

都農町所在

たわらいし

俵石第1遺跡(第2次調査)

たわらいし

俵石第2遺跡

東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8

2012

宮崎県埋蔵文化財センター





倭石第2遺跡より倭石第1遺跡方面を望む



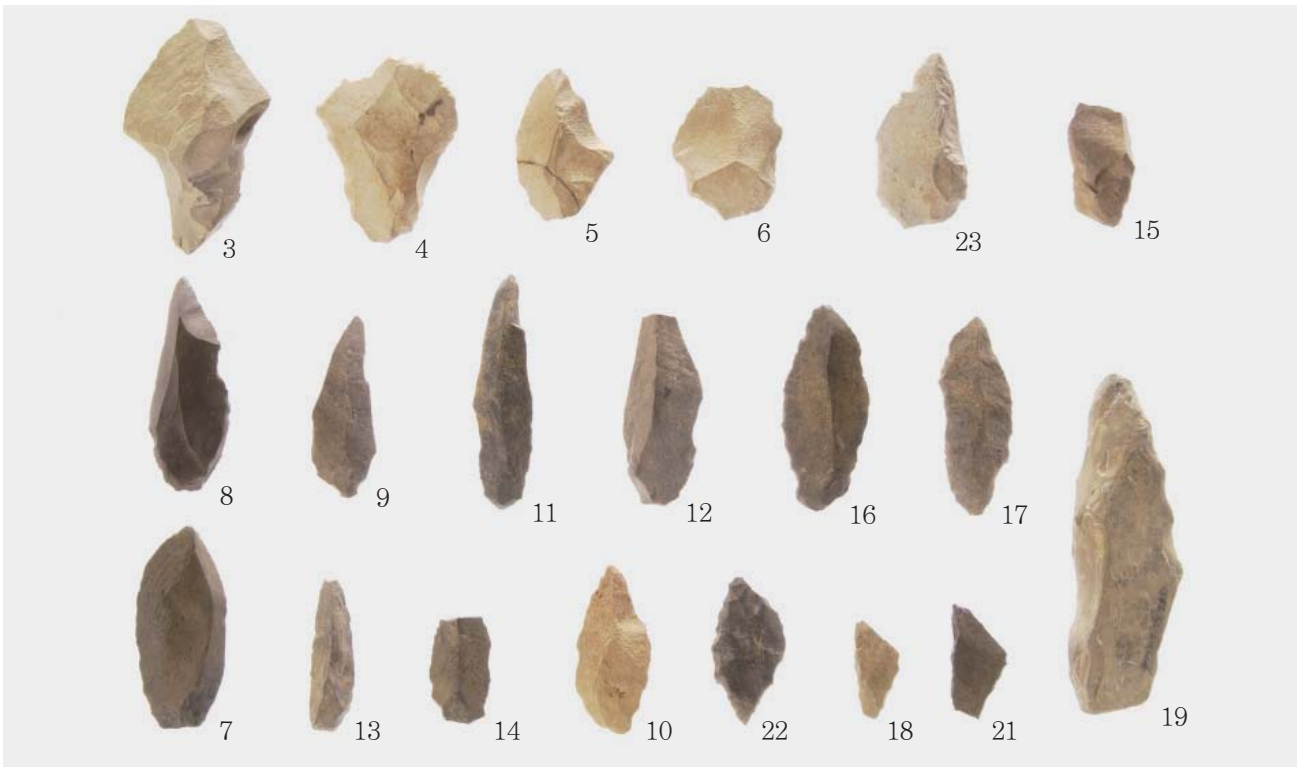
← K-Ah  
(鬼界アカホヤ)

← AT  
(始良Tn)

俵石第1遺跡（第2次調査）の基本土層

左上：礫群（SI1）検出状況

左下：VI層遺物出土状況



後期旧石器時代の遺物（ナイフ形石器）



俵石第2遺跡 SZ1出土 弥生土器



俵石第2遺跡 後期旧石器時代I期 局部磨製石斧と打製石斧



SZ1 土器集中区 a 検出状況



SZ1 完掘状況

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施してまいりました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した俵石第1遺跡（第2次調査）及び俵石第2遺跡は、平成21年度から平成22年度に調査が実施され、後期旧石器時代の礫群や石器群、縄文時代早期の土器や石鏃、集石遺構などが確認されました。さらに俵石第2遺跡では、弥生時代の水穴状遺構から多くの完形の土器が出土し、当地域の土地利用の一端が明らかになりました。

都農町ではこれまで埋蔵文化財の発掘調査事例が少なく、今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、ならびに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成24年2月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 森 隆 茂

# 例 言

- 1 本書は、平成 21～22 年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う俵石（たわらいし）第 1 遺跡（第 2 次調査）・俵石第 2 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託をした。  
俵石第 2 遺跡  
基準点・グリッド杭等の設営・・・・・・・・・・(有)河野測量設計事務所、(有)久保田測量設計  
空中写真撮影・・・・・・・・・・(有)スカイサーベイ九州
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の担当者が行った。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 6 石器石材の分類は松本茂の協力の下、俵石第 1 遺跡では谷口めぐみが、俵石第 2 遺跡では橋口由佳が行った。
- 7 遺物実測・トレース・遺物写真撮影については、整理作業員の補助を得て各担当者を中心に作業を進めた。  
俵石第 1 遺跡…谷口、俵石第 2 遺跡…橋口  
なお、石器実測およびトレースについては、一部を除き(株)パスコに業務委託した。
- 8 自然科学分析にかかるフローテーション作業ならびに種子の選別作業は橋口を中心に行った。放射性炭素年代測定・樹種同定・種実同定は、(株)古環境研究所に委託し、その成果報告については、橋口が同社と協議・編集して掲載した。
- 9 本文の執筆は職員間で分担して行った。  
第 1 章・第 2 章…谷口 第 3 章第 1～7、9、10 節…橋口 第 8・11 節…橋口・今塩屋 第 4 章…谷口・橋口・今塩屋
- 10 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は谷口が編集した。
- 11 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書で使用した周辺遺跡地図等は国土地理院発行の 1/50,000 図及び 1/25,000 図をもとに、周辺地形図等は西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所から提供された 1/1,000 図をもとに作成した。

# 凡 例

- 1 本書に用いた主な略記号は次のとおりである。  
SC = 土坑 SI = 礫群、集石遺構 SZ = 不明遺構 K-Ah = 鬼界アカホヤ火山灰 Sz-S = 桜島薩摩テフラ Kr-Kb = 霧島小林軽石  
AT = 始良 Tn 火山灰 A-Fm = 始良深港テフラ A-0t = 始良大塚テフラ Gr. = グリッド
- 2 本書で「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩 (WT1・WT2) を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定制が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記した資料には溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。
- 3 遺物への注記は以下のような略号とした。  
俵石第 1：タワラ 1-2・・・IV (層位) 1 (ドットマップ作成用の遺物取り上げ(以下、点上げ)番号)、カクラン (攪乱中の遺物)、  
IV (層位) (一括)  
俵石第 2：タワラ 2・・・A (調査区) IV (層位) 1 (点上げた遺物番号)、カクラン (攪乱中の遺物)、  
I (層位) (表土中および表面採集遺物)  
タワラ 2・・・C 6 (調査区) SZ 1 (遺構番号) A (遺構内の小区画) 上層 (出土層位) (不明遺構出土遺物)
- 4 本書で使用した標高は海拔絶対高であり、方位は座標北 (G. N.) を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北 (M. N.) を用いた。
- 5 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所 監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 6 石器の節理面は一点鎖線、ガジリ部分は黒塗り、敲き磨りがみられる部分は破線の○にトーンをかけて示している。石器の観察表の長さ・幅・厚さは、最大長・最大幅・最大厚で表示している。
- 7 遺構・遺物写真など図版の縮尺については任意であり、統一していない。
- 8 本書に記載する層の略称は『東九州自動車道（都農～西都農）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書 VI』（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）第 1 章 第 3 節の記述を参考にしている。



# 本文目次

## 第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 地理的環境	3
第4節 歴史的環境	4
第5節 石器石材分類について	6

## 第II章 俵石第1遺跡（第2次調査）の調査

第1節 発掘調査の経緯	7
第2節 整理作業の経過	7
第3節 基本層序	8
第4節 遺物包含層の認識	11
第5節 後期旧石器時代の遺構と遺物	11
第6節 縄文時代早期の遺物	27
第7節 その他の時代の遺物	29
第8節 まとめ	29

## 第III章 俵石第2遺跡の調査

第1節 第1次調査の概要	33
第2節 発掘調査・整理作業の方法と経過	34
第3節 教育普及活動	35
第4節 基本層序と地形	36
第5節 遺物包含層の認識と後期旧石器時代の「期」の設定について	40
第6節 後期旧石器時代の遺構と遺物	41
第7節 縄文時代の遺構と遺物	82
第8節 弥生時代の遺構と遺物	94
第9節 K-Ah 降灰以降の遺構と遺物	109
第10節 自然科学分析の結果	112
第11節 まとめ	115

## 第IV章 総括

報告書抄録	巻末
-------	----

# 挿図目次

## 第 I 章 はじめに

- 第 1 図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡分布図 …… 2
- 第 2 図 俵石遺跡群の位置関係と周辺地形図 …… 3
- 第 3 図 俵石遺跡群と周辺遺跡位置図 …… 5
- 第 4 図 遺跡間地形断面図 …… 5

## 第 II 章 俵石第 1 遺跡（第 2 次調査）の調査

- 第 1 図 俵石第 1 遺跡の周辺地形図 …… 7
- 第 2 図 調査区およびトレンチ配置図 …… 9～10
- 第 3 図 土層断面記録位置図 …… 9～10
- 第 4 図 土層断面図 …… 9～10
- 第 5 図 後期旧石器時代礫群実測図 …… 12
- 第 6 図 C1区礫分布図 …… 12
- 第 7 図 後期旧石器時代（AT下位）遺物分布図（石材別） …… 13
- 第 8 図 後期旧石器時代（AT上位）遺物分布図（石材別） …… 13
- 第 9 図 後期旧石器時代（VI層）遺物分布図（器種別） …… 14
- 第10図 後期旧石器時代（V層）遺物分布図（器種別） …… 15
- 第11図 後期旧石器時代の石器実測図（1） …… 17
- 第12図 後期旧石器時代の石器実測図（2） …… 18
- 第13図 後期旧石器時代の石器実測図（3） …… 19
- 第14図 後期旧石器時代の石器実測図（4） …… 20
- 第15図 後期旧石器時代の石器実測図（5） …… 21
- 第16図 後期旧石器時代の石器実測図（6） …… 22
- 第17図 後期旧石器時代の石器実測図（7） …… 23
- 第18図 後期旧石器時代の石器実測図（8） …… 24
- 第19図 後期旧石器時代の石器実測図（9） …… 25
- 第20図 後期旧石器時代の石器実測図（10） …… 26
- 第21図 後期旧石器時代の石器実測図（11） …… 27
- 第22図 縄文時代早期（IV層）の遺物分布図（石材別） …… 28
- 第23図 縄文時代早期の石器実測図 …… 28
- 第24図 その他の時代の遺物実測図 …… 29

## 第 III 章 俵石第 2 遺跡の調査

- 第 1 図 各調査区位置および第 1 次調査トレンチ配置図 …… 33
- 第 2 図 第 1 次調査出土遺物実測図 …… 33
- 第 3 図 グリッド配置図 …… 37
- 第 4 図 土層断面図（1）（A-A'） …… 37
- 第 5 図 土層断面図（2）（B-B'、C-C'、D-D'、E-E'） …… 38
- 第 6 図 土層断面図（3）（E-E'、F-F'、G-G'） …… 39
- 第 7 図 A区VII・VIII層上面調査範囲 …… 41
- 第 8 図 後期旧石器時代 I 期（A区）遺物分布図 …… 41
- 第 9 図 後期旧石器時代 I 期（A区）石材別遺物分布図 …… 42
- 第10図 後期旧石器時代 I 期（A区）石器実測図（1） …… 43
- 第11図 後期旧石器時代 I 期（A区）石器実測図（2） …… 44
- 第12図 後期旧石器時代 I 期（A区）石器実測図（3） …… 45
- 第13図 B区VII・VIII層上面調査範囲 …… 45
- 第14図 後期旧石器時代 I 期（B区）石材別遺物分布図 …… 46
- 第15図 後期旧石器時代 I 期（B区）石器実測図 …… 46
- 第16図 C区VII・VIII層調査範囲 …… 47
- 第17図 後期旧石器時代 I 期（C区）遺構・遺物分布図 …… 48
- 第18図 後期旧石器時代 I 期（C区）礫群実測図 …… 48
- 第19図 後期旧石器時代 I 期（C区）石器実測図（1） …… 48
- 第20図 後期旧石器時代 I 期（C区）石器実測図（2） …… 49
- 第21図 後期旧石器時代 II 期（A区）遺物分布図 …… 50
- 第22図 後期旧石器時代 II 期（A区）石材別遺物分布図(1) …… 50
- 第23図 後期旧石器時代 II 期（A区）石材別遺物分布図(2) …… 51
- 第24図 後期旧石器時代 II 期（A区）石器実測図（1） …… 52
- 第25図 後期旧石器時代 II 期（A区）石器実測図（2） …… 53
- 第26図 後期旧石器時代 II 期（B区）石材別遺物分布図 …… 54
- 第27図 後期旧石器時代 II 期（B区）石器実測図 …… 55
- 第28図 後期旧石器時代 III 期（A区）遺構・遺物分布図 …… 56
- 第29図 後期旧石器時代 III 期（A区）礫群実測図 …… 57
- 第30図 後期旧石器時代 III 期（A区）石材別遺物分布図(1) …… 58

第31図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石材別遺物分布図(2) … 59	第62図	縄文時代早期（C区）土器実測図 …… 89
第32図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（1） …… 60	第63図	縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図(1) … 90
第33図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（2） …… 61	第64図	縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図(2) … 91
第34図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（3） …… 62	第65図	縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図(3) … 92
第35図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（4） …… 63	第66図	B区弥生土器出土位置 …… 94
第36図	後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（5） …… 64	第67図	弥生時代（B区）土器実測図 …… 94
第37図	後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石材別遺物分布図 …… 65	第68図	弥生時代（C区）SZ1・SZ2位置図 …… 95
第38図	後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（1） …… 66	第69図	SZ1実測図 …… 96
第39図	後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（2） …… 67	第70図	SZ1土器集中区a・土器集中区b実測図 （平面図・見通し断面図） …… 97
第40図	後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（3） …… 68	第71図	SZ1出土 弥生土器実測図（1） …… 100
第41図	後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（4） …… 69	第72図	SZ1出土 弥生土器実測図（2） …… 101
第42図	後期旧石器時代Ⅲ期（C区）遺構・遺物分布図 …… 70	第73図	SZ1出土 弥生土器実測図（3） …… 102
第43図	後期旧石器時代Ⅲ期（C区）礫群実測図（1） …… 70	第74図	SZ1出土 弥生土器実測図（4） …… 103
第44図	後期旧石器時代Ⅲ期（C区）礫群実測図（2） …… 71	第75図	SZ1出土 弥生土器実測図（5） …… 104
第45図	後期旧石器時代Ⅲ期（C区）石器実測図 …… 71	第76図	SZ2実測図 …… 105
第46図	後期旧石器時代Ⅳ期（A区）石材別遺物分布図 …… 72	第77図	包含層出土遺物実測図 …… 105
第47図	後期旧石器時代Ⅳ期（A区）石器実測図 …… 72	第78図	Ⅱ層検出遺構分布図 …… 109
第48図	後期旧石器時代Ⅳ期（B区）石材別遺物分布図 …… 73	第79図	礫集積遺構実測図 …… 110
第49図	後期旧石器時代Ⅳ期（B区）石器実測図（1） …… 74	第80図	SC1実測図 …… 111
第50図	後期旧石器時代Ⅳ期（B区）石器実測図（2） …… 75	第81図	SC1埋土中出土遺物実測図 …… 111
第51図	I層（表土）出土遺物実測図（1） …… 76	第82図	暦年校正結果 …… 113
第52図	I層（表土）出土遺物実測図（2） …… 77	第83図	炭化材断面顕微鏡写真 …… 114
第53図	縄文時代早期（B区）遺構・遺物分布図 …… 82	第84図	炭化種実写真 …… 114
第54図	縄文時代早期（B区）集石遺構実測図 …… 83		
第55図	縄文時代早期（B区）土器実測図 …… 83		
第56図	縄文時代早期（B区）包含層出土石器実測図 …… 84		
第57図	縄文時代早期（C区）遺構・遺物分布図 …… 85		
第58図	散礫土層断面図 …… 85		
第59図	縄文時代早期（C区）集石遺構実測図（1） …… 86		
第60図	縄文時代早期（C区）集石遺構実測図（2） …… 87		
第61図	縄文時代早期（C区）石材別遺物分布図 …… 88		

## 表目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1表	石器石材分類対応表 …… 6	
第Ⅱ章	俵石第1遺跡（第2次調査）の調査	
第1表	俵石第1遺跡（第2次調査）との土層対比 …… 8	
第2表	後期旧石器時代礫群観察表 …… 12	

第3表	石材別器種出土（内訳）表	15
第4表	後期旧石器時代石器計測表（1）	31
第5表	後期旧石器時代石器計測表（2）	32
第6表	縄文時代早期石器計測表	32
第7表	その他の時代石器計測表	32
第8表	その他の時代土器観察表	32

### 第三章 俵石第2遺跡の調査

第1表	各調査区と基本層序対応表	36
第2表	後期旧石器時代I期（C区）礫群観察表	48
第3表	後期旧石器時代III期（A区）礫群観察表	56
第4表	後期旧石器時代III期（C区）礫群観察表	71
第5表	後期旧石器時代石器観察表	79～81
第6表	I層（表土）等出土石器観察表	81
第7表	縄文時代早期（B区）集石遺構観察表	83
第8表	縄文時代早期（C区）集石遺構観察表	87
第9表	縄文土器観察表	93
第10表	縄文時代石器観察表	93
第11表	弥生土器観察表	106～108
第12表	礫集積遺構観察表	109
第13表	測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法	112
第14表	放射性炭素年代測定結果	112

### 第四章 総括

第1表	後期旧石器時代～縄文時代早期相当層の基本層序と各遺跡の状況	119
-----	-------------------------------	-----

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	俵石第2遺跡より俵石第1遺跡方面を望む
巻頭図版2	俵石第1遺跡（第2次調査）の基本土層礫群（SI1）検出状況、VI層遺物出土状況、後期旧石器時代の遺物（ナイフ形石器）
巻頭図版3	俵石第2遺跡 SZ1出土弥生土器
巻頭図版4	俵石第2遺跡 後期旧石器時代I期 局部磨製石斧と打製石斧、SZ1土器集中区a 検出状況、SZ1完掘状況

## 写真図版

写真1	俵石第2遺跡 SI12炭化材集中箇所検出状況	86
写真2	俵石第2遺跡 SI15炭化材検出状況	87

## 図版目次

図版1	俵石第1遺跡（第2次調査） 後期旧石器時代の遺物（角錐状石器、尖頭器、台形石器、搔器）、（黒曜石製遺物）（石核）、（二次加工剥片、微細剥離剥片）、（剥片1）、（剥片2）、（敲石）、縄文時代及びその他の時代の遺物	121
図版2	俵石第2遺跡 SI1、SI2、SI3、SI4、SI5、SI6、SI7、SI8	122
図版3	俵石第2遺跡 SI9、SI10、SI11、散礫（東より）、散礫（西より）、SI12、SI13、SI14	123
図版4	俵石第2遺跡 SI15、SZ1検出状況（西より）、SZ1（A区）弥生土器出土状況、SZ1（B区）弥生土器出土状況、SZ1 A-A'間土層断面（東より）、SZ1 B-B'間土層断面（東より）、SZ1 完掘状況（東より）、SC1土層断面（東より）	124
図版5	俵石第2遺跡 SC1内 礫検出状況（西より）、SC1完掘状況（南より）、SI16、SI17、後期旧石器時代I期の石器、後期旧石器時代II期の石器	125
図版6	俵石第2遺跡 後期旧石器時代III期の石器、縄文早期の土器、縄文時代早期包含層出土の石器	126
図版7	俵石第2遺跡 SZ1出土の弥生土器（1） 238、239、240、242、246、247、249、252、253、259、266、267、269、271	127
図版8	俵石第2遺跡 SZ1出土の弥生土器（2） 243、245、255、256、257、258	128
図版9	俵石第2遺跡 SZ1出土の弥生土器（3） 241、261、262、263、264、265	129
図版10	俵石第2遺跡 SZ1出土の弥生土器（4） 273、274、275、276、279、280、281、282、283、284、285	130

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19,7kmについて県文化財課は、平成17年度、32遺跡、306,700㎡の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、平成18年度末には用地買収に着手している。この間、当区間の平成26年度供用開始が公表され、用地取得及びそれに続く埋蔵文化財調査にとって時間的に厳しい状況となった。また、平成19年11月には発掘調査対象面積の見直しが行われ、暫定2車線261,400㎡と面積が減っている。

平成20年7月1日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも同年10月17日付けで『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着手できる可能性がある10遺跡3,350㎡の発掘調査に着手した。平成21年1月には、用地取得や文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となったが、関係者の努力により平成23年11月末現在、32遺跡中25遺跡は完全に調査を終了、未着手は3遺跡を残すのみとなっている。

俵石第1遺跡は平成20～21年度に第1次調査が実施され、後期旧石器時代及び縄文時代早期、弥生時代の遺物が出土し、礫群や陥し穴状遺構が検出された。平成22年度の第2次調査では橋脚建設のための広域農道の迂回路部分830㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。また、俵石第2遺跡は平成21・22年度に第1次調査を実施し、後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が出土した。第1次調査の結果より、用地取得後の第2次調査では9,295㎡を対象に発掘調査を実施することになった。

## 第 2 節 調査の組織

本書掲載の遺跡の発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会  
宮崎県埋蔵文化財センター  
所 長 福永 展幸（平成21年度）

森 隆茂（平成22～23年度）  
副所長兼総務課長 長友 英詞（平成21年度）  
副所長 北郷 泰道（平成22～23年度）  
総務課長 矢野 雅紀（平成22年度）  
坂上 恒俊（平成23年度）  
主幹兼総務担当リーダー  
高山 正信（平成21年度）  
副主幹兼総務担当リーダー  
長友由美子（平成22～23年度）  
調査第一課長 長津 宗重（平成21～23年度）  
主幹兼調査第二担当リーダー  
菅付 和樹（平成21～23年度）

### 俵石第1遺跡（第2次調査）

（調査担当）

調査第一課 調査第一担当

主 査 吉野 達三（平成22年度）

（調査・整理担当）

調査第一課 調査第二担当

主 事 谷口めぐみ（平成22～23年度）

### 俵石第2遺跡

（第1次調査担当）

調査第一課 調査第二担当

主任主事 徳留 洋志（平成21年度）

主 事 米森 祐太（平成21年度）

（第2次調査担当）

調査第一課 調査第一担当

主 査 松浦 朋彦（平成22年度）

主 査 黒木 誠司（平成22年度）

調査第一課 調査第二担当

主 査 明石 宏一（平成22年度）

主任主事 松本 茂（平成22年度）

主 事 原口耕一郎（平成22年度）

主 事 川俣 唱子（平成22年度）

（第2次調査・整理担当）

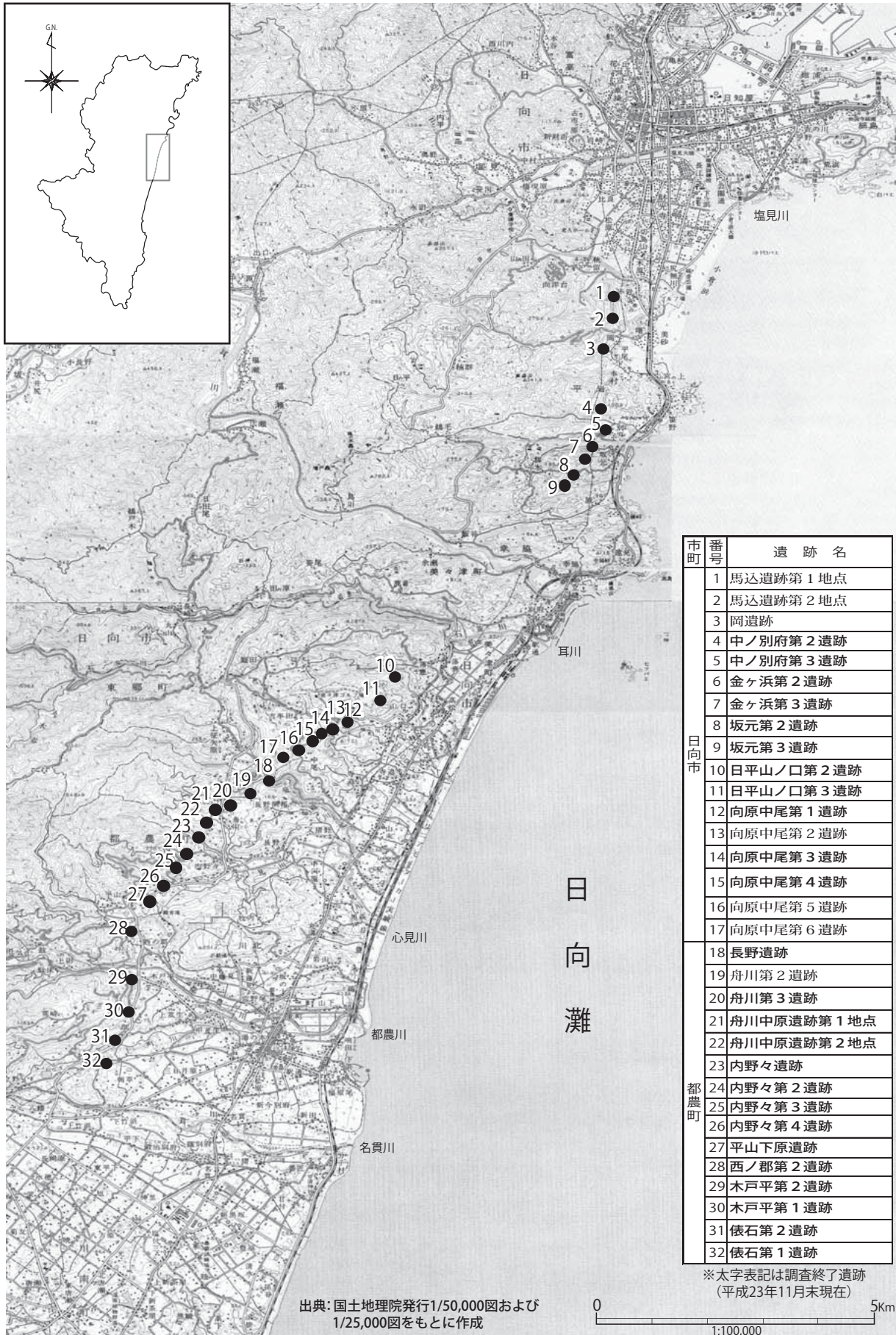
調査第一課 調査第二担当

主 事 橋口 由佳（平成22～23年度）

調査協力 藤木 聡（宮崎県立西都原考古博物館）

岸田 優子（宮崎市教育委員会）

岸田 裕一（都城市教育委員会）



第1図 東九州自動車道(日向~都農間)関連遺跡分布図

### 第3節 地理的環境

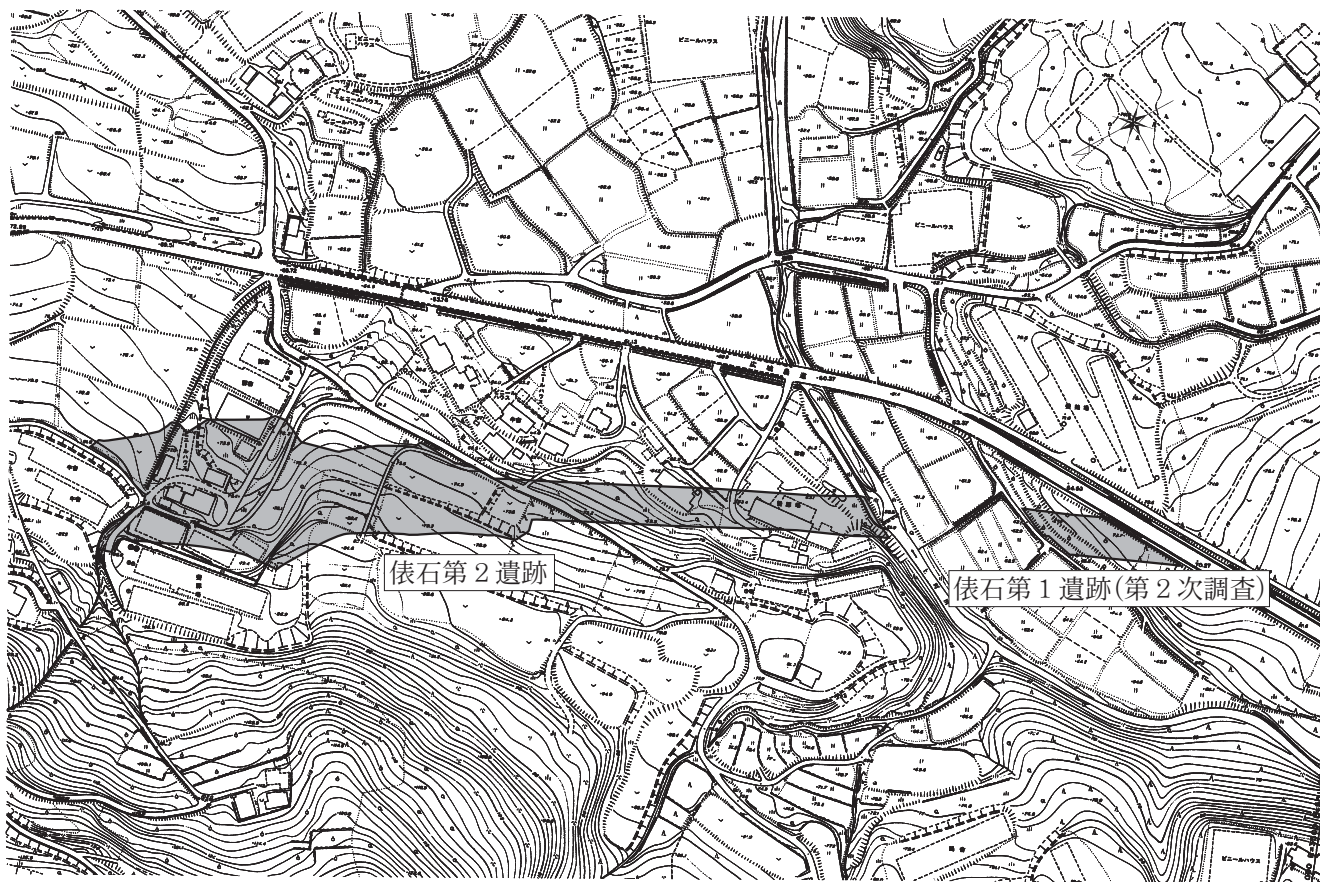
俵石第1遺跡及び俵石第2遺跡（以下、俵石遺跡群）は、宮崎県児湯郡都農町大字川北に所在する。俵石遺跡群が立地する都農町は、宮崎県中央部よりやや北側に位置する。

都農町の地勢は、町の西半分を尾鈴山(1,405.2m)を中心とする尾鈴山地が占める。この尾鈴山地の一角である矢筈岳や畑倉山などから派生する丘陵は、町の東側に面する日向灘に向かって展開する。そのため都農町の地形は山岳部、山麓部、平野部、海岸部の4つの地形に大別でき、起伏が激しく、平地が非常に少ない地形である。この山地形によって平野部とは途切れる形となり、宮崎平野の北端となる。また河川は、尾鈴山地を源とする名貫川や都農川、心見川及びその支流が東流する。これらは山麓部や平野部を南北に分断するように流れ、丘陵の各所に開析谷や小さな扇状地を形成させる。河岸段丘面の

発達も特徴的である。河岸段丘は、約25万年前ごろから繰り返されてきた海進と海退の際に、こうした河川の開析作用や土砂の堆積によって形成されたという。

一方、日向灘に面する海岸部は南北に直線的な海浜となり、その中に点在する小さな沖積地には尾鈴山溶結凝灰岩の円礫が堆積している。これらも河川の影響により堆積されたものである。

俵石第1遺跡（第2次調査）の調査区は、尾立第2遺跡から続く名貫川の左岸台地上の末端、標高約72mに位置する。俵石第2遺跡は、上町川の対岸、荒崎山の裾野、標高72mに立地する。俵石第1遺跡と俵石第2遺跡の間には都農川の支流である上町川が流れ、河岸段丘面を介して隔てられる遺跡である。上町川は立野方面から流れ出しているが、以前は名貫川とつながっていたと考えられている。



第2図 俵石遺跡群の位置関係と周辺地形図

## 第4節 歴史的環境

**後期旧石器時代** 都農町内での旧石器時代の発掘調査は近年までわずかであった。しかし東九州自動車道建設に伴う発掘調査が進む中、俵石第1遺跡をはじめとし、舟川第2遺跡、平山下原遺跡、尾立第2遺跡、朝草原遺跡などの遺跡からAT下位から上位にかけての後期旧石器時代の遺構・遺物が確認されるようになった。後期旧石器時代は、河川やその支流に近い台地上に遺跡が立地する傾向が見られる。特に立野第5遺跡では環状ブロック群の可能性を示す遺物の集中、俵石第1遺跡（第1次調査）では水晶製のナイフ形石器や剥片などが出土する等、近年ではAT下位の遺構や遺物の報告例が増加している。

**縄文時代** 縄文時代は旧石器時代同様に、遺跡が河川に近い台地上に立地する。しかし縄文時代後・晩期になると平野部にも見られるようになる。

**草創期** 朝草原遺跡では草創期末葉とされる無文土器が出土したが、類例の比較検討を要する。なお近隣の川南町の赤石・天神本遺跡では草創期後半～末の隆帯文土器と石器群の出土例がある。

**早期** 周辺の俵石第1遺跡（第1次調査）、尾立第2遺跡などで、陥し穴状遺構が検出され、それに前後する押型文土器、無文土器や石器類が出土している。特に平山下原遺跡で無文土器単純期の遺物包含層が確認されたことは、都農町域における縄文時代早期の動向を探る上で注目される出土事例である。

**前・中期** 内野々第4遺跡では、轟B式土器や曾畑式土器、玦状耳飾が出土している。内野々遺跡では深浦式土器や春日式土器、船元系土器が出土している。特に船元系土器の出土は、その特異な胎土から瀬戸内系の影響あるいは土器そのものの流通があったと想定される。

**後期** 新別府川原遺跡では竪穴建物跡1軒が検出され、新別府下原遺跡では貝殻条痕文土器や石斧類が出土している。内野々遺跡では磨消縄文系土器を伴う竪穴建物跡が4軒検出されている。当該期の宮崎県下の集落跡は台地上の平坦地での発見例が多いが、内野々遺跡のような丘陵裾の河岸段丘状に立地する遺跡は少なく、当時の集落の立地を考慮する上で貴重な出土例である。

**弥生時代** 弥生時代になると河川沿いの平坦地に遺跡が立地する傾向が見られるが、長野遺跡など台地上の傾斜地の遺跡も近年確認されている。下別府下原遺跡では、竪穴建物7軒と周溝状遺構3基および土坑4基が調査され、遺構群中から集落の1単位が認定された。木戸平第2遺跡でも間仕切りのある竪穴建物跡が検出された。尾立第2遺跡では「水穴」の可能性のある陥没坑に一括埋納された弥生土器の甕と壺が調査されている。時期は不明であるが俵石第1遺跡(第1次調査)でも水穴状遺構が確認された。

**古墳時代** 都農町内には海岸部に県指定古墳が12基ある。前方後円墳2基、円墳10基で、すべて積石塚である。積石塚は大小の石を積み上げて墳丘にしたもので、県内では名貫川や海岸部を中心に分布する。

**古代以降** 都農町の古代遺跡は知られていない。『延喜式』に日向国6牧のうち「都農野牧」についての記述がある。また日向国16駅のうち「去飛駅」については、町内に比定されることが多い。『日本三代実録』などに都農神社関連の記事が記載されている。中世における都農町は土持氏→伊東氏→島津氏と支配者が変遷する。なかでも森遺跡では溝状遺構1条が検出され、青磁碗、格子目文の須恵器、陶磁器碗、土師器皿などが出土している。近世になると都農町は、御城下高鍋と藩港美々津との中間点にあり、藩政上の拠点であった。また、石河内尾鈴の豊富な山林資源から産出される林業生産物の集荷中心地でもあった。

### 【参考文献】

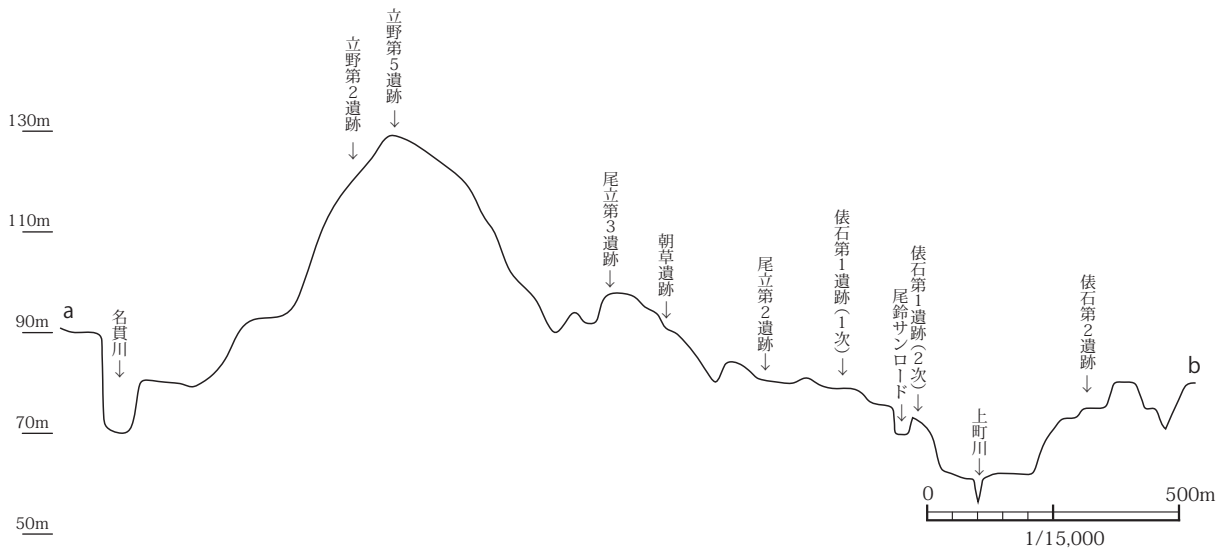
- 都農町（1998）『都農町史（通史編）』
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2007）「立野第5遺跡・立野第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第156集
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2008）「尾立第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第169集
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2011）「俵石第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2011）「平山下原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第201集
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2011）「内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第202集





- |            |             |              |             |             |             |              |              |
|------------|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 俵石第1遺跡  | 2. 俵石第2遺跡   | 3. 平山下原遺跡    | 4. 西ノ郡第2遺跡  | 5. 木戸平第2遺跡  | 6. 木戸平第1遺跡  | 7. 尾立第2遺跡    | 8. 朝草原遺跡     |
| 9. 尾立第3遺跡  | 10. 立野第5遺跡  | 11. 立野第2遺跡   | 12. 八幡第2遺跡  | 13. 銀座第1遺跡  | 14. 銀座第2遺跡  | 15. 平山遺跡     | 16. 白石第2遺跡   |
| 17. 白石第1遺跡 | 18. 上黒萩遺跡   | 19. 西ノ郡第2遺跡  | 20. 西ノ郡第1遺跡 | 21. 白水遺跡    | 22. 境ヶ谷第2遺跡 | 23. 久次牟田遺跡   | 24. 井手ヶ平遺跡   |
| 25. 川神田遺跡  | 26. 京塚遺跡    | 27. 境ヶ谷第1遺跡  | 28. 木戸平第2遺跡 | 29. 黒石遺跡    | 30. 木戸平第1遺跡 | 31. 上荒生遺跡    | 32. 鹿牟田遺跡    |
| 33. 師匠田遺跡  | 34. 中原遺跡    | 35. 荒生尾立第2遺跡 | 36. 馬場口遺跡   | 37. 鍛冶屋敷遺跡  | 38. 都農古墳群   | 39. 荒生尾立第1遺跡 | 40. 俵石第2遺跡   |
| 41. 中河原遺跡  | 42. 森遺跡     | 43. 湯牟田遺跡    | 44. 尾立遺跡    | 45. 俵石第1遺跡  | 46. 朝草原遺跡   | 47. 榎土手遺跡    | 48. 福原尾遺跡    |
| 49. 立野遺跡   | 50. 竜ヶ平第2遺跡 | 51. 竜ヶ平第1遺跡  | 52. 下原遺跡    | 53. 新別府川原遺跡 | 54. 新別府遺跡   | 55. 新別府肥遺跡   | 56. 新別府下原遺跡  |
| 57. 篠別府遺跡  | 58. 八幡遺跡    | 59. 古場山遺跡    | 60. 寺屋敷遺跡   | 61. 下ノ原遺跡   | 62. 杵袋畑遺跡   | 63. 上ノ原北分B遺跡 | 64. 上ノ原北分A遺跡 |
| 65. 形山上遺跡  | 66. 孫衛門遺跡   | 67. 大塚山遺跡    | 68. 下肥B遺跡   | 69. 大猪久保遺跡  | 70. 下肥A遺跡   | 71. 長岡原遺跡    | 72. 黒岩遺跡     |
| 73. 銀座遺跡   | 74. 新耕原遺跡   | 75. 東平下A遺跡   | 76. 東平下B遺跡  | 77. 蔵座原遺跡   | 78. 山本遺跡    |              |              |
- ※ ●：東九州自動車道建設に伴う発掘調査

第3図 俵石遺跡群と周辺遺跡位置図



第4図 遺跡間地形断面図

※ 水平距離に対して、高さは10倍の比率になっている

## 第5節 石器石材分類について

石器石材は色調や礫面の特徴、手触り、風化の状況及び隣接遺跡である尾立第2遺跡、俵石第1遺跡（第1次調査）の分類基準を参考にして、肉眼による分類を行った。各石材の同定にあたっては、俵石第1遺跡（第2次調査）は谷口、俵石第2遺跡は橋口が決定した。

石材名称については、俵石第1遺跡（第1次調査）の分類基準を参考に名称を付した。黒曜石の分類については、肉眼による観察で得られる情報により分類を行った。なお、出土点数や使用されている石材の違い等から、分類基準に異なる点があるため、石材分類の対応表で違いを記した。

第1表 石器石材分類対応表

石材名	石器石材の特徴	俵石第1	俵石第2	俵石第2遺跡での石器分類基準
流紋岩	白色に風化し、白色ないし灰～灰褐色の流離構造が確認されるものもある。風化にはツヤがあるもの、マットな質感のもの、全体が褐色がかったものがみられる。礫面はなめらかである。	Ryu	Ryu	
ホルンフェルス	風化面が黄色のもの、灰色のものがあり、粉を吹いたかのような状態になっている。新鮮面は黒色緻密で、被熱前の石材がわかるものもある。ホルンフェルス化する前の石材がわかる資料がいくつかあったが、今回は粉を吹いたかのような状態のものはホルンフェルスとして報告する。	Ho1	Ho11 Ho12	黄色～黄白色 灰～濃灰色
頁岩	青みがかった黒褐色を呈するものが多く、中には縞模様をもつものがある。非常に硬質緻密である。	Sh	Sh	
チャート	青灰色、赤色、白色など色調にバリエーションをもつ。表面に光沢をもつものもあり、薄く剥離されたものは半透明となる。	Ch	Ch1 Ch2 Ch3 Ch4	赤色 白色に半透明の筋状の節理を持つもの 光沢があり、褐色がかった茶色 その他
砂岩	青灰色～灰色、赤褐色を呈する。組織がやや大きく、硬質緻密で重量がある。礫石器が多いが、一部剥片も存在する。	Sa	Sa	
尾鈴山溶結凝灰岩 ※1	新鮮面は灰白色を呈する。2mm程度の石英や黒色・白色の粒子を多く含むものも見られる。礫面は滑らかである。	Os	Os	
凝灰岩	表面はざらついて黄褐色を呈し、1～5mmの粒を多く含む。	Tu1	Tu	
緑色凝灰岩	薄い黄緑色を呈し、1mm以下の粒を含む。管玉作成に用いられるものと違い、質が悪い。	Tu2	-	
ガラス質安山岩	全面が風化し、風化面はにぶい黄褐色を呈する。風化面はなめらかで、新鮮面は黒灰色で透過性がない。風化面などから鹿児島県いちき串木野市から薩摩川内市樋脇町付近で採取されるガラス質安山岩の可能性が高い。	An	-	
	自然面は褐色でざらざらしている。新鮮面は濃灰色を呈し、緻密でなめらかである。これらの特徴から、大分県姫島で採取されるガラス質安山岩の可能性が高い。	-	An	
水晶	石英の中でも透過性が高く、光沢がある。不純物の少ない透明のものから、黄褐色を呈するものがある。	-	Cr	
黒曜石	透過性が高く、色調は鉛色・コーヒーゼリー色を呈する。ごくわずかに不純物を含み、礫面は研磨したかのように滑らかなものと、鮫肌状のざらざらしたものがある。熊本県人吉市桑ノ木津留周辺で採取される黒曜石の可能性が高い。	Ob1	Ob1	
	黒褐色を呈し、透過性がない。礫面は比較的なめらかである。腰岳産黒曜石と類似しているが、近年の研究などから南九州産の黒曜石の可能性が高い。	Ob2	-	
	乳白色を呈し、磨りガラス状で濁っている。大分県姫島村で採取される黒曜石の可能性が高い。赤色のザクロ石が確認できる。	Ob3	Ob3	
	青みがかる黒褐色を呈し、剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面が確認できる資料がないため断定できないが、佐賀県伊万里市腰岳周辺で採取される黒曜石の可能性も考えられる。	Ob4	-	
	灰色がかる黒褐色を呈し、剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。南九州産黒曜石の可能性が高い。※2	Ob5	-	
	黒色で不純物が多く、透過性がない。鬆が多く入っている。鹿児島県伊佐市大口周辺で採取される黒曜石の可能性が高い。	-	Ob6	
	濃灰色を呈し、表面の光沢がない。風化面はざらざらしており、鹿児島県いちき串木野市から薩摩川内市樋脇町付近で採取される黒曜石の可能性が高い。	-	Ob7	

※1 名称等については凡例の2を参照。

※2 近年の研究成果により、菱刈系などの南九州産黒曜石の新しい産地が発見されているが、今回の報告では肉眼観察にとどまるため、「南九州産黒曜石」として報告する。

## 第Ⅱ章 俵石第1遺跡(第2次調査)の調査

### 第1節 発掘調査の経緯

俵石第1遺跡(第2次調査 以下、第2次調査)は平成22年11月1日から平成22年12月24日まで225㎡の面積を実施した。俵石第1遺跡(第1次調査 以下、第1次調査)の南側のC区を便宜上、調査区南側をC1区、北側をC2区とした。

調査では層の堆積状況を確認しながら、表土を重機で除去し、表土下は人力掘削を行った。Ⅷ層以下はトレンチ調査を行った。C1区では第1次調査区で堆積が認められなかったⅡ、Ⅲ、Ⅳ層があり、Ⅵ層では礫群及び遺物が検出された。C2区の表土下はⅤ層で遺構は検出されず、遺物もごくわずかであった。C2区内の段々畑状の地形については、トレンチ調査を実施し、重機での表土除去が困難だったので、表土から人力掘削を行った。

各調査区で包含層より出土した遺物については、トータルステーションで出土位置を記録し、取り上げを行った。包含層中の礫も遺物と同様トータルステーションによる取り上げを行った。

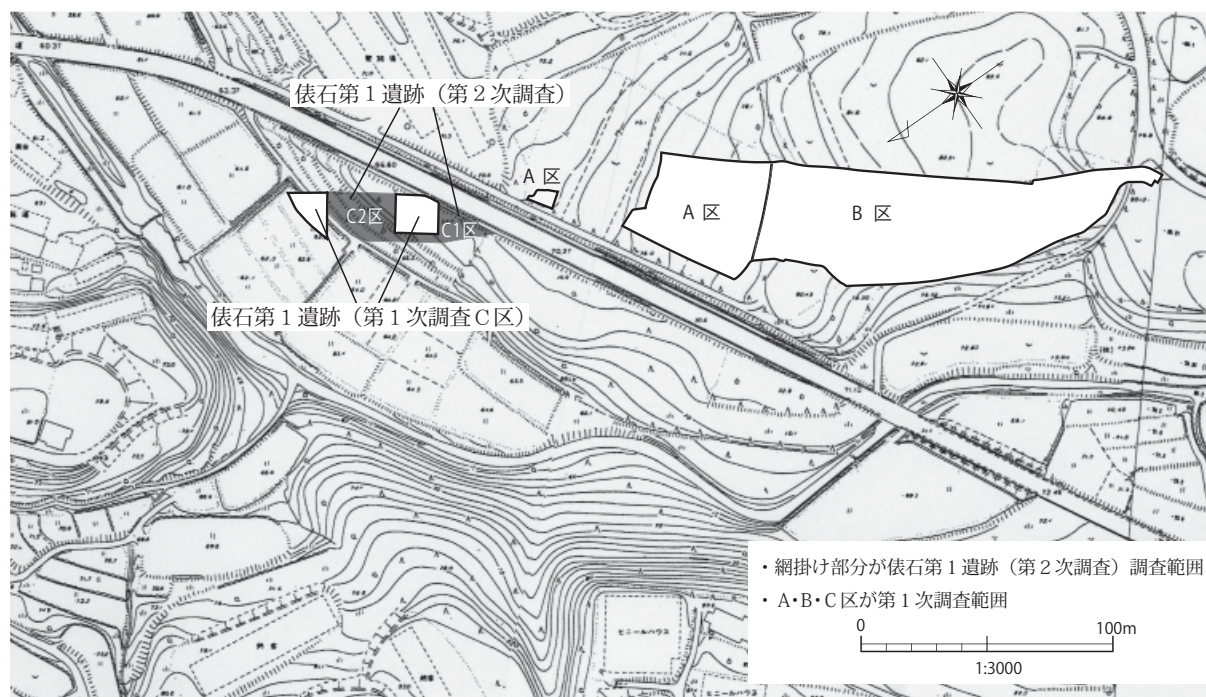
調査の結果、Ⅳ～Ⅶ、Ⅸ層中より縄文時代早期から後期旧石器時代の遺構・遺物が確認された。検出された遺構は1/10の縮尺で図化し、写真撮影等の記録を進めた。

### 第2節 整理作業の経過

整理作業は平成23年1月5日から宮崎県埋蔵文化財センター本館内で開始し、水洗、注記、接合、実測、製図を経て、平成23年10月に終了した。

石器は、接合作業を行いながら、色調、手触りを重視して石材分類を行った。礫の整理は水洗、注記、計量、接合の各作業を行った。計量は石材、礫群を構成する礫全体の重量、赤化状況等を記録した。

報告書に掲載した遺物分布図や土層断面図等一部の挿図は、調査で得られたデータを基にデジタルデータで作成した。挿図作成には、株式会社CUBICの『遺構くん』、『トレースくん』や、Adobe社の『IllustrATor』等のソフトウェアを使用した。



第1図 俵石第1遺跡の周辺地形図

### 第3節 基本層序

基本層序を設定するにあたって、C1区の南東壁を土層観察用の壁面として利用した(巻頭図版2)。土層は土質によりI~XI層までの層に分層した。

#### 【基本層序】

- I層：耕作土
- II層：黒色シルト質土 (Hue10YR 1/2)  
しまり、粘性ともに弱い。いわゆるクロボクと考えられる。一部1mm以下のIII層ブロックを含む。
- IIIa層：橙色砂質土 (Hue7.5YR 6/8)  
鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)。
- IIIb層：橙色砂質土 (Hue7.5YR 6/8) 鬼界アカホヤ火山灰。  
IIIaに比べII層のブロックを多く含む。
- IV層：黒褐色シルト質土 (Hue10YR 3/2)  
しまりやや弱く、粘性もやや弱い。第1次調査III層と同等の層であるため、MB0と考えられる。
- V層：暗褐色粘質土 (Hue10YR 3/4)  
しまりやや強く、粘性も強い。30cmのIV層のブロックを含む。第1次調査IV層と同等の層であるため、ML1上部に相当する。
- VI層：明黄褐色粘質土 (Hue10YR 5/6)  
しまり強く、粘性強い(V層よりも粘性強い)。第1次調査V~VI層と同等の層であるため、ML1下部に相当する
- VII層：オリーブ灰色粘質土 (Hue10YR 5/2)  
しまり、粘性ともにやや強い。VIII層ブロックをまばらに含む。
- VIII層：明黄褐色砂質土 (Hue2.5YR 7/6) 始良Tn火山灰(AT)。
- IX層：赤褐色粘質土 (Hue5YR 6/6)  
しまり、粘性ともに強い (IX > VI)。第1次調査IX層と同等の層であるため、ML3に相当する。C2区では円礫を含む。
- X層：明赤褐色粘質土 (Hue5YR 5/6)  
しまり、粘質ともに強い (X > IX)。ML3に相当する。調査区全体で円礫を含み、C2区では円礫を大量に含む。
- XI層：明緑灰色礫層  
青灰色の2m以上の巨礫を含む礫層。

第2次調査の土層の堆積は一定ではなく、北西側の段々畑状になる部分に向かって急激に傾斜している。

C1区南側は調査開始時まで山林として利用されていたが、全体的に堆積状況が良好であった。C1区北側は調査開始前に畑地として利用されていたため、II層は堆積しておらず、III、IV層もほとんど残存していなかった。また北西側は大規模な攪乱があり、攪乱下はX層であった。攪乱中からは弥生時代以降の遺物が出土した。

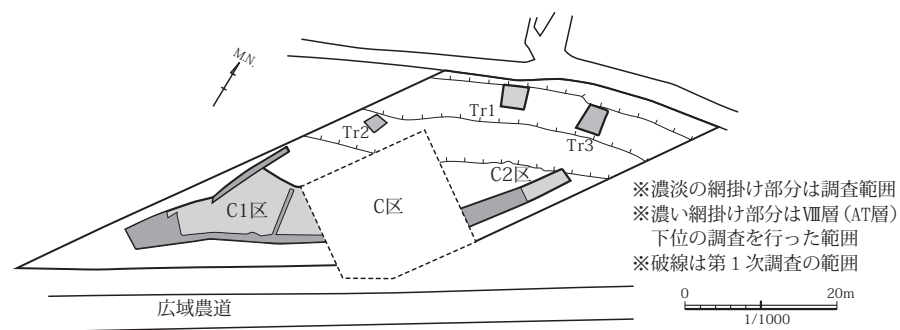
C2区もC1区北側と同様、畑地として利用されていたため、表土下はV層であった。VI層直下は円礫混じりのIX層であり、VIII層の堆積は確認されなかった。また北側斜面にいくにつれて、表土が1m近く堆積しており、表土直下は円礫混じりのIX層であった。C2区のトレンチ調査では、すべてのトレンチでIII層が確認できたが、III層直下のV層はX層由来の円礫が混じる状況であった。トレンチ調査を行った段々畑状の地形は急斜面を削平・造成して造られた地形であることもわかった。

また、第2次調査では、土層中にいくつかの火山灰が確認された。K-AhはC1区の南東~東側に、ATはC1区のほぼ全面で堆積していた。

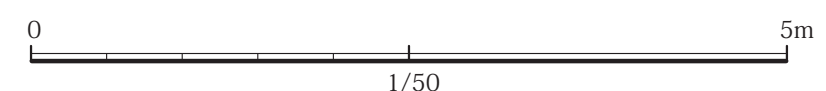
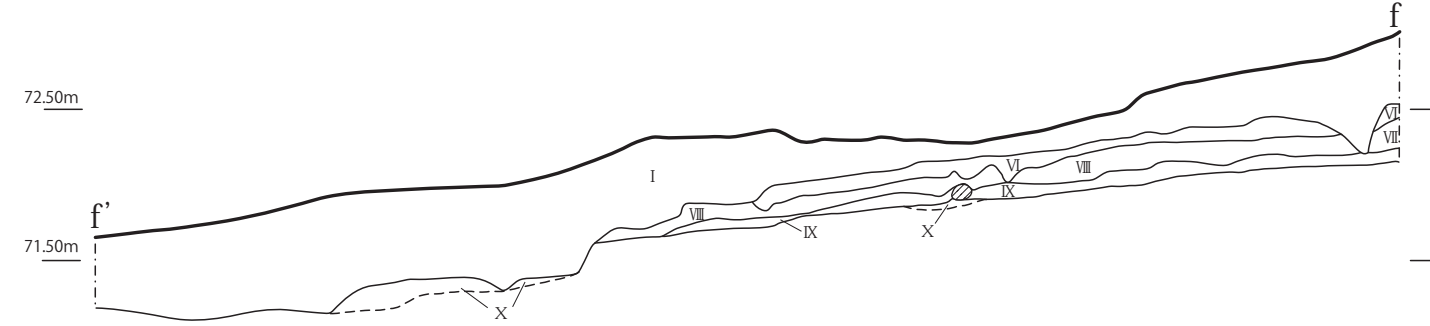
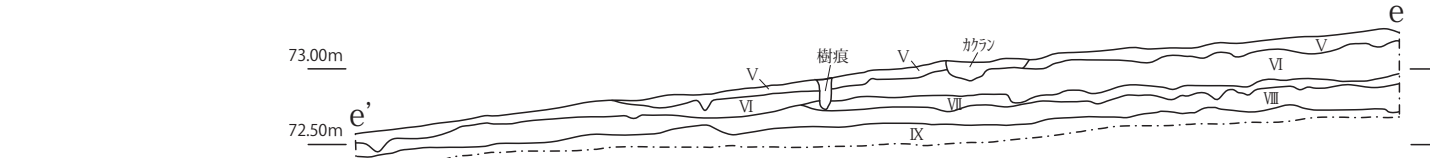
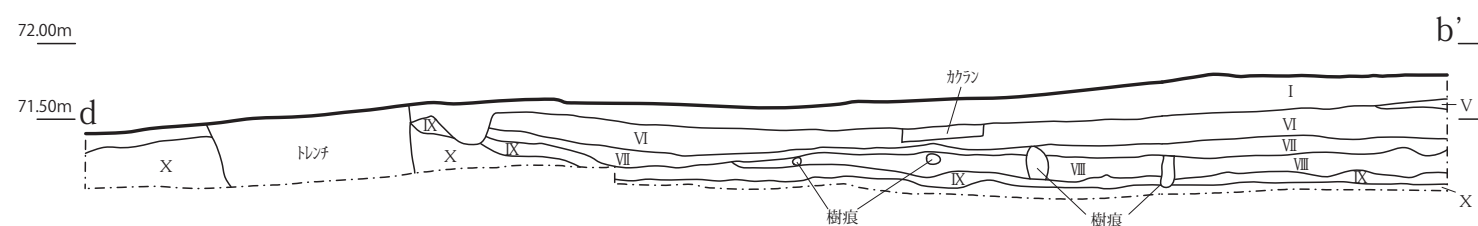
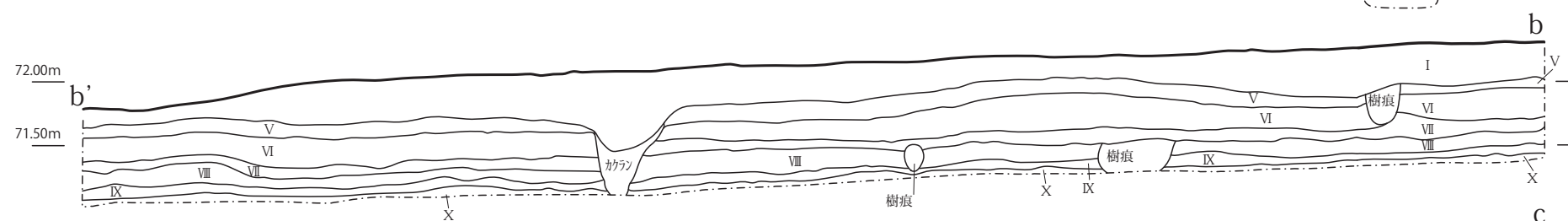
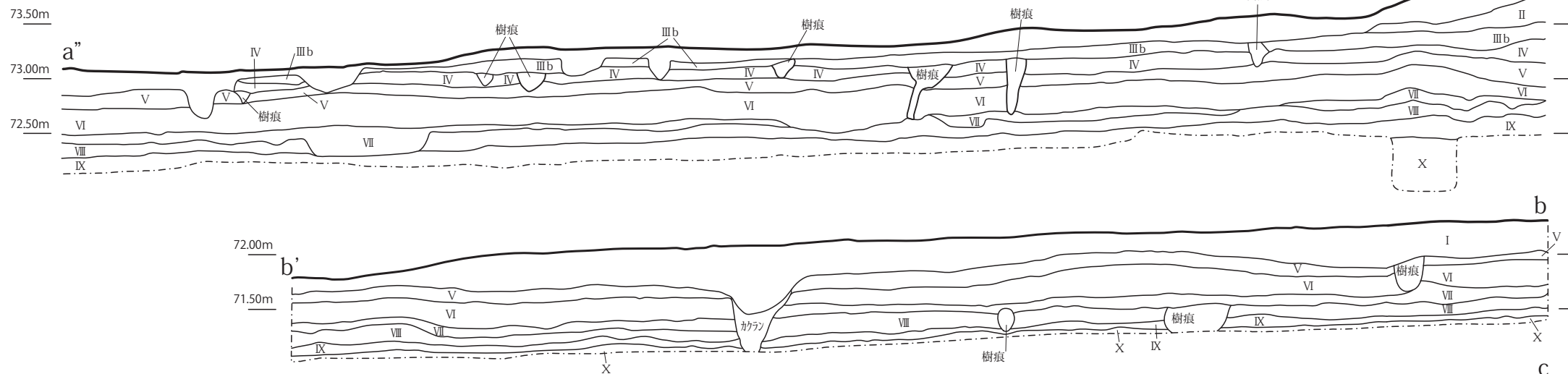
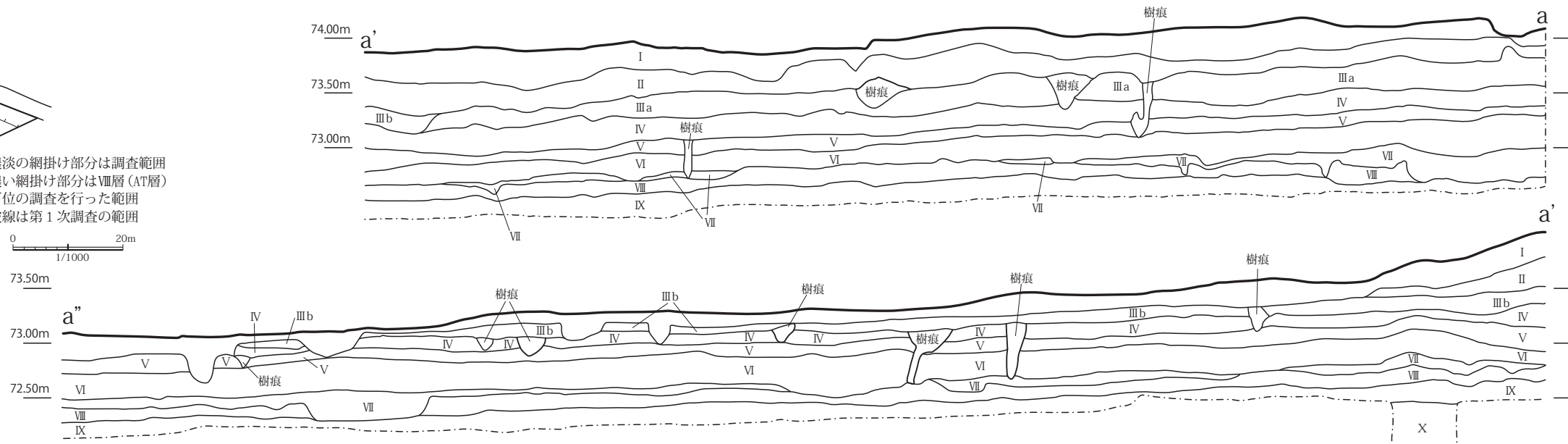
なお、東九州自動車道(都農~西都間)の調査では、宮崎平野部で認められるテフラやローム層、黒色帯に共通の略称を用いている。MB0やML1等がこの略称にあたる。ただし本遺跡が所在する都農町は宮崎平野の北端にあたり、共通認識として捉えられてきた宮崎平野の基本層序にそぐわないことも確認されている。

第1表 俵石第1遺跡(第2次調査)との土層対比

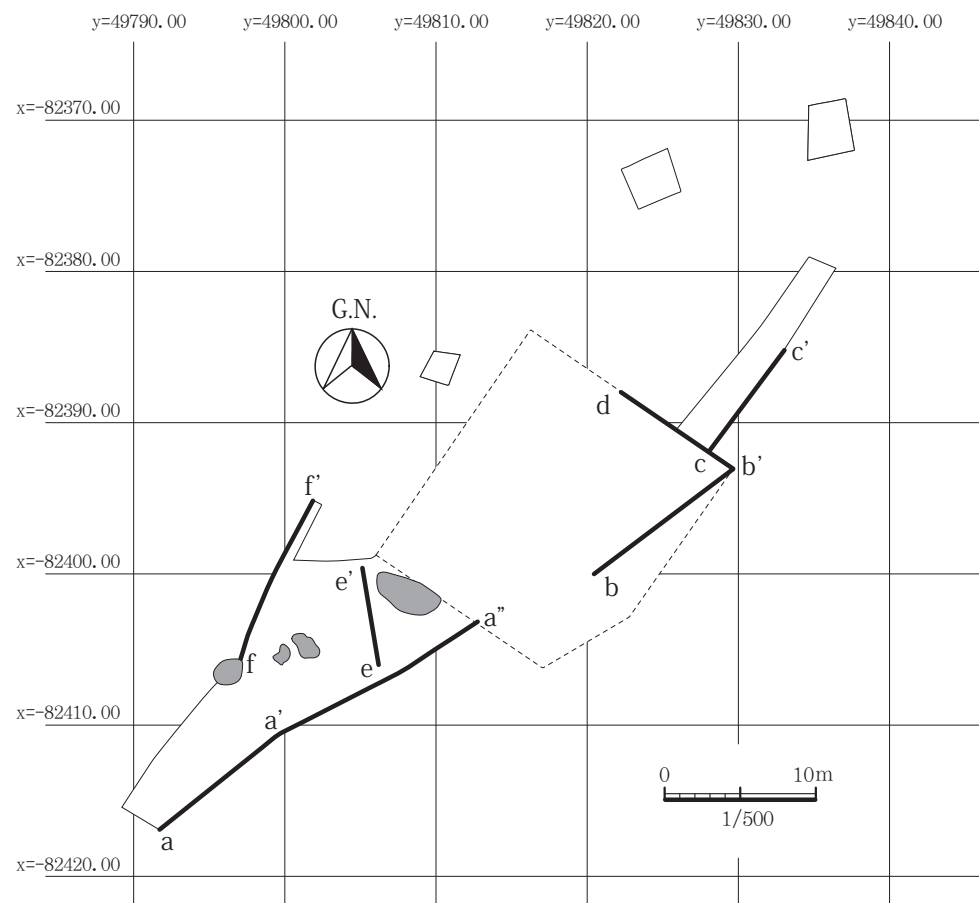
都農町域基本層序	尾立第2遺跡	俵石第1遺跡(第1次調査)		俵石第1遺跡(第2次調査)
表土	I層	耕作土		I層
クロボク(黒色土)	II層	I層		II層
鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)	IIIa、b層	II層		IIIa、b層
MB0(黒褐色ローム)	IV層	III層		IV層
ML1上部(暗褐色ローム)	V層	IV層	桜島薩摩(Sz-S)	V層
ML1下部(褐色ローム)	VIa層	Va層		
小林軽石(Kr-Kb)を含む層	VIb層 VIa層	小林軽石(Kr-Kb)	小林軽石(Kr-Kb)	VI層
MB1(暗褐色ローム)	VIIb層	—		
ML2(暗褐色ローム)	VIIc層	VI層		VII層
始良Tn火山灰(AT)	VIIIa、b層	VII層		VIII層
MB2(暗褐色ローム)	IXa層	始良深港(A-Fm)	VIIIa層	IX層
MB3(暗褐色ローム)	IXb層			
—	—	VIIIb層 (明褐色ローム)	始良深港(A-Fm) 始良大塚(A-Ot)	礫層 (X、XI層)
ML3(褐色ローム)	X層	IX層		



第2図 調査区およびトレンチ配置図



第4図 土層断面図



第3図 土層断面記録位置図

※ 網掛け部分は風倒木痕による攪乱の範囲、破線は第1次調査の範囲である。  
※ b-b'の土層断面図は第1次調査での記録であるが、未掲載であったため、今回掲載した。



## 第4節 遺物包含層の認識

第2次調査の調査中および調査後の遺物包含層の層位と遺構、遺物の認識は以下のとおりであった。

IV層 切外型ナイフ形石器、台形石器、細石刃核等

V層 縄文土器、石鏃、石匙、細石刃核、縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器、角錐状石器等

VI層 石鏃、細石刃、細石刃核、敲石、縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器、搔器、角錐状石器等。礫群を2基検出。

VII・IX層 剥片がごくわずか。

出土遺物の層別分布状況や地形等から、今回、報告書作成において以下のことに考慮し報告する。

1 第2次調査の旧地形は台地の末端部で、調査区北西に向かうにつれ急な斜面地である。そのため北西側の層厚が薄く、縄文土器がナイフ形石器を含む層から出土する等の遺物の垂直移動が多く見られた。

2 調査中に風倒木痕が4箇所を確認され、風倒木痕中から出土した遺物は一括遺物とし調査を行った。

3 南東部のV・VI層は調査区全体の中で層厚が比較的厚かったが、更なる分層が困難であったため、上・中・下に分けて遺物の取り上げを行った。

以上の3つの点を考慮した上で、後期旧石器時代か縄文時代かに時期がわかる遺物は、それぞれの時代の節で取り上げるが、時期の特定が難しい剥片等の遺物は出土した層に基づき報告する。しかし剥片については、後期旧石器時代の時期区分が困難であったため、時期区分を設定せず、まとめて報告する。

## 第5節 後期旧石器時代の遺構と遺物

後期旧石器時代の遺構・遺物はV～VI層を中心に確認され、一部IV層からも遺物が出土した。遺構はVI層中より礫群を2基検出した。遺物はVI層中に最も多く、ナイフ形石器、角錐状石器、細石刃等の狩猟具や、石器製作時に使用される敲石が出土した。

### (1) 遺構 (第5図)

C1区北西側にて2基の礫群を検出した。S11、S12ともに直径1.5mほどの範囲に散漫に分布している。構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩で、大きさは直径10cm程度であり、ほぼ全ての礫が赤化の弱いピンク色をした礫であり、顕著に熱を受けたとみられる赤化の強い礫はなかった。S12は第1次調査のトレンチ調査

で検出されたが、未報告であったため今回報告する。なおS12内からは、剥片尖頭器が出土している(第1次調査報告 掲載番号123)。礫群からタール等の付着物や焼土は確認されなかった。

### 調査区内の礫 (第6図)

調査区内の礫の多くは尾鈴山溶結凝灰岩で、赤化の弱いピンク色をした礫(赤化(弱))が多く、熱を受けて強く赤化した礫(赤化(強))はごくわずかであった。赤化(強)の礫は、小さな破碎礫が多く、大きな礫は非赤化の完形礫が多い傾向が見られた。礫群構成礫を含む調査区内の礫の接合を行い、15点接合できた。傾斜に沿って接合した礫が多く、破碎後に流れ落ちたと考えられる。

### (2) AT下位の遺物・石材分布

AT下位のIX層からは流紋岩製、尾鈴山溶結凝灰岩製の剥片がごくわずかに出土し、接合関係はみられなかった。遺物はATの堆積が非常に薄い箇所から出土し、AT上位から同一母岩と考えられる石器が出土したことから、落ち込んだものだと考えられる。

整理作業の中で、第2次調査区と第1次調査区との遺物の接合状況を検討したところ、第1次調査区内での接合が確認されたため、追加して報告する。分布を再検討した結果、同一個体の頁岩が集中している箇所が確認された(第7図)。また接合した遺物は第13図41、42である。

### (3) AT上位の遺物・石材分布

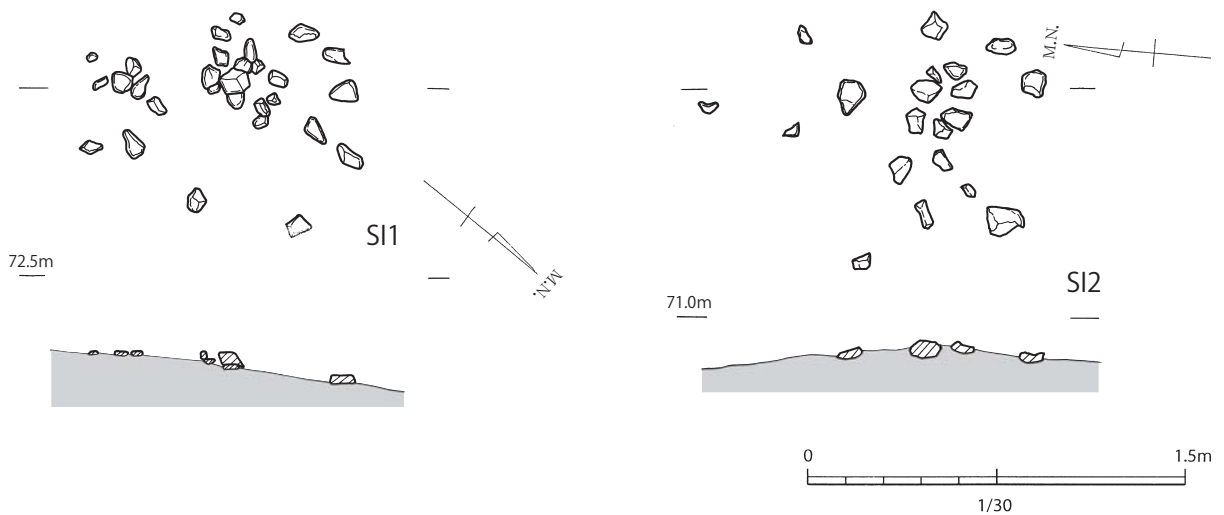
AT上位のV～VII層からは、ナイフ形石器や角錐状石器、細石刃核、細石刃、敲石等が出土した。

### 石材分布 (第8図)

第2次調査では、剥片が最も多く出土し、全体の7割を占める。剥片は頁岩製、ホルンフェルス製、流紋岩製の順で多い。南西側では、多くの白色系の流紋岩製の微細剥離剥片、剥片等が出土する箇所が確認された。これらは同一母岩のものが少なく、接合関係も1点のみであった。黒曜石も中央部に偏る傾向があるが、他の石材はほぼ調査区全体に散在していた。

### 器種別の分布 (第9・10図)

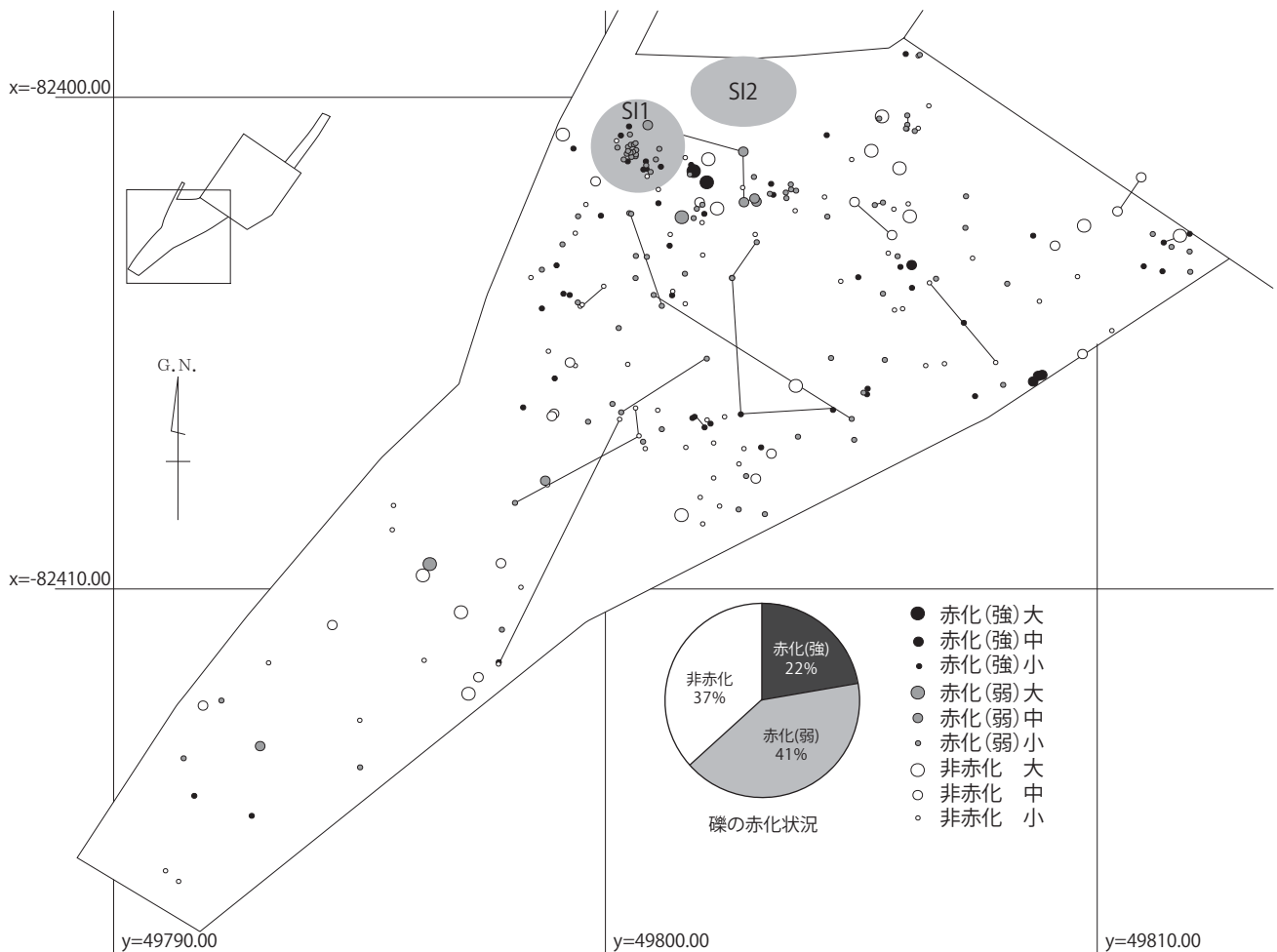
ほとんどの器種が比較的散在する傾向が見られるが。細石刃、細石刃核はC1区中央に集中し、敲石はC1区北東側に分布する傾向が見られた。



第5図 後期旧石器時代礫群実測図

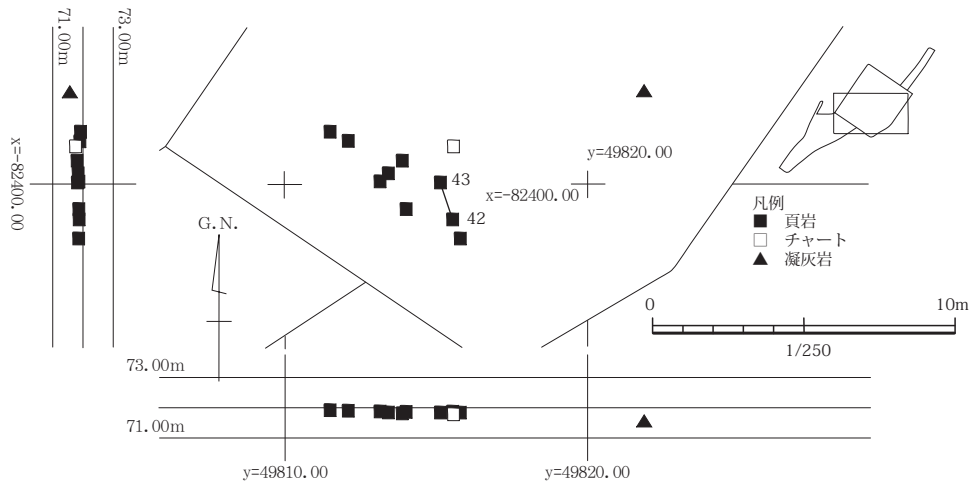
第2表 後期旧石器時代礫群観察表

掲載番号	検出層	長軸 (m)	短軸 (m)	石材	礫数 (個)	赤化度	礫完形度	備考
S11	VI	1.2	1.1	尾鈴山溶結凝灰岩	29	約90%	約80%	礫は赤化の弱いものがほとんど。
S12	VI	1.1	1.1	尾鈴山溶結凝灰岩	20	約90%	約80%	第1次調査時に検出。剥片尖頭器を伴う。

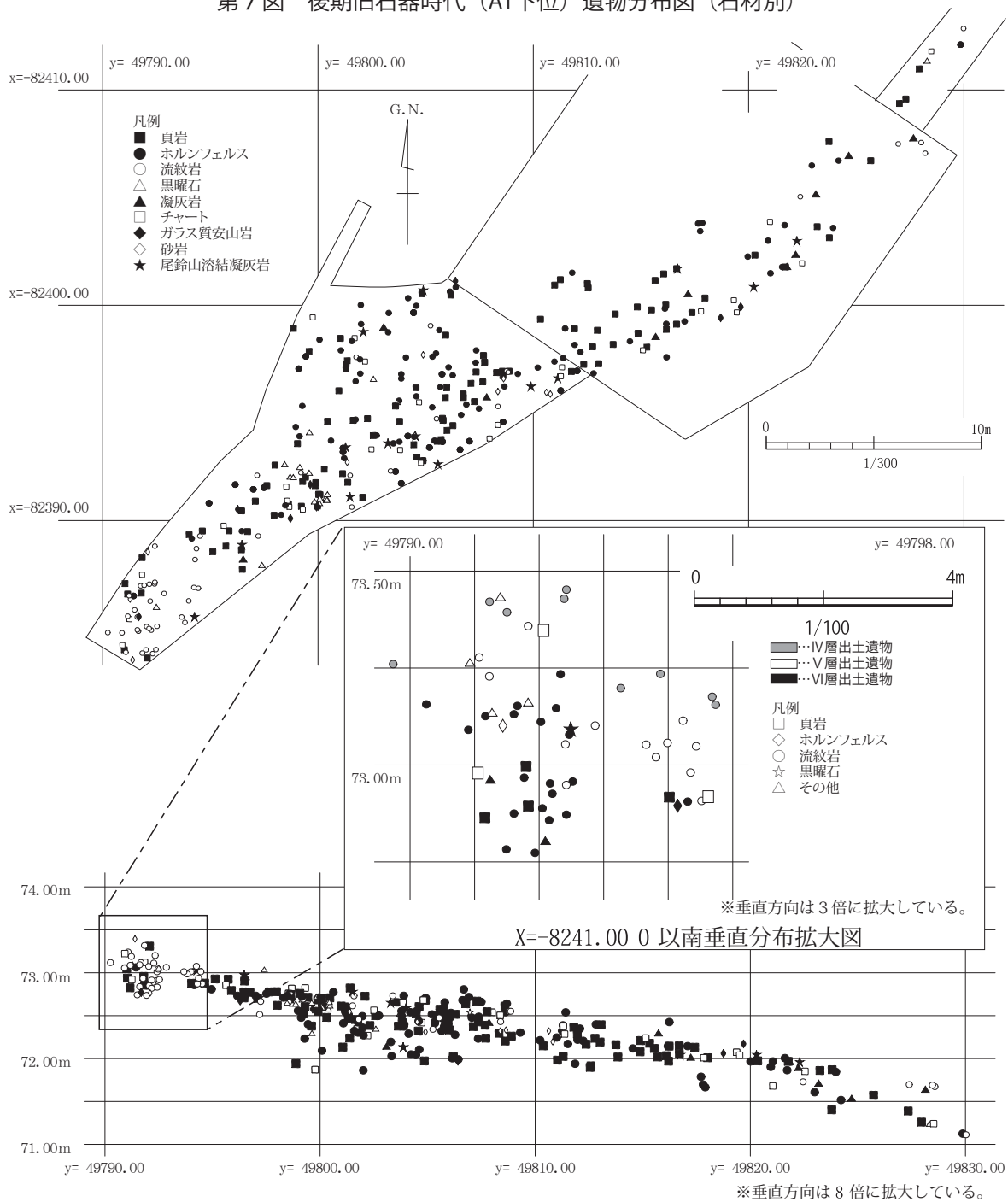


第6図 C1区礫分布図



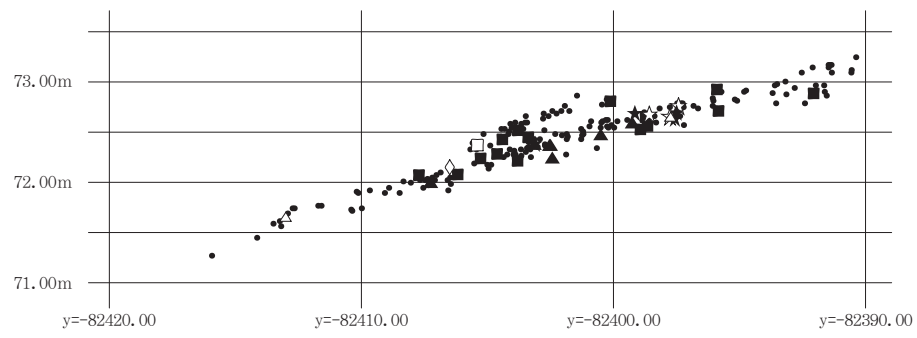
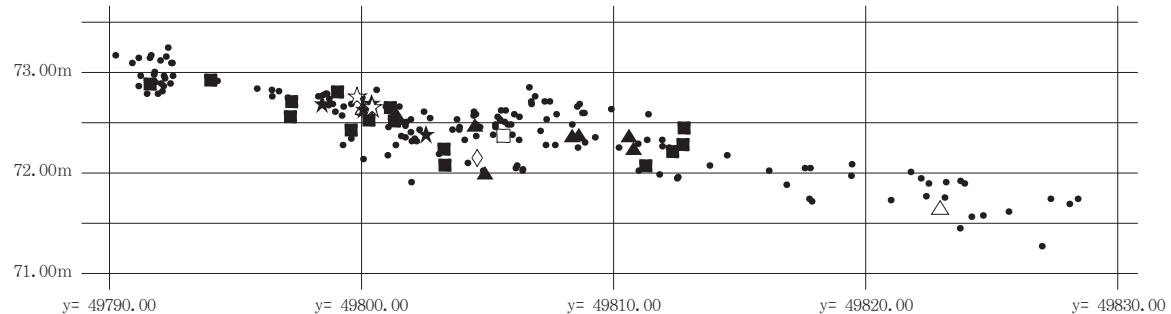
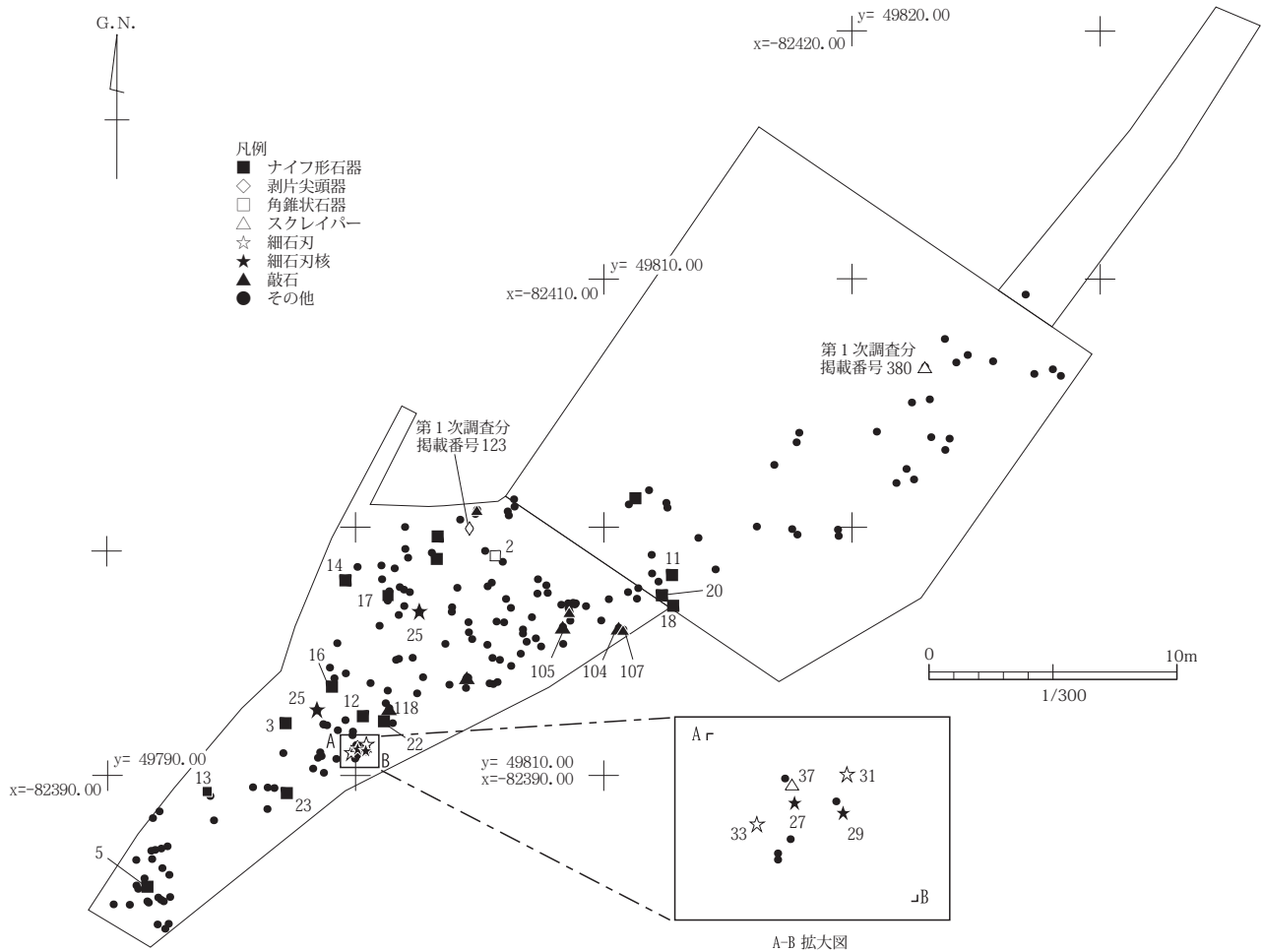


第7図 後期旧石器時代 (AT下位) 遺物分布図 (石材別)



第8図 後期旧石器時代 (AT上位) 遺物分布図 (石材別)

俵石第1遺跡  
(第2次調査)

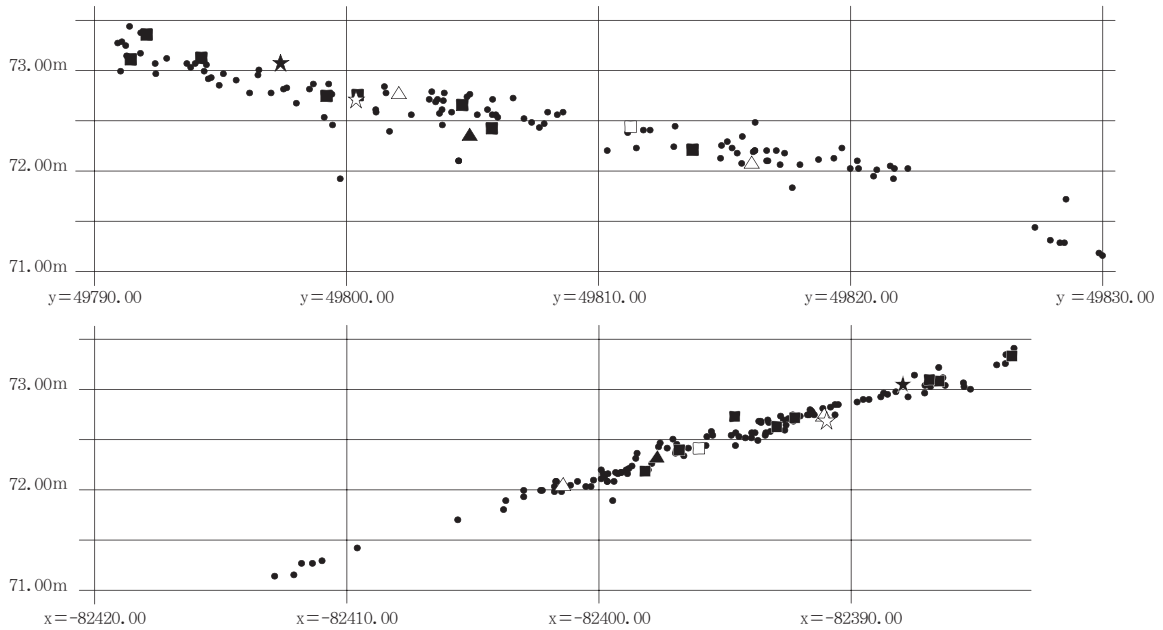
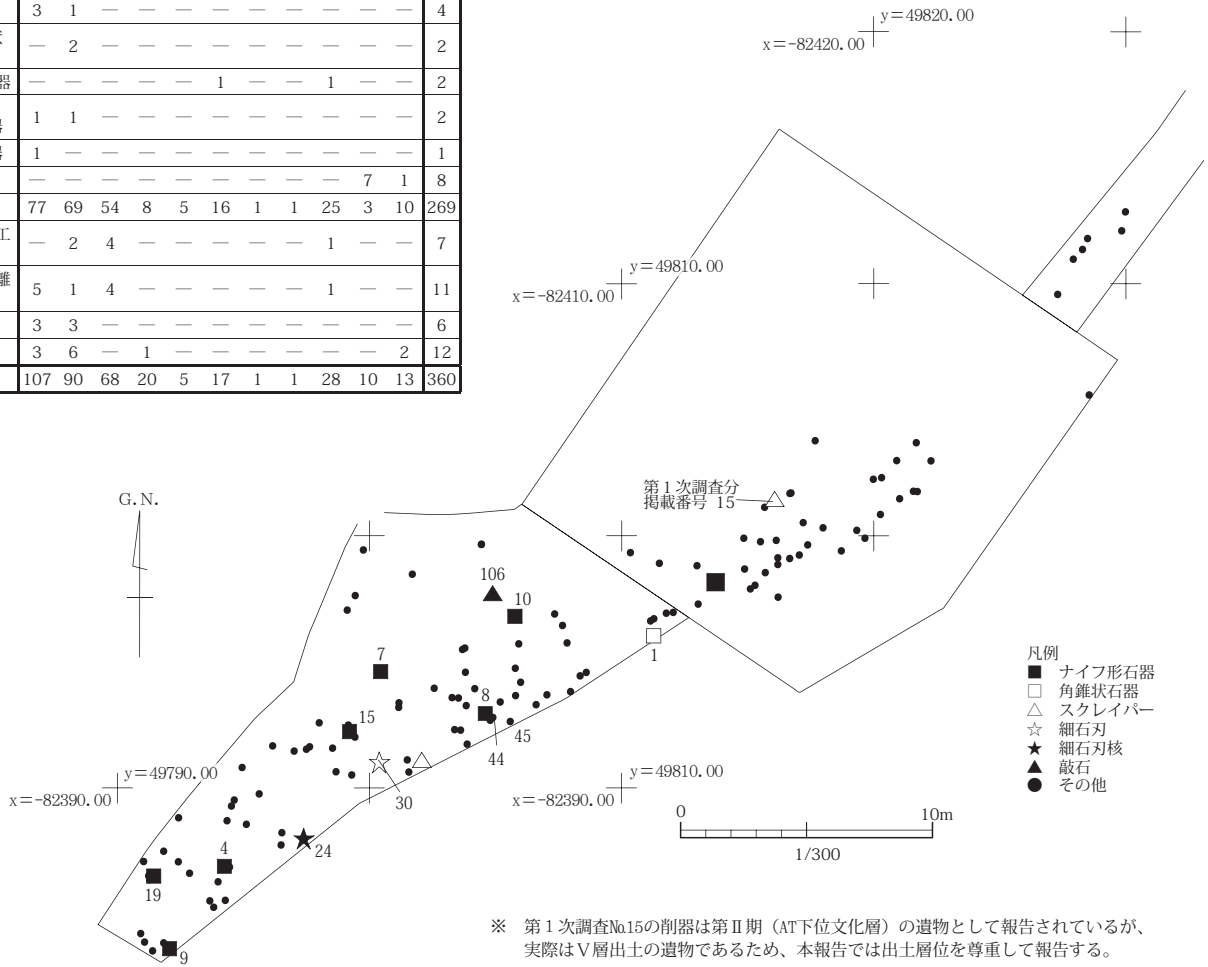


※垂直方向は水平方向に対し4倍に拡大している。

第9図 後期旧石器時代 (VI層) 遺物分布図 (器種別)

第3表 石材別器種出土内訳表

	Sh	Hol	Ryu	Ob	An	Tu1	Tu2	Cr	Ch	Sa	Os	合計
ナイフ形石器	14	5	6	—	—	—	—	—	—	—	—	25
細石刃核	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	6
細石刃	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	5
搔器	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
角錐状石器	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
台形石器	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	2
剥片 尖頭器	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
尖頭器	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	1	8
剥片	77	69	54	8	5	16	1	1	25	3	10	269
二次加工 剥片	—	2	4	—	—	—	—	—	1	—	—	7
微細剥離 剥片	5	1	4	—	—	—	—	—	1	—	—	11
石刃	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
石核	3	6	—	1	—	—	—	—	—	—	—	12
合計	107	90	68	20	5	17	1	1	28	10	13	360



※垂直方向は水平方向に対し4倍に拡大している。

第10図 後期旧石器時代（V層）遺物分布図（器種別）

#### (4) 出土遺物

この項ではV・VI層から出土した遺物に加え、IV層中で出土したナイフ形石器や流紋岩等についても報告する(第11～21図)。個々の遺物の特徴については観察表に付し、ここでは遺物全体の傾向について述べる。

**角錐状石器(第11図)** 角錐状石器は2点出土した。第1次調査で1と同一母岩の剥片尖頭器も出土した。

**ナイフ形石器(第11・12図)** ナイフ形石器は時期不明のものも含め21点出土し、全点図化した。そのうち、ノの字剥片を素材としたナイフ形石器は4点出土した。それらは全て流紋岩製で、3と4は基部：刃部が1：1ないし2：1(I類)で、5と6は基部加工が施されている(II類)。特に4はナイフとして使用後に刃部を潰しスクレイパーとして使用した可能性が考えられる。出土したナイフ形石器の中で出土点数が最も多いものは、小型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である(III類 7～17)。石材別にみると、頁岩製が最も多く9点で、流紋岩製とホルンフェルス製は各1点のみである。背面にポジ面を取り込み断面形が分厚くなるもの(Aタイプ：7～13)と、背面に全てネガ面を取り込み平面形が幅広もの(Bタイプ：14～17)とに大別できる。二次加工は、腹面から背面に向けて加工を施すもの(7・8・11・13・15・16)、背面から腹面に向けて加工を施すもの(9・10・11・14)、その両方をもつもの(12・17)がある。18は石刃素材のナイフ形石器、19と20は切出型ナイフ形石器である。21～23もナイフ形石器である。

**細石刃核・細石刃(第12・13図)** 細石刃核は6点出土した。全て小型の黒曜石製で、いずれも礫面を残している。黒曜石1類の桑ノ木津留産黒曜石は、原石が3～4cm大と小さく、24～29は原石を利用して作ったものと考えられる。同じようなタイプの細石刃核は、尾立第2遺跡や第1次調査でも出土した。24～29は打面調整を行っており、26は特に顕著である。細石刃は4点出土した。全て黒曜石製であるが、33は細石刃核に同種類の黒曜石が伴っていない。

**尖頭器・台形石器(第13図)** 尖頭器と台形石器は

各1点ずつ出土し、いずれも小型である。尖頭器は34、台形石器は35である。

**スクレイパー(搔器)(第13図)** スクレイパー(搔器)は2点出土し、全点図化した(36・37)。37は正面中央に礫面を残し、下部のみ二次加工が施されている。第1次調査C区からは流紋岩製のスクレイパーが出土した。

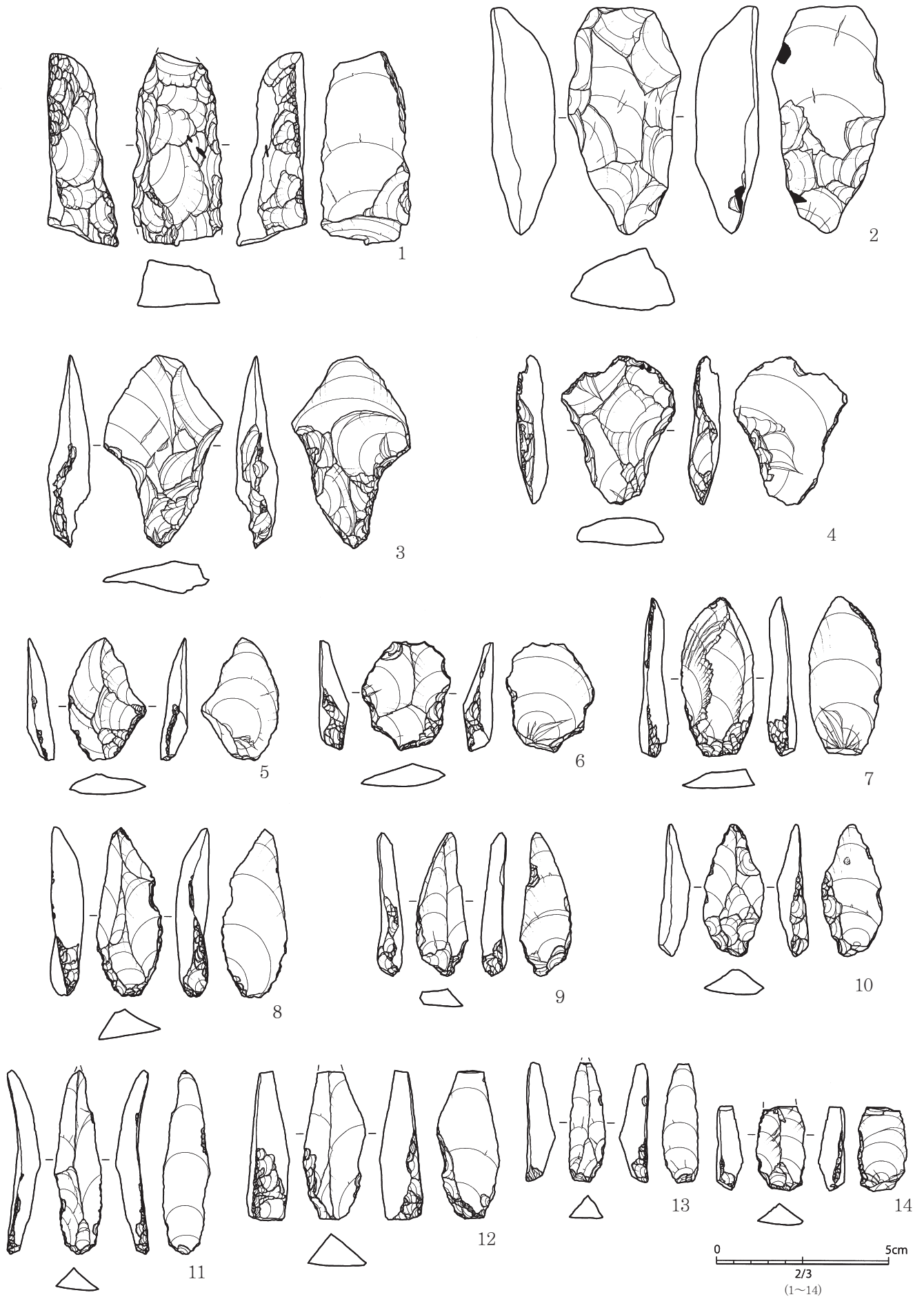
**接合資料(第13・14図)** 接合資料は3点中2点、個別図を合わせて計6点を図化した。第1次調査区出土の石器と第2次調査区出土の石器の接合を試みたところ、第1次調査区内での接合関係を新たに確認した。41は第1次調査報告書掲載番号50の剥片である(『宮崎県埋蔵文化財センター 第200集 俵石第1遺跡』を参照)。

**石核(第15・16図)** 石核は8点出土し、全点図化した(50～57)。ホルンフェルス製が最も多く、接合した資料は1点しかなかった(48は節理面で割れていたため、接合資料として扱っていない)。石核には、上面から剥離を行ったものと、外から内へと求心状に剥離を行っているものがある。

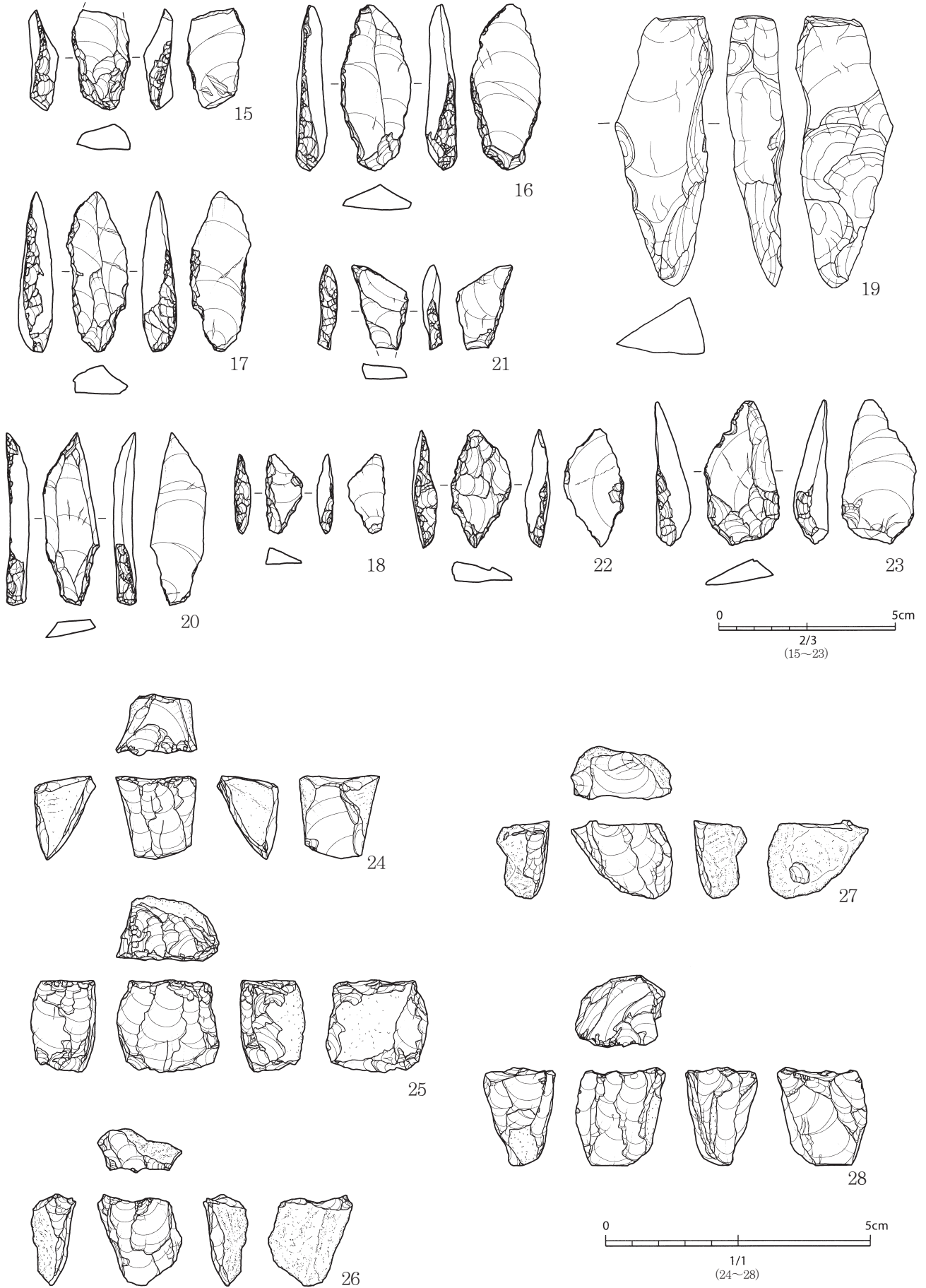
**二次加工剥片・微細剥離剥片(第17図)** 二次加工剥片・微細剥離剥片は9点出土し全点図化した(58～66)。二次加工剥片の石材は多様であるが、微細剥離剥片には流紋岩製のノの字剥片もある。

**石刃・剥片(第17～20図)** 石刃は5点、剥片は31点図化した。頁岩製の遺物は大小のばらつきが見られるが、流紋岩製の剥片は比較的小片が多く、ホルンフェルス製は5～10cm大の大きさの剥片が多い傾向が見られた。それぞれの石材で同一母岩と思われる資料が少なかった。石刃は頁岩・ホルンフェルス製のものが多く、頁岩製の67～69・71は同一母岩の石材が他に出土していない。また67はIII類のナイフ形石器の素材になる剥片である。

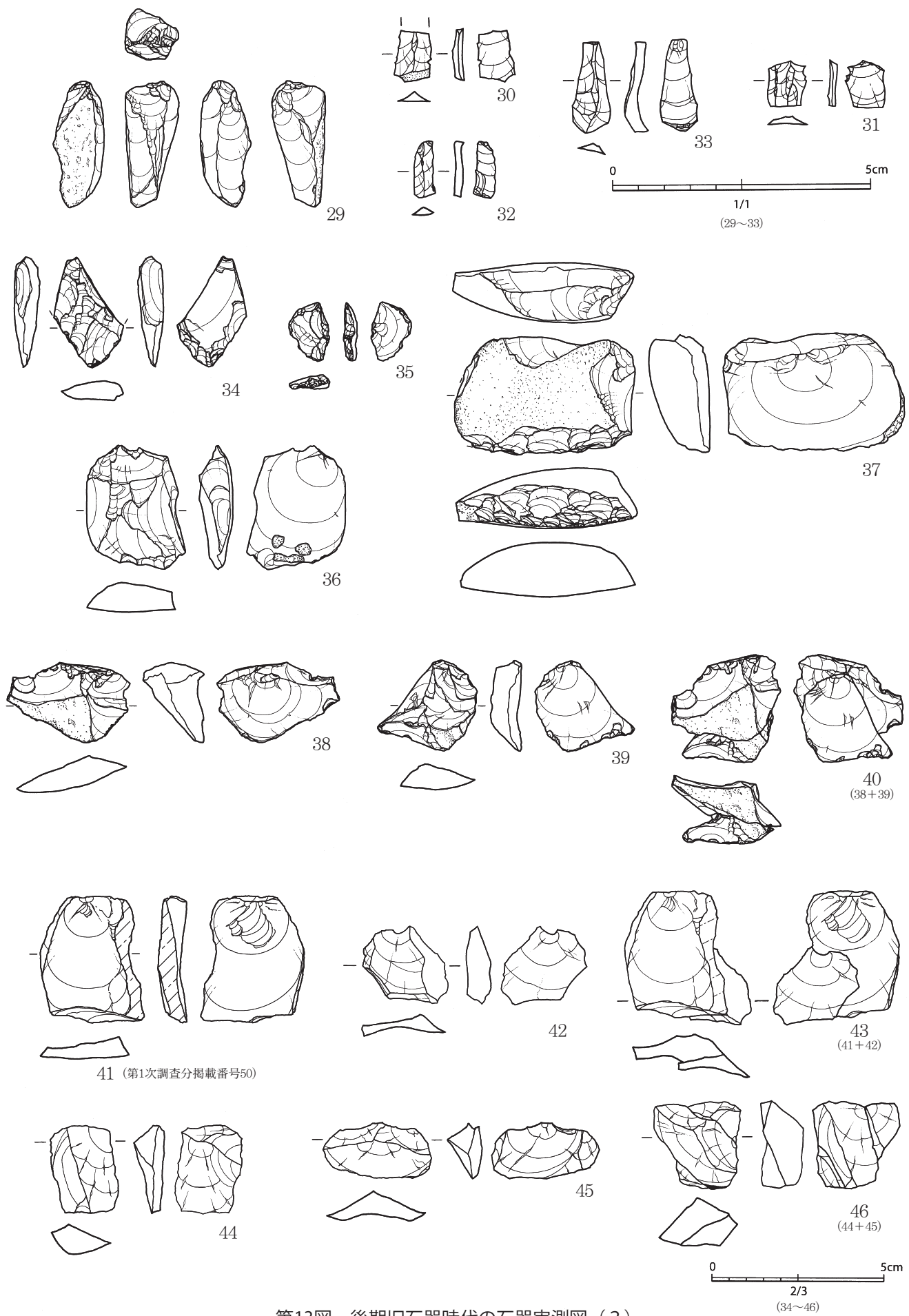
**敲石(ストーンリタッチャー)(第20・21図)** 敲石は8点出土し、7点を図化した。敲き磨りを行ったもの(104・105・107・109・110)と、敲打痕のみのもの(106・108)に大別でき、敲き磨りを行ったものが大半を占める。砂岩製が大半を占め、尾鈴山溶結凝灰岩製も一部存在する。剥離面の確認できる敲石もあり、敲打時に剥離したのと考えられる。これらは石器製作時に使用したと考えられる。



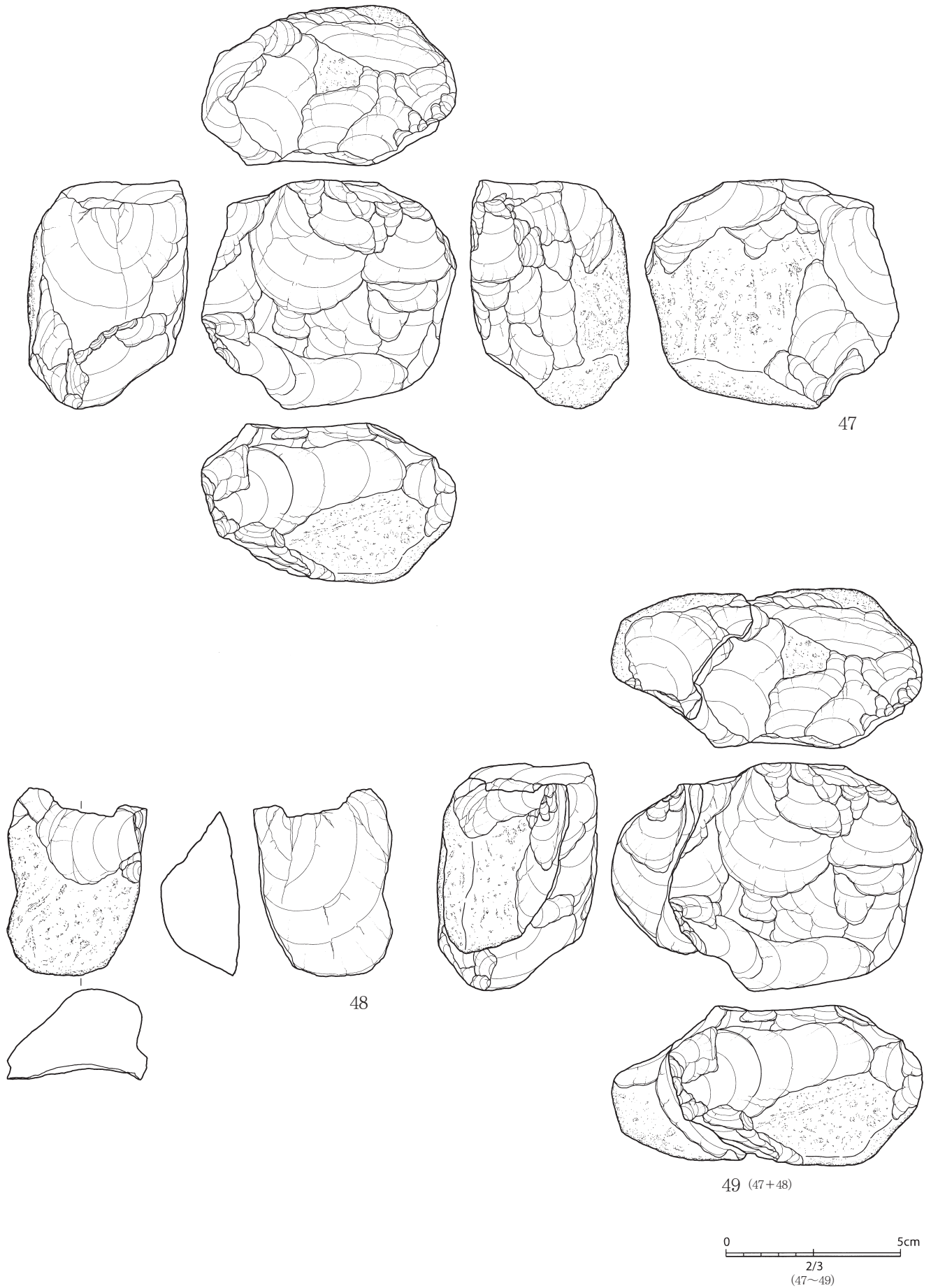
第11図 後期旧石器時代の石器実測図(1)



第12図 後期旧石器時代の石器実測図(2)

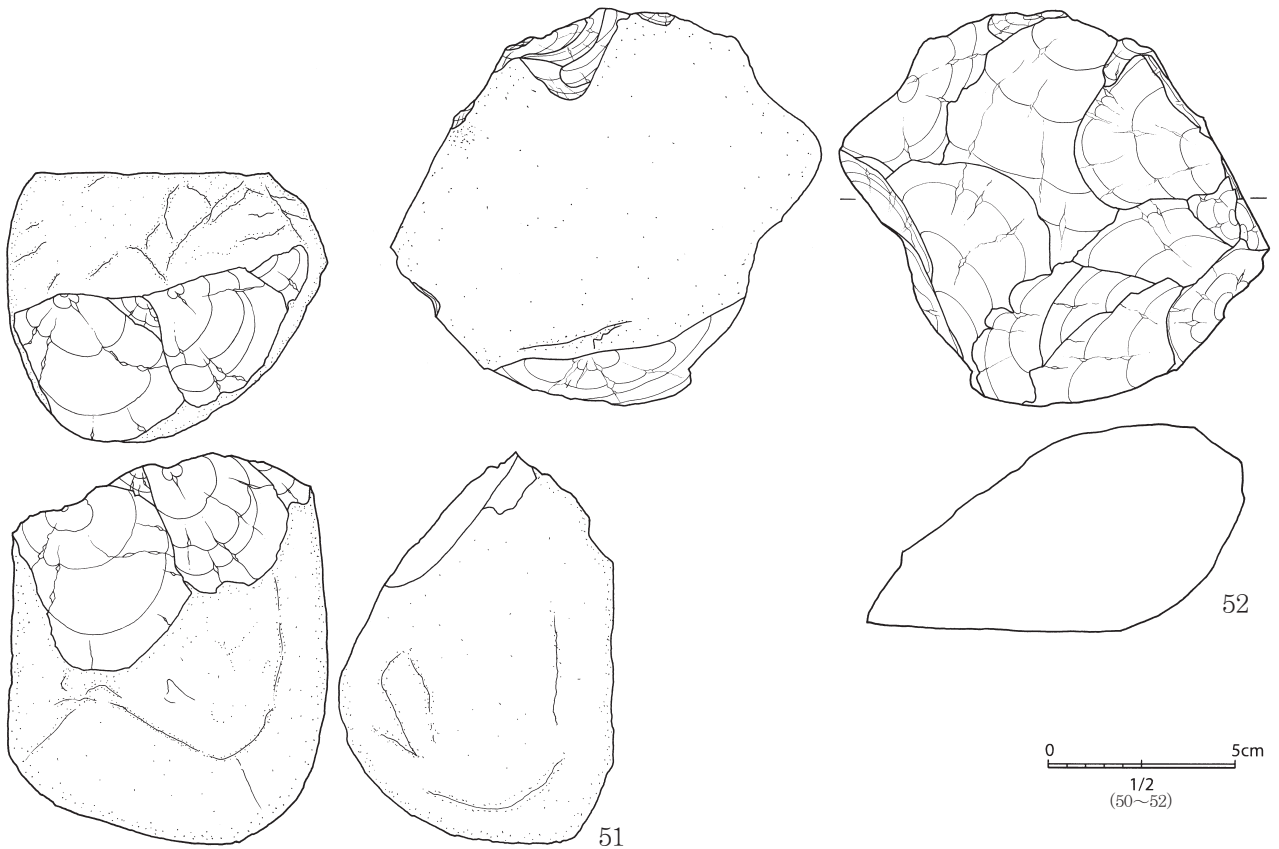
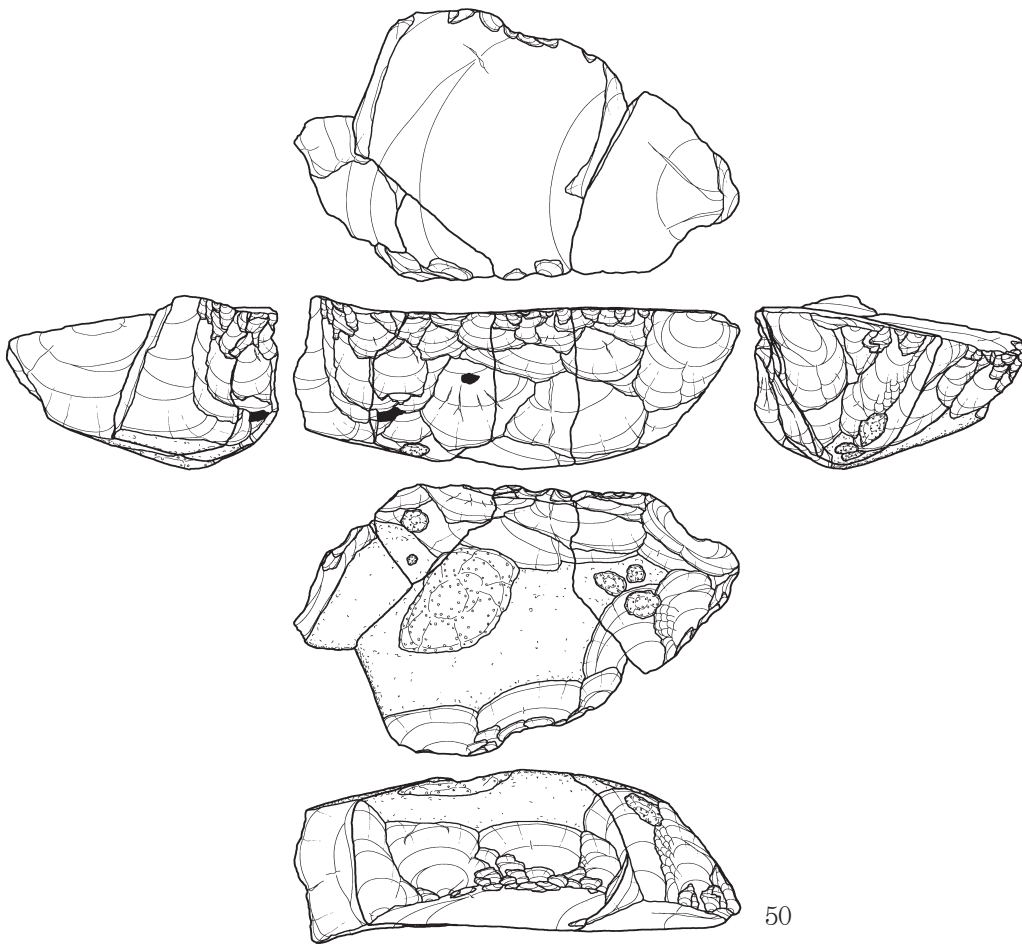


第13図 後期旧石器時代の石器実測図 (3)

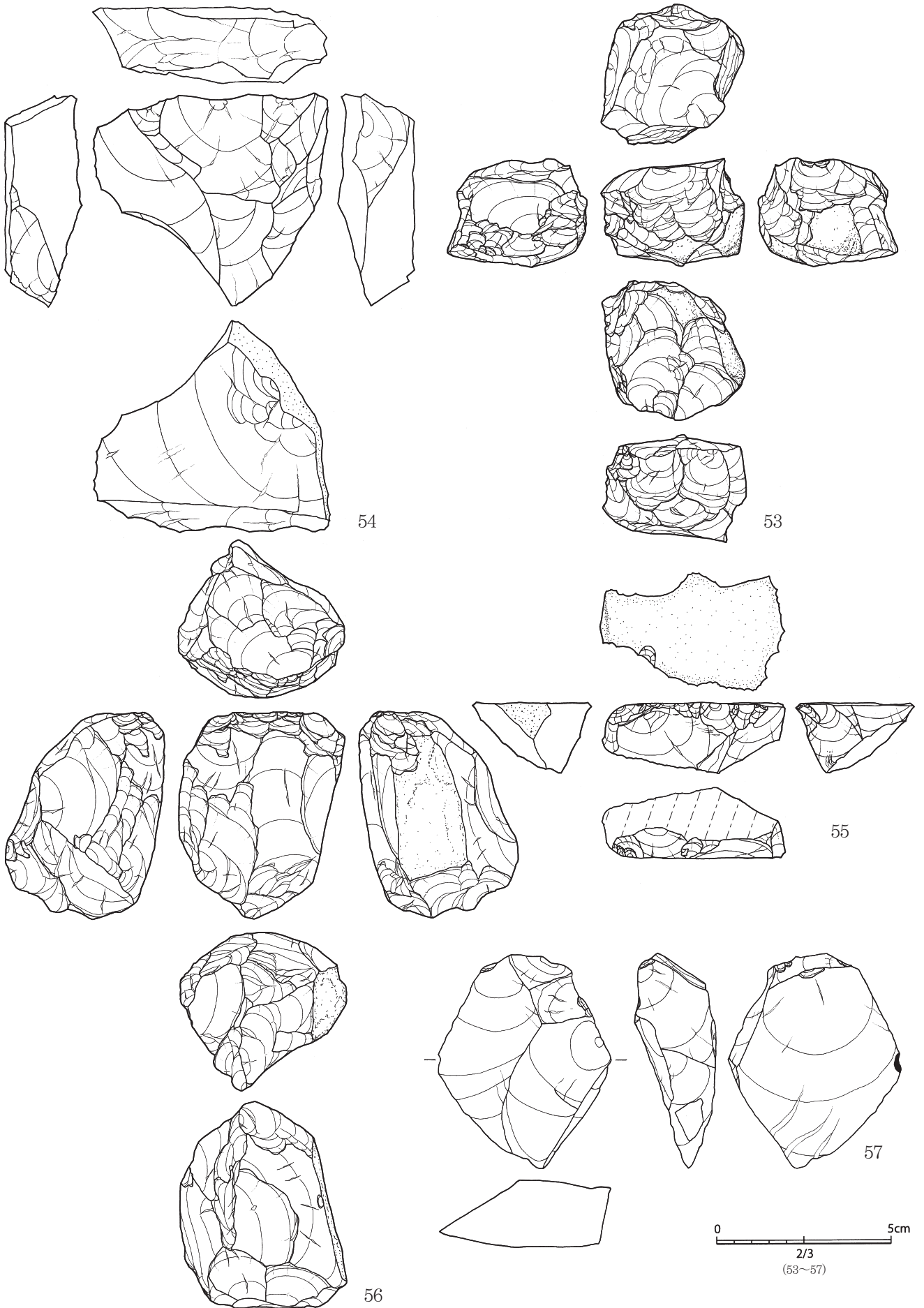


第14図 後期旧石器時代の石器実測図(4)





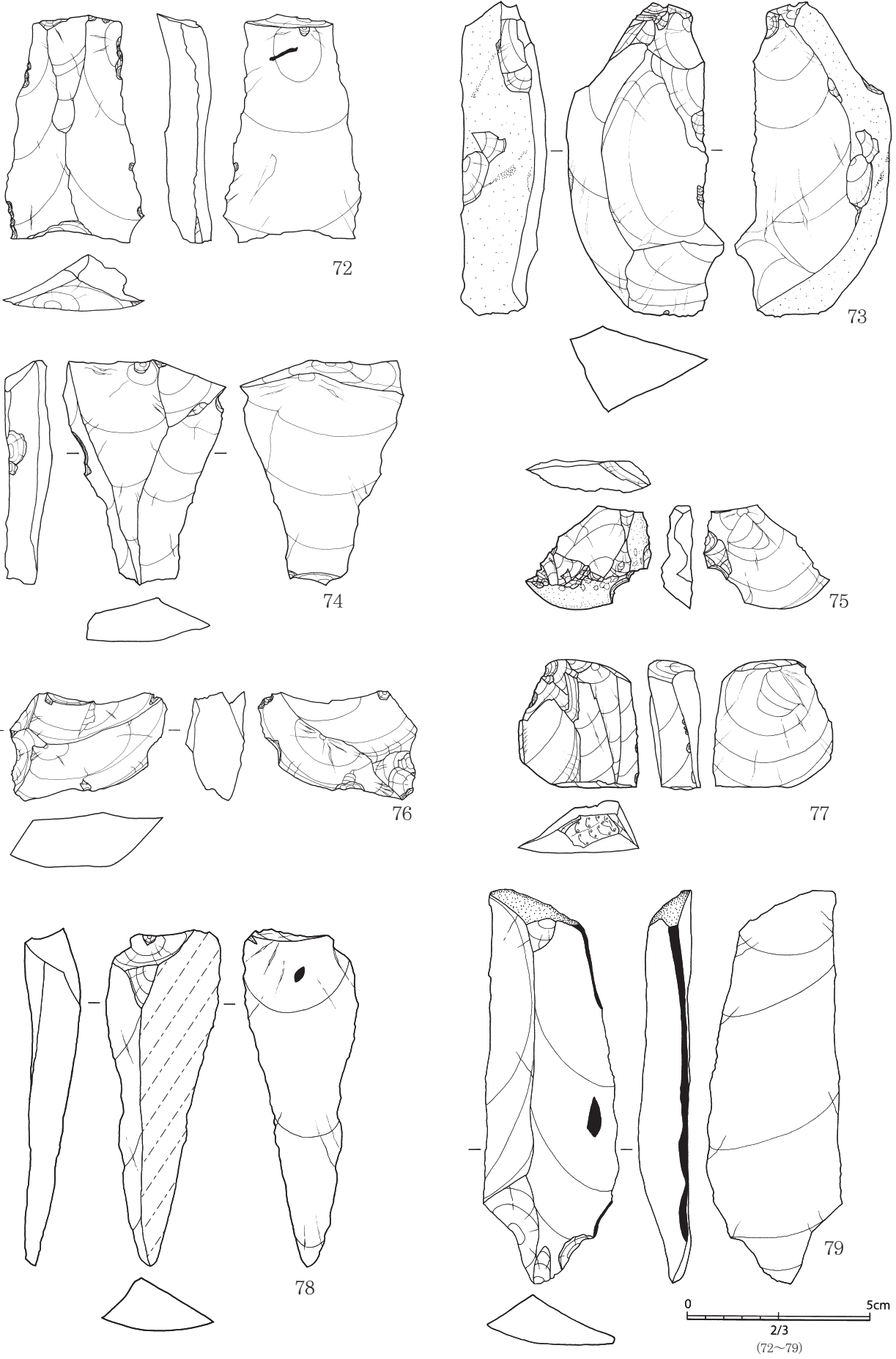
第15図 後期旧石器時代の石器実測図 (5)



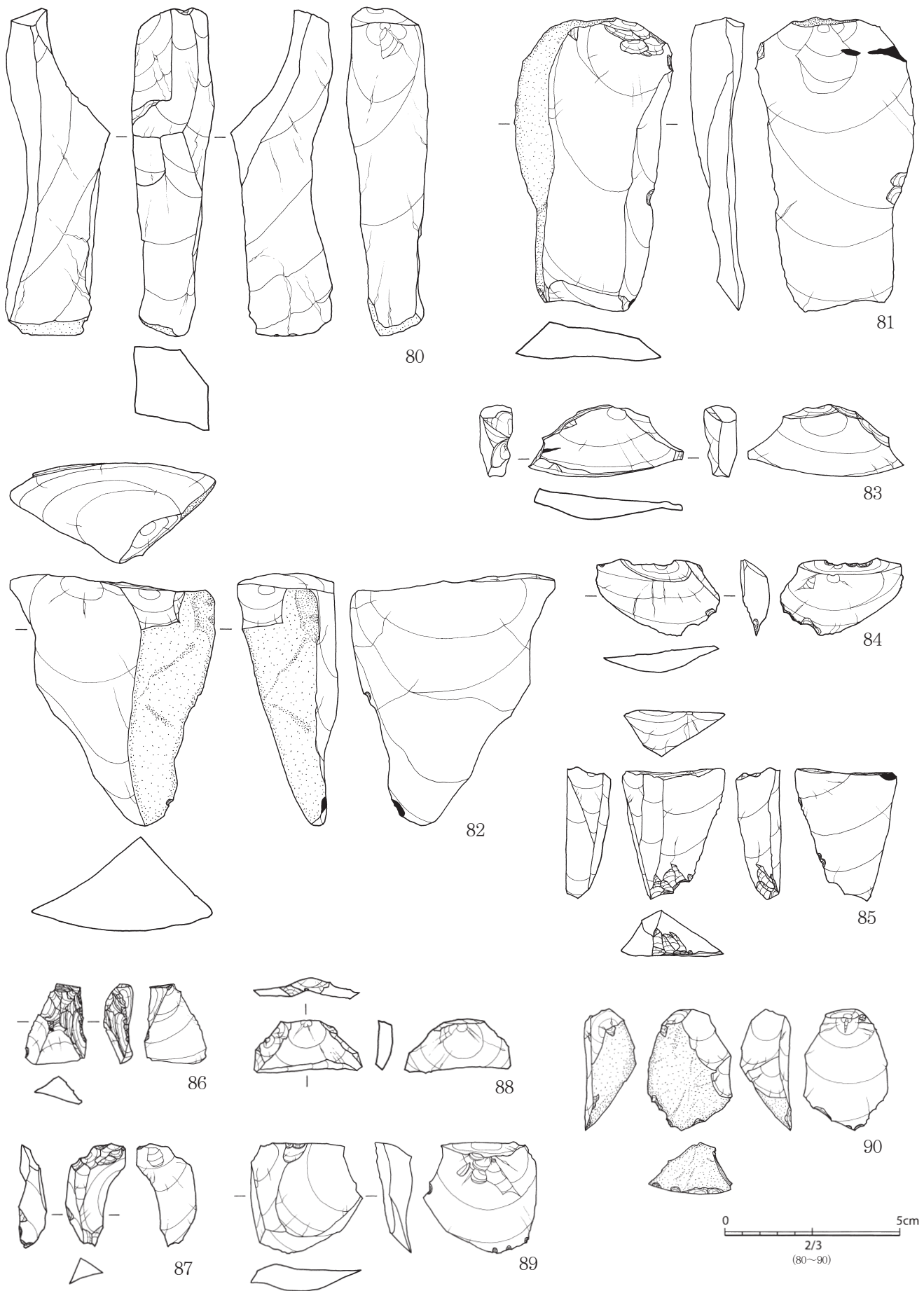
第16図 後期旧石器時代の石器実測図(6)



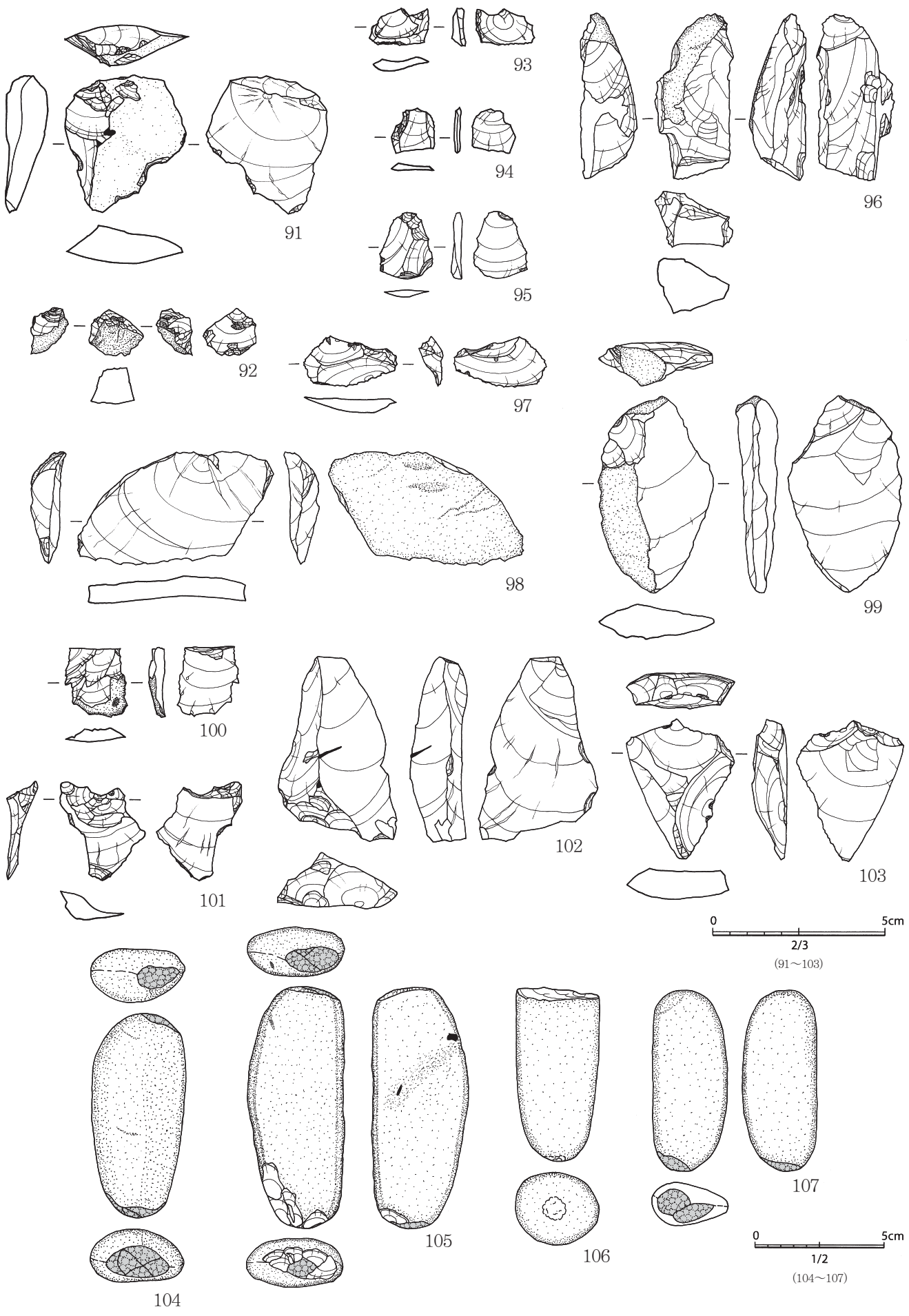
第17図 後期旧石器時代の石器実測図（7）



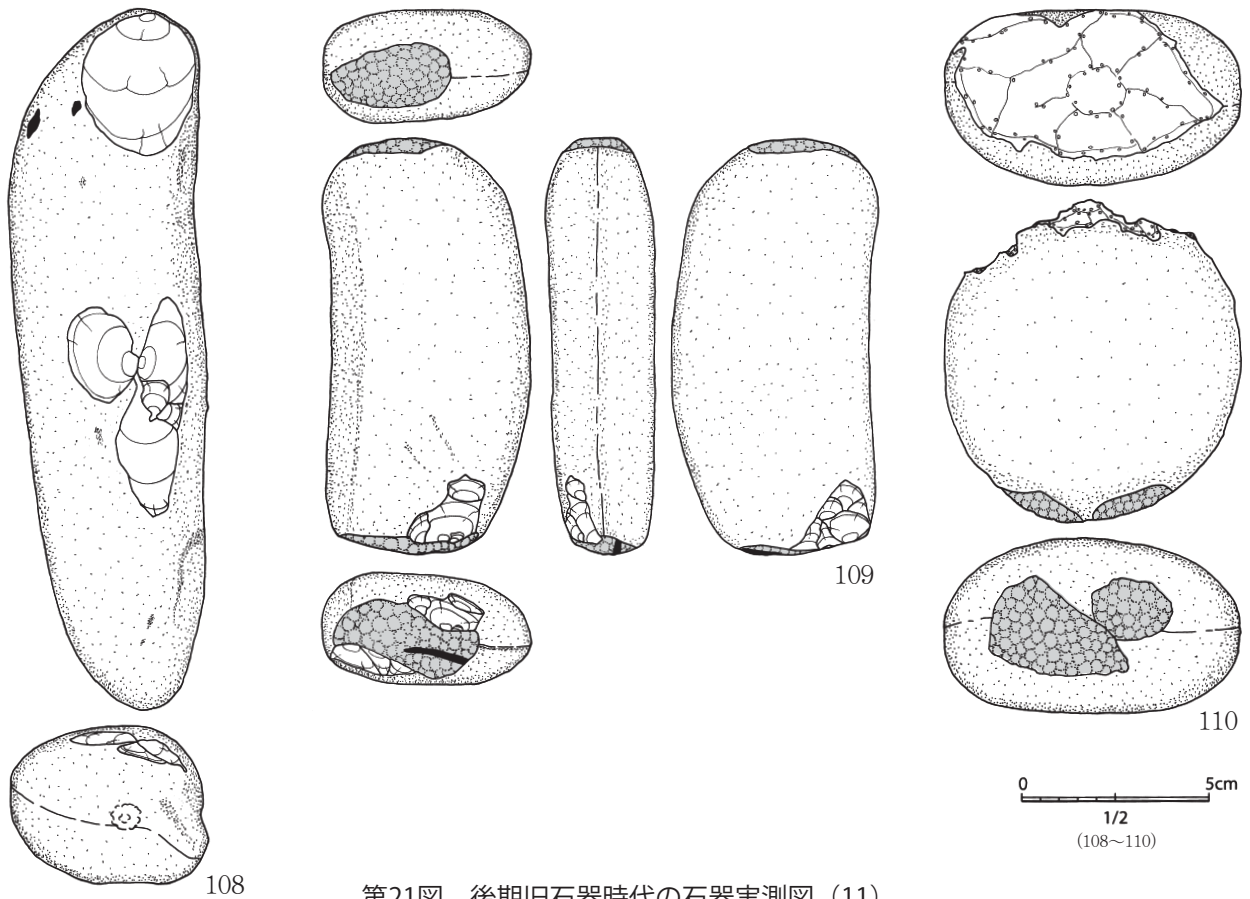
第18図 後期旧石器時代の石器実測図(8)



第19図 後期旧石器時代の石器実測図(9)



第20図 後期旧石器時代の石器実測図 (10)



第21図 後期旧石器時代の石器実測図 (11)

### 第6節 縄文時代早期の遺物

遺構は検出されず、遺物はIV層を中心に石鏃や縄文土器等が出土した。しかし、比較的層の残存状況がよい南側でも層厚が薄く、遺物も少量であった。

#### (1) 石材別出土状況 (第22図)

IV層中の遺物はアカホヤが検出された範囲を中心として確認された。IV層出土遺物のほとんどが剥片のため、石材別に図化した。C1区南西部分で流紋岩の分布が確認できるが、この石材の特徴や下層の状況、剥片の形状等を考慮すると、後期旧石器時代に由来する可能性が高い(遺物は第6節に掲載)。また点上げた遺物同士の接合関係は見られなかった。

#### (2) 出土遺物

遺物はIV層を中心に出土するが、V・VI層からも検出された。なお、V層以外から出土した石鏃と縄文土器等は、この節で報告する。

**打製石鏃 (第23図)** 打製石鏃は3点出土し、全点図化した(111~113)。打製石鏃は全てV・VI層から出土した。111と112はホルンフェルス製で刃

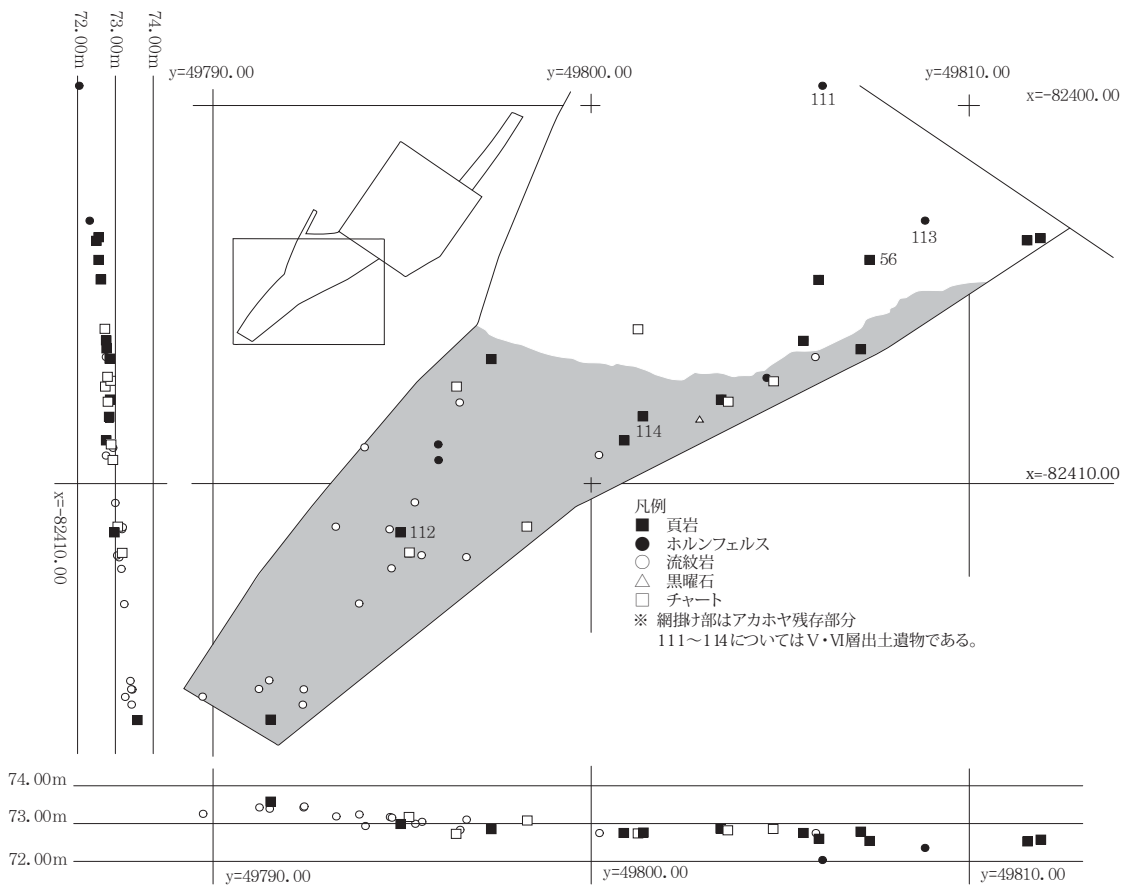
部にくびれがあり、抉りが顕著である。113は頁岩製の二等辺三角形で、抉りがある。111・112の打製石鏃のフォルムは、第1次調査で出土例がなく、内野々第4遺跡の縄文時代前期相当層で出土した打製石鏃に類似している。これらはVI層直上が表土である地点から出土し、落ち込みであると考え、縄文時代早期の遺物でない可能性を否定できない。

**石匙 (第23図)** 石匙は1点出土した。114は頁岩製である。身部は二等辺三角形で、上部のつまみ状の作り出し部分が欠損している。

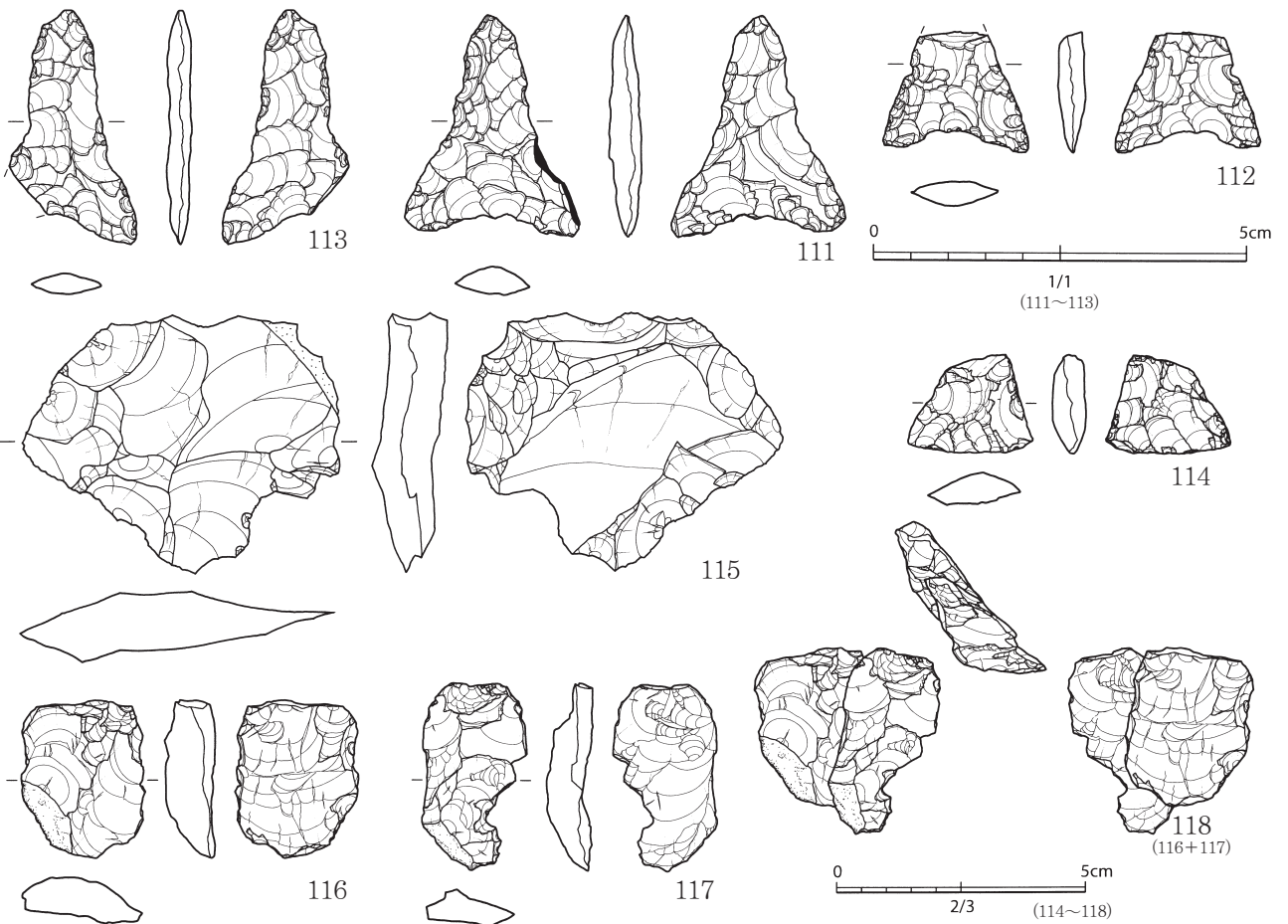
**石核 (第23図)** 石核は1点出土した。115は求心状に剥離されている剥片素材の石核である。

**剥片・接合資料 (第23図)** 116と117はチャートの剥片である。116と117は接合したが、117が攪乱出土のため、位置関係は不明である。

縄文土器も出土したが、2点とも小片であるため、形式及び文様は確認できなかった。今回は図化せずに写真のみで報告する(写真図版1)。



第22図 縄文時代早期 (IV層) の遺物分布図 (石材別)



第23図 縄文時代早期の石器実測図



## 第7節 その他の時代の遺物

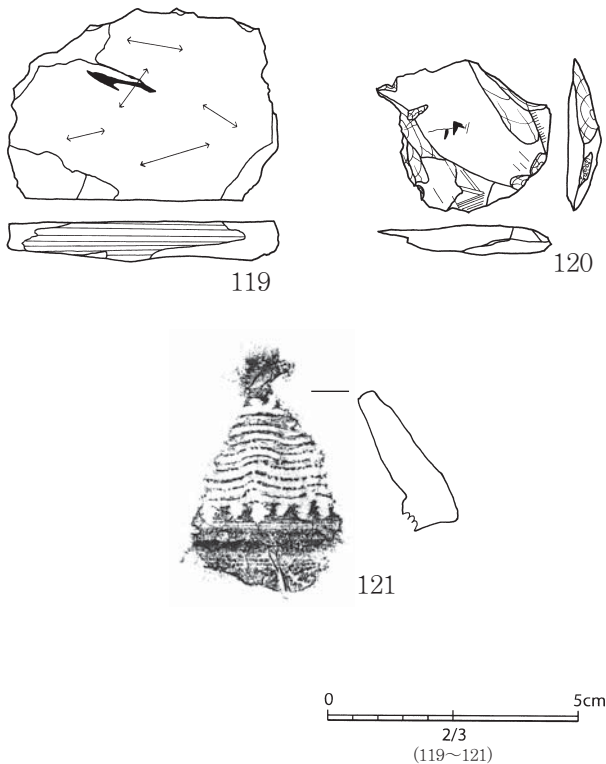
ここでは表土及び攪乱中から出土した遺物を報告する。

### (1) 出土遺物 (第24図)

119と120は研磨痕のある石製品で、頁岩製である。119は顕著な使用痕や凹みがないものの、側面に切り出し痕があり砥石と考えられる。石材から仕上げ砥石の可能性が高い。120には顕著な研磨痕があり、刃と思われる部分が一部残存している。弥生時代の土器片もいくつか出土したこと等から、石庖丁であった可能性も考えられる。

121は弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての複合口縁壺の口縁部である。口縁部には櫛描波状文、その上下に竹管文が施されている。この文様の組み合わせされたタイプは近隣遺跡での類例はなく珍しい。また口縁の屈曲部は丁寧に調整されている。

その他、弥生時代以降の土器片や近世以降の陶磁器が出土した。



第24図 その他の時代の遺物実測図

## 第8節 まとめ

第2次調査では、後期旧石器時代から縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。

本節では、第2次調査の成果を概括したうえで、第1次調査分、隣接する尾立第2遺跡を含めた調査成果をまとめておきたい。

### (1) 第2次調査の成果

**後期旧石器時代** 第2次調査では、AT下位の石器群を確認できなかった。AT上位では、礫群2基と良好な資料が多く確認された。AT上位の石器群は周辺の遺跡の様相から2時期に分けることができる。

**第1期** 基本層序V・VI層を中心としたAT上位から出土した石器群を有する時期である。礫群が2基検出され、角錐状石器、剥片尖頭器、ナイフ形石器、細石刃、細石刃核が出土した。

特にナイフ形石器は3つに分類できる。I・II類はいわゆるノの字型の剥片を利用して作られた、北牛牧型ナイフ形石器(3・4)や、今峠型ナイフ形石器(6)とよばれるものである。白色系の流紋岩製が多く、二次加工剥片(59)、微細剥離剥片(62～65)はこの時期のものと考えられる。

III類は片島型ナイフ形石器(7～17)で、第2次調査で最も多く出土した製品である。III類の素材には頁岩が主流となる。スクレイパーや、ナイフ形石器の素材となる石刃も頁岩製が多い傾向がみられる。

**第2期** 細石刃を主体とする時期であり、第1期と同一層から出土しているが、時期を分けて設定した。細石刃核(24～29)及び細石刃(30～33)も出土した。全て黒曜石製で、細石刃核全てが南九州系の小礫の黒曜石を素材としたものである。92のように、腰岳産の特徴を持つ剥片も出土しているが、南九州系の黒曜石の中でも透過性のないものが存在する事例も出てきている(岸田 2010)。今回の報告では蛍光X線による分析を行っていないため、原産地の特定はできないが、近隣遺跡の状況等を考慮すると南九州産黒曜石の可能性が高い。

**縄文時代早期・弥生時代** 縄文時代早期の遺構は検出されず、遺物は土器、石鏃や石核などが少量出土したのみである。石核は他所からの持ち込みを推定しておきたい。弥生時代後期の遺物は、安国寺式系の複合口縁壺の口縁部が出土している。

## (2) 俵石第1遺跡における後期旧石器時代

この項では第1次調査と第2次調査の成果を含めた、後期旧石器時代における俵石第1遺跡の様相についてまとめる。

**AT下位の様相** 第1次調査の本体部(A・B区)や、南側に隣接する尾立第2遺跡ともに2つの石器相が確認された。MB3～ML3とMB2～MB3にかけて出土する石器群である。

MB3～ML3の層では、遺構は検出されていない。俵石第1遺跡のB区北側では、ホルンフェルス・頁岩・チャート製の剥片類が集中して出土したが、尾立第2遺跡では局部磨製石斧と敲石のみである。

MB2～MB3の層では、俵石第1遺跡で礫群4基、尾立第2遺跡で礫群が1基検出された。石器は小型の二側辺加工のナイフ形石器をはじめ、スクレイパー等が出土している。俵石第1遺跡では、ホルンフェルス・頁岩・チャートに加えて、阿蘇溶結凝灰岩、水晶、ガラス質安山岩等が石器石材として利用される。石器ブロックも認められた。また今回の報告で、C区から頁岩を母岩とする石器ブロックも認定できた。第1次調査で出土した水晶製ナイフ形石器は、類例が少なく、当該地域の石材利用を考える上で、重要な出土事例である。

なお、岸田(2011)は、第1次調査の礫群の検出層の状況などから、文化層が2面に分けられる可能性を示唆しており、石器相や出土層位についての更なる総合的な検討が必要となる。

**AT上位の様相** AT上位から検出された遺構は、第1次調査で11基、第2次調査で2基、尾立第2遺跡で4基の礫群を検出している。

MB1～ML2を中心とするAT直上の礫群は、AT下位の礫群と比較すると、礫が密に集まっているものが多い傾向がみられる。

出土した石器には、角錐状石器、北牛牧型・狸谷型ナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器等が出土した。石材は流紋岩、ホルンフェルス、黒曜石、頁岩、チャート等が主に使用されている。

俵石第1遺跡の礫群は、ML1とMB2～MB3で検出されたものについては礫の密度が散漫になる傾向がみられる。ML1を中心とする層から出土した石器は、

片島型ナイフ形石器とよばれる小型のナイフ形石器があげられる。第1・2次調査、尾立第2遺跡ともに最も多く出土する製品で、緻密な頁岩、黒色の流紋岩が中心に素材として使用されている。

細石刃・細石刃核は第1・第2次調査や尾立第2遺跡においても出土している。しかし、これらの石器はナイフ形石器等と同一の層で出土する。従って、細石刃文化期に伴う剥片類を抽出し、判断するのが困難であり、かつ遺構を含めた検討は困難な状況である。石器相に注目すると、両遺跡とも黒曜石製の小礫を用いた細石刃核や、畦原型や船野型細石刃核が出土している。船野型・畦原型細石刃核には、流紋岩、ホルンフェルス、チャートが主として使用される。ただし、第2次調査では黒曜石の小礫を素材とするもののみが出土した。

**結び** 俵石第1遺跡(第1次調査)の後期旧石器時代においては、MB3～ML3の層が形成された、今から3万年前に石器の存在を認めることができる。MB3～ML3の形成時期以降は、俵石第1遺跡の立地する三日月原台地西側一帯に生活や狩猟・採集の場が形成され、時期を追ってその広がりや上町川沿いの丘陵末端まで展開していたといえる。また、その人間活動は細石刃文化期に至るまで断続的ながらも生活の場として営まれていた。

このように、俵石第1遺跡の調査は遊動生活をライフスタイルとする後期旧石器時代の人々による土地利用の一端を明らかにした。一方で、石器や遺構の検討、他遺跡における様相との比較といった、遺跡の歴史的評価につながる作業が残されている。

## 【参考文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター(2006)『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI』
- 宮崎県埋蔵文化財センター(2011)「俵石第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集
- 宮崎県埋蔵文化財センター(2008)「尾立第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第169集
- 岸田裕一(2010)「いわゆる「霧島山黒曜石」とは何なのか」『宮崎考古』第22号
- 宮崎県旧石器談話会(2005)「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学66』
- 岸田裕一(2011)「宮崎県の動向」『九州旧石器』第15号

第4表 後期旧石器時代石器計測表(1)

掲載 番号	遺物 番号	出土 層位	器種	石材 (略称)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
1	24	V下	角錐状石器	Hol	5.57	2.59	2.01	30.60	-82403.971	49811.271	72.433	
2	414	VI中	角錐状石器	Hol	6.55	3.25	1.83	39.90	-82401.152	49805.628	72.364	
3	365	VI下~VIII上	ナイフ形石器	Ryu	5.52	3.41	1.20	13.00	-82407.900	49797.179	72.552	I類
4	198	V	ナイフ形石器	Ryu	4.27	3.26	0.90	9.90	-82413.113	49794.238	73.116	I類。スクレイパーとして再利用か。
5	344	VI下	ナイフ形石器	Ryu	3.51	2.22	0.77	4.30	-82414.488	49791.611	72.876	ノの字形の剥片素材。
6	97	IV	ナイフ形石器	Ryu	3.11	2.51	0.82	5.80	-82413.184	49793.879	73.238	II類
7	430	V	ナイフ形石器	Sh	4.55	2.07	0.82	7.40	-82405.389	49800.441	72.749	III Aタイプ。
8	8	V中	ナイフ形石器	Sh	4.84	1.86	0.92	7.30	-82407.053	49804.588	72.649	III Aタイプ。
9	63	V中	ナイフ形石器	Sh	4.11	1.46	0.72	3.70	-82416.384	49792.069	73.349	III Aタイプ。
10	388	V中	ナイフ形石器	Hol	3.79	1.73	0.88	4.30	-82403.197	49805.765	72.418	III Aタイプ。
11	506	VI上	ナイフ形石器	Sh	5.29	1.36	0.94	3.90	-82401.930	49812.751	72.278	III Aタイプ。
12	458	VI下	ナイフ形石器	Sh	4.28	1.79	1.24	8.20	-82407.618	49800.292	72.521	III Aタイプ。
13	279	VI上	ナイフ形石器	Sh	3.43	1.03	0.83	2.50	-82410.652	49794.017	72.917	III Aタイプ。
14	421	VI上	ナイフ形石器	Sh	2.39	1.39	0.74	2.40	-82402.143	49799.588	72.420	III Bタイプ。
15	205	V	ナイフ形石器	Ryu	2.81	1.61	0.80	2.90	-82407.771	49799.206	72.738	III Bタイプ。
16	433	VI上	ナイフ形石器	Sh	4.65	1.97	0.86	7.60	-82406.427	49799.047	72.800	III Bタイプ。
17	426	VI上	ナイフ形石器	Sh	4.49	1.69	0.96	6.60	-82402.756	49801.304	72.511	III Bタイプ。
18	510	VI上	ナイフ形石器	Hol	2.24	1.04	0.46	0.90	-82403.166	49812.794	72.442	切出タイプ。
19	265	V下	ナイフ形石器	Hol	7.55	2.75	1.65	27.80	-82413.501	49791.438	73.101	剥離部分が風化し、確認が困難。
20	142	VI中	ナイフ形石器	Sh	4.85	1.56	0.63	4.10	-82402.746	49812.340	72.209	石刃素材のナイフ。
21	125	IV	ナイフ形石器	Sh	2.36	1.58	0.55	1.60	-82406.705	49797.359	72.848	切出タイプ。
22	455	VI上	ナイフ形石器	Sh	3.30	1.68	0.68	2.90	-82407.822	49801.142	72.642	
23	350	VI下	ナイフ形石器	Ryu	4.05	2.09	0.97	6.70	-82410.715	49797.227	72.704	
24	82	V上	細石刃核	Ob1	1.54	1.48	1.13	2.40	-82412.061	49797.397	73.074	打面調整あり。
25	303	VI上	細石刃核	Ob1	1.71	1.91	1.20	4.70	-82407.382	49798.452	72.688	打面調整が顕著に見られる。
26	474	VI下	細石刃核	Ob1	1.72	1.58	0.82	1.50	-82403.418	49802.575	72.386	打面調整あり。
27	372	VI中~下	細石刃核	Ob5	1.45	1.89	0.99	2.50	-82409.037	49800.416	72.695	打面調整なし。
28	1	IV下	細石刃核	Ob1	1.81	1.66	1.32	3.60	-82408.304	49802.876	72.844	打面調整あり。
29	358	VI下	細石刃核	Ob1	2.44	1.02	0.98	2.20	-82408.969	49800.089	72.634	
30	361	V中	細石刃	Ob1	0.95	0.70	0.20	0.12	-82409.034	49800.392	72.712	
31	363	VI下	細石刃	Ob1	1.70	0.70	0.40	0.25	-82408.777	49800.440	72.654	
32	-	VI層一括	細石刃	Ob4	0.90	0.75	0.15	0.09	-	-	-	
33	309	VI中	細石刃	Ob1	1.05	0.45	0.20	0.05	-82409.112	49799.835	72.759	
34	398	VI中	尖頭器	Sh	3.05	2.01	0.73	3.90	-82402.647	49807.738	72.587	
35	47	IV下~V上	台形石器	Ch	1.68	1.16	0.39	0.07	-82412.516	49791.830	73.162	
36	53	V中	搔器	Sh	3.55	2.84	0.95	9.90	-82408.919	49802.075	72.768	
37	359	VI下	搔器	Sh	3.40	5.22	1.73	39.90	-82408.804	49800.088	72.642	
38	287	VI中	剥片	Sh	2.26	3.51	1.72	7.40	-82410.479	49795.868	72.833	
39	-	VI一括	剥片	Sh	2.60	2.84	0.87	4.50	-	-	-	
40	-	-	接合資料	Sh	-	-	-	-	-	-	-	61+62
41	-	第1次調査	剥片	Sh	36.00	27.40	6.80	9.80	-	-	-	1次調査の報告した遺物(掲載番号50)。
42	-	第1次調査	剥片	Sh	2.20	2.40	0.60	2.70	-	-	-	1次調査の報告した遺物と接合。
43	-	第1次調査	接合資料	Sh	-	-	-	-	-	-	-	47+48
44	54	IV下~V上	剥片	Os	2.50	1.80	0.90	3.45	-82408.891	49801.494	72.828	
45	12	V下	剥片	Os	1.60	3.15	1.00	3.67	-82407.371	49805.581	72.610	
46	-	-	接合資料	Os	-	-	-	-	-	-	-	84+88
47	473	VI下	石核	Hol	6.53	7.23	4.53	279.50	-82403.538	49801.742	72.344	
48	522	VI上	剥片	Hol	3.95	5.34	2.56	49.40	-82403.173	49801.961	72.403	
49	-	-	接合資料	Hol	-	-	-	-	-	-	-	522+473
50	432	VI上	石核	Hol	4.57	11.80	7.17	371.30	-82406.088	49799.147	72.765	底面に固定痕あり。
51	517	VI上	石核	Os	10.30	8.40	7.30	776.10	-82406.582	49801.294	72.541	
52	512	V	石核	Os	10.50	11.35	5.45	585.80	-82414.465	49794.281	73.079	
53	460	VI下	石核	Hol	3.06	4.10	3.98	59.20	-82405.307	49801.743	72.464	作業面に何度も剥離を行った痕跡あり。
54	446	V下~VI上	石核	Hol	6.00	6.60	2.20	86.57	-82406.064	49804.175	72.585	
55	32	V中	石核	Sh	2.00	5.20	3.40	29.85	-82402.716	49813.037	72.437	
56	443	VII中	石核	Hol	5.89	4.72	4.52	125.60	-82406.551	49803.765	72.553	作業面に何度も剥離を行った痕跡あり。
57	298	VI中	石核	Hol	6.05	4.90	2.26	58.16	-82411.902	49795.536	73.050	
58	9	V上	二次加工剥片	Hol	2.95	5.15	0.85	7.09	-82407.209	49804.890	72.751	
59	251	VI上~中	二次加工剥片	Ryu	2.90	1.59	0.86	3.30	-82415.130	49791.661	73.157	スクレイパーか。
60	419	V	二次加工剥片	Ch	2.83	2.12	0.74	3.10	-82401.524	49801.701	72.387	
61	504	VI上	二次加工剥片	An	2.15	2.35	0.50	2.69	-82398.876	49806.388	72.012	
62	181	IV	微細剥離剥片	Ryu	3.77	2.53	0.87	5.80	-82415.645	49789.744	73.262	ノの字形の剥片。
63	122	IV	微細剥離剥片	Ryu	1.99	2.09	0.67	2.00	-82407.864	49796.541	72.836	ノの字形の剥片。
64	269	VI下	微細剥離剥片	Ryu	2.56	2.82	0.94	4.90	-82412.952	49792.169	72.953	
65	80	IV	微細剥離剥片	Ryu	1.99	2.09	0.67	2.00	-82411.948	49796.710	73.102	
66	439	VI中	微細剥離剥片	Sh	2.36	2.19	0.52	2.20	-82403.828	49804.548	72.362	
67	321	V上	石刃	Sh	4.80	14.50	0.70	6.30	-82389.025	49827.918	71.309	同一母岩なし。
68	310	VI中	石刃	Sh	6.30	2.60	0.75	12.62	-82408.779	49800.029	72.742	同一母岩なし。
69	356	VI中	石刃	Sh	6.30	2.60	0.75	12.62	-82409.280	49799.980	72.744	同一母岩なし。
70	79	V上	剥片	Sh	8.90	3.40	1.55	59.22	-82412.266	49796.485	72.945	石刃剥離中にできたものか。

第5表 後期旧石器時代石器計測表(2)

掲載 番号	遺物 番号	出土 層位	器種	石材 (略称)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
71	450	V下~VI上	剥片	Sh	5.50	5.35	1.80	31.62	-82406.051	49802.564	72.543	
72	377	VI上	剥片	Sh	6.20	3.80	1.10	25.52	-82406.239	49805.718	72.616	
73	285	VI中	剥片	Sh	8.45	4.25	2.30	73.96	-82410.513	49796.728	72.812	石刃剥離中にできたものか。
74	493	VI中	剥片	Sh	6.05	4.40	1.15	27.26	-82403.126	49808.293	72.336	
75	267	VI中	剥片	Sh	2.80	3.40	0.90	6.36	-82413.373	49791.797	72.996	礫面上に複数の打撃痕あり。
76	-	C1一括	剥片	Sh	2.90	4.25	1.60	15.80	-	-	-	
77	511	VI下	剥片	Sh	3.45	3.25	1.40	17.57	-82399.467	49804.826	72.016	
78	449	VI上	石刃	Hol	9.10	3.10	1.40	25.48	-82406.043	49802.718	72.539	
79	296	VI中	石刃	Hol	10.06	3.65	1.40	46.82	-82409.729	49798.292	72.752	
80	452	V下~VI上	剥片	Hol	9.20	2.30	2.80	68.02	-82406.808	49801.158	72.604	
81	497	VI下	剥片	Hol	8.25	4.50	1.55	42.48	-82402.899	49810.206	72.255	石刃剥離中にできたものか。
82	416	VI	剥片	Hol	7.10	5.80	2.85	73.53	-82400.875	49801.999	72.312	
83	405	VI上	剥片	Hol	2.00	4.40	0.90	7.32	-82404.613	49806.895	72.755	有底剥片。
84	200	V	剥片	Ryu	2.10	3.50	0.53	3.84	-82413.392	49792.861	73.104	上面に打面調整が見られる。
85	5	V上	剥片	Ryu	3.70	2.90	1.25	11.30	-82407.694	49803.373	72.774	
86	193	IV下	剥片	Ryu	2.25	1.75	0.80	2.42	-82409.295	49798.483	72.771	
87	368	VII上	剥片	Ryu	2.90	1.70	0.75	2.06	-82414.251	49792.240	72.724	
88	334	IX下	剥片	Ryu	1.50	3.00	0.50	1.61	-82389.745	49828.523	71.065	有底剥片。
89	347	VI下	剥片	Ryu	3.10	3.15	1.05	8.16	-82413.004	49791.927	72.775	
90	248	VI中	剥片	Ryu	3.40	2.35	1.45	9.22	-82415.216	49790.904	73.093	
91	96	V上	剥片	Ryu	3.95	3.45	1.05	13.12	-82411.188	49792.426	72.951	
92	305	VI中	剥片	Ob2	1.35	1.50	1.52	6.20	-82407.980	49798.851	72.677	
93	322	V下	剥片	Ob3	1.05	1.40	0.40	0.47	-82388.639	49828.287	71.285	
94	304	VI中	剥片	Ob1	1.30	1.20	0.20	0.23	-82407.956	49798.709	72.676	
95	357	VI下	剥片	Ob1	1.90	1.55	0.30	0.60	-82409.186	49800.065	72.651	
96	207	V	剥片	Ch	4.75	2.30	1.60	15.15	-82408.425	49798.528	72.801	
97	27	V上	剥片	Ch	1.45	2.65	0.70	1.46	-82403.296	49811.279	72.419	
98	417	VI中	剥片	Os	3.25	5.60	1.00	12.93	-82401.228	49802.116	72.338	
99	374	VII下~VIII上	剥片	Os	5.65	3.30	1.20	17.19	-82413.228	49792.579	72.664	
100	297	VI下	剥片	An	2.00	1.80	0.50	1.34	-82409.900	49798.720	72.736	
101	81	V上	剥片	Tu1	2.80	2.45	0.95	2.09	-82411.786	49796.526	72.993	
102	214	V	剥片	Tu2	5.30	3.45	1.60	22.06	-82409.196	49794.946	72.847	
103	264	V下	剥片	Sa	4.05	3.10	1.00	9.49	-82413.647	49791.275	73.131	
104	48	VI上	敲石	Sa	8.80	3.60	2.10	80.30	-82404.049	49810.610	72.364	敲き磨り面あり。
105	500	VI中	敲石	Sa	9.20	3.75	1.90	93.00	-82404.009	49808.357	72.363	剥離後に敲き磨りを行う。
106	244	IV下~V上	敲石	Sa	6.65	3.20	2.85	95.17	-82402.304	49804.886	72.354	敲き痕あり。
107	49	VI上	敲石	Sa	6.90	2.90	1.65	42.40	-82404.122	49810.791	72.238	敲き磨り面あり。
108	454	VI中	敲石	Sa	18.45	5.25	4.15	547.50	-82407.295	49801.356	72.587	敲き痕あり。正面中央部に剥離痕あり。
109	494	VI中	敲石	Sa	10.95	5.50	2.59	264.30	-82403.406	49808.620	72.374	剥離と敲き磨り面あり。
110	514	VI下	敲石	Os	8.50	7.85	4.60	411.70	-82399.296	49804.897	71.994	敲磨面あり。上面にはじけあり。

第6表 縄文時代早期石器計測表

掲載 番号	遺物 番号	出土 層位	器種	石材 (略称)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
111	501	VI	石鏃	Hol	2.94	2.31	0.42	0.19	-82399.527	49806.175	72.066	
112	201	V	石鏃	Sh	1.59	1.93	0.37	1.00	-82411.448	49795.114	72.968	
113	496	VI	石鏃	Hol	3.11	1.68	0.32	1.30	-82403.064	49808.868	72.304	
114	126	V	石匙	Sh	1.95	2.48	0.66	0.30	-82408.225	49801.381	72.865	
115	56	IV	石核	Sh	5.10	6.20	1.40	39.13	-82404.088	49807.357	72.554	
116	241	IV	剥片	Ch	3.14	2.46	0.98	8.10	-82405.927	49801.241	72.733	
117	-	カクラン	剥片	Ch	3.72	2.08	0.90	5.30	-	-	-	
118	-	接合資料	-	Ch	-	-	-	-	-	-	-	113+114

第7表 その他の時代石器計測表

掲載 番号	遺物 番号	出土 層位	器種	石材 (略称)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
119	-	カクラン	砥石	Sh	3.80	5.35	0.75	21.54	-	-	-	側面の切り出し痕が顕著。わずかに研磨痕残る。
120	-	表土	研磨痕のある石製品	Sh	3.00	2.90	0.50	5.60	-	-	-	刃部が一部残存。石庖丁の可能性もある。

第8表 その他の時代土器観察表

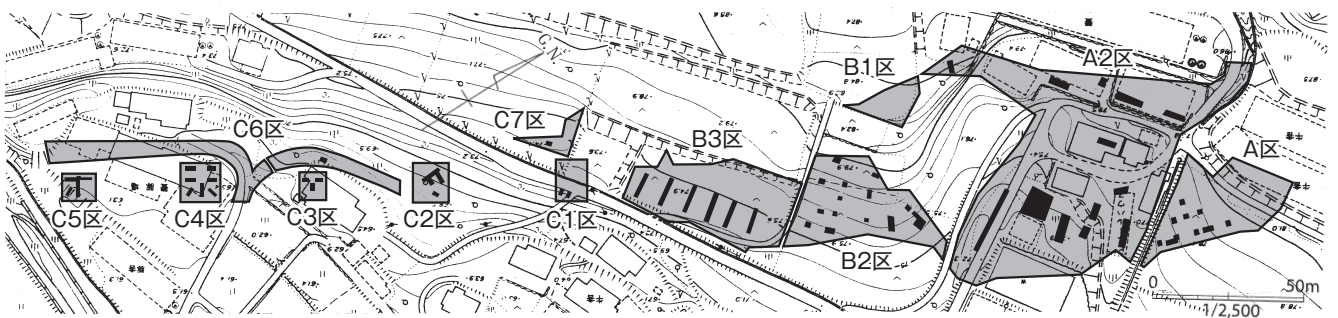
掲載 番号	出土 層位	区	種別	部位	文様調整		焼成	色調		胎土	備考
					外面	内面		内面	外面		
121	カクラン	C1	壺	口縁	櫛描 波状文 竹管文	ナデ	良好	明赤褐色 Hue5YR 5/6	橙色 Hue5YR 6/6	微細~2mm大の白色粒子を多く含む。 微細の透明粒子を多く含む。 微細の黒色粒子をごくわずかに含む。 2mm大の黄色不透明粒子をごくわずかに含む。	複合口縁部に櫛描波文、竹管文があり、 頸部に向かう部分は丁寧な調整が施さ れている。

# 第三章 俵石第2遺跡の調査

## 第1節 第1次調査の概要

俵石第2遺跡A、B2区の第1次調査は平成21年6月16日～7月14日に行った。A区550㎡に対しトレンチ調査を行った結果、東側を中心に良好な遺物包含層が見られ、V層より礫群を検出、石核や微細剥離ある剥片等が出土した。またナイフ形石器や石核などの遺物が多数表面採集され、東側を中心に遺構・遺物が残存すると判断し第2次調査を行った。B2区2,670㎡に対するトレンチ調査の結果、北側ではⅡ・Ⅲ層の二次堆積が見られたが遺構・遺物は見られず、周辺は表土下に礫層が確認されたため北側1,465㎡を除外した。南側ではV～Ⅶ層が見られ、V層よりナイフ形石器、剥片尖頭器が出土したため1,150㎡に対し第2次調査を行った。C1、C2、C4、C5区の第1次調査は平成22年4月16日～23日に行った。C2区の南西には炭焼窯が見られた。C1、C2区は250㎡に対しトレンチ調査を行ったが、両区とも遺

物包含層は見られず調査終了とした。C4区は270㎡に、C5区は195㎡に対しトレンチ調査を実施した。C4区はⅢ層上面でピット1基が検出され調査を継続した。C5区はⅢ層直下より縄文土器小片が出土、Ⅳ層より集石遺構と思われる礫の集まりを1基検出した。削平された南端60㎡は除外し110㎡に対して第2次調査を行った。A2、B1、B3、C3、C7区は第2次調査期間中にトレンチ調査を行った。A2区は表土中より石核1点(第2図②)が出土したのみであり調査終了とした。B1区はV層以下が堆積し、Ⅵ層直下より剥片1点が出土したため継続して調査を行った。B3、C3区およびC6区北側は遺物包含層の堆積が見られず調査除外とした。C7区はⅡ層の二次堆積層よりスクレイパー(第2図①)と土器片1点が出土したのみであったため調査終了とした(各層の詳細は「第4節 基本層序と地形」を参照)。



第1図 各調査区位置および第1次調査トレンチ配置図



第2図 第1次調査出土遺物実測図

## 第2節 発掘調査・整理作業の方法と経過

### 1 発掘調査の方法と方針

第2次調査は、平成22年10月4日から平成23年2月17日まで行った。全調査区で重機による表土除去後、人力での掘削を行った。A区は、V層を全面掘削終了後、B2区のグリッド座標をもとに光波トランシットを用いて測量を行い、10m×10mグリッドを設定した。VI層以下については、グリッド単位での掘り下げを行い、掘削範囲・深度については遺構・遺物の状況を見ながら判断した。掘削した範囲については、第7図に示すとおりである。B1区についてはVII層まで全面掘削を行った。B2区は日本測地系による10m×10mグリッドを設定し、グリッド単位での調査を行った。V層までを完掘し、VI層以下については遺構・遺物の状況を見ながら、適宜掘削するグリッドを拡張した。掘削範囲については第13図に示した。B2区北側では急傾斜によるII層の二次堆積層（IIa層）から弥生土器片が出土したが、座標記録はせずグリッド単位で取り上げた。その他の遺物については、B1・B2区ともに光波トランシットを用いてドットデータで記録した。C4区は表土除去後、全面掘削を行ったが、地下水流の影響により高いレベルで湧水が見られた。そのため、先行トレンチで遺構・遺物の包含が確認されたIV層までを全面掘削し、調査終了とした。C5区は、一部削平を受けていたが、III～VII層まで安定した堆積が見られ、先行トレンチによりVII層も遺物包含層であることが確認されたため、VII層まで全面掘削を行った。C6区は工事中道路部分にあたり、C4区とC5区の様相を広く捉えることができた。調査区を5mごとに区画し、南からa～l区とし区画ごとに掘削を行った。a～c区は、C5区の遺構・遺物の状況を考慮しVII層まで掘削を行った。調査区北側では、C4区同様高いレベルで湧水が見られたため、d～l区については1区画おきに掘削を進め、遺構・遺物の状況を見ながら、掘削する範囲を拡張した。掘削深度についても、C4・C5区の出土状況を考慮しながら適宜判断した。掘削範囲については第16図に示した。C6区の北側i～j区のII層から出土した弥生土器片については、出土区画と層位のみ記録して取り上げた。また、調査区北側で地下水流により陥没したと思われる穴（この地域では通称「水穴」と呼ばれている）が検出された。この陥没

孔から多数の弥生土器が出土し、完形に復元されるものも多く見られた。陥没孔は長さ約8m、最大幅2.5mという大きさであったためA・B・C区の3区画を設定し、先行トレンチで把握した検出面から底面までの深さを上・中・下に3区分し、埋土中の土器については「A上」「B中」「C下」という形で取り上げを行った。加えて、底面付近で集中して土器が出土する箇所が2箇所見られ、その範囲については1/10で図化を行った。その他の包含層出土遺物については、C4・C5・C6区ともに光波トランシットでドットデータを記録した。

全調査区において、集石遺構・礫群は1/10または1/20、土坑は1/20で図化を行った。C5区で見られた散礫については、1/100で礫の広がる範囲を記録し、土層断面を1/30で図化して礫を外した。なお、現場では調査の進行状況により調査区を細分したが、本報告書では、各調査区の立地や土層の堆積状況を考慮した上で、以下のように調査区を区分しなおして報告を行う（細分した各調査区の位置については第1図を参照）。

【A区 → A区】

【B1・B2区 → B区】

【C4・C5・C6区 → C区】

### 調査日誌抄録

平成22年

- 10月13日(水) 現場事務所建て込み。
- 10月18日(月) 作業員雇用開始。
- 11月8日(月) C4区II層より尾鈴山溶結凝灰岩の礫のまとまりを検出。礫に赤化は見られないがSIと付して記録する。  
C5区散礫検出。
- 11月9日(火) C4区II層よりSC1検出。
- 11月10日(水) B2区斜面下側の先行トレンチ内より細石刃核と縄文土器片出土。  
C4区SC1内に一定レベルで広がる礫を確認。遺構の性格に悩む。
- 11月11日(木) A区で発掘体験を実施。
- 11月29日(月) C4区SI15検出。礫直下に親指大の炭化材が見られる。
- 12月20日(月) A区先行トレンチ掘削開始。

平成23年

- 1月5日(水) C6区作業員掘削開始。調査区中央のⅡ層中より土器片が集中して出土。
- 1月11日(火) C6区Ⅳ層中でSZ1検出。
- 1月13日(木) C6区SZ1サブトレンチ内の黒色埋土からほぼ完形の壺が出土。
- 1月18日(火) 好天。空中写真撮影。
- 1月19日(水) C5区AT下位全面掘削。AT直下より礫群1基検出。黒曜石の剥片も出土。
- 2月1日(火) C6区SZ1内で土器集中箇所が2箇所確認される。
- 2月16日(水) C6区埋め戻し。
- 2月17日(木) 完全撤収。現場終了。

## 2 整理作業の方法と方針

整理作業は、平成23年2月から宮崎県埋蔵文化財センター内で開始した。遺物を順次持ち帰り、水洗、注記、接合、実測、製図を経て、平成23年11月に終了した。

**接合**は、各調査区の立地から土器・石器ともにA、B1、B2、C4、C5、C6区に分けて行った。ある程度進めた段階で、B1・B2区をまとめてB区、C4、C5、C6区をまとめてC区とし、再び接合を行った。また、C6区で検出したSZ1出土の弥生土器については、調査時に設定したA・B・C区の区画ごとに接合を試みた。また、B区の底面付近では土器の集中する部分が2箇所見られ、それぞれ土器集中区a、土器集中区bとして取り上げを行ったので、まず集中区ごとに接合を行い、ある程度進んだ段階で小区分を外して接合を試みた。その後、A・B・C区の区画も取り払い、SZ1から出土した土器全点での接合を試みた。

その他、**フローテーション作業**による水洗選別を平成23年3月28日～31日にセンター内で実施した。水洗選別を行った土の種類は、①SC1底面の焼土、②SI15の礫直下の土、③SZ1の土器集中区の土器直下の土、④SZ1の埋土で土器を多く包含していた層(第69図A-A'間土層断面図第7層)、加えて⑤SZ1より出土した完形および類完形の壺や甕内の土、以上5種類である。水洗選別を行い採取した炭化材や炭化種実等は、十分に乾燥させたのち選別作業を行った。

## 第3節 教育普及活動

宮崎県埋蔵文化財センターでは、教育普及活動の一環として、実際の発掘現場で発掘作業を体験する「発掘体験」を行っている。

俵石第2遺跡では、平成22年11月11日(木)に、宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校の第1学年40名を対象に発掘体験を実施した。



整理作業の様子（土器接合作業）



整理作業の様子（トレース作業）



発掘体験の様子

## 第4節 基本層序と地形

俵石第2遺跡における基本的な層序を下に記した。本遺跡は、南側を東流する上町川沿いの河岸段丘面に位置し、標高約62～85mと起伏に富む。第1次調査の結果を受け、調査区をA・B・C区の3つに区分し調査を行った。以下、各調査区の立地と土層の堆積状況について示す。各調査区の位置については第1図を、グリッドについては第3図を参照されたい。

A区は、調査区南側の西から東に下る谷に向かって緩やかに傾斜し、標高約80～84mを測る。調査前は畑地として利用され、耕作による攪乱のため表土中から多数の石器が回収された。表土下は基本層序のV～VII層が堆積し、VII層下は礫層となる。南へ緩やかに下る地形であるため、調査区南側ほど土層の堆積状況は不安定になる。各層の層厚もさほど厚くなく、斜面下側ではATと思われる白色粒子の上下層への拡散も見られた(第4図A-A')。

B区は、B1区とB2区に分けて調査を行った。B1区は西側の一段高い平地部分で、標高約85mである。V～VII層の堆積が見られ、VII層下は礫層であった。B2区は、調査区北側の谷に向かって下る斜面と、東へ下る斜面からなる標高約75～80mの斜面地である。北に向かって傾斜する調査区北側(E2グリッド付近)では、表土下に鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah: III層)をブロック状に含む黒色土(IIa層とする)が堆積し、その下にIII層の二次堆積層が15～35cmの厚さで見られ、その直下は礫層であった。東に傾斜する調査区南側では、斜面上部でIV層の堆積が見られない範囲もあったが、広範囲にわたりIV～VII層

が堆積し、VII層下は礫層となる。しかし、斜面下部ほど堆積状況は不安定となり、部分的に土層が途切れる箇所も見られた(第5図B-B')。

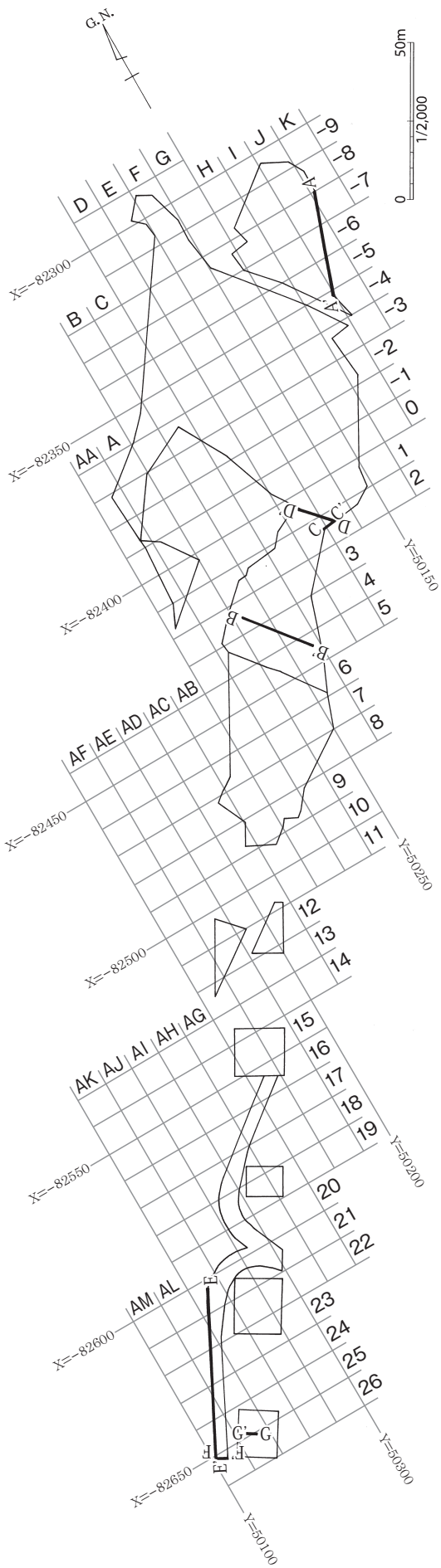
C区は、C4・C5・C6区の3箇所の調査を行った。C4・C5区を同時に調査する過程で、土層の堆積状況から両調査区の間小さな谷地形の存在が予想され、C6区の調査においてその存在が確認された(第5・6図E-E')。C4区は、調査区南側でIII層が約30cmと厚く堆積し、谷地形の影響かIII層を掘り抜く前に高いレベルで湧水が見られた。調査区北側ほどIII層の堆積状況は不安定になり、層厚も薄くなる。III層下にはIV層が見られたが、IV層下部より下層については水の影響によると思われる土色・土質の激しい変化が見られた。C5区は、東流する上町川を南に臨む平地である。II・III層の堆積は薄かったが、IV層以下の堆積は比較的良好に認められた。特に、基本層序VI層(ATと思われる白色粒子を含む層)は、C5区ではATが拡散することなく単純層として堆積し、VI層下位がパックされた状況が認められた。AT下位黒色帯(VII層)も調査区全面で安定した堆積が見られ、礫群も検出された。C6区は、C4・C5区両区の様相を広く捉えられる調査区で、C4・C5区調査時に予想されたC4・C5区間の小さな谷地形(AL23グリッド付近からAJ25グリッド付近へ向かう小さな谷筋)が認められた。調査区南側(C5区側)では安定していた土層堆積が、北側(C4区側)に向かうにつれ激しく変色・変質していく様子も捉えられ、C6区北端では地下水流による陥没孔も見られた。陥没孔周辺は他の場所と異なり、人頭大以上の転石(巨礫)が多数含まれる様相であった。

第1表 各調査区と基本層序対応表

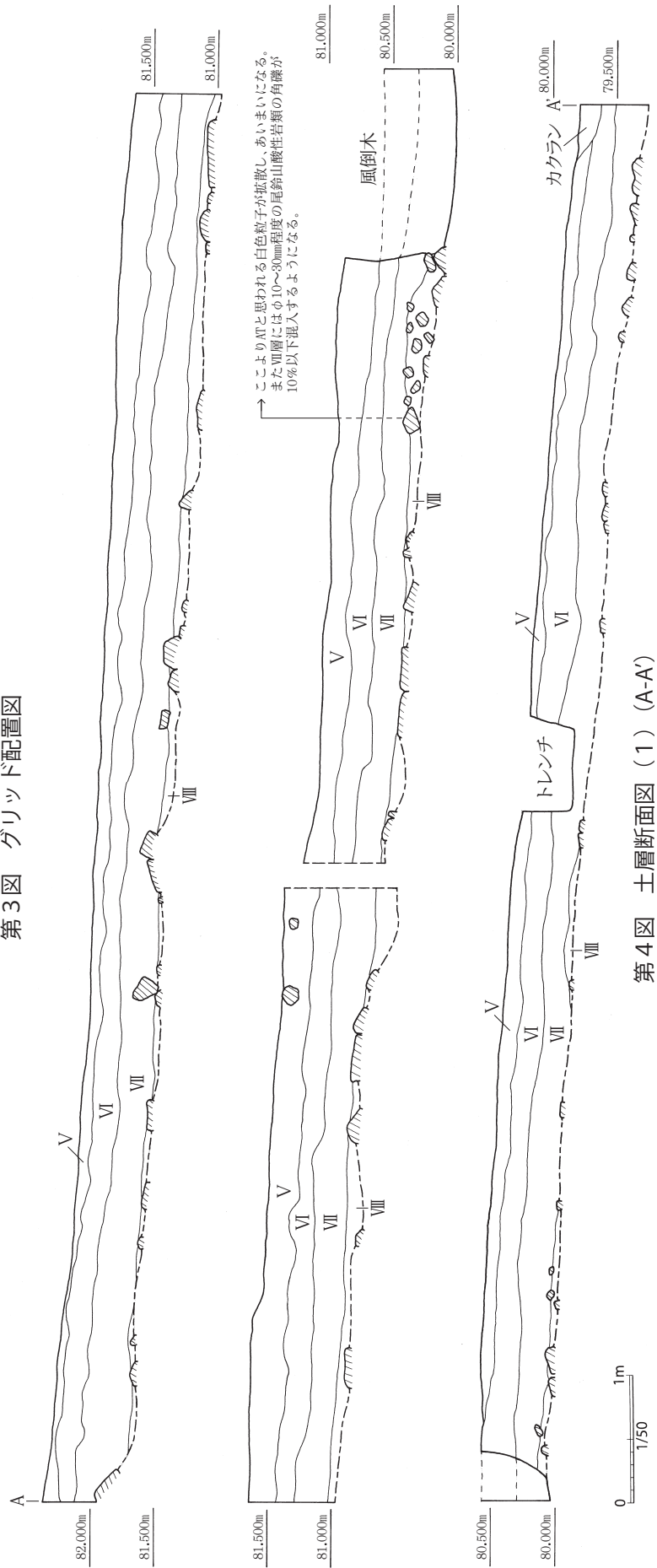
・網掛け部は堆積が確認された層

	A区	B区			C4区	C区		
		B1区	B2区	B2区 (E1・E2Gr.付近)		C5区	C6区北側 (C5区より北側)	C6区南側 (C5区付近)
I 表土								
II 黒色土 (HueN2/) : クロボク層 弥生時代遺物包含層				※二次堆積 (IIa層)				
III 明褐色土 (7.5YR5/8) : 鬼界アカホヤ火山灰層								
IV にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) : MB0～ML1 相当層 縄文時代早期遺物包含層								
V にぶい褐色土 (Hue7.5YR5/4) : MB1～ML2相 当層 後期旧石器時代遺物包含層 3					※水成堆積		※水成堆積	※上部 縄文土器出土
VI 褐色土 (10YR4/6) : ATブロック混 後期旧石器時代遺物包含層 2						※AT (無遺物層)		※AT (無遺物層)
VII 黒褐色土 (7.5YR3/2) : MB2～MB3相当層 後期旧石器時代遺物包含層 1								
VIII 黄褐色土 (10YR5/7) : ML3相当層	※礫層	※礫層	※礫層	※礫層				

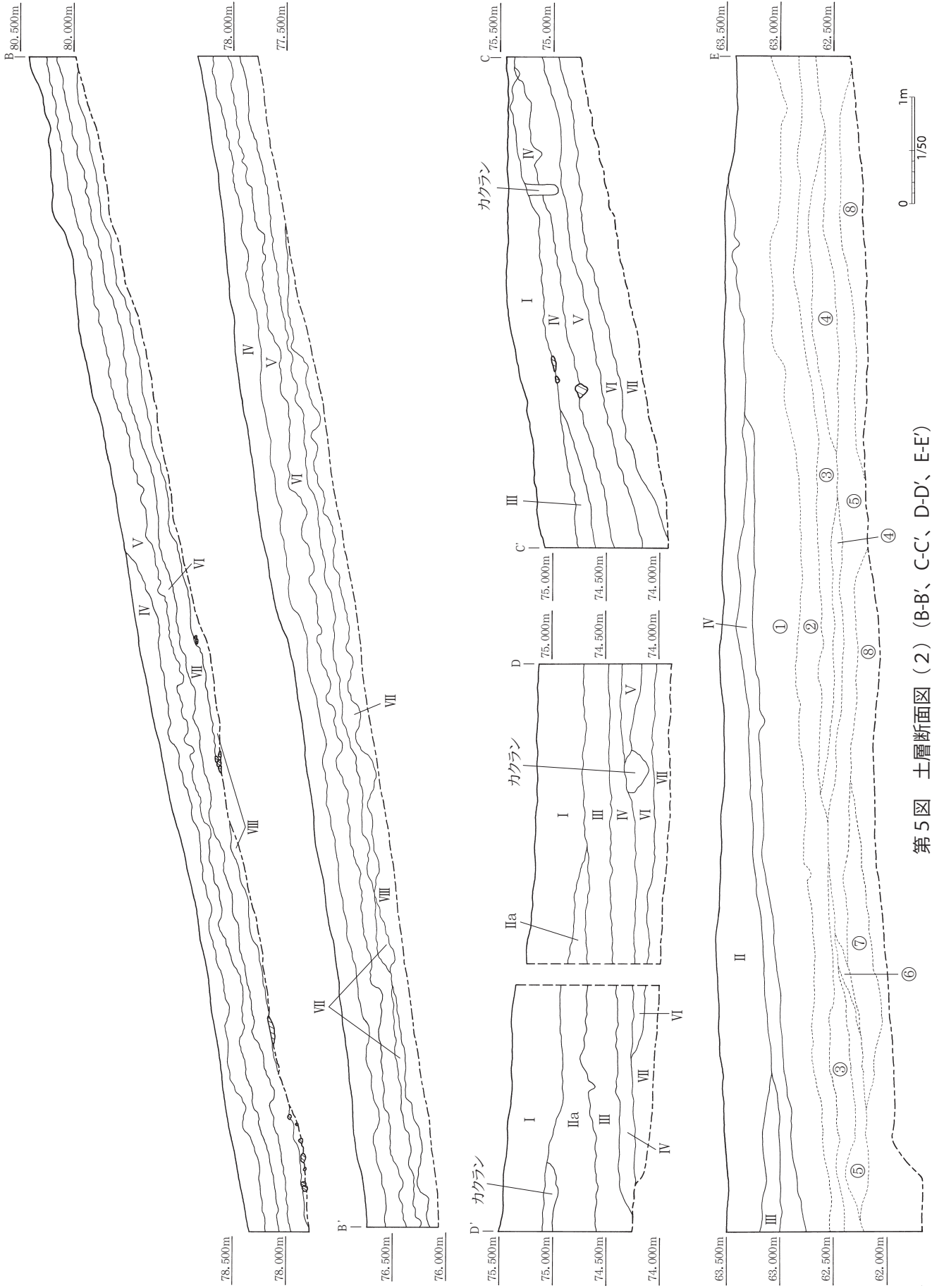




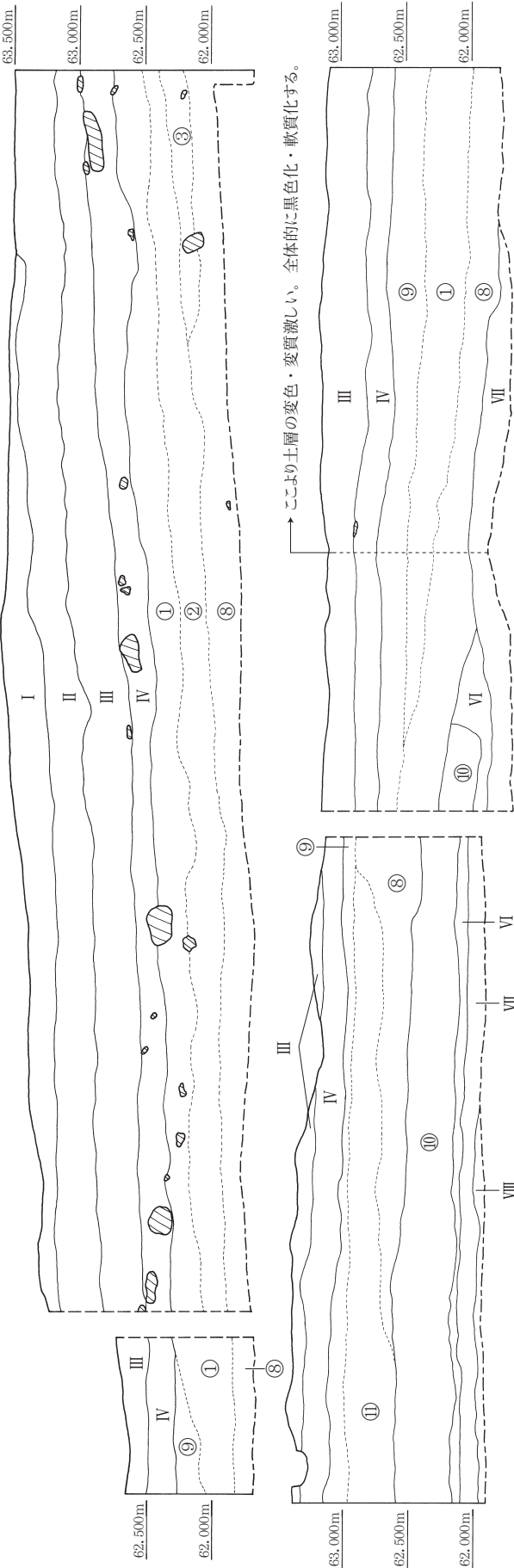
第3図 グリッド配置図



第4図 土層断面図(1) (A-A')



第5図 土層断面図(2) (B-B'、C-C'、D-D'、E-E')



土層注記

- ① 黒褐色シルト質土 (Hue10YR2/2) しまりあり粘性なし。細礫区北側でのみφ2～30mmの小礫を層全体に多く含む。礫大の円礫もわずかに含む。
- ② 黒色シルト質土 (Hue7.5YR2/1) しまりあり粘性なし。φ1mm以下の白色粒子を層全体にまばらに少量含む。φ2～20mmの小礫やφ2～5mmの焼・赤色の粒も層全体にまばらに含む。
- ③ 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2) しまりあるか③より弱く粘性なし。φ1mm以下の白色粒子を層全体に多く含む。部分的にφ3～6mmの白・黄色の粒(小礫)を少量含む。
- ④ 灰黄褐色シルト質土 (Hue10YR4/2) しまりより弱く粘性なし。φ1mm以下の白色粒子を⑤と同量含む。φ2～15mmの白・黄・褐色の粒も含むが層全体に不均一に含む。部分的に集中して見られる箇所もある。
- ⑤ 黒褐色シルト質土 (Hue7.5YR3/2) しまりあるか③より弱く粘性なし。φ5mmの白色の小礫もまばらに含む。
- ⑥ 暗褐色シルト質土 (Hue7.5YR3/3) しまり⑤と同じ粘性なし。φ1mm以下の白色粒子を⑤と同量含む。φ3～5mmの黄色の粒もまばらに含む。にぶい黄褐色粒 (Hue10YR5/4) を層全体にまばらに含む。
- ⑦ 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1) しまり⑤と同じ粘性なし。φ1mm以下の白色粒子を非常に多く含む(>⑥)。φ3～5mmの黄・褐色の粒も層全体にまばらに含む。
- ⑧ 褐色シルト質土 (Hue7.5YR4/4) しまり⑥よりあり粘性少しあり。φ1～3mmの白・黄・褐色の粒を層全体に含む(<⑥)。φ10～15mmの小礫も層全体にまばらに含む。
- ⑨ 暗褐色シルト質土 (Hue10YR3/4) しまり⑥と同じ粘性なし。φ2～5mmの白・黄・褐色の粒を層全体に多く含む。φ10～20mmの小礫もまばらに含む。
- ⑩ 暗褐色シルト質土 (Hue10YR3/3) しまり⑧よりあり粘性⑥に同じ。φ1mm以下の白色粒子を層全体に非常に多く含む。φ3～10mmの小礫もごくわずかに含む。
- ⑪ にぶい黄褐色シルト質土 (Hue10YR4/3) しまり⑧よりあり粘性なし。⑩同様。φ2～5mmの黄・褐色の粒を層全体に多く含む。河川の跡かφ50～150mmの河原石のような円礫や削れた礫を非常に多く含む。
- ⑫ にぶい黄褐色砂状土 (Hue10YR5/4) 上位のV層よりしまりあり粘性やあり。φ1～20mmの白色・褐色・黄色の小礫を全体的に含む。根蘗物層。

第6図 土層断面図(3) (E-E'、F-F'、G-G')

## 第5節 遺物包含層の認識と後期旧石器時代の「期」の設定について

調査時および整理作業時における各調査区の層ごとの出土遺物の認識は以下のとおりである。

### A区（堆積層：V～Ⅷ層）

#### V層

ナイフ形石器、角錐状石器、細石刃、細石刃核、石刃、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### VI層

ナイフ形石器、細石刃、石刃、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### Ⅶ層

局部磨製石斧、打製石斧、ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### Ⅷ層上面

ナイフ形石器、二次加工剥片。

### B区（堆積層：Ⅱa～Ⅳ層）

#### Ⅱa層

弥生土器片。

#### Ⅳ層

縄文土器、石鏃、ナイフ形石器、石刃、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### V層

ナイフ形石器、細石刃、細石刃核、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### Ⅵ層

ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工剥片、石核、剥片、碎片。

#### Ⅶ層・Ⅷ層上面

ナイフ形石器、微細剥離ある剥片、剥片。

### C区（堆積層：Ⅱ～Ⅶ層）

#### Ⅱ層

弥生土器片。

#### Ⅳ層

縄文土器、石鏃、ナイフ形石器、スクレイパー、敲石、台石、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

#### V層

縄文土器、打製石斧、二次加工剥片、剥片、碎片。

#### Ⅶ層

石刃、二次加工剥片、微細剥離ある剥片、石核、剥片、碎片。

A区では後期旧石器時代の遺物包含層が認められた。しかし各層の層厚はあまり厚くなく、地形の影響もあり斜面下側は層全体にわたってATと思われる白色粒子の拡散が見られた。接合状況からもV層出土遺物とⅥ層・Ⅶ層出土遺物が接合するなど、土層堆積状況の不安定さが表れる結果となった。

B区では後期旧石器時代から縄文時代までの遺物包含層が確認され、Ⅱa層からは弥生土器片も出土した。しかし、斜面下側ほど土層の堆積は良くなく、遺物の接合関係からも堆積状況の不安定さが見られた。

C区では後期旧石器時代から縄文時代の遺物包含層が見られ、部分的に弥生時代の遺物包含層も認められた。地形的影響により、安定した土層の堆積が見られたのは調査区南側に限られる状況であった。

以上のように、各調査区で堆積層や堆積状況が異なり、層による時期区分が困難な状況であったため、遺物包含層より出土した細石刃、細石刃核および作業面再生剥片のみを抽出し、後期旧石器時代Ⅳ期と設定したい。これらの遺物以外にもここに帰属する遺物が含まれている可能性があるが、前述した明らかな細石刃石器群についてのみ後期旧石器時代Ⅳ期の遺物として取り扱う。

#### I期

Ⅶ～Ⅷ層上面（AT下位）から出土した石器群。

#### Ⅱ期

Ⅵ層（AT混褐色土）出土の石器群。

#### Ⅲ期

V層（AT上位）より出土した石器群。

#### Ⅳ期

細石刃文化期の石器群。遺物包含層中より細石刃・細石刃核が出土したのはA、B区のみである。

## 第6節 後期旧石器時代の遺構と遺物

A・B・C区において後期旧石器時代の遺構・遺物が確認された。以下では、各調査区の立地を考慮し、時期および調査区ごとに分けて遺構・遺物について述べる。なお、遺物の詳細については観察表(第5・6表)にゆずる。その後、「12 後期旧石器時代 小結」において、遺跡全体を通しての後期旧石器時代の様相と遺跡の変遷について述べる。

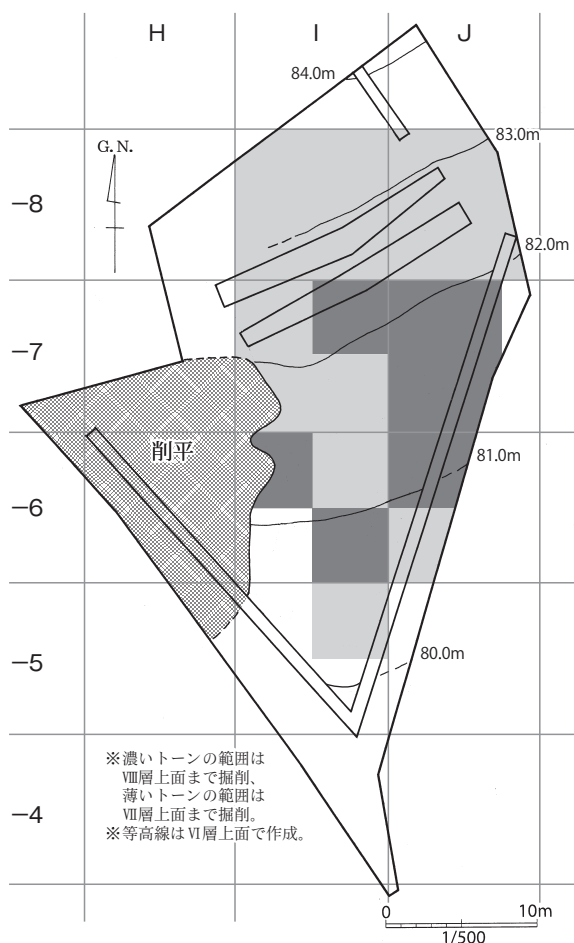
### 1-1 I期 (A区) 概要

VII層およびVIII層上面より出土した遺物が当該期にあたる。調査区西側は削平の影響と表土下が礫層であったため、VII・VIII層の全面調査は行っていない。調査範囲は第7図に示す。遺構は見られなかったが80点の遺物が出土した。J-7グリッド(以下、Gr.)より局部磨製石斧1点とその未製品と思われる打製石斧2点が出土し、うち1点は剥片との接合も確認された。黒曜石製ナイフ形石器や厚手の剥片素材のスクレイパー、縦長剥片などの遺物が出土した。

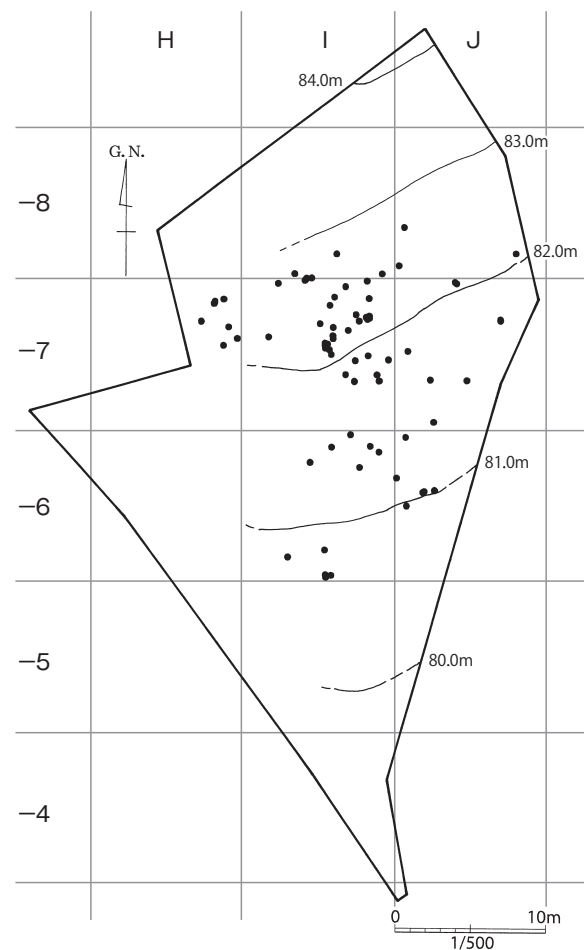
### 1-2 遺物 (第10～12図)

#### 局部磨製石斧・打製石斧 (第10図1～3)

1は自然の棒状礫を素材とする。礫の長軸の一端を刃部に設定し、左右両方向から剥離を行い、先端部にわずかに研磨を施す。表面が滑らかな自然礫であるが、基部の表・裏面と両側面に敲打痕と思われるざらざらとする部分が見られる。2は打製石斧である。1よりやや厚みの薄い扁平な自然礫を素材とするが、刃部にのみ成形時の剥離面を有する点で1と共通する。1、2ともに素材の形状を利用した弧状の刃部をもつが、2の刃部には研磨痕は見られない。研磨工程前の調整段階の資料と思われる。3は打製石斧の欠損品である。約6m離れた地点から出土した剥片との接合が確認されたが、敲石等の出土は見られなかった。稜線がとろけたような部分が正面、裏面に見られる。素材の厚みを除去するためか片面には大小の剥離が施され、背面の一部にも剥離を行い、うち1点が接合したものと思われる。



第7図 A区VII・VIII層上面調査範囲



第8図 後期旧石器時代I期(A区)遺物分布図

**ナイフ形石器 (第11図4)**

4は黒曜石(Ob1)である。基部と先端部を欠くが、現状では右側縁に丁寧な調整加工が施される。

**スクレイパー (第11図5)**

5は厚みのある剥片端部に主要剥離面側から刃部を加工し、周縁にも両面から調整剥離を施す。

**剥片 (第11図6)**

6は尾鈴山溶結凝灰岩の縦長剥片である。平坦な剥離面を打面とする寸詰まりな剥片である。

**微細剥離ある剥片 (第11図7)**

7は黒曜石 (Ob1) の剥片で、端部に微細剥離が見られる。

**二次加工剥片 (第11図8～10)**

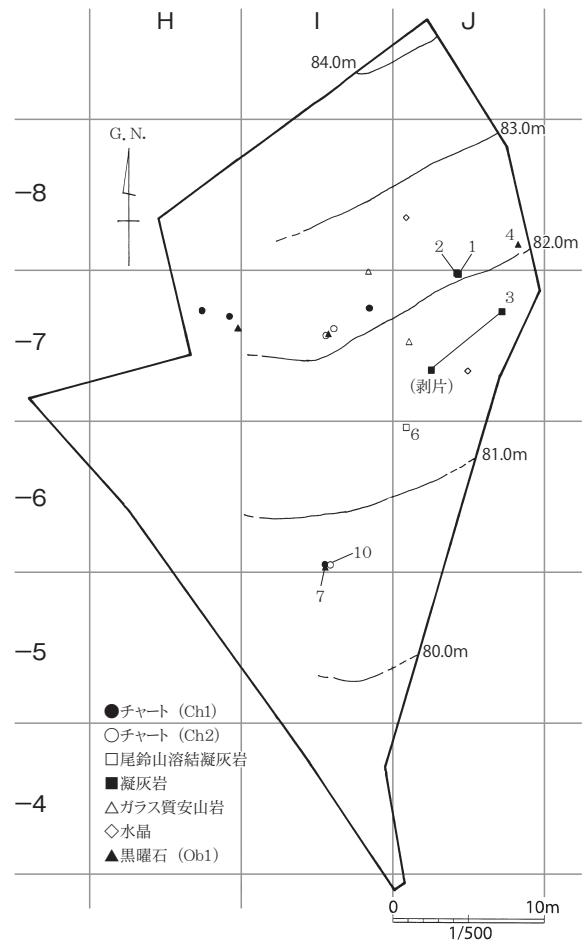
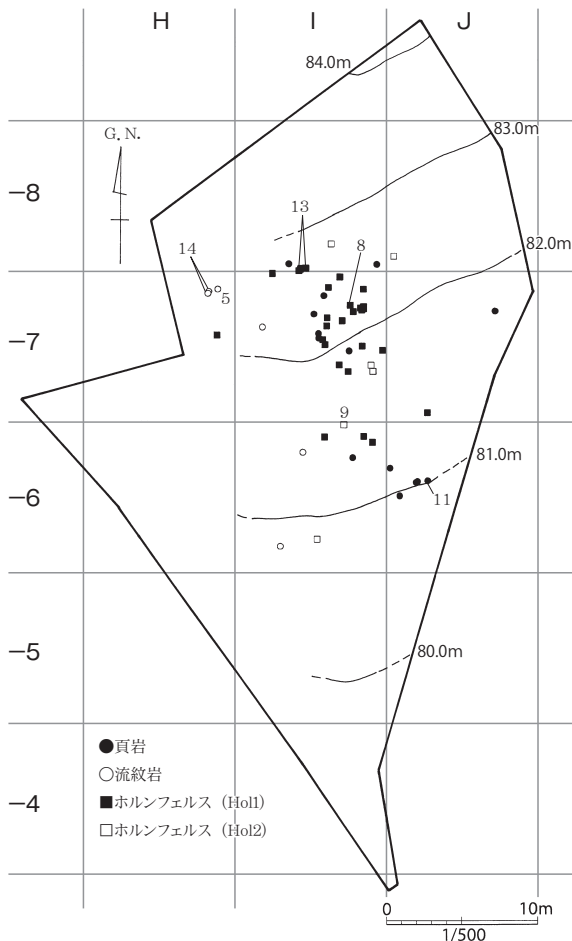
8はホルンフェルス (Hol1)、9はホルンフェルス (Hol2)、10はチャート (Ch2) である。9は背面にこれと同様の大型剥片を剥離した痕跡を残す。10は平坦な剥離面を打面とし剥離される。主要剥離面に二次加工を施す。

**石核 (第11図11)**

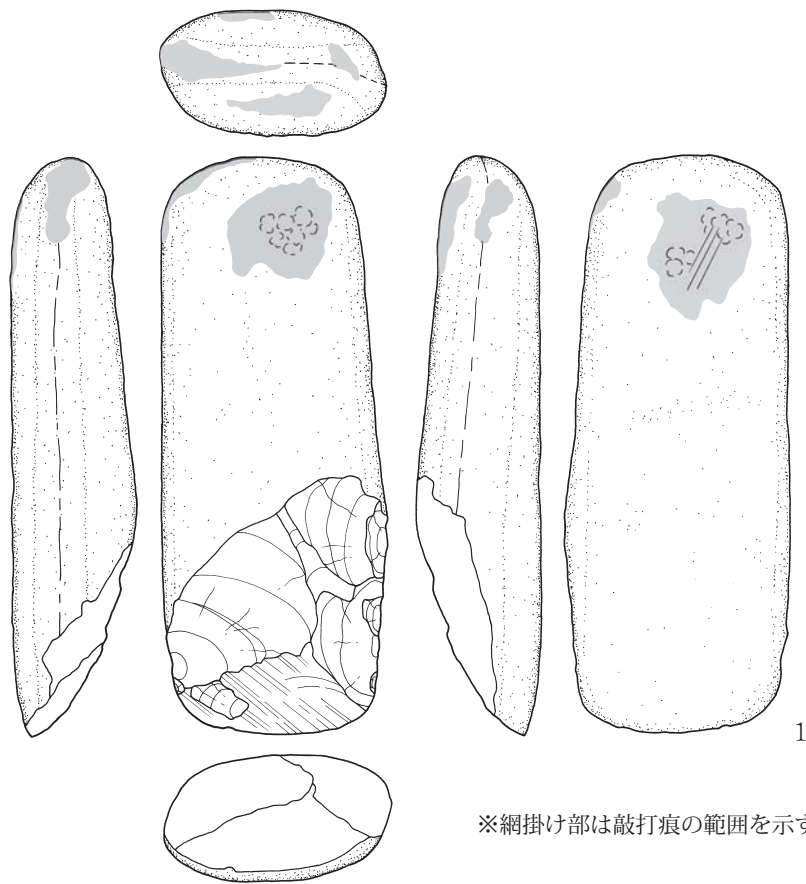
11は頁岩である。背面・側面に上下二方向から剥片剥離を行った痕跡を残し、中には長さ5cm以上の縦長剥片剥離面も見られる。

**接合資料 (第11図12～第12図14)**

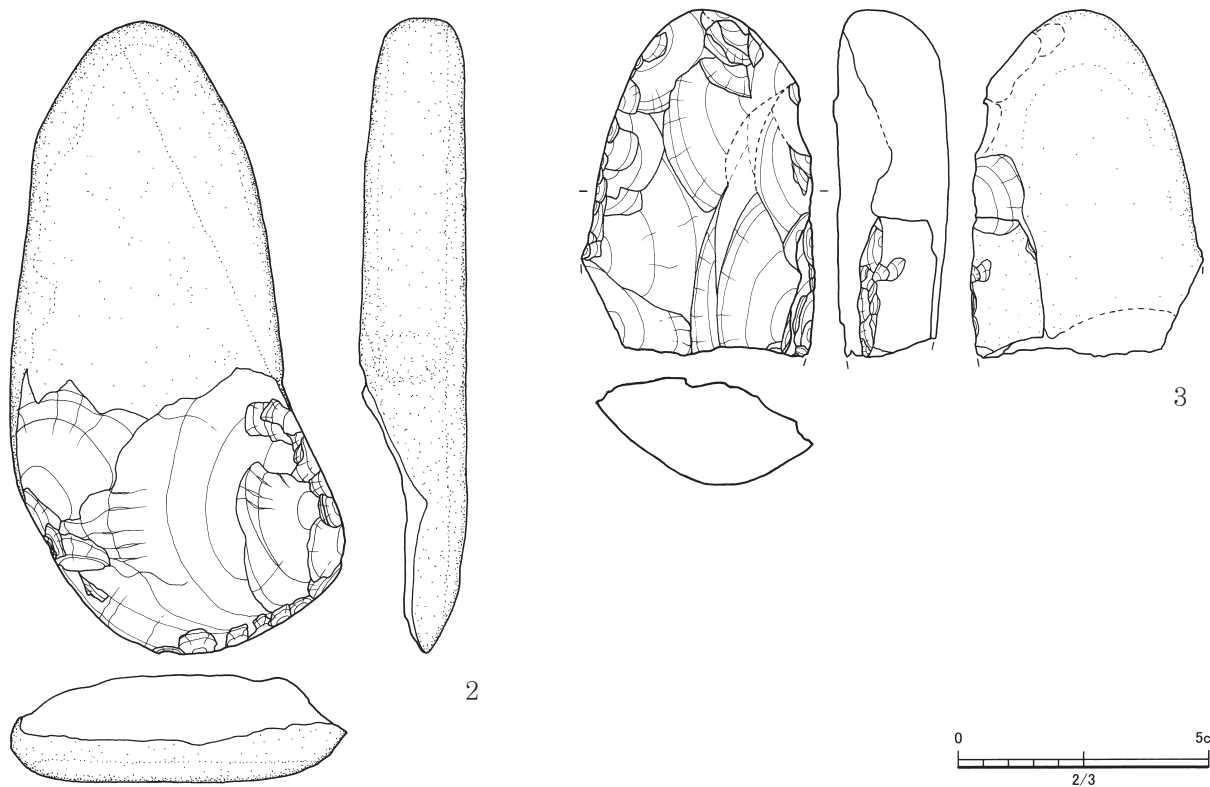
12は白色流紋岩の剥片2点の接合である。左側の剥片はⅦ層、右側の剥片はⅤ層より出土した。多方向からの剥離面を背面に残す左側の剥片を剥離後、90°打面転移し頭部調整を施したのち、長さ約3.4cm、幅約2.3cmの右側の剥片を剥離する。頭部調整を行う点や一側縁に微細剥離が見られる点から、右側の剥片を目的剥片としていた可能性がある。13はホルンフェルス (Hol1) の剥片2点の接合で、どちらも自然面を打面とし、背面に自然面を残す。左側の剥片を剥離後、右側の剥片を分厚く剥離する。石核調整に伴う剥片である。14は黒色流紋岩の石核と剥片の接合資料である。一部に自然面を残すが、打面転移を繰り返しながら縦長剥片や幅広剥片を剥離した痕跡が残る。



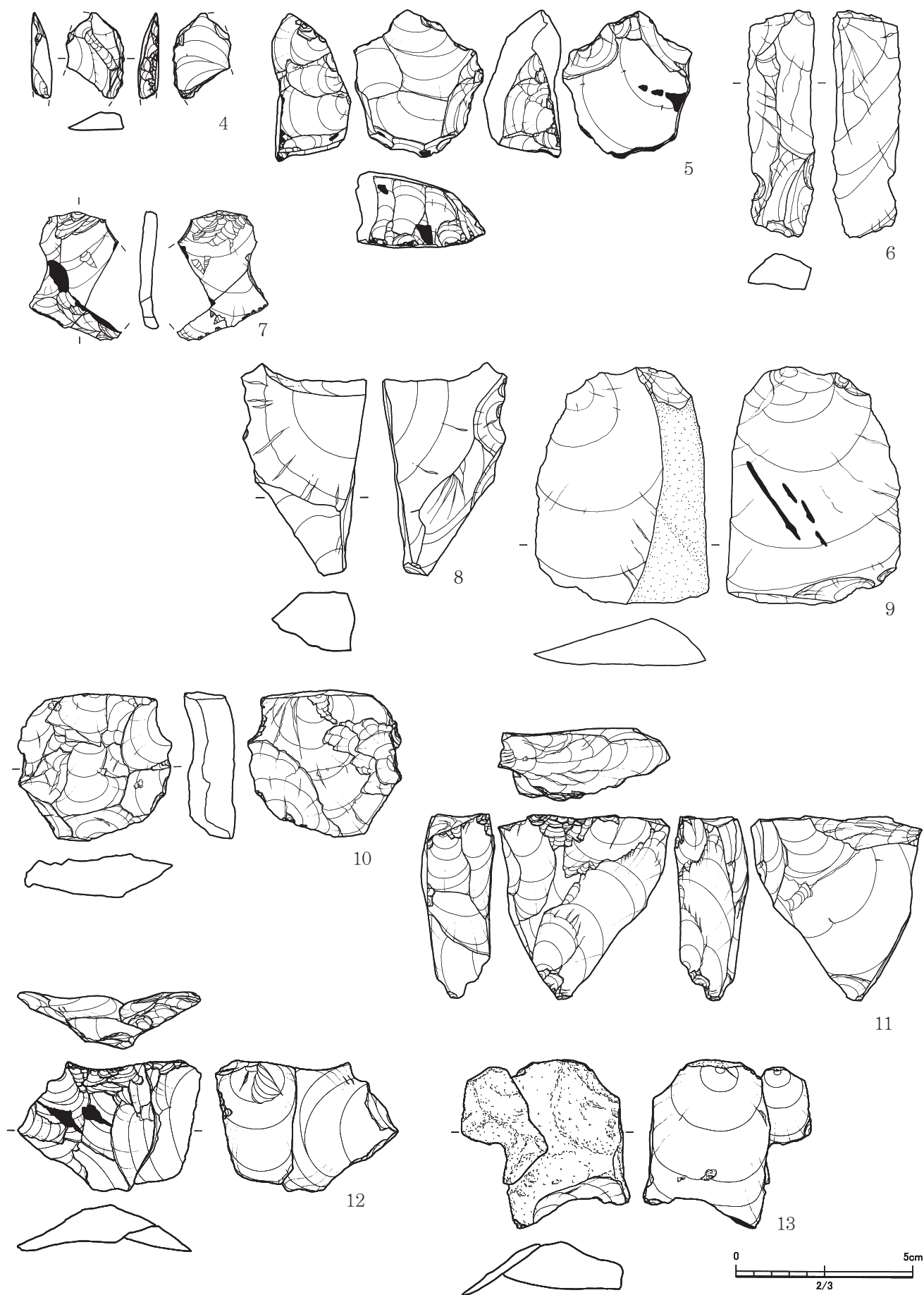
第9図 後期旧石器時代Ⅰ期 (A区) 石材別遺物分布図



※網掛け部は敲打痕の範囲を示す。

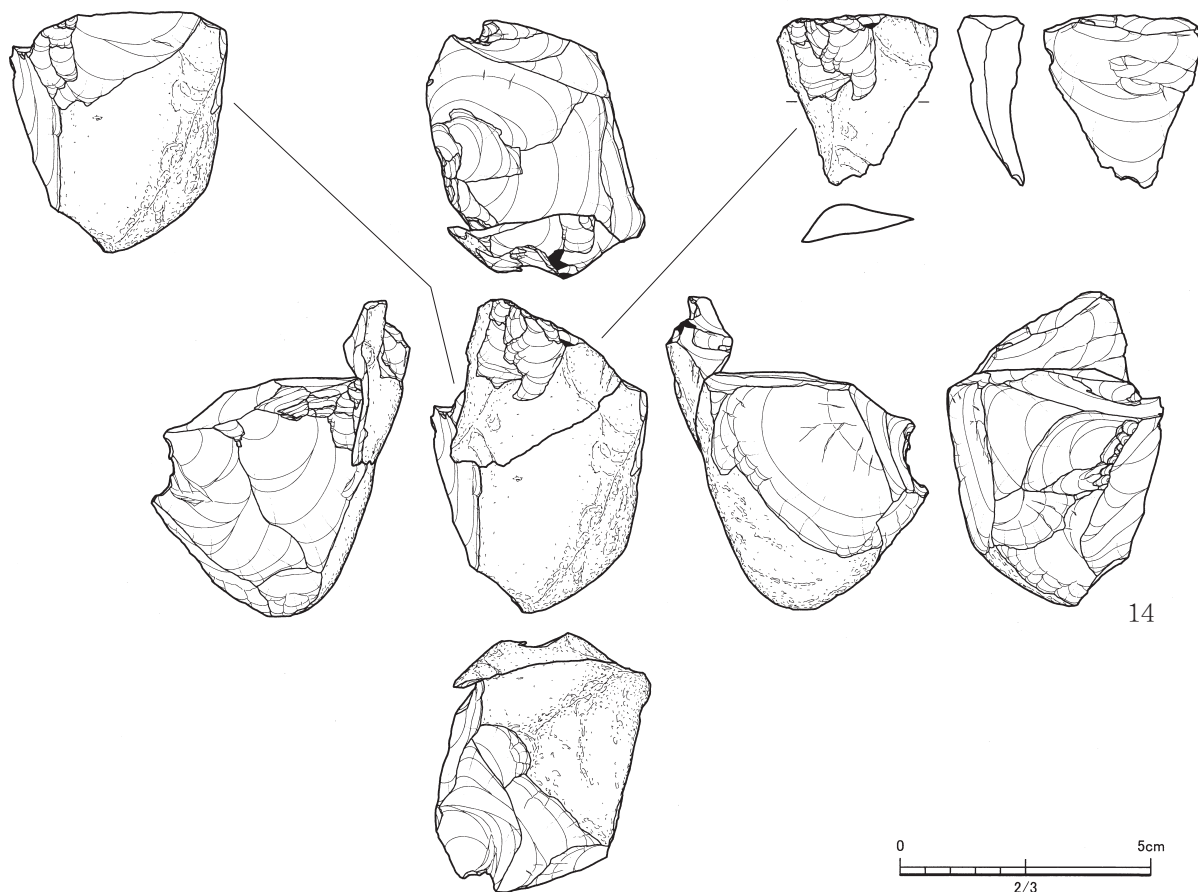


第10図 後期旧石器時代Ⅰ期（A区）石器実測図（1）



第11図 後期旧石器時代Ⅰ期（A区）石器実測図（2）





第12図 後期旧石器時代Ⅰ期（A区）石器実測図（3）

### 2-1 I期（B区）概要

VII層およびVIII層上面より出土した遺物である。調査範囲は右図に示す（第13図）。旧地形は標高75～85mの急斜面で、層堆積も安定していない。斜面上側で約10～15cmの層厚が見られたVII層も、斜面下側では10cm以下と薄くなり、部分的に途切れる箇所も見られた。こうした地形的要因からか遺物の分布も希薄であり、ナイフ形石器や二次加工剥片が出土したもの、総遺物数は10点に満たない状況であった。

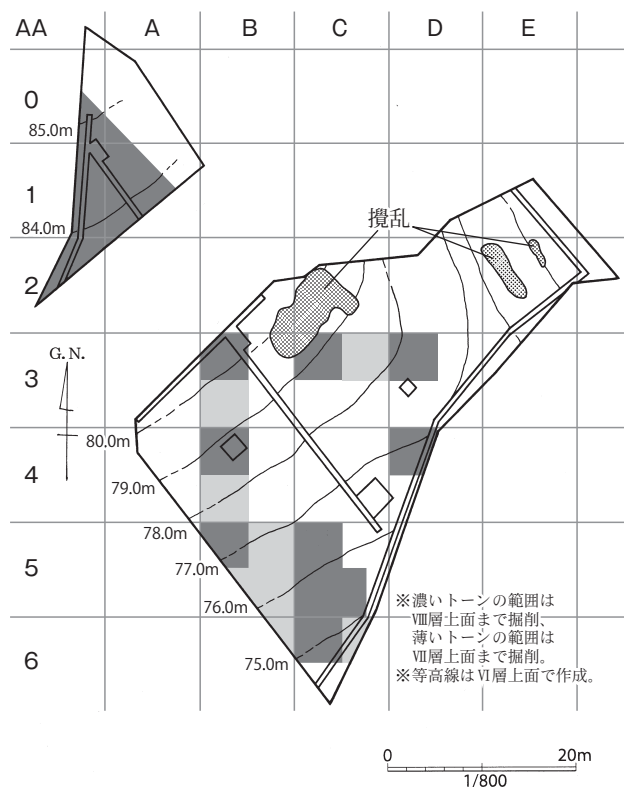
### 2-2 遺物（第15図）

#### ナイフ形石器（第15図15・16）

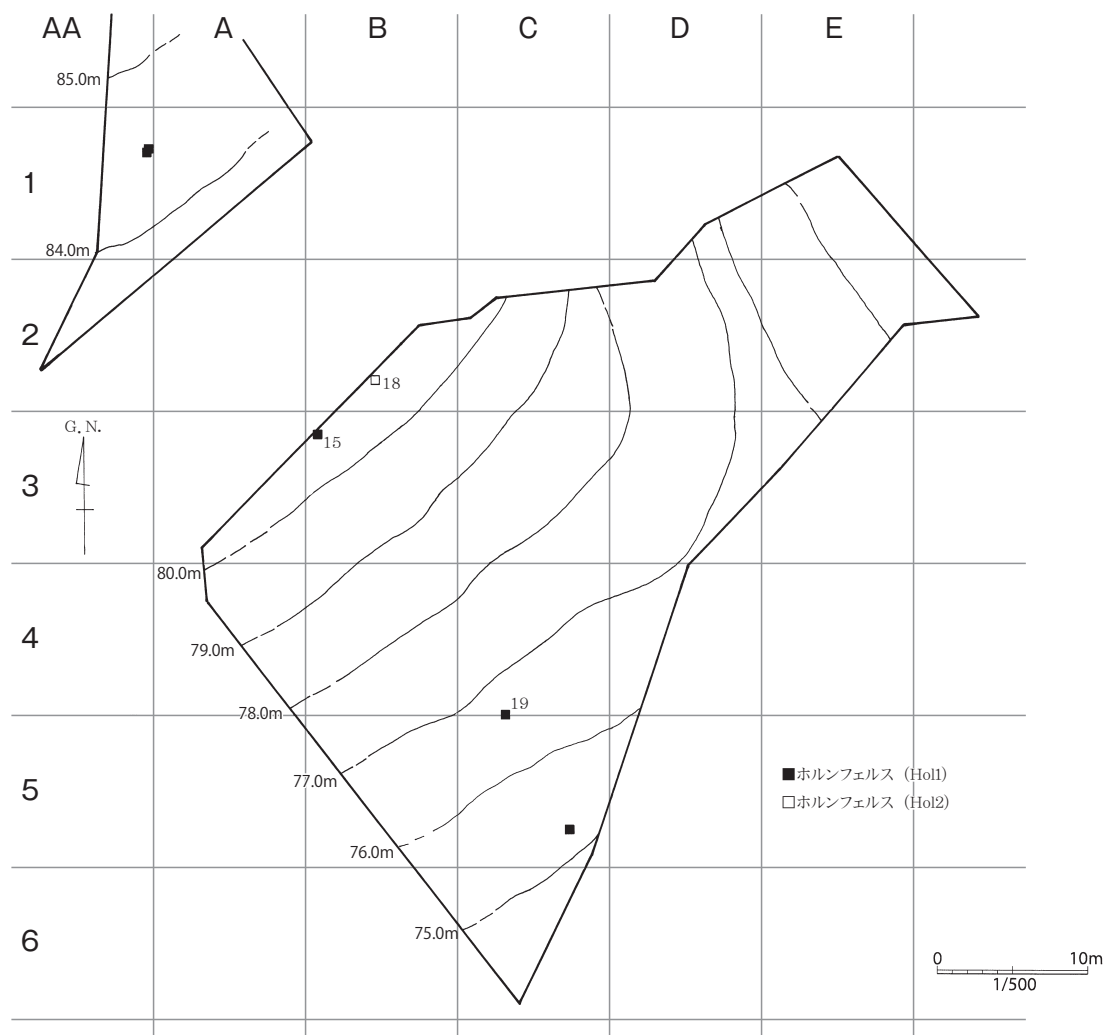
15は縦長剥片素材の二側縁加工品である。刃部に微細剥離が見られる。16は基部・先端部を欠くが、右側縁に明瞭な調整剥離が見られる。VIII層上面出土。

#### 二次加工剥片（第15図17）、剥片（第15図18・19）

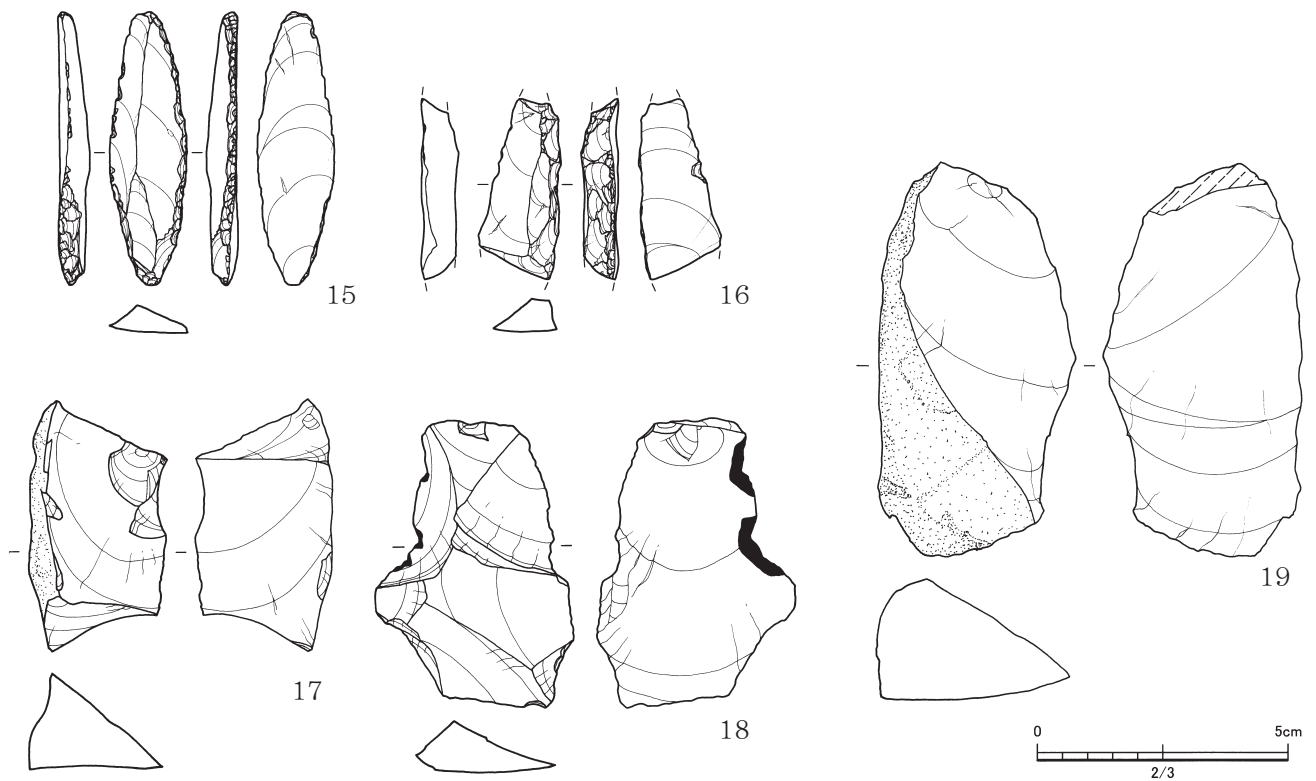
17はVIII層上面より出土した。18は背面に多方向からの剥片剥離面を残す石核調整剥片である。



第13図 B区VII・VIII層上面調査範囲



第14図 後期旧石器時代Ⅰ期（B区）石材別遺物分布図



第15図 後期旧石器時代Ⅰ期（B区）石器実測図

### 3-1 I期（C区）概要

C区はAK24Gr.付近を北東から南西方向に走る谷地形の影響により、広い範囲で土層の変色・変質が見られた。安定したVII層の堆積が確認できたのはAK24Gr.より南西側に限られていた。VII層以下の調査を行った範囲は第16図に示す。礫群2基が検出され、稜付石刃や二次加工剥片、石核などの遺物が出土した。また、AM25Gr.では桑ノ木津留産黒曜石と思われる剥片を含む遺物集中区が見られた。

### 3-2 遺構（第17・18図）

SI1は層厚約25cmの発達したVII層の中程より検出された。検出できたのは遺構全体のごく一部と思われる、調査区外に広がる可能性がある。SI2も同じく層厚約15～20cmの安定したVII層中より検出された。14個の礫で構成され、そのほとんどが破碎礫である。中には1個の礫がその場で割れたかのような状態の礫も見られた。ほぼすべての礫が赤化しているが礫群内や礫群周辺で炭化物等は検出されなかった。

SI1は遺構全体を検出できていない可能性を残すが、検出できた範囲でSI1とSI2を比較すると、SI1は10cm以下の礫3個と15cm大の礫1個で構成されるのに対し、SI2は10cm以下の礫3個と12～17cmの礫10個で構成され、利用する礫の大きさに若干の違いが見られる（その場で割れたような礫は接合した状態、つまり遺跡内に礫を搬入した時の状態で1個と考える）。遺構の検出層位や位置関係から、2基は同時期のものと考えられる。

### 3-3 遺物（第19・20図）

I期石器群の遺物は19点出土した。石器石材として頁岩、ホルンフェルス、チャート、黒曜石、尾鈴山溶結凝灰岩、砂岩が用いられている。

#### 石刃（第19図20）

20は断面三角形の稜付石刃である。

#### 石核（第19図21）

21は剥片剥離面を複数残す石核である。

20・21は色調や風化度が近似するが、2点の間に接合関係は見られず、元となる石核や剥離された剥片などは出土していない。

#### 二次加工剥片（第20図22～25）

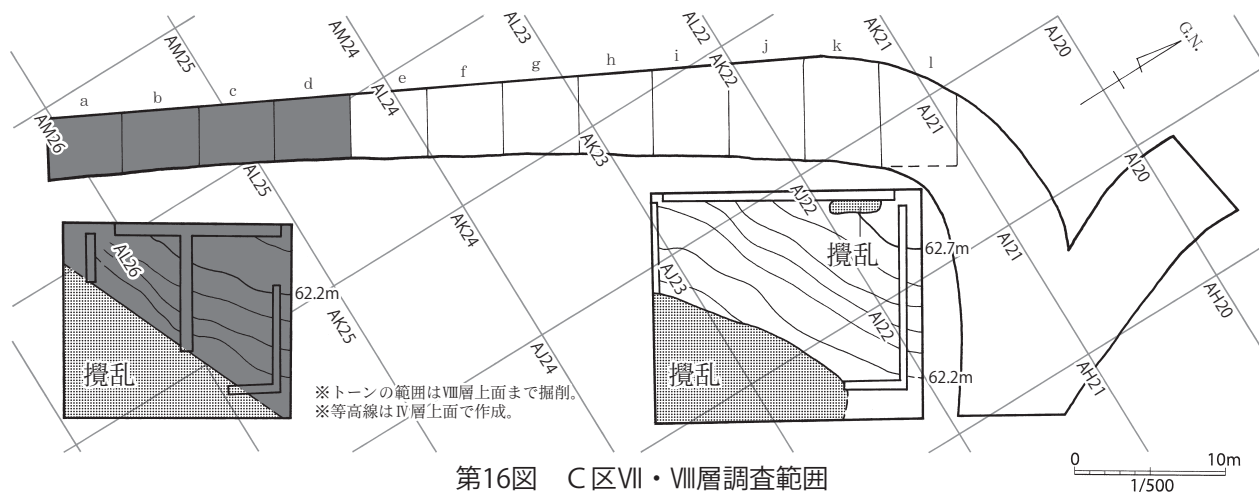
22は主要剥離面側に、23は背面側に二次加工を施す。22・23は同一母岩と思われる。25は黒曜石(Ob1)の二次加工剥片で、他の黒曜石製遺物とは離れたAL25Gr.においてVI層(AT)直下より出土した。

#### 微細剥離ある剥片（第20図26・27）、剥片（第20図28～31）

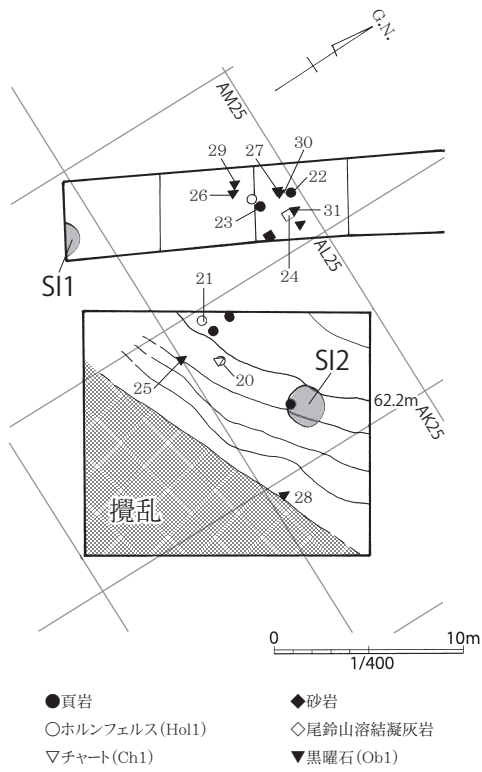
30・31は大型の剥片で背面に剥片剥離面を残す。

### 3-4 遺物集中区について

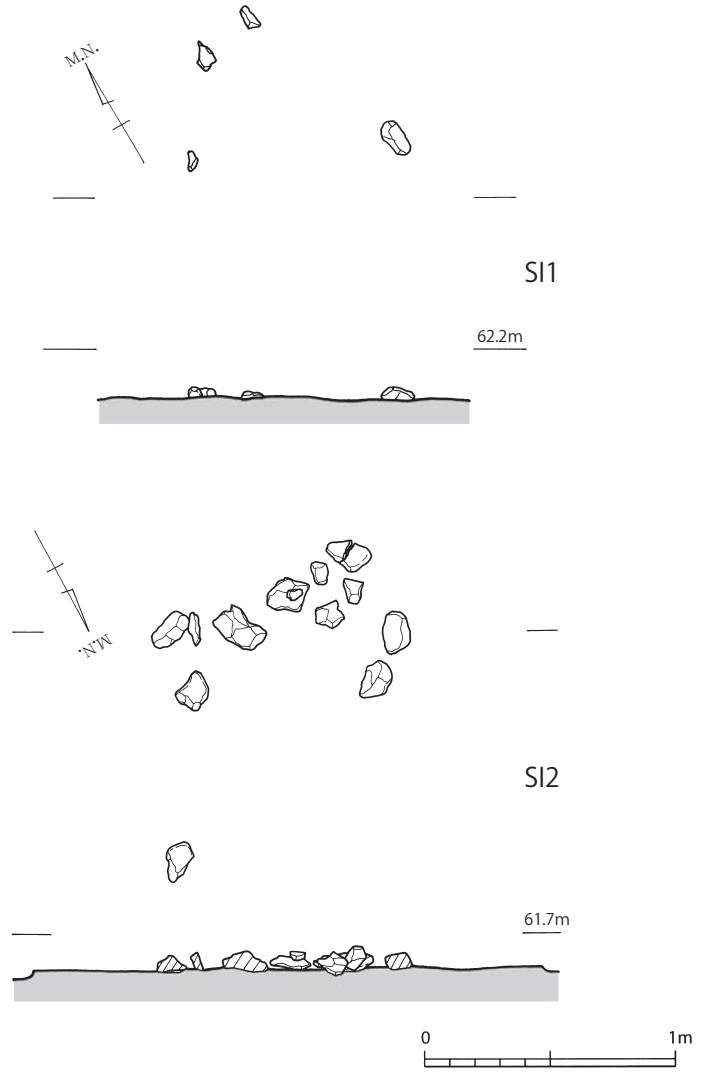
AM25Gr.において確認された遺物集中区では、頁岩の二次加工剥片(22・23)、尾鈴山溶結凝灰岩の二次加工剥片(24)、黒曜石の微細剥離ある剥片(26・27)と剥片(29～31)に加え、未図化であるが頁岩・砂岩の剥片とチャートの碎片が出土した。3m×5mの範囲にまとまって出土したが、同一石材間においても接合関係は見られないことから、遺跡外で調整したのち遺跡内に持ち込んだものと思われる。



第16図 C区VII・VIII層調査範囲



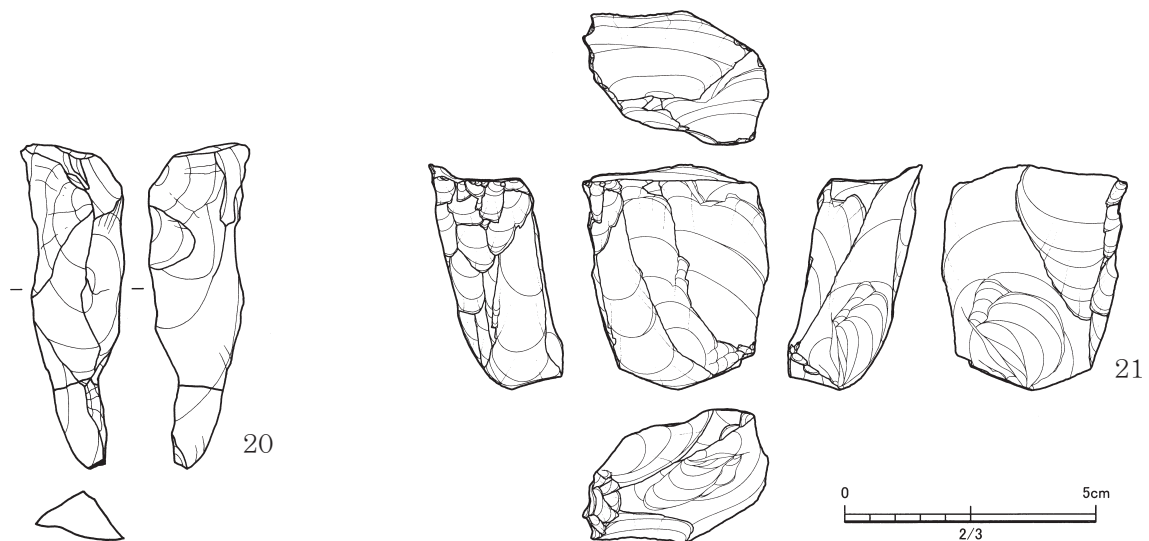
第17図 後期旧石器時代Ⅰ期（C区）  
遺構・遺物分布図



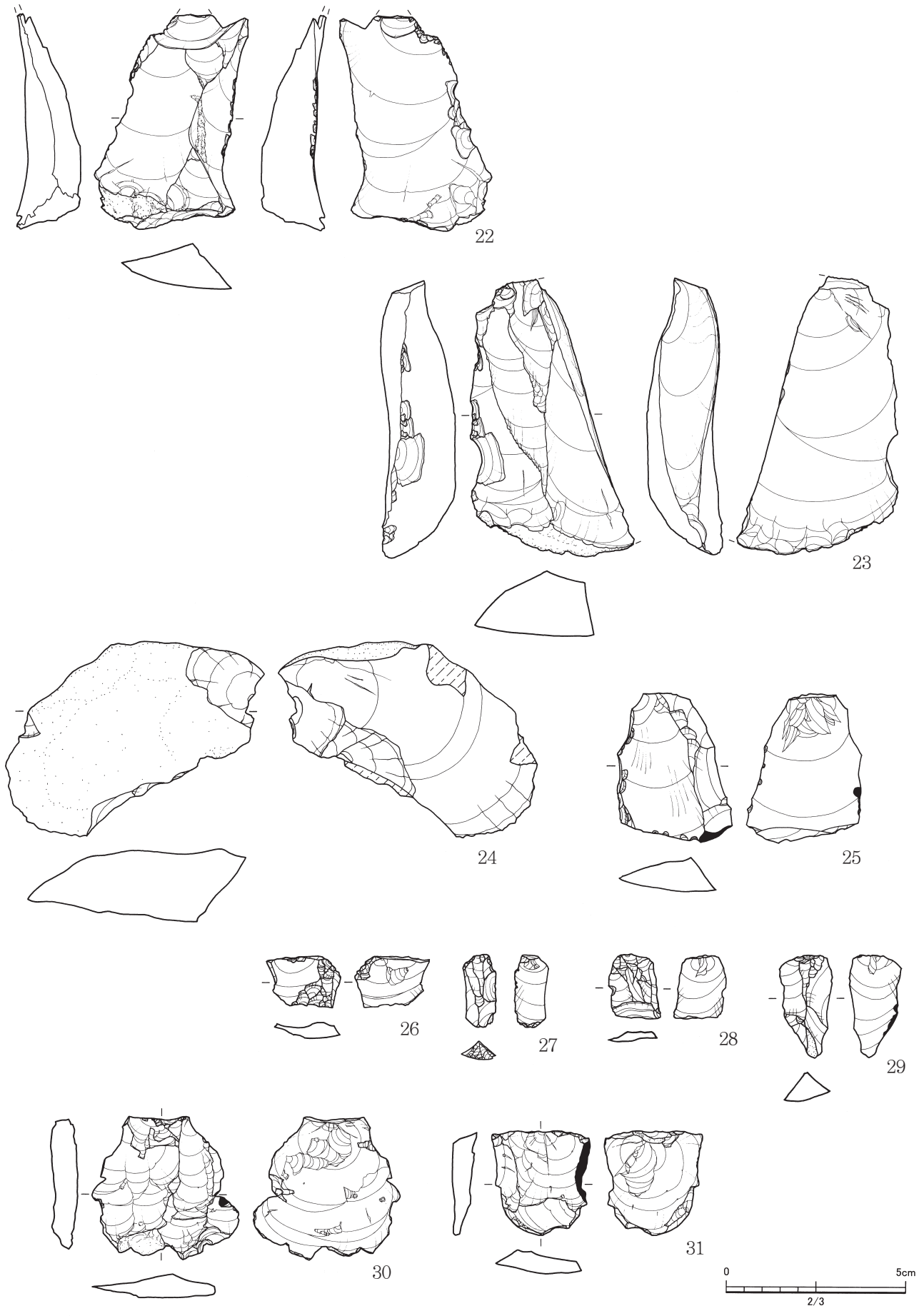
第18図 後期旧石器時代Ⅰ期（C区）  
礫群実測図

第2表 後期旧石器時代Ⅰ期（C区）礫群観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 (個)	重量 (kg)	備考
S11	VII	AM26	0.90	0.68	4	1.5	調査区外に広がる可能性あり。
S12	VII	AL25	1.41	1.03	14	10.0	



第19図 後期旧石器時代Ⅰ期（C区）石器実測図（1）



第20図 後期旧石器時代Ⅰ期（C区）石器実測図（2）

#### 4-1 II期（A区）概要

VI層（AT混褐色土）より出土した石器群である。遺構は確認されなかったが、ナイフ形石器や石刃、スクレイパー、明瞭な微細剥離ある剥片、石核などの遺物が出土した。

#### 4-2 遺物（第24・25図）

##### ナイフ形石器（第24図32～34）

32・33はホルンフェルス（Ho11）に分類されるが、色調や風化度合から母岩は異なるものと思われる。ほぼ同地点より出土した。34は基部・先端部を欠くが、幅広の不定形剥片端部を刃部に設定し、打面側に調整剥離を施す。

##### 石刃（第24図35）

35はホルンフェルス（Ho11）の薄手の石刃で、背面にも同方向からの縦長剥片剥離面を残す。

##### スクレイパー（第24図36～38）

36は右側を欠損するが、剥片端部および左側縁に、明瞭な急斜度加工が施される。37は全周の約

2/3に刃部加工を施す。38はいわゆる削器である。左側縁から剥片端部にかけて細かな刃部加工が施されるが、右側面の自然面は残されたままである。

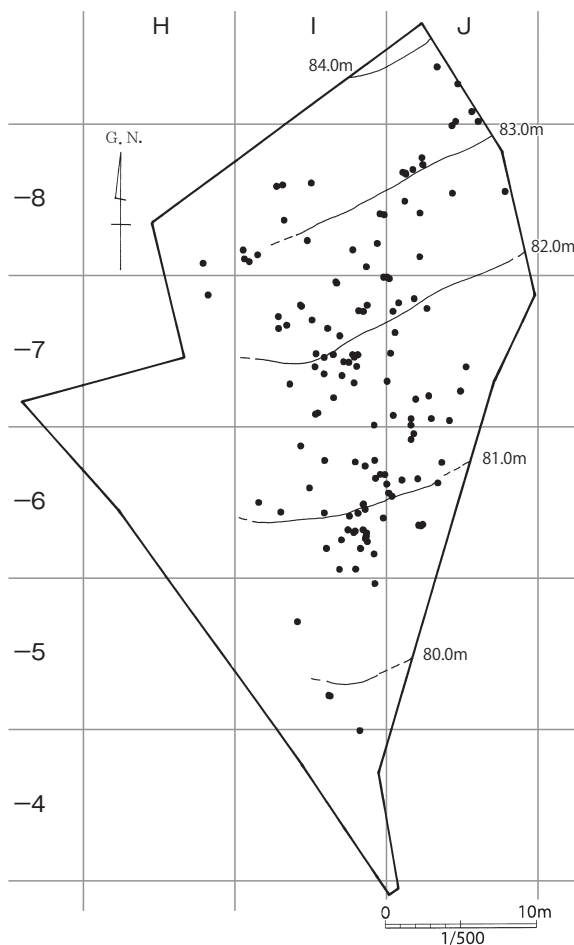
36・37は厚みのある剥片を素材とするのに対し、38は厚みのない不定形剥片を素材とし、それにより刃部加工も浅く細かく施されている。3点ともI-8Gr.より出土した。

##### 二次加工剥片（第24図39）

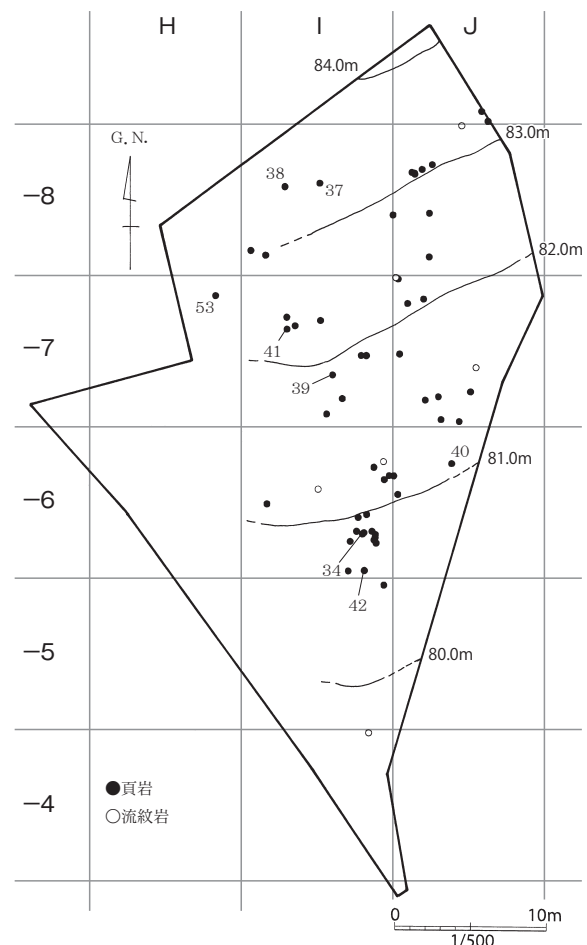
不定形でやや厚みのある寸詰まりな剥片を素材とする。右側縁端部の主要剥離面側に浅い二次加工を施す。厚みのない縁辺には微細剥離も見られる。

##### 微細剥離ある剥片（第24図40～45）

40・41はともに頁岩で法量も近似しているが、色調や風化度合は異なる。背面に同方向からの剥片剥離面を残す点にも共通性が見出せる。42は頁岩、43はチャート（Ch4）である。44は赤チャート（Ch1）、45は桑ノ木津留産と推測される黒曜石（Ob1）である。



第21図 後期旧石器時代II期（A区）遺物分布図



第22図 後期旧石器時代II期（A区）石材別遺物分布図(1)

### 剥片 (第25図46 ~ 50)

46 ~ 50は剥片である。46 ~ 48はホルンフェルス (Hol1)、49は無光沢チャート (Ch2)、50は水晶である。

### 接合資料 (第25図51 ~ 54)

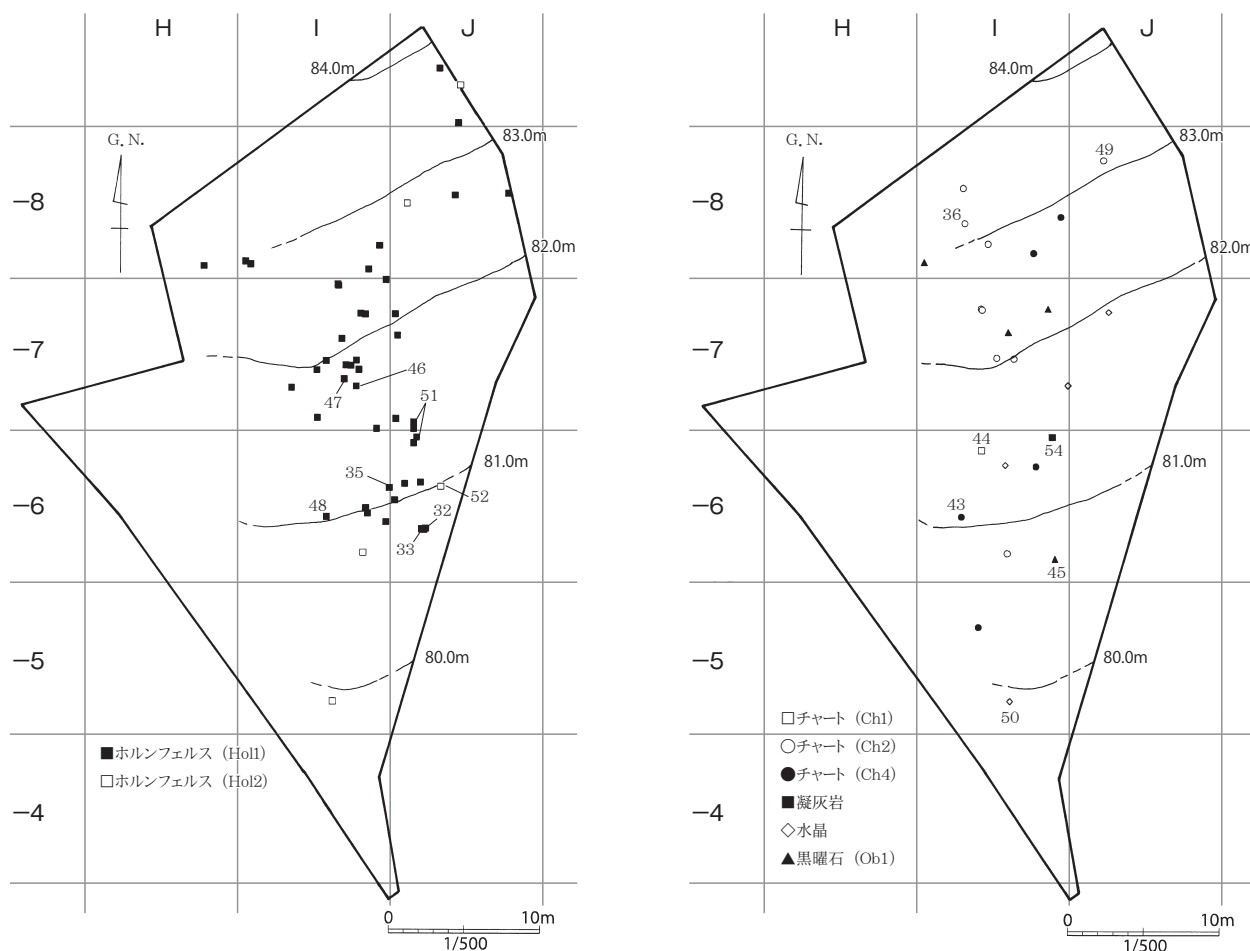
51は幅広剥片2点の接合であるが、石材の質が粗く大型の剥片を剥離するのは困難だったと思われる。52は第1次調査時にトレンチより出土した剥片との接合である。折損前に縦長剥片を剥離した痕跡を背面に残す。折損後、下半分の剥片には二次加工が施される。53は剥片2点の接合で、うち1点は表土より回収した剥片である。左側の剥片の背面から、自然面を打面として剥片剥離後、180°打面転移を行い、これら2点の剥片を剥離したことがわかる。石核調整剥片と思われる。54は石核と剥片2点 (表土より回収) の接合資料である。凝灰岩の大型の石核で、一部なめらかな自然面を残すが、多方向から大小さまざまな不定形剥片を剥離している。

### 4-3 石器石材の割合

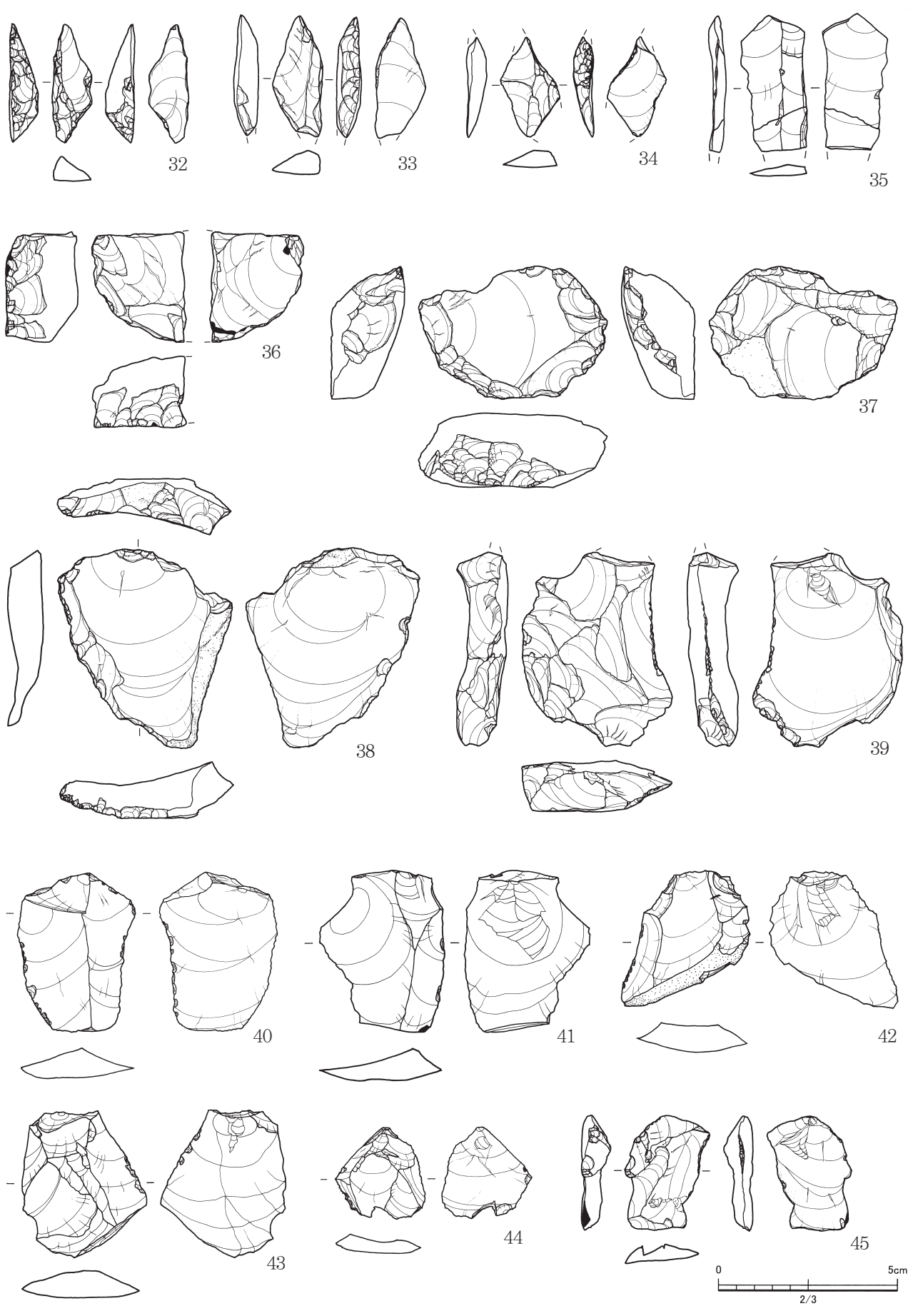
当該期 (AT混褐色土：VI層出土) の石器石材の割合を概観すると、頁岩54点、ホルンフェルス (Hol1) が45点、ホルンフェルス (Hol2) が5点、流紋岩6点、チャート (Ch1) が5点、チャート (Ch2) が1点、チャート (Ch3) が9点、桑ノ木津留産と推測される黒曜石4点、水晶4点、ガラス質安山岩1点、凝灰岩1点である。頁岩の利用頻度が最も高く、次いでホルンフェルス (Hol1) が多く利用されている。

### 4-4 他層出土遺物との接合状況

各層の層厚が薄く、特に調査区南側の斜面下側ほど堆積状況が良くなく、AT粒子も上下層に拡散する状況が見られ、遺物の二次移動は激しいものがある。VI層出土遺物についても同様で、VI層出土遺物同士で接合関係が見られるものもあるが、上層 (V層) および下層 (VII層) 出土遺物との間に接合関係が見られるものもある。

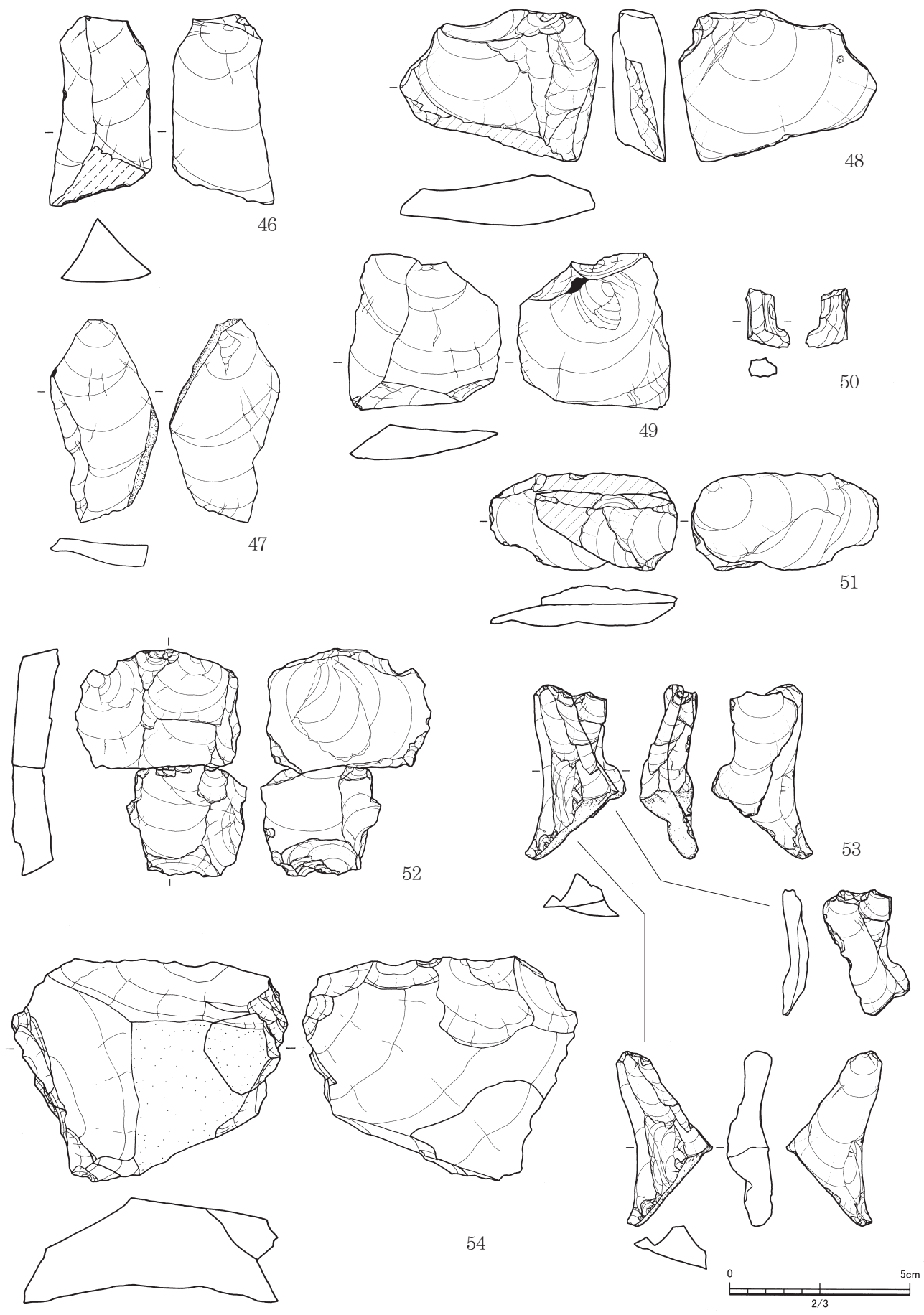


第23図 後期旧石器時代II期 (A区) 石材別遺物分布図 (2)



第24図 後期旧石器時代Ⅱ期（A区）石器実測図（1）





第25図 後期旧石器時代Ⅱ期（A区）石器実測図（2）

### 5-1 II期（B区）概要

VI層出土の石器群である。遺物量は少ない中で、二側縁加工ナイフ形石器やスクレイパー、また姫島産ガラス質安山岩の石核などが出土した。

### 5-2 遺物（第27図）

#### ナイフ形石器（第27図55）

55は縦長剥片素材の二側縁加工ナイフ形石器である。素材剥片端部を基部とし、背面には自然面を残す。基部側より刃部側の方が厚みがある。表面にATの粒子が多量に付着している。

#### スクレイパー（第27図56）

56は剥片端部に急斜度加工を施し、両側縁にも定形化した浅い調整剥離が見られる。

#### 二次加工剥片（第27図57）

57は円形の剥片の厚みのある縁辺2箇所

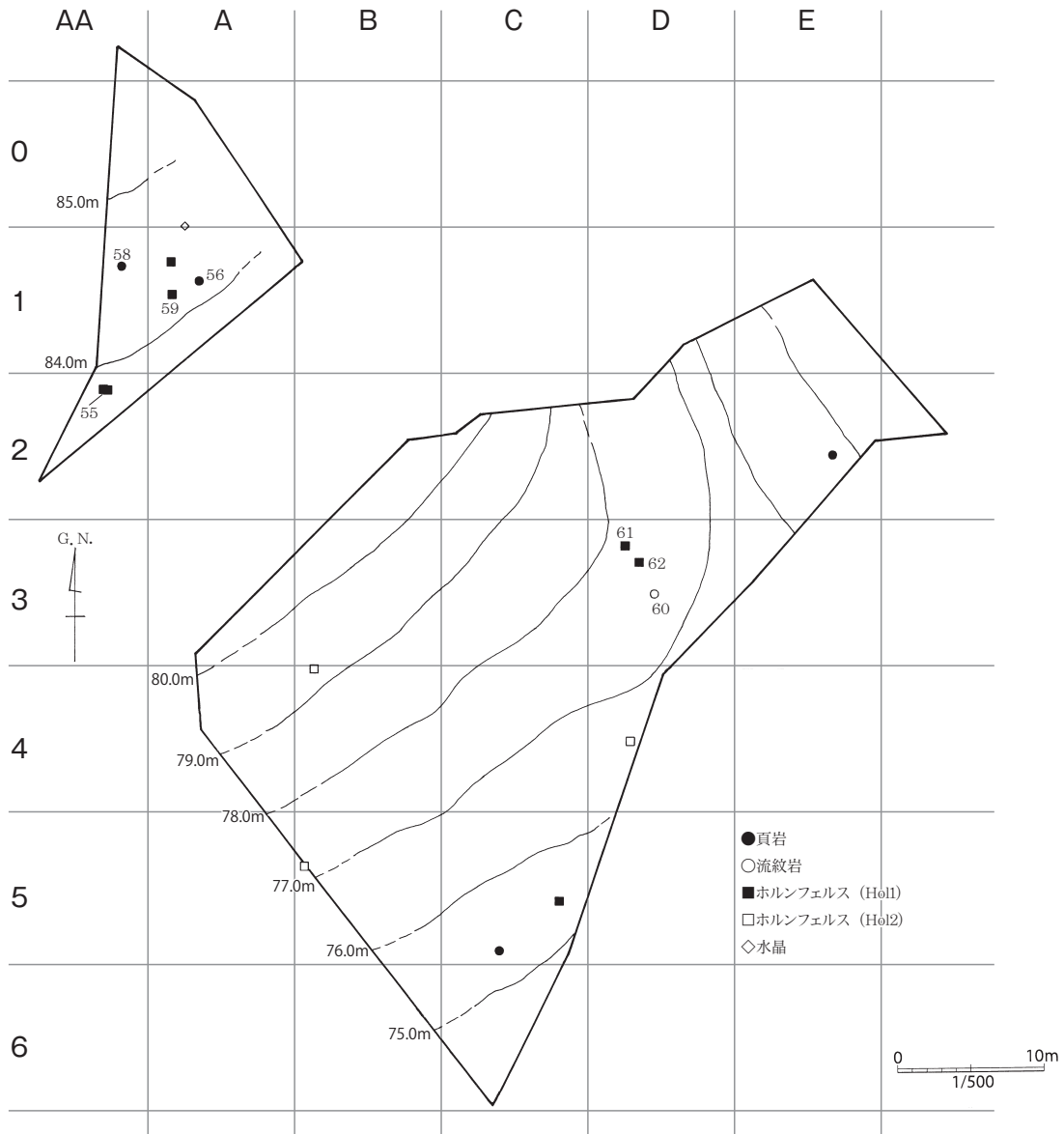
加工を施す。北東の一段高い調査区のVI層上面より出土。

#### 剥片（第27図58～61）

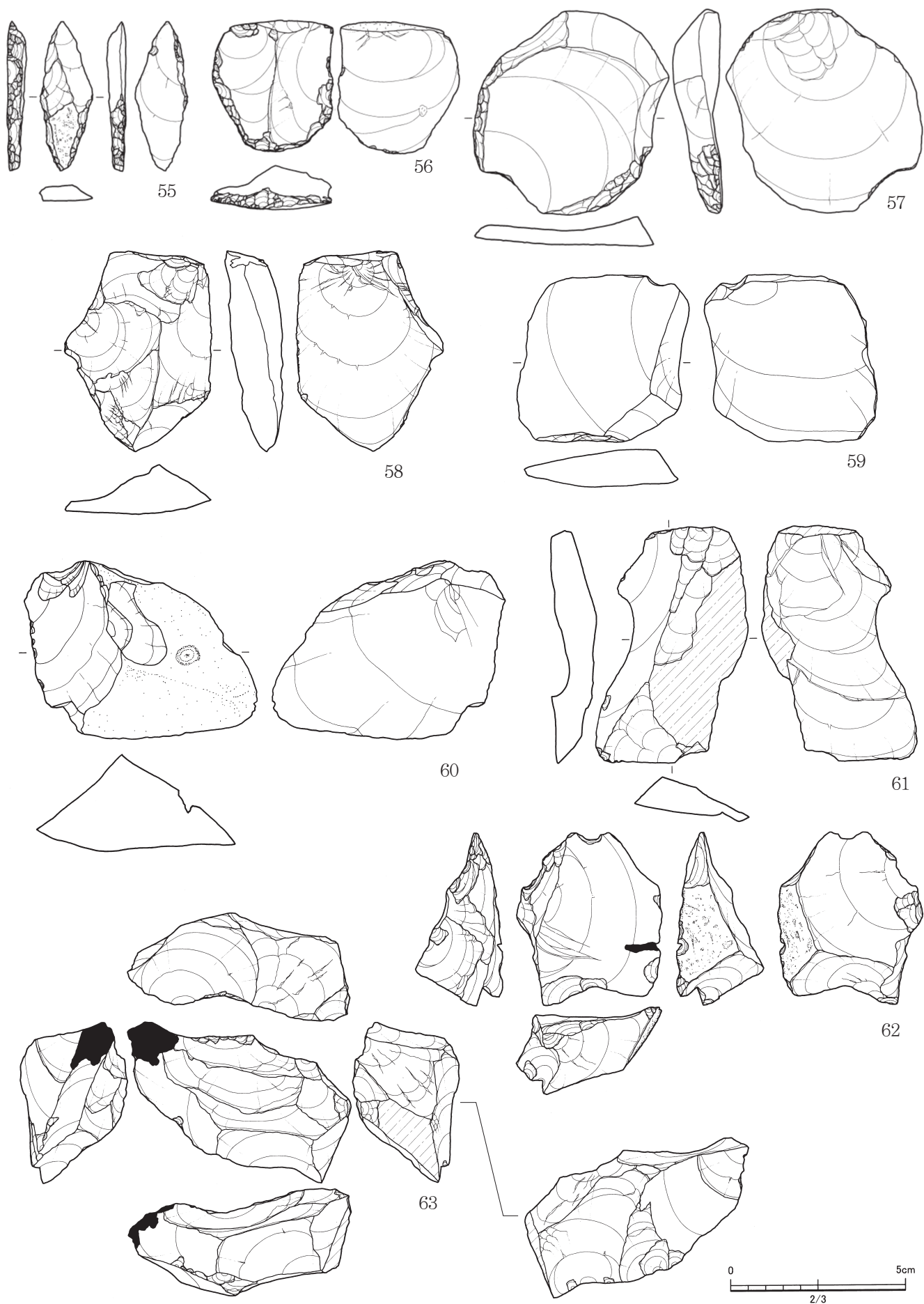
58は背面に多方向からの剥片剥離面を残すが、周辺からは同一石材の遺物の出土は見られなかった。60・61は下段の斜面部分より出土した剥片である。ともに同一母岩と思われる遺物の出土は見られなかった。

#### 石核（第27図62・63）

63は姫島産ガラス質安山岩の石核で、重量は55.2gを測る。B3aGr.のVI層上面出土。何度も打面を転移し剥片を剥離した様相を残すが、同石材の遺物としては、同調査区の上層（V層）から3cm角の剥片（第39図121）が1点出土したのみである。接合関係は見られなかった。



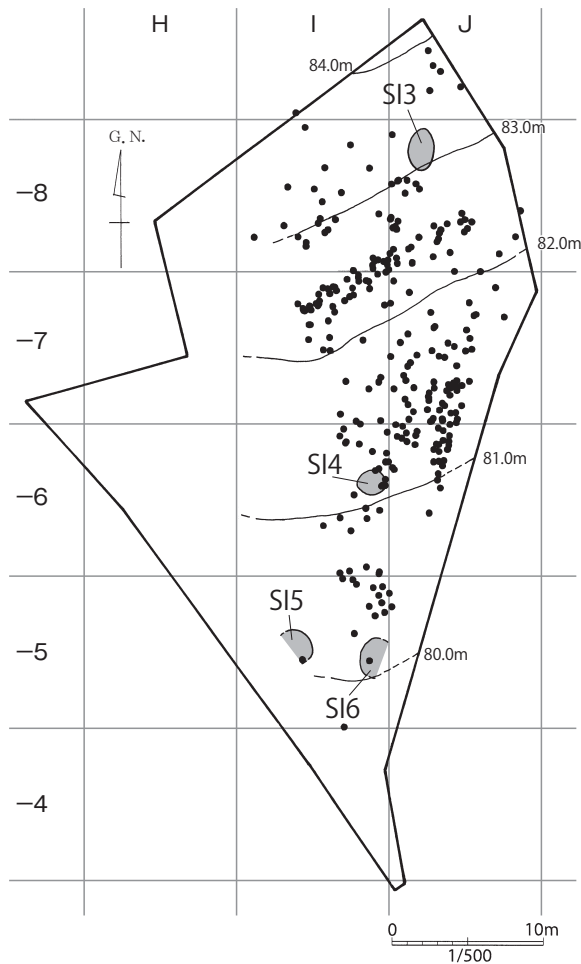
第26図 後期旧石器時代II期（B区）石材別遺物分布図



第27図 後期旧石器時代Ⅱ期（B区）石器実測図

### 6-1 Ⅲ期（A区）概要

Ⅲ期石器群はV層より出土した遺物である。調査範囲全面に対してV層の調査を行ったところ278点もの遺物が出土し、遺構も確認された。ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、石刃、スクレイパーなどに加え、石核や剥片も多く出土した。しかし、調査区南側ほど土層の堆積状況は不安定で下層のATブロックが拡散している状況が見られた。また、V層出土遺物とVI・VII層出土遺物が接合するなど、接合状況からも堆積状況の不安定さが確認される結果となった。また、同層より細石刃文化期の遺物も出土した。遺物の激しい上下移動が考えられたため、遺物の垂直分布および水平分布における検討は避けることとした。



第28図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）遺構・遺物分布図

第3表 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）礫群観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 (個)	重量 (kg)	備考
S13	V	J-8	2.04	1.04	10	2.0	赤化した破碎礫で構成される。
S14	V	I-6	1.70	0.83	4	0.5	赤化した破碎礫で構成される。
S15	V	I-5	2.07	1.53	24	10.5	赤化した礫と赤化していない礫が混じる。
S16	V	I-5	2.11	0.95	29	8.5	赤化した礫と赤化していない礫が混じる。

### 6-2 遺構（第29図）

V層より礫群を4基検出した。しかし、表土中に礫群構成礫と思われる赤化した礫が見られたことから、削平を受け原形を留めていない可能性が考えられるが、礫群の位置関係や規模の推測、また出土遺物との大まかな位置関係の把握等の検討は行えると考え、S13～S16として図化した。

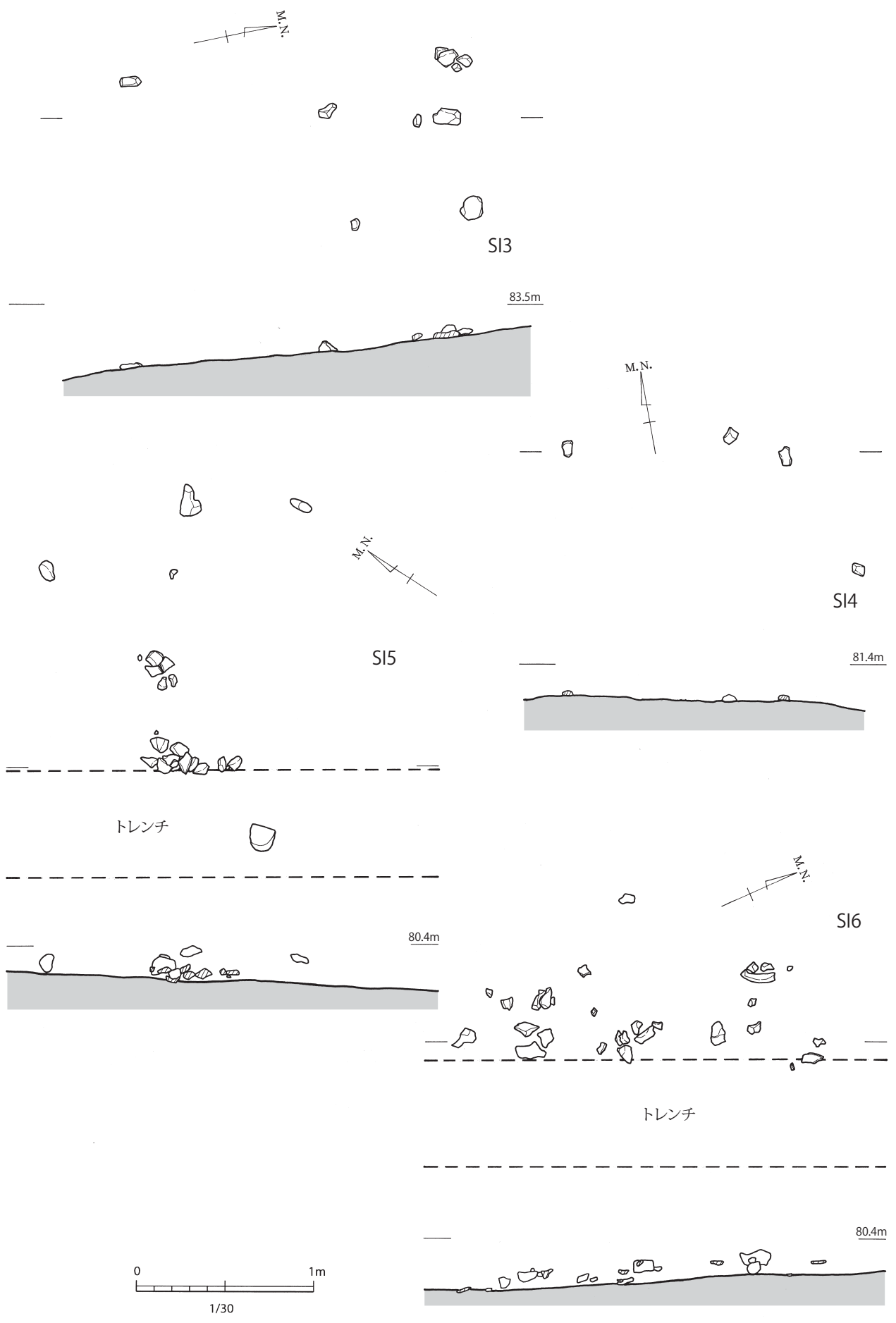
S13はJ-8Gr.に位置する。10個の破碎礫で構成され、すべての礫に赤化が認められた。S14はI-6Gr.に位置し、4個の赤化した破碎礫で構成される。S15・S16はI-5Gr.に位置する。どちらも構成礫は破碎礫で、赤化が認められる礫と認められない礫が混在する状況であった。礫群内やその周辺から炭化物等は検出されなかった。

### 6-3 遺物（第30～36図）

V層出土の石器群が最も数量が多く、器種も多様で、その形態もさまざまなものが見られた。

#### ナイフ形石器（第32図64～72）

64は左側を欠損するが、64・65ともに一側縁加工のナイフ形石器である。66はやや厚みのある二側縁加工ナイフ形石器である。67は黒曜石（Ob1）である。背面に剥片剥離面の残る薄手の剥片を素材とし、剥片端部を刃部に設定する。主要剥離面側から、二側縁に細かな調整剥離を施す。68は刃部右側縁に使用によるものと思われる衝撃剥離痕が見られる。70は緑色頁岩の縦長剥片を素材とする。基部右側に調整剥離と、左側縁に連続した微細剥離が見られる。遺跡内から同一石材の他の遺物は出土していない。71・72は頁岩であり、72が左側を大きく欠損するが、素材剥片剥離時の打瘤を残す点や、素材剥片に対する刃部の設定位置に共通性が認められる。また、素材剥片の厚さにより角度・深度に若干の違いは見られるが、刃部下縁に抉るような調整剥離を施す点でも共通する。



第29図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）礫群実測図

**角錐状石器（第32図73・74）**

73・74はともに黒色チャート製である。先端部から2cmの部分の幅が73は1.3cm、74は1.7cmと、73の方がやや細身である。そのためか、73がやや粗い調整剥離であるのに対し、74は細かく調整が施されている。また、74は厚みを除去するための稜上調整と思われる横方向からの剥離が背面に見られる。2点とも欠損が見られるが、ともに4.0～4.5cmほどに復元されるものと思われる。

**石刃（第32図75～78）**

75の背面には縦長剥片2点を剥離した剥離面が残る。76は左側縁上部に細かな剥離が見られる。77はホルンフェルス(Ho11)で、背面にこれと同等の長さをもつ縦長剥片剥離面2面を残す。78も大型の石刃で、背面に縦長剥片を含む剥片剥離面が見られる。75・78は色調や風化度合が近似している。最大長6.3～10.2cm、最大幅2.95～4.3cmを測るこれら大型の石刃が出土したが、これらを剥離したと思われる大型の石核は同層や上・下層においても見られないため、石刃

の状態に遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

**スクレイパー（第33図79～82）**

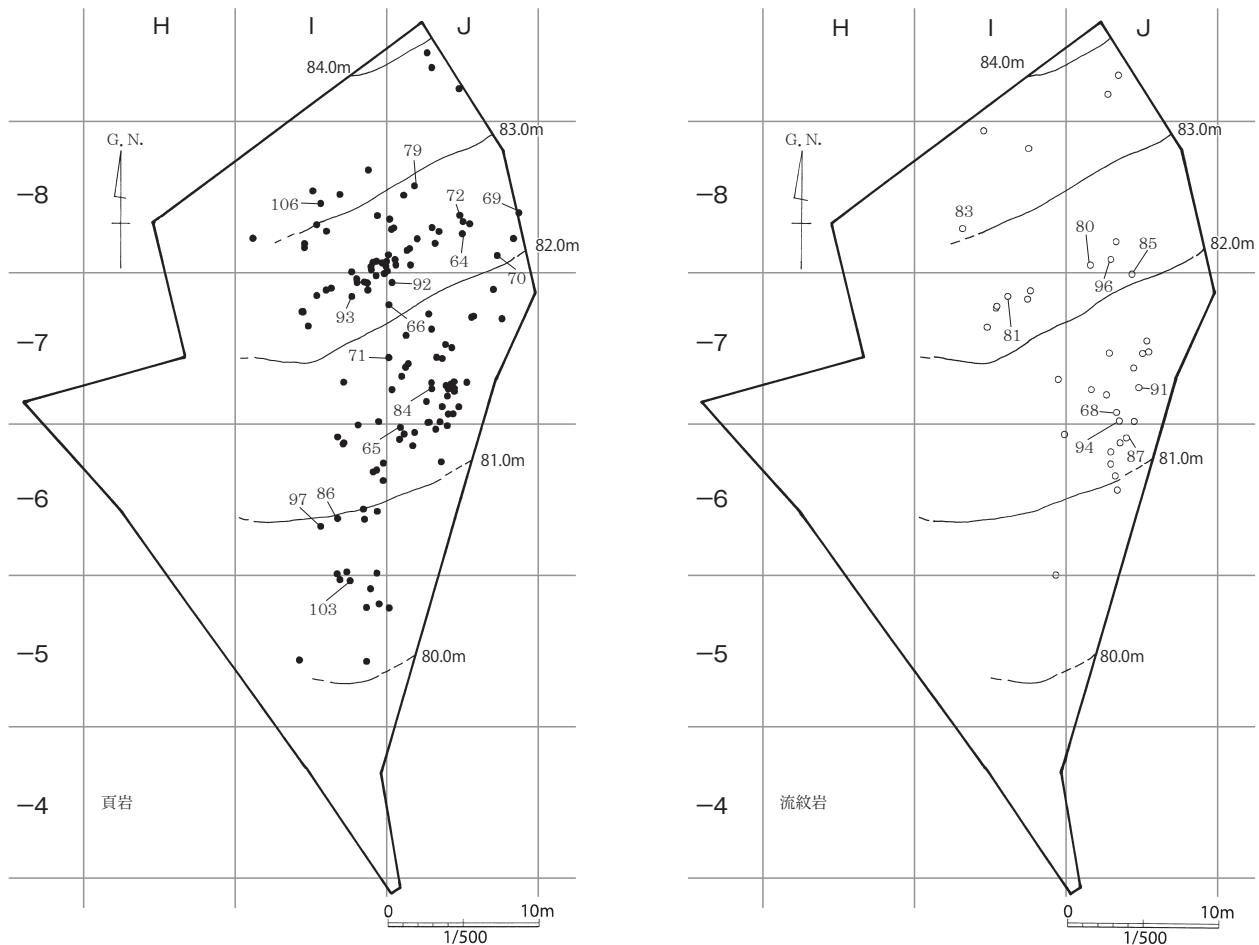
79は全周に粗い刃部加工を施す。80は白色流紋岩で、厚みのある剥片端部に細かな調整剥離で刃部を成形する。81は厚さ約1cmの剥片を素材とする。剥片端部にほぼ直角の急斜度加工を施し、厚みのない右側縁の両面に浅い二次加工を施す。82はチャート(Ch1)の大型剥片素材で、44の微細剥離ある剥片や表土中より回収された小型の石核(第51図165)の母岩であった可能性もあるが、前述した2点に比べるとやや質が劣る。

**尖頭器（第33図83）**

83は片面調整の尖頭器である。背面にはなめらかな自然面を残し、腹面には両側縁からの深い調整剥離が密に施される。

**二次加工剥片（第33図84～第34図88）**

84は断面三角形の縦長剥片素材で、主要剥離面には打瘤が残る。剥片端部は尖頭状を呈し、右側縁にのみ細かな二次加工が施される。緻密な頁岩製で、



第30図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石材別遺物分布図（1）

尖頭器としての利用も充分に考えられる資料である。**85**は縦長剥片の左側縁端部に明瞭な二次加工が見られる。**86**は不定形剥片素材で、直線状の端部に二次加工が施される。**87**は上下端部を欠くが、両側縁に深い急斜度加工がやや間隔を空けて施され、削器としての利用も考えられる。**88**は厚手の不定形剥片素材で、背面・主要剥離面両面に浅い二次加工を施す。

**微細剥離ある剥片 (第34図89～第35図95)**

**89～95**は微細剥離ある剥片である。**92～95**は厚みのとれた直線状の縁辺に微細剥離が見られる。

**剥片 (第35図96～102)**

**99・100・102**はいずれもホルンフェルスであるが、色調や風化度合から異なる石核から剥離されたと考えられる。石核調整剥片であるが、これらを剥離したと思われる大型石核の出土は見られなかった。石核調整作業の進行により石核が小型化した可能性や、石核を遺跡外に持ち運んだ可能性などが考えられる。**101**は横長剥片である。背面にもこれと同様の横長剥片を剥離した痕跡を残す。

**石核 (第35図103～第36図107)**

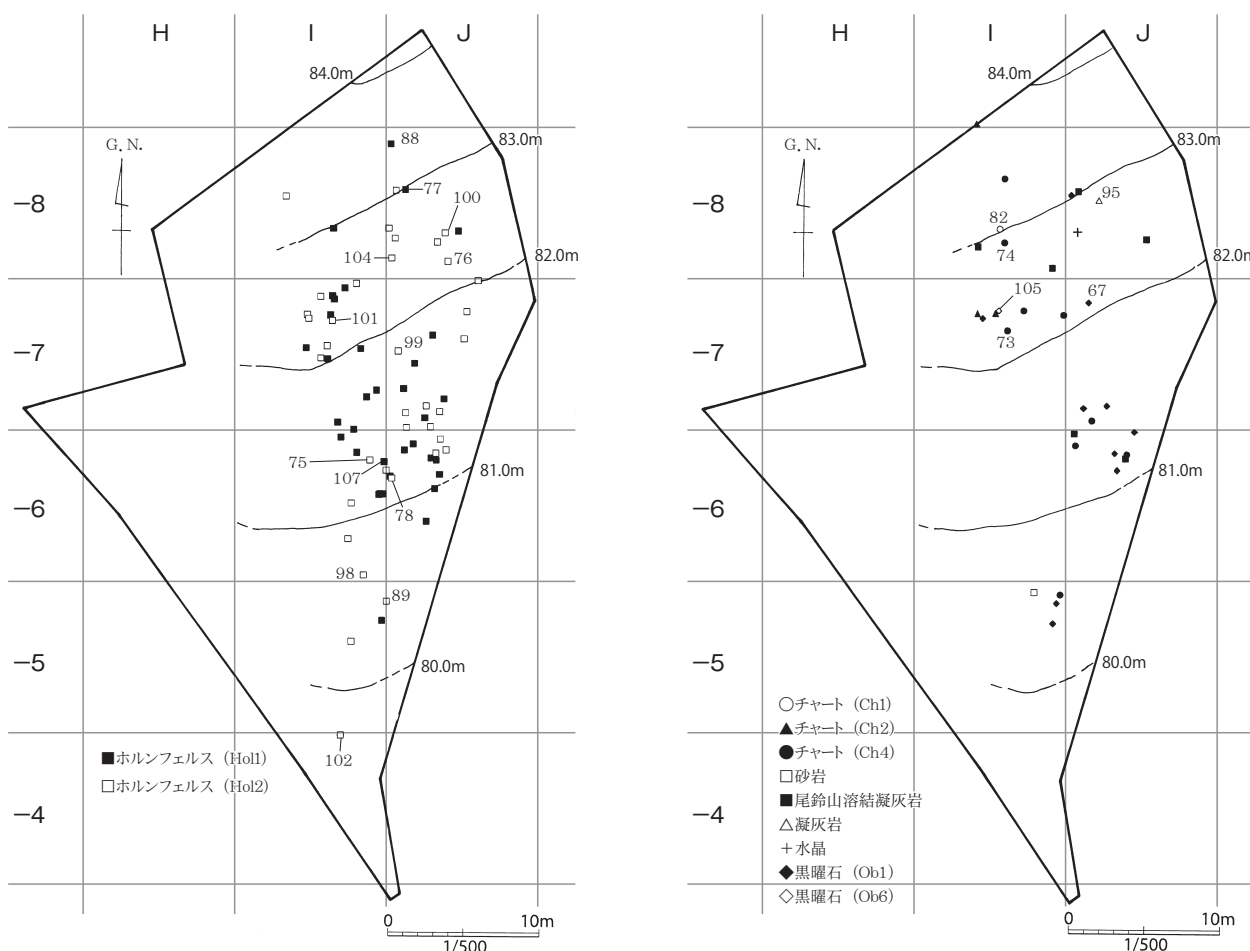
**103**は頁岩で、その色調から69のナイフ形石器の母岩である可能性も考えられる。**104**からは幅約4cmの幅広剥片が剥離され、**107**にも幅約2～3.5cmの剥片を剥離した痕跡が残る。

**接合資料 (第36図108・109)**

**108**はチャート (Ch2) で同方向より剥離が行われる。2点の剥片の間にも厚さ約3mmの剥片が入ると思われる。**109**はホルンフェルス (Hol1) であるが節理が多く、剥片剥離において大きさや厚みなどに制約を受けたと思われる。主要剥離面から打面転移を行い、打点を180°回転させ剥離を継続している。

**6-4 礫群と遺物出土状況 (第28図)**

遺物の二次移動を考慮しつつ礫群の位置と出土遺物の分布状況を見ると、SI4周辺では若干の遺物の出土が見られるものの、SI3および斜面下側に位置するSI5・SI6においては、礫群内および礫群周辺からは遺物がほとんど出土していない状況である。

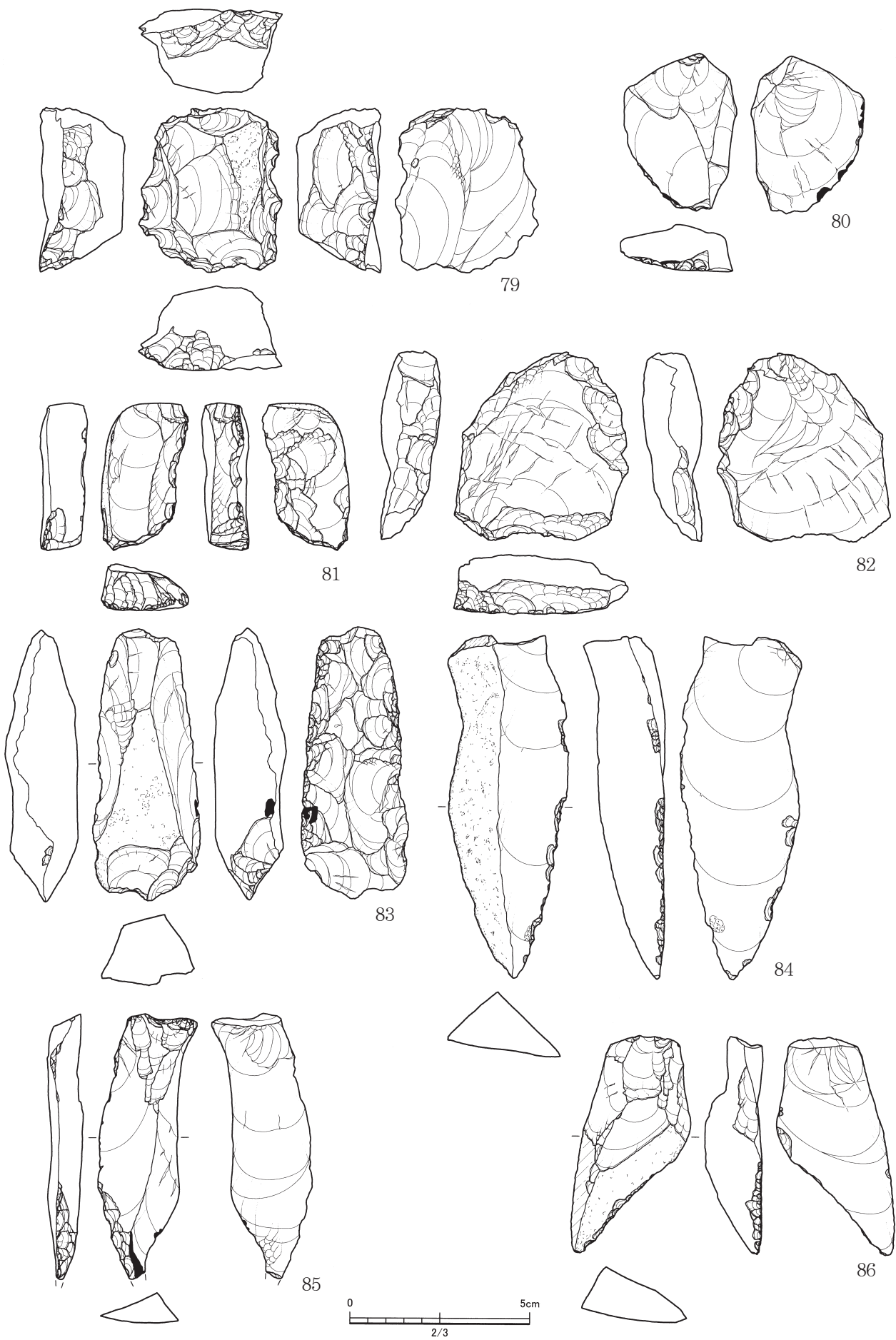


第31図 後期旧石器時代Ⅲ期 (A区) 石材別遺物分布図 (2)

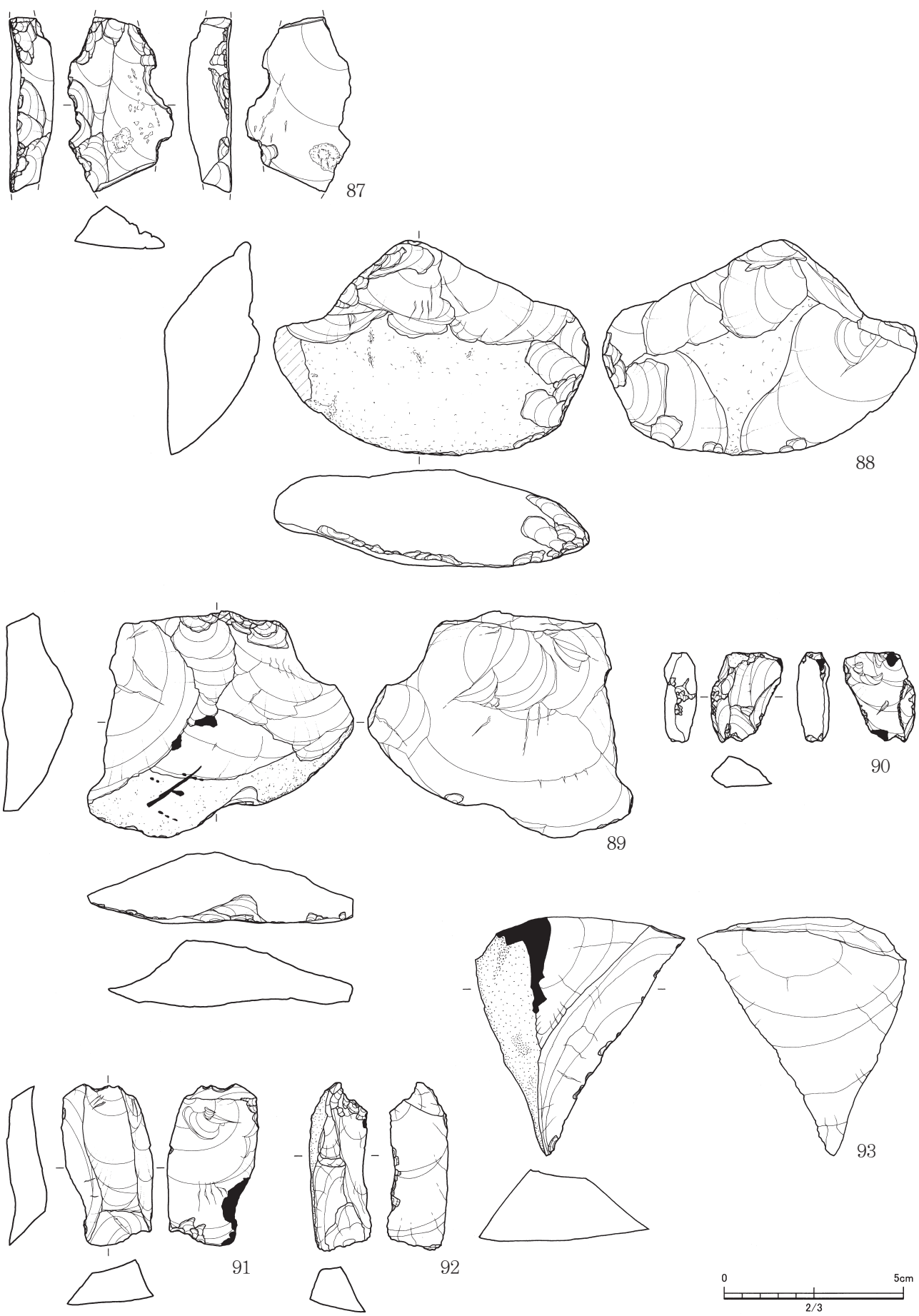


第32図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（1）

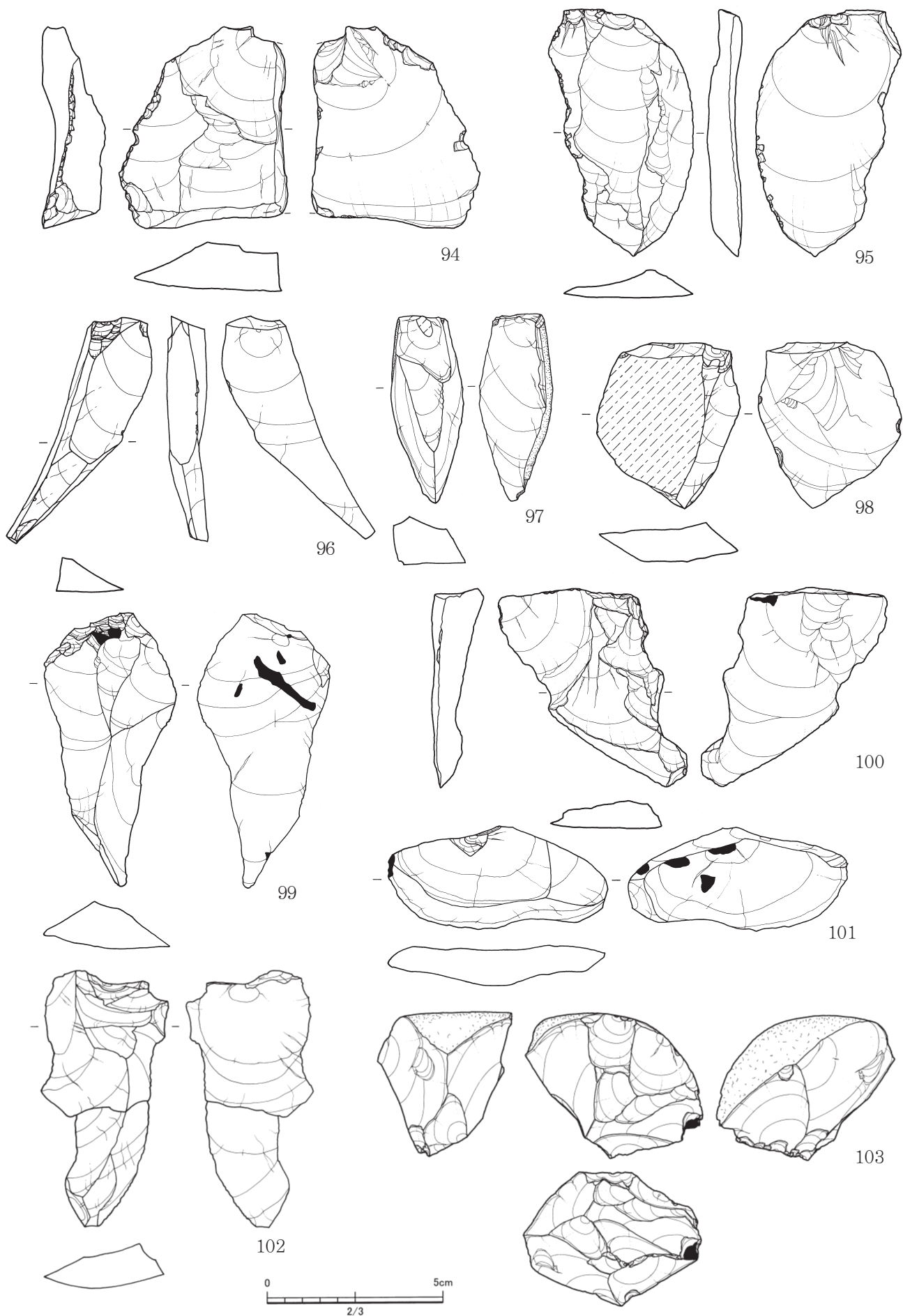




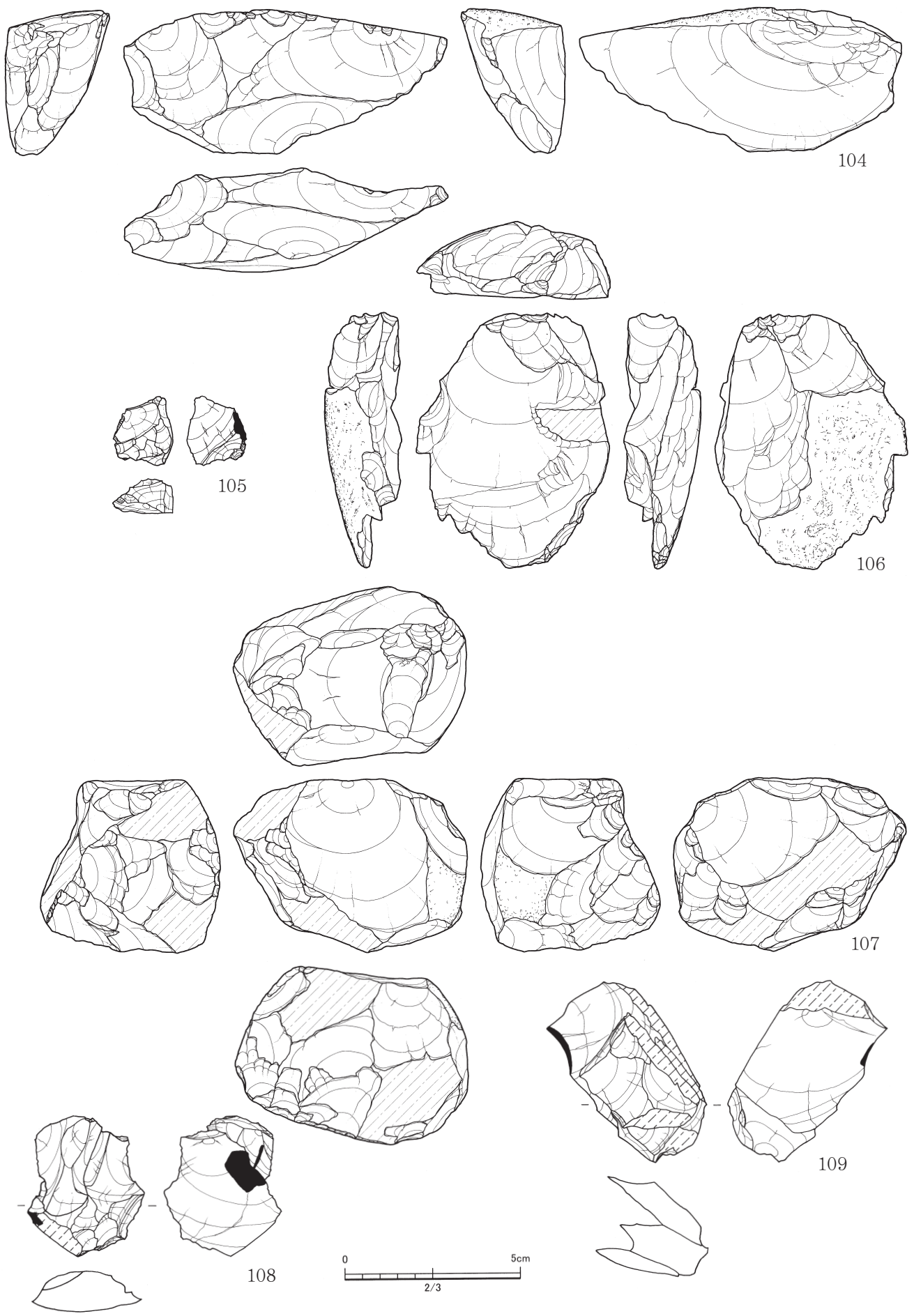
第33図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（2）



第34図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（3）



第35図 後期旧石器時代Ⅲ期 (A区) 石器実測図 (4)



第36図 後期旧石器時代Ⅲ期（A区）石器実測図（5）

### 7-1 Ⅲ期（B区）概要

Ⅲ期石器群はV層より出土した石器群である。遺構は確認されなかったが、ナイフ形石器、剥片尖頭器、スクレイパーなどの遺物が出土した。また、石核や細石刃核が多く出土する傾向が見られた。

### 7-2 遺物（第38～41図）

#### ナイフ形石器（第38図110～113）

110は縦長剥片端部を刃部とし、左側縁と右側縁約3/4に調整剥離を施す。111は基部側を欠損するが、左側縁に背面・主要剥離面両面からの調整剥離が施される。112は堆積構造が明瞭で節理も顕著な頁岩を素材とする。幅広剥片の端部を刃部とし、刃部下縁に粗い調整剥離で深い抉りを施す。113は第

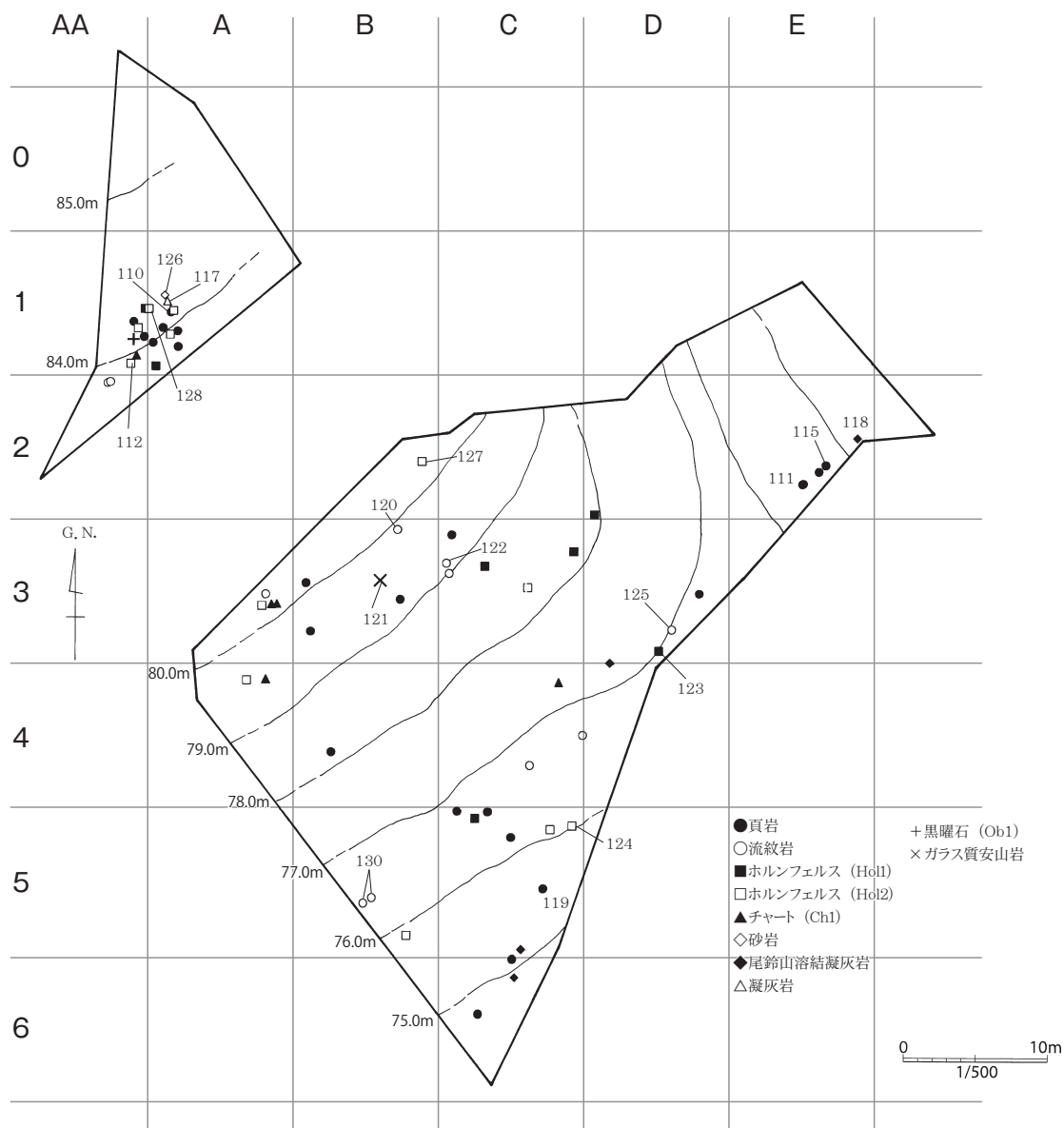
1次調査時に出土した。主要剥離面に素材剥片剥離時の打瘤が残る。

#### 剥片尖頭器（第38図114）

114は白色の流紋岩製で第1次調査時に出土した。基部調整は主要剥離面側よりやや粗く施され、二辺の刃部には微細剥離が見られる。本遺跡内において剥片尖頭器の出土はこの1点のみである。

#### スクレイパー（第38図115・116）

115は厚みのある剥片を素材とする。全周の約3/4に粗い急斜度加工が施され、上部の直線状の縁辺にも微細剥離が見られる。116は搔器である。やや寸詰まりな幅広剥片の端部に浅い調整剥離を施す。



第37図 後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石材別遺物分布図

**二次加工剥片 (第39図117・118)**

117は凝灰岩でやや風化している。寸詰まりの不定形な大型剥片を素材とする。打面脇の両縁辺の主要剥離面側に二次加工を施す。また、直線状の剥片端部の中央に微細剥離も見られる。

**微細剥離ある剥片 (第39図119)**

119は被熱によるハジケ部分を多く残す不定形剥片である。重量も軽い。厚みのない縁辺2箇所を微細剥離が見られる。

**剥片 (第39図120・121)**

120は石核調整剥片である。大小の剥片剥離面を背面に残す。121は姫島産ガラス質安山岩の剥片である。前述したⅡ期 (VI層) において同石材の石核が出土している (第27図63)。

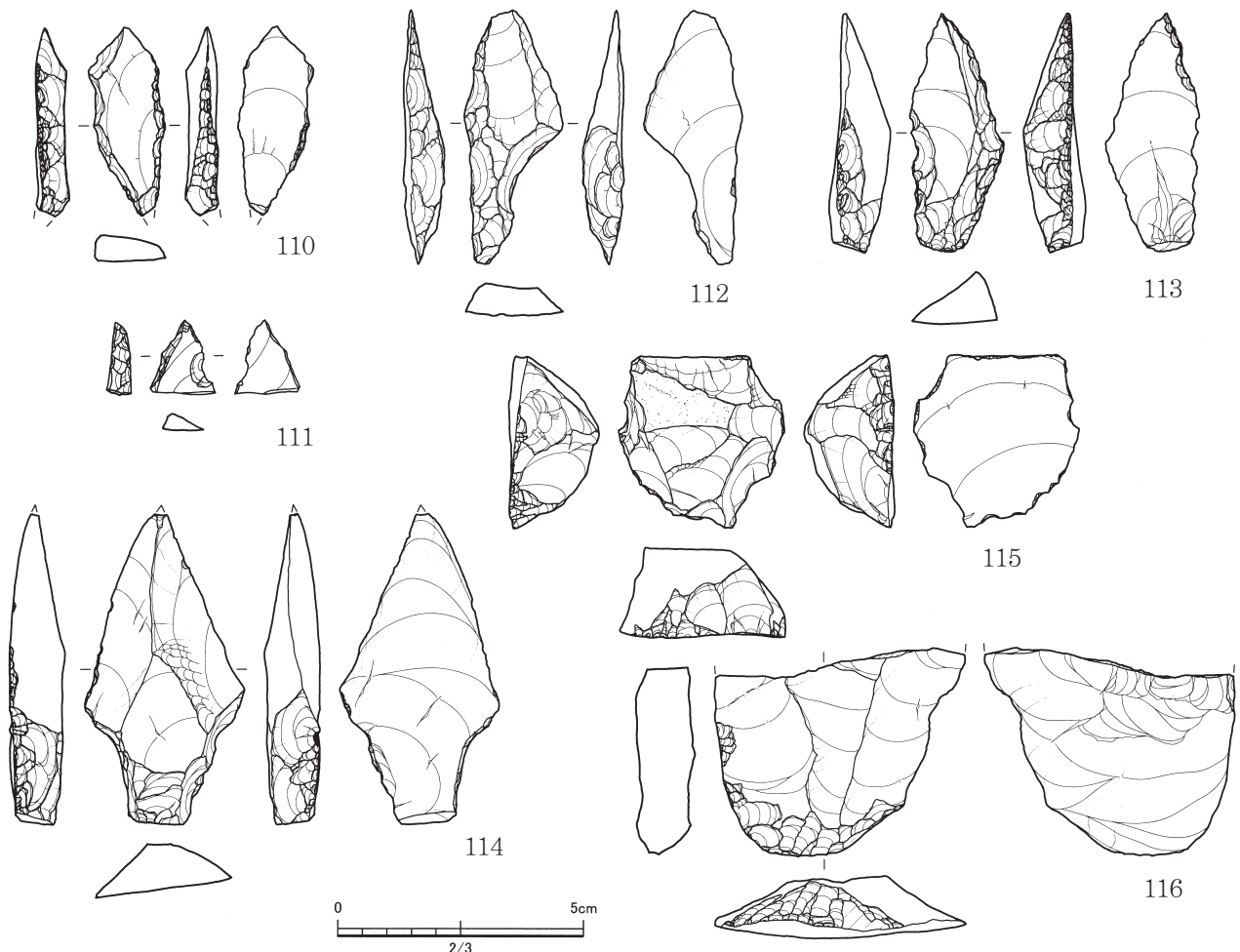
**石核 (第39図122～第40図128)**

122は白色流紋岩である。色調や風化度合は120と近似するが、接合関係は見られなかった。124は円礫素材である。最終剥離面のつくる直線状の縁辺からは、礫器としての使用も考えられる。125は黒

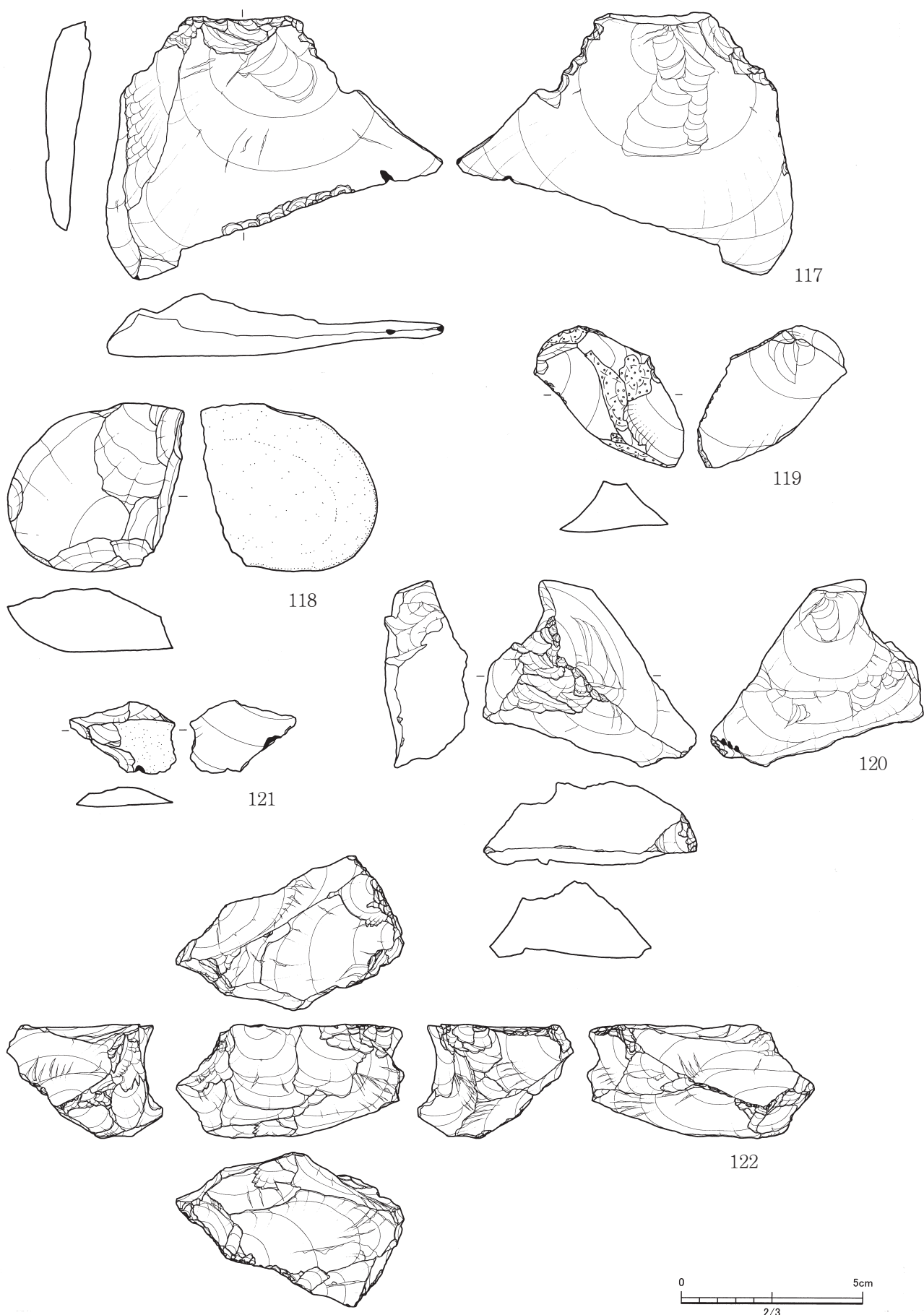
色流紋岩の大型石核である。母岩より剥離した際の打瘤が残る主要剥離面を打面として、幅2～4cmの不定形剥片を剥離する。やや質が粗く、寸詰まりな剥片も剥離されている。126は砂岩の円礫素材である。片面には自然面を残すが多方向から剥離を行っている。礫器の可能性も考えられる。127はホルンフェルス (Ho11) で重量がある。平坦な剥離面を打面とし、幅3cmほどの幅広剥片を目的剥片としていたと思われる。128はホルンフェルス (Ho12) で、石材の質がやや粗く、正面に幅約5cmの幅広剥片剥離面が見られるが、その他はさほど大型の剥片剥離の痕跡は見られない。

**接合資料 (第41図129・130)**

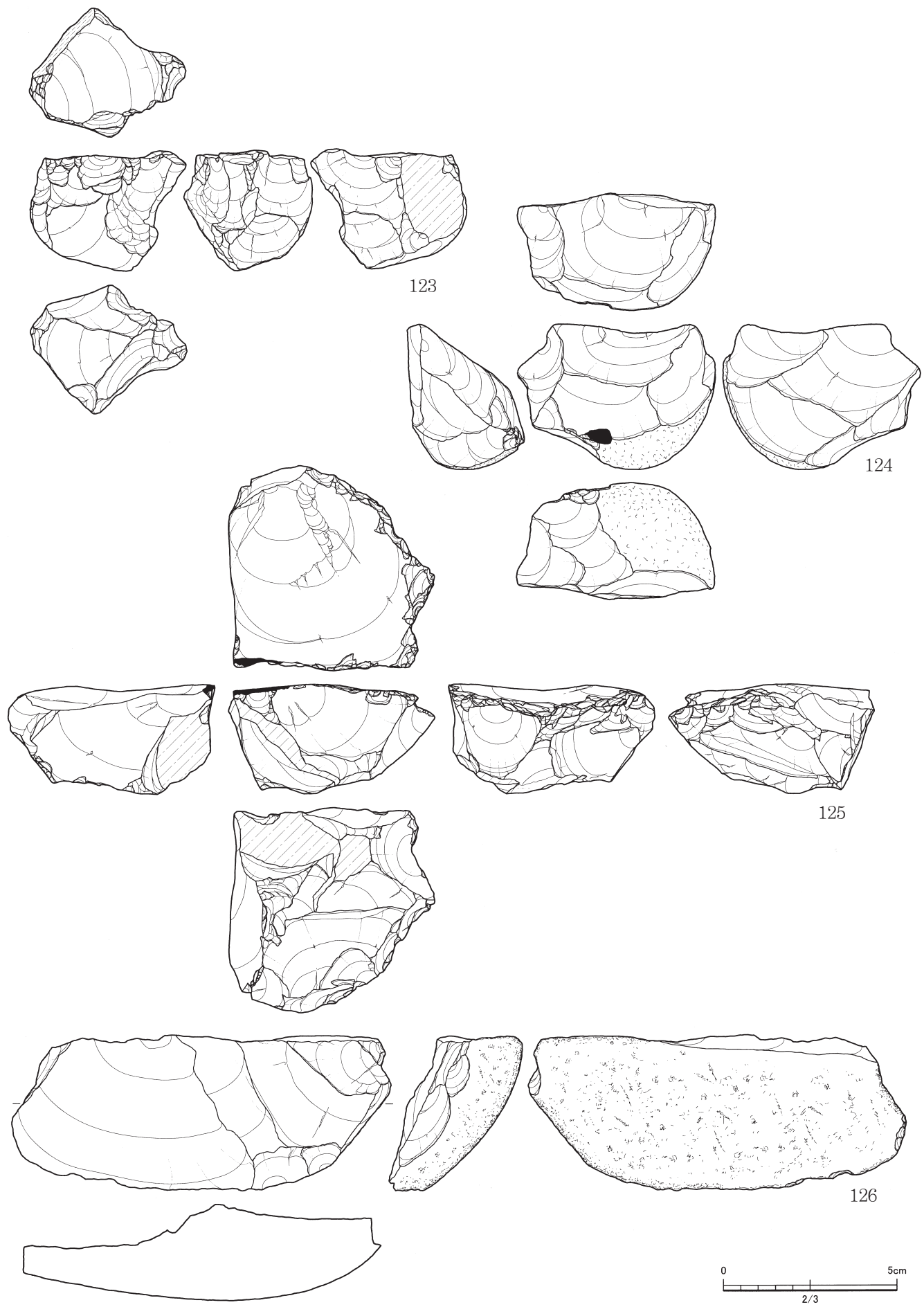
129はAA2Gr. とA4Gr. より出土した3点の折れ接合である。白色流紋岩でなめらかな自然面を残す石核で、背面には右方向からの厚みのある剥片剥離面が残り、厚みの取れた縁辺部には微細剥離も見られる。130は黒色流紋岩の剥片2点の接合である。



第38図 後期旧石器時代Ⅲ期 (B区) 石器実測図 (1)



第39図 後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（2）



第40図 後期旧石器時代Ⅲ期（B区）石器実測図（3）





第41図 後期旧石器時代III期 (B区) 石器実測図 (4)

### 8-1 Ⅲ期（C区）概要

V層より出土した遺物がこれにあたる。C区ではⅢ期にあたる礫群が3基検出されたが、遺物の出土量はきわめて少なかった。

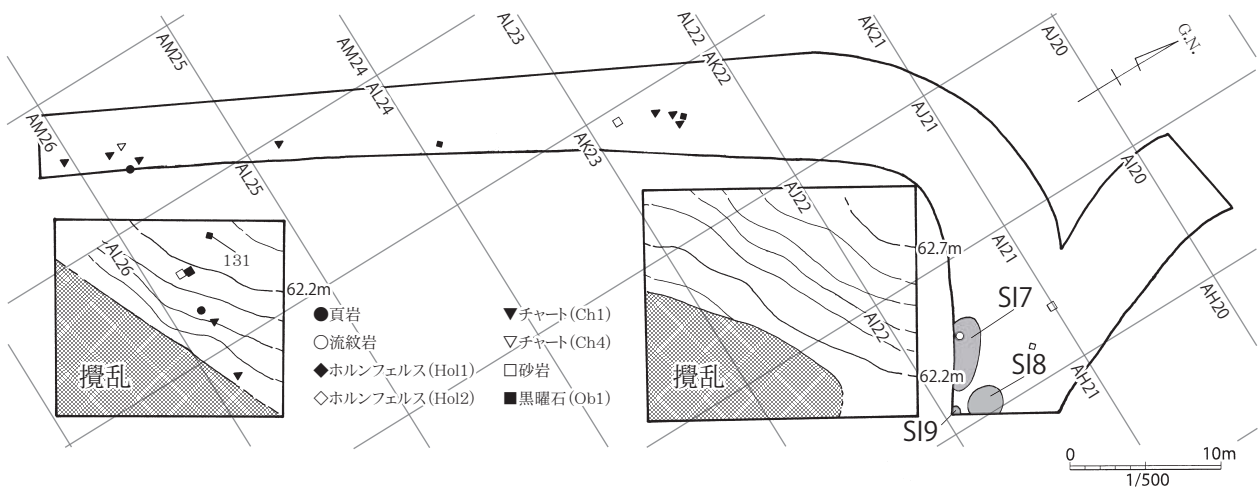
### 8-2 遺構（第42～44図）

AH21・AI21Gr.で3基の礫群が検出された。

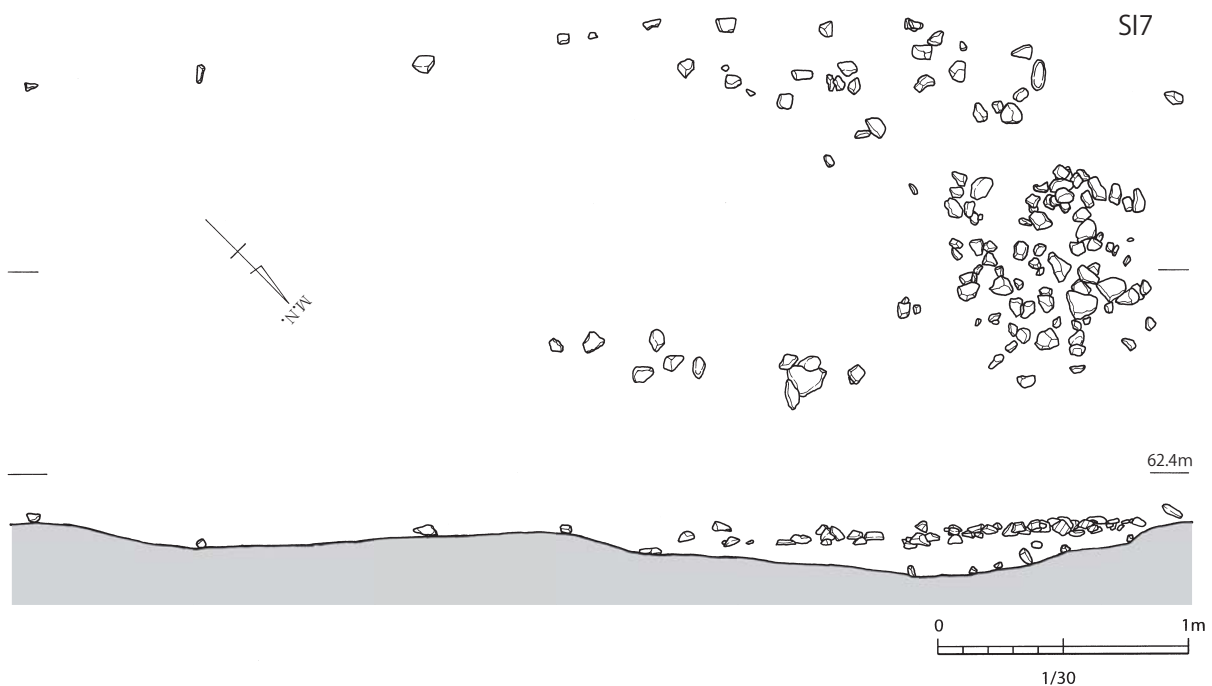
SI7はAI21Gr.に位置する。構成礫のほとんどが破碎礫で、礫1個1個が小さく、総数135個の礫から成るが総重量は15.0kgほどである。ややまとまった礫の周辺にまばらに礫が広がり、その範囲は調

査区外に広がるものと思われる。SI8はAH21Gr.からAI21Gr.にかけて広がる。破碎礫が一定の範囲にやや密にまとまった状態である。礫総数は149個とSI7とほぼ変わらないが、礫1個1個がSI7と比較するとやや大きく、総重量が26.8kgとなる。SI8もSI7同様、調査区外に広がる可能性がある。

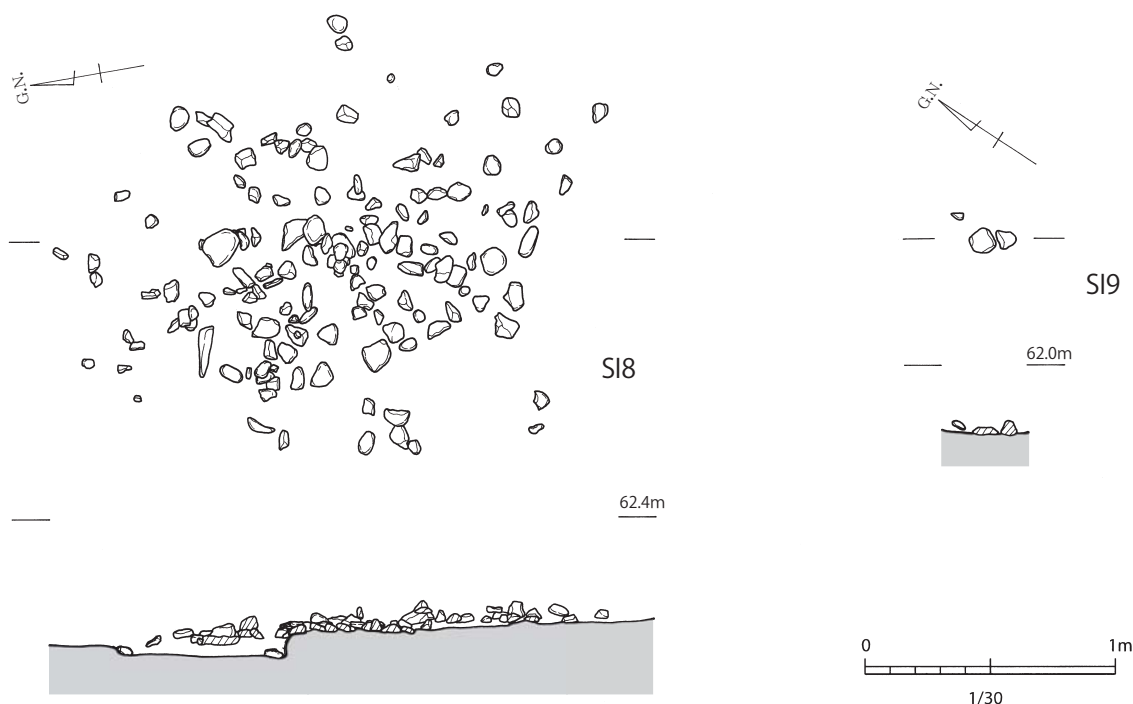
SI9は遺構全体のごく一部しか検出できていないと思われるが、前述したSI7・SI8同様、ほのかに赤化した破碎礫で構成される。SI7・SI8ともに赤化が見られる礫は全体の半分ほどで、それほど強く赤化している様子は見られない。SI9はSI7・SI8と比較



第42図 後期旧石器時代Ⅲ期（C区）遺構・遺物分布図



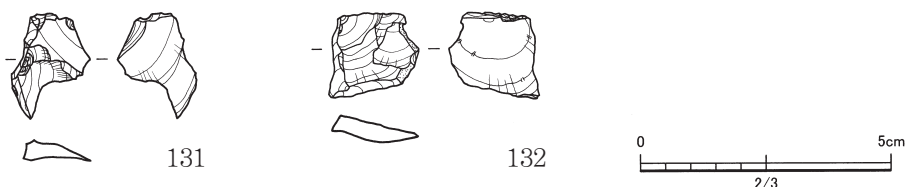
第43図 後期旧石器時代Ⅲ期（C区）礫群実測図（1）



第44図 後期旧石器時代Ⅲ期（C区）礫群実測図（2）

第4表 後期旧石器時代Ⅲ期（C区）礫群観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 (個)	重量 (kg)	備考
SI7	V	AI21	4.56	1.56	135	15.0	調査区外に広がる可能性あり。
SI8	V	AI21	2.22	1.76	149	26.8	調査区外に広がる可能性あり。
SI9	V	AI21	0.26	0.16	3	0.5	調査区外に広がる可能性あり。



第45図 後期旧石器時代Ⅲ期（C区）石器実測図

すると検出レベルはやや低いが、旧地形が南に向かって緩く傾斜しているため、機能面から見るとSI7・SI8と同時期のものと思われる。

### 8-3 遺物（第45図）

C区全体を通して、V層出土の遺物はきわめて少ない。礫群が検出されているため、ある一定の時期の機能面であると考えられるが、剥片や碎片が30点に満たない程度出土したに留まる状況であった。131・132は黒曜石 (Obs) の剥片である。2点とも背面に剥片剥離面を残している。

### 9-1 IV期（A区）概要

このIV期には、表土中から回収され、あるいはV～VI層より出土した細石刃、細石刃核が該当する。

### 9-2 遺物（第47図）

V層より細石刃8点と細石刃核1点、VI層より細石刃1点が出土し、表土中からも細石刃3点、細石刃核1点が回収された。土層堆積状況や遺物の接合関係から、遺物は激しく上下移動していると考えられるため、平面分布による詳細な検討は避けることとするが、原位置に近い位置を留めているものの中には含まれる可能性も考慮し、遺物包含層より出土

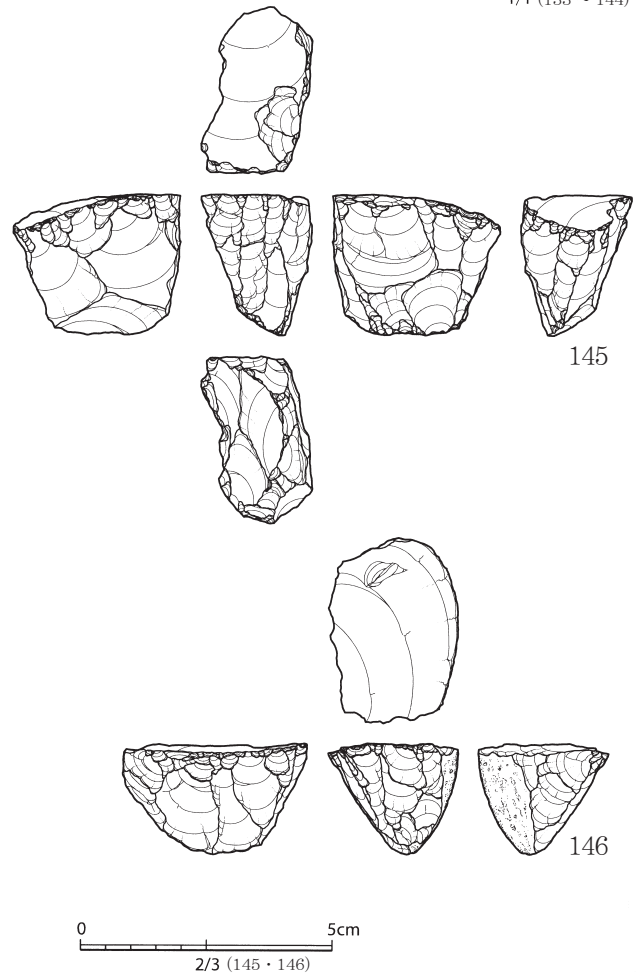
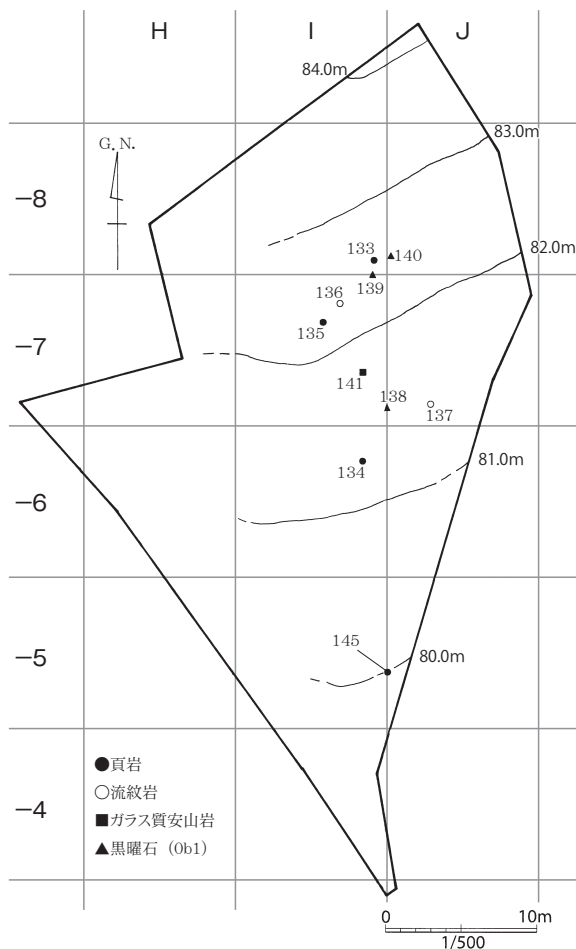
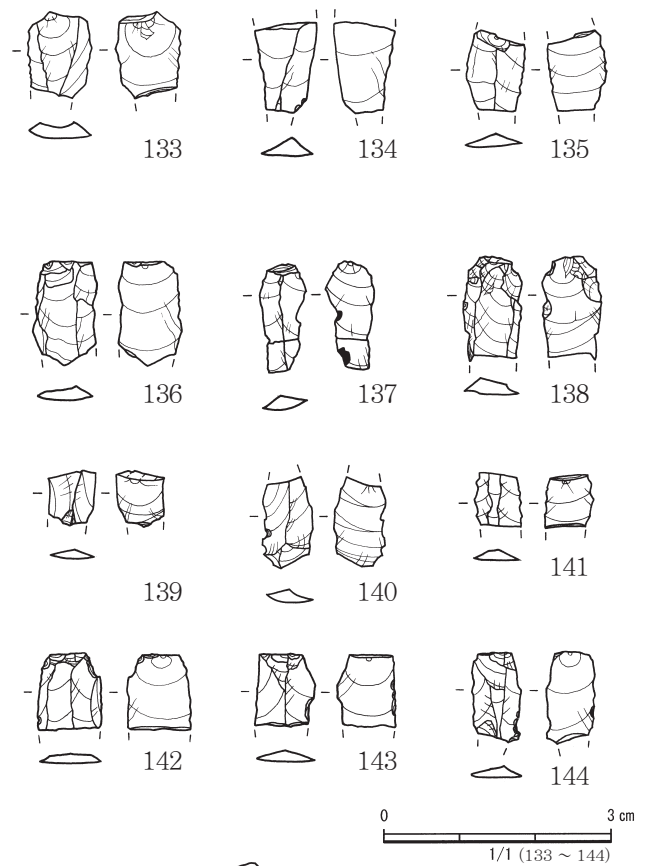
した遺物については分布状況を示した（第46図）。

**細石刃（第47図133～144）**

133～140はV層出土、141はVI層出土、142～144は表土から回収されたものである。133～135は頁岩、136・137は流紋岩、138～140は黒曜石(Ob1)、141はガラス質安山岩である。表土中より回収された細石刃も、遺物包含層より出土したものと同石材で、142・143が頁岩、144が流紋岩である。

**細石刃核（第47図145・146）**

145はV層出土、146は表土から回収された。145は頁岩で、前述した細石刃133～135・142・143の石核の可能性も考えられる。また、135・143は133・134・142と比較すると若干色調が異なり、まだ見ぬ細石刃核の存在も考えられる。その他、細石刃で見られた流紋岩や黒曜石、ガラス質安山岩の細石刃核も本調査では出土しておらず、調査範囲外に眠っている可能性がある。146はチャート(Ch4)であるが、作業面の右側面に自然面を大きく残したままである。



第46図 後期旧石器時代IV期（A区）石材別遺物分布図

第47図 後期旧石器時代IV期（A区）石器実測図

### 10-1 IV期（B区）概要

V層より細石刃、細石刃核が出土した。また、一段高い北東の調査区の表土中より、細石刃核と作業面再生剥片が回収された。

### 10-2 遺物（第49・50図）

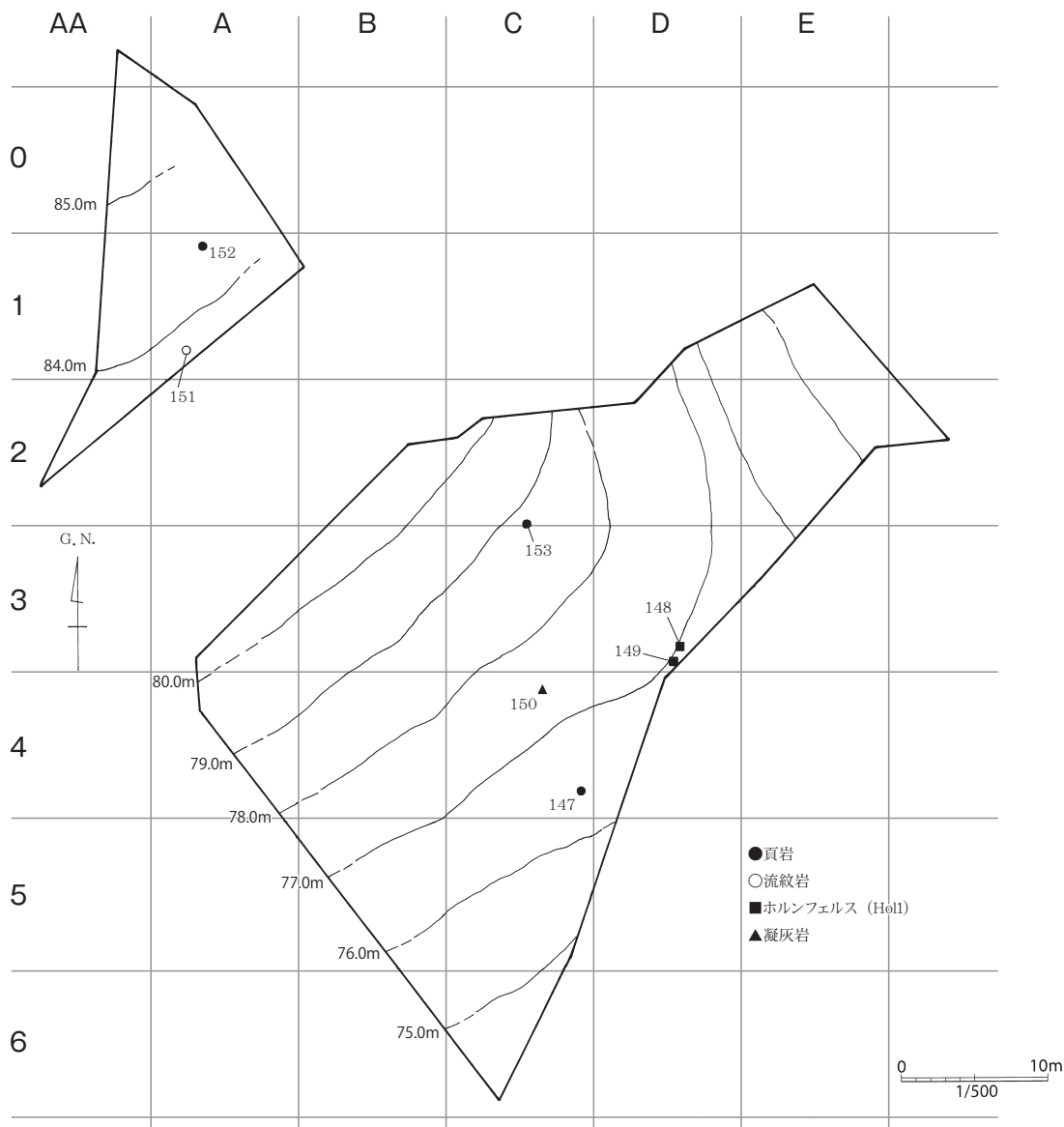
V層より細石刃1点、細石刃核6点が出土した。また、一段高い北東の調査区の表土中から、細石刃核3点と作業面再生剥片1点が回収された。旧地形は南東・北東方向に下る急斜面で、土層の堆積状況や遺物の接合状況から、遺物の激しい二次移動が考えられる。水平分布・垂直分布からの詳細な検討は避けるが、原位置に近い出土位置を留めている遺物も含まれる可能性を考慮し、V層中より出土した細石刃、細石刃核の出土位置を示した（第48図）。

### 細石刃（第49図147）

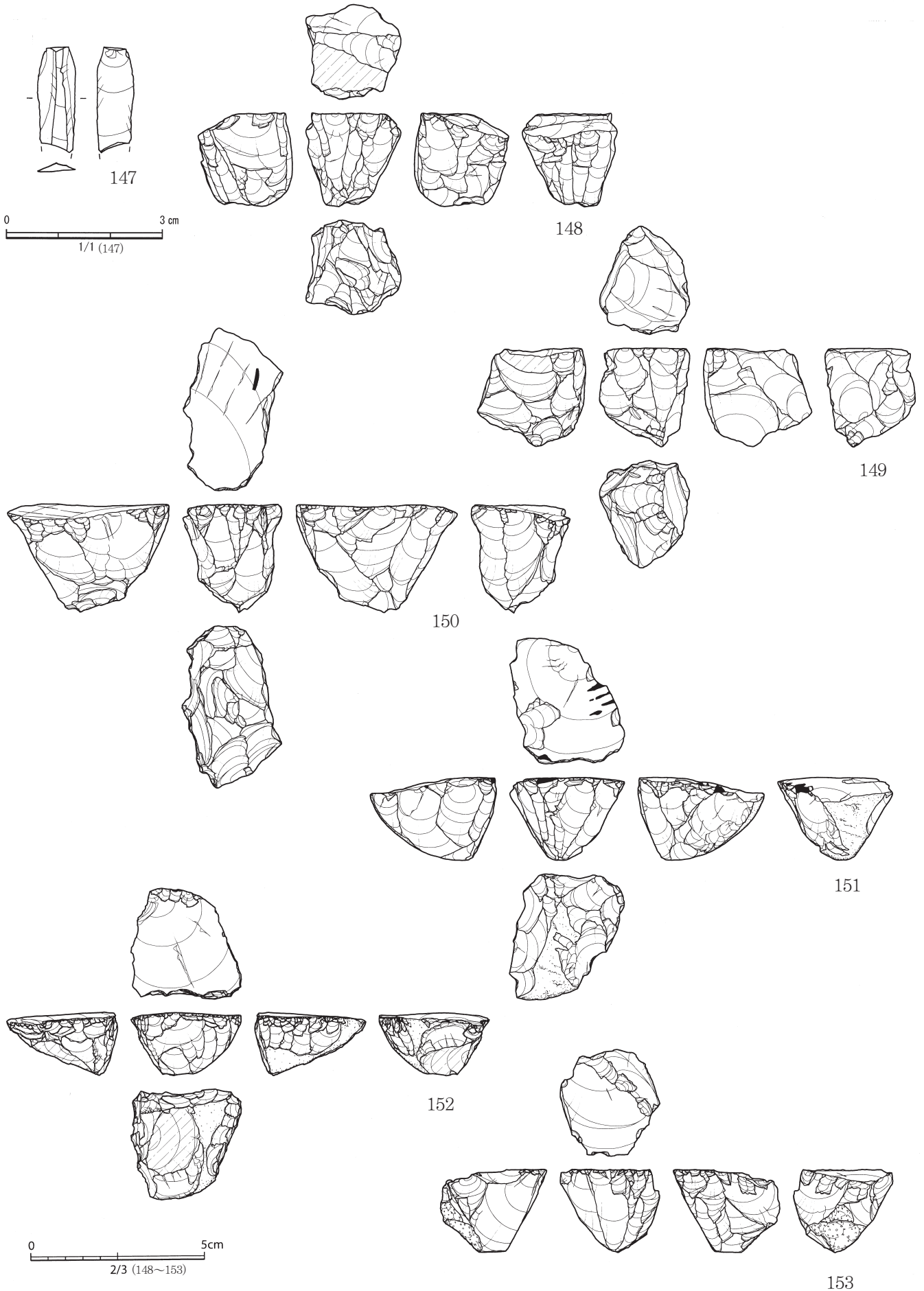
147は頁岩の細石刃である。

### 細石刃核（第49図148～第50図156）

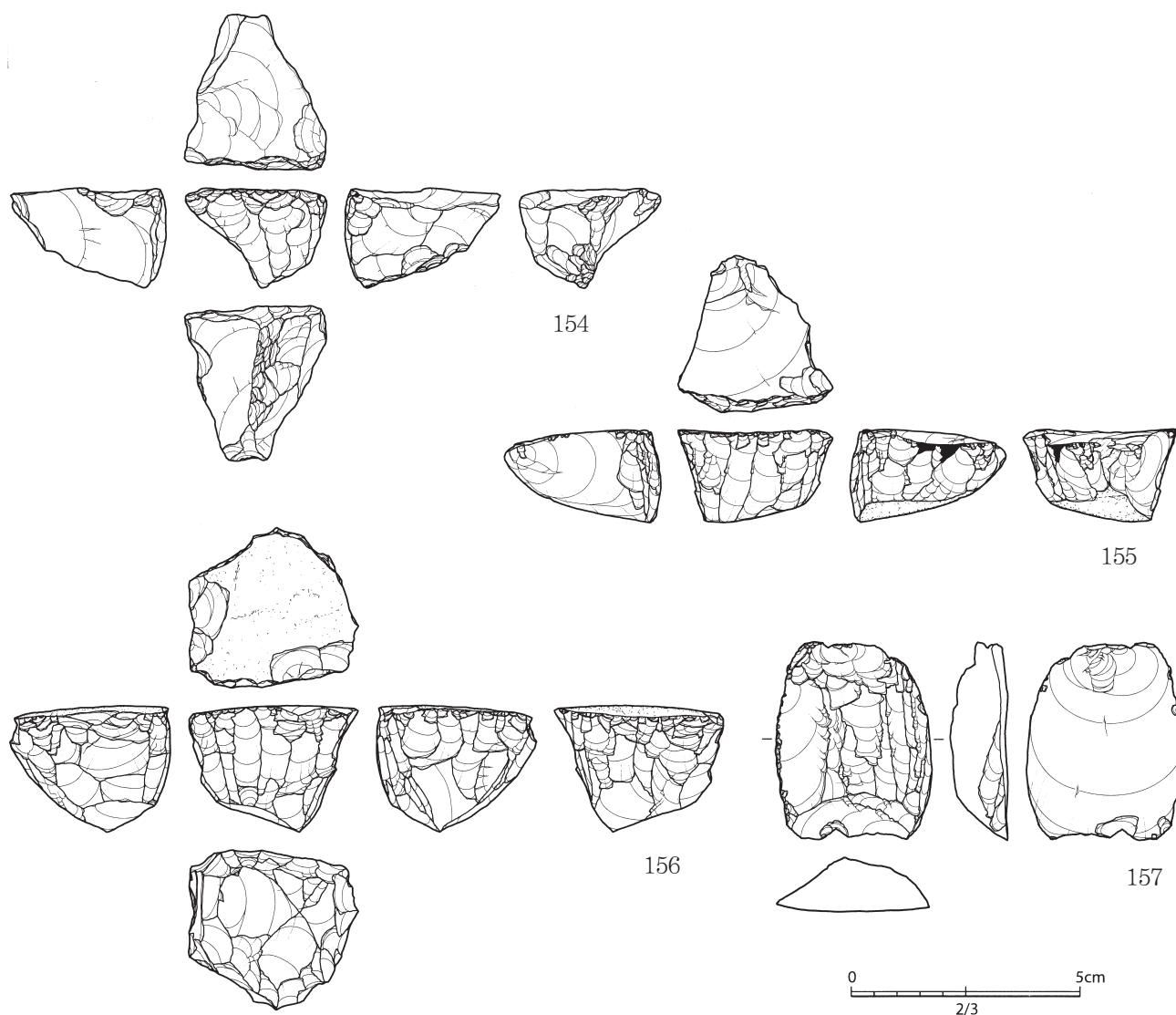
148・149はホルンフェルス（Holl）の細石刃核である。母岩の質が粗いため、繰り返し作業面を転移しながら細石刃剥離を行った痕跡を残す。150は凝灰岩の細石刃核である。素材剥片の平坦な剥離面の打面側を作業面に設定する。作業面以外にも全周にわたって調整剥離が施され、下縁調整も施される。151は白色流紋岩を素材とするが、風化も激しく、全面にAT粒子がこびりついている。打面には素材剥片剥離時の打瘤を残し、剥片端部を作業面とする。調整剥離は全周には及ばず、作業面の対面は自然面を残している。152は151に類似する。153は頁岩であるが、厳密には石核調整の粗い剥離に留まっ



第48図 後期旧石器時代IV期（B区）石材別遺物分布図



第49図 後期旧石器時代Ⅳ期（B区）石器実測図（1）



第50図 後期旧石器時代Ⅳ期（B区）石器実測図（2）

ているため、細石刃剥離前の石核である。不整形な素材剥片に対し、細石刃剥離のため調整剥離を施す。154～156は北東の調査区の表土中より回収された細石刃核である。154はホルンフェルス（Ho11）を素材とする。素材剥片の側縁部を作業面とし、作業面以外の側面にはほとんど石核調整剥離は施されないが、細かな下縁調整が作業面の右側面に観察される。155は白色流紋岩である。同石材を用いている151と比較すると、色調や自然面の様子は近似するものの、風化度が異なる。作業面の様子から、ここから幅約5mm、長さ約20mmの細石刃が少なくとも4枚以上剥離されたと思われる。156は頁岩である。作業面に接する側縁は直線状であり、作業面以外にも全周にわたり調整剥離が施される。作業面の左側面には、打面調整と思われる剥離面も見られる。作

業面から、幅約5～6mm、長さ約20～22mmの細石刃が剥離されたことがわかる。他の細石刃核と比較すると、大きさの割に重量がある。

#### 作業面再生剥片（第50図157）

157は頁岩の作業面再生剥片で、厚みのとれた左側縁には微細剥離も見られる。剥片の右側に見られる細石刃剥離作業面からは、幅約4～5mmで約30mmに近い長さをもつ細石刃が剥離されたことがわかる。石材は156と非常に似ており、同一母岩の可能性が考えられる。接合関係は見られないが、それは①157が剥離される前の細石刃核（157より大きい）が機能→②作業面を再生するために157を剥離→③新たな作業面をつくり出す過程で調整剥離が繰り返され小型化したという可能性も考えられる。

11-1 I層（表土）中の遺物の概要

A・B区の表土中から多くの遺物が回収された。特にA区は良好な遺物包含層が耕作等により攪乱され、第1次調査時からナイフ形石器、スクレイパー、石核や剥片など数十点もの遺物が確認されていた。また、礫群構成礫と考えられる赤化した礫もI層（表土）中に散見される状況であった。ここでは、A・B区のI層（表土）中より回収された遺物のうち、特徴的な14点の遺物について図化を行った。

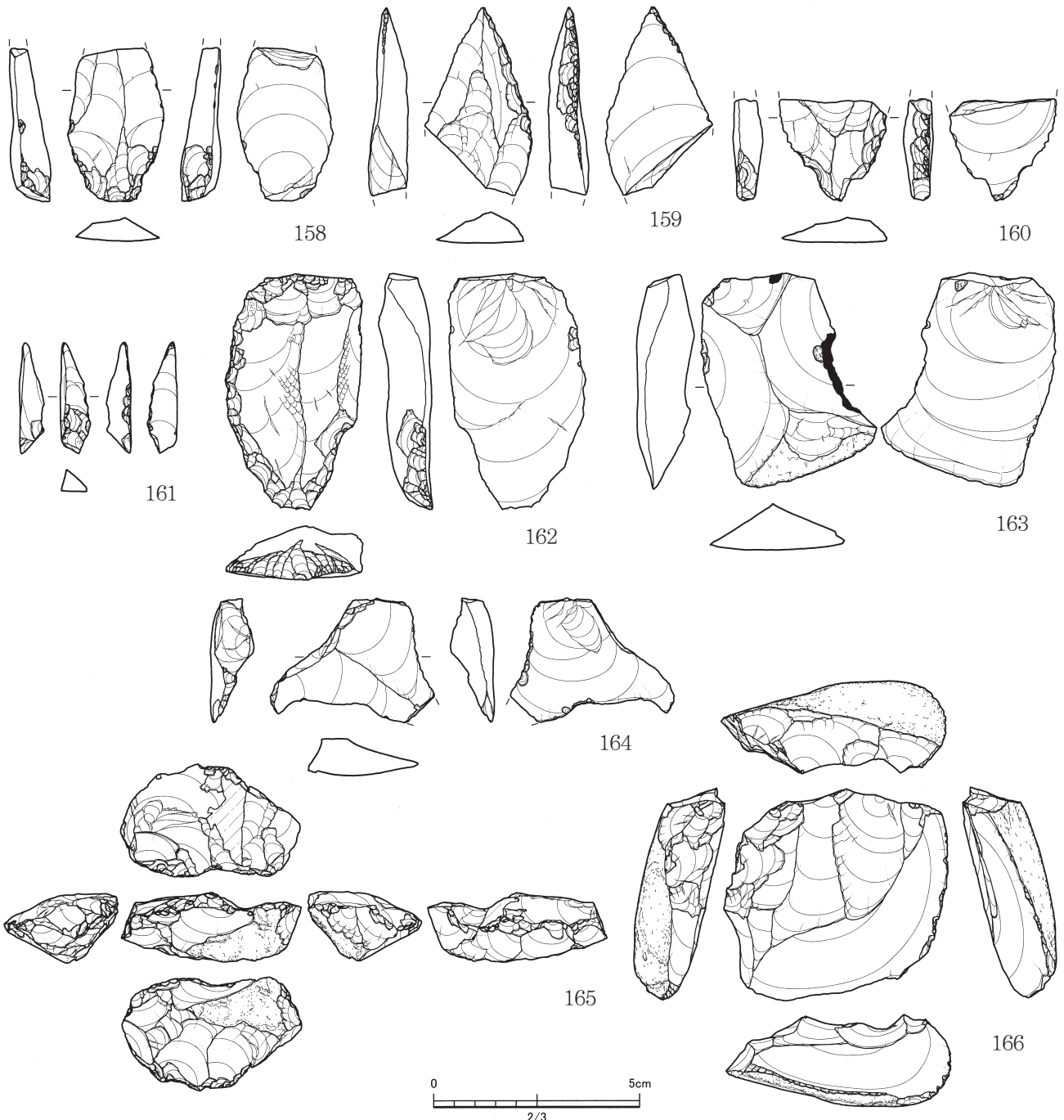
11-2 遺物（第51・52図）

ナイフ形石器（第51図158～161）

158・159は縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。素材剥片端部を刃部に設定し、現状では158は基部加工、159は先端部に調整剥離を施している。161は後期旧石器時代Ⅱ期（A区）のものに類似する小型のナイフ形石器である。

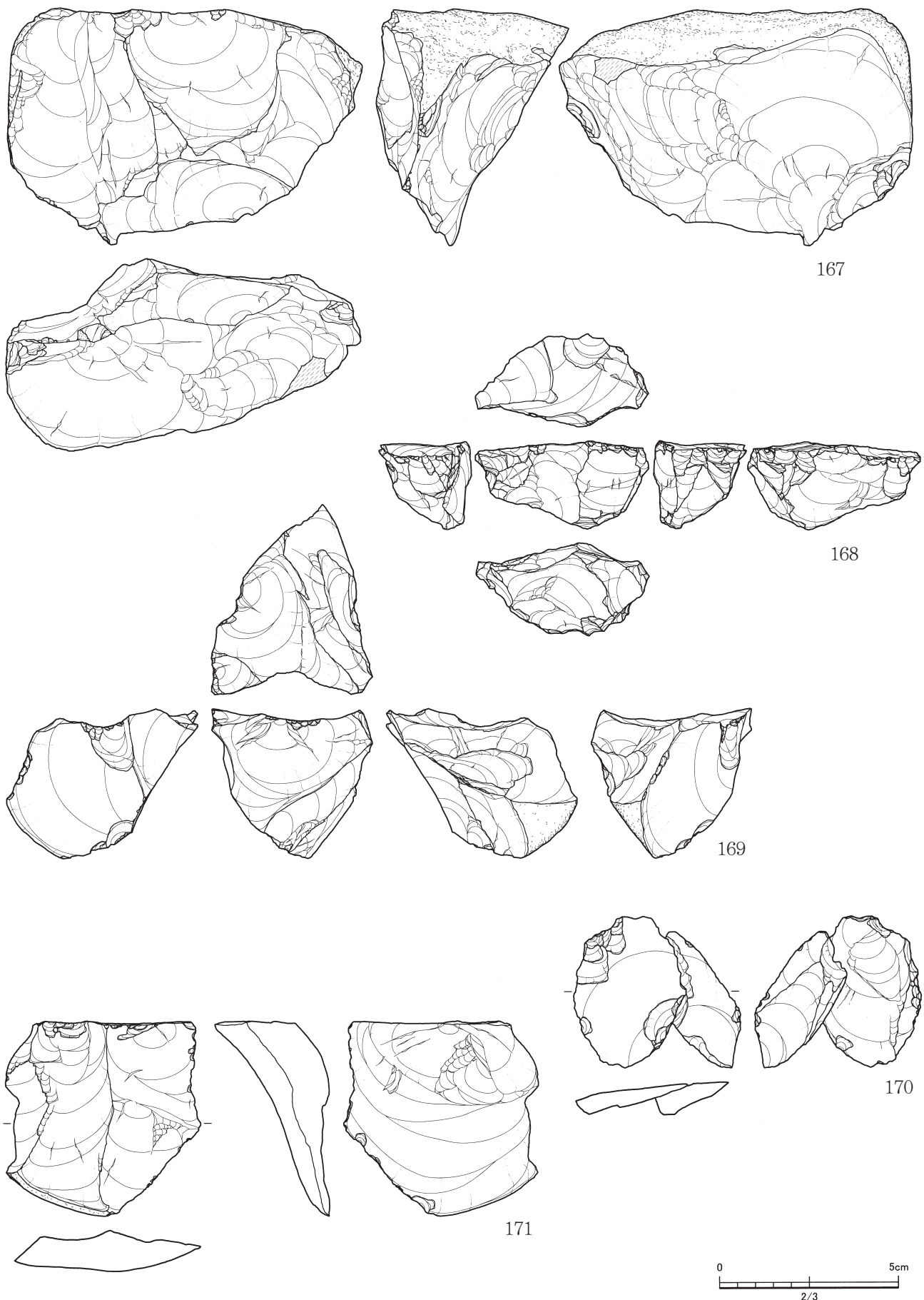
スクレイパー（第51図162）

162は定形化した縦長剥片素材の搔器である。剥片端部にスクレイパーエッジを加工し、左側縁にも浅い



第51図 I層（表土）出土遺物実測図（1）





第52図 Ⅰ層（表土）出土遺物実測図（2）

調整剥離を施している。削器としての利用も考えられる。

#### 剥片 (第51図163)

163は背面に多方向からの剥片剥離面を残す剥片である。頁岩製でなめらかな自然面をもつ。

#### 微細剥離ある剥片 (第51図164)

164は厚みのない右側縁に微細剥離が見られる。背面に同一方向からの剥片剥離面が残る。

#### 石核 (第51図165～第52図169)

頁岩およびチャートの石核が回収された。167は大型の石核で、打面転移を繰り返し幅広剥片を剥離した痕跡を残す。

#### 接合資料 (第52図170)

白色流紋岩の剥片2点の接合資料である。同一方向より剥離され、正面左側の剥片の左側縁には部分的に急斜度加工が施されている。

#### 微細剥離ある剥片 (第52図171)

171はB区I層より回収された。背面には、少なくとも縦長剥片を2枚以上剥離した剥離面が残る。厚みのない右側縁に微細剥離が見られる。

## 12 後期旧石器時代 小結

ここでは前述した調査区ごとの遺構・遺物の様相をまとめ、遺跡全体をとおして見た後期旧石器時代の遺跡の変遷についてまとめる。

### 後期旧石器時代Ⅰ期

AT下位黒色帯 (Ⅶ層: MB2～3相当層) より出土した石器群である。上町川から300mほど北の緩斜面地では、局部磨製石斧(1)と打製石斧2点(2・3)が出土した。打製石斧1点は剥片と接合したものの加工具の出土は見られず、刃部に研磨痕の残る製品についても、研磨に使用したと思われる砥石等は出土しなかった。局部磨製石斧との関連性が注目される遺物の環状分布・環状ブロックは、本遺跡では確認されなかった。旧地形が傾斜地であることや、各層の層厚が薄いことによる遺物の二次移動を考慮する必要がある。

そこから50mほど南の急斜面地では、遺物数は少ないが縦長剥片素材の一側縁加工・二側縁加工のナイフ形石器(15・16)が出土している。

上町川北側の平地部分では発達したⅦ層の堆積が見

られ、Ⅶ層中部より礫群2基が確認された。礫群から10mほどの場所には、頁岩製の縦長剥片を素材とする二次加工剥片(22・23)や尾鈴山溶結凝灰岩製の二次加工剥片(24)、桑ノ木津留産と推定される黒曜石の剥片類(26～31)を含む遺物集中区が見られた。しかし、遺物の接合関係は見られず、敲石等の加工具も出土していないため、これらの遺物は遺跡外で加工・調整を施した後、遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

### 後期旧石器時代Ⅱ期

当該期の遺物は、斜面地に堆積したAT混じりの褐色土層(Ⅵ層)より出土した石器群である。ATが単純層として確認されたのは上町川北側の平地部分のみで、斜面地ではATがブロック状に堆積している状況であった。斜面下部になるほどAT粒子が上下層に拡散しており、AT上下層にわたる遺物の二次移動が考えられる。遺物数は少ないが、小型の二側縁加工ナイフ形石器(32・33)や厚手の剥片素材のスクレイパー(36・37)などの出土が見られた。定形化した剥片(40・41)や接合資料(51・53・54)も確認されたが、敲石等の加工具の出土は見られなかった。

### 後期旧石器時代Ⅲ期

V層出土のAT上位の石器群である。礫群も4基確認された。礫群の平面形はいずれも礫が散漫な形態で、構成礫は破碎礫である。礫の赤化度にはばらつきが見られる。遺物数は当該期のものが最も多く、一側縁加工・二側縁加工ナイフ形石器(64～72、110～113)や、少量ではあるが角錐状石器(73・74)や剥片尖頭器(114)などの尖頭器類の出土も見られた。

### 後期旧石器時代Ⅳ期

Ⅳ期の設定については第5節で述べた。細石刃石器文化期の遺物の出土が見られたが、調査時に層として確認されたものではないため、本来当該期に帰属する遺物が他期に含まれている可能性がある。

細石刃核について概観すると、船野型細石刃核が出土した細石刃核の大半を占めるが、中にはチャート製で作業面側面に自然面を大きく残すもの(146)も見られる。

第5表 後期旧石器時代石器観察表（1）

掲載 番号	区	遺物番号	出土層位	器種	石材 (略称)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	観察所見
1	A	939	VII	局部磨製石斧	Tu	15.25	6.00	3.30	434.60	刃部はゆるやかな弧状でわずかに研磨を施す。柄部に敲打痕あり。
2	A	938	VII	打製石斧	Tu	16.75	8.85	0.25	455.80	刃部弧状。背面なめらかだが正面・側面は風化。
3	A	622+914	VII+VII	打製石斧	Tu	9.20	6.10	3.00	183.80	未製品。剥片と接合。多方向より剥離を施す。
4	A	625	VII	ナイフ形石器	Ob1	2.41	1.61	0.57	1.80	一側縁加工もしくは切出形ナイフ形石器。
5	A	361	VII	スクレイパー	Ryu	4.13	3.61	2.16	31.80	剥片端部に刃部を作出。周縁にも腹面・背面両面から二次加工を施す。
6	A	787	VII	剥片	Os	6.35	1.90	1.10	13.70	縦長剥片。平坦な剥離面を打面とする寸詰まりな剥片。
7	A	906	VII	微細剥離剥片	Ob1	36.50	2.60	0.50	3.30	右側一部欠損。端部に微細剥離あり。
8	A	933	VII	二次加工剥片	Hol1	6.00	3.60	1.70	33.00	背面に多方向からの剥片剥離面を残す。
9	A	952	VII	二次加工剥片	Hol2	6.65	4.95	1.40	53.10	背面にこれと同方向からの大型剥片剥離痕を残す。
10	A	904	VII	二次加工剥片	Ch2	4.14	4.35	1.36	26.10	平坦な剥離面を打面とする。背面に多方向からの不定形剥片剥離面を残す。
11	A	791	VII	石核	Sh	5.20	4.85	2.04	46.00	不定形剥片剥離面を背面に残す。
12	A	291+360	V+VII	接合資料	Ryu	3.68	5.13	1.58	19.50	剥片2点の接合。正面右側の剥片の一側縁に微細剥離あり。
13	A	327+329	VII+VII	接合資料	Hol1	4.72	4.71	1.50	27.70	剥片2点の接合。自然面を打面とする。石核調整剥片。
14	A	362+363	VII+VII	接合資料	Ryu	6.25	4.29	5.17	111.30	石核と剥片の接合。
15	B2	75	VII	ナイフ形石器	Hol1	5.40	1.52	0.59	4.00	二側縁加工。刃部に使用によるものと思われる微細剥離あり。
16	B1	VII上-3	VII上	ナイフ形石器	Ryu	3.56	1.63	0.72	3.90	基部・先端部欠損。一側縁加工か。
17	B1	VII上-1	VII上	二次加工剥片	Sh	4.95	2.70	1.90	25.00	断面三角形でうち一面は自然面を残す。背面に二次加工を施す。
18	B2	76	VII	剥片	Hol2	5.70	3.90	1.00	18.20	石核調整剥片。背面に多方向からの不定形剥片剥離面を残す。
19	B2	880	VII	剥片	Hol1	7.75	4.95	2.35	71.20	背面に大きな剥離面1面あり。節理多く質粗い。
20	C5	681+682	VII+VII	石刃	Hol1	6.50	2.00	1.00	10.40	断面三角形。背面と主要剥離面に調整剥離を施す。うねった稜を通す。
21	C5	28	VII	石核	Hol1	4.45	3.68	2.64	35.10	縦長剥片剥離後、180°打面転移し剥片剥離を継続した痕跡を背面に残す。
22	C6	997	VII	二次加工剥片	Sh	5.98	4.22	1.75	28.80	縦長剥片素材。左側縁の主要剥離面側に二次加工、右側縁に微細剥離あり。
23	C6	993	VII	二次加工剥片	Sh	7.72	4.50	2.06	62.30	縦長剥片素材。左側縁の背面側に二次加工を施す。
24	C6	994	VII	二次加工剥片	Os	5.40	7.20	2.05	65.70	自然面を打面とする。背面・主要剥離面ともに二次加工を施す。
25	C5	459	VII	二次加工剥片	Ob1	4.10	3.20	0.90	13.40	左側縁に二次加工を施す。
26	C6	990	VII	微細剥離剥片	Ob1	1.40	2.05	0.45	1.40	剥片端部背面側に微細剥離あり。
27	C6	996	VII	微細剥離剥片	Ob1	2.00	0.95	0.50	0.70	剥片端部に急斜度の微細剥離あり。
28	C5	679	VII	剥片	Ob1	1.70	1.40	0.30	0.80	背面に多方向からの剥片剥離面を残す。
29	C6	991	VII	剥片	Ob1	2.85	1.40	0.80	2.10	石核調整剥片。背面端部になめらかな自然面を残す。
30	C6	995	VII	剥片	Ob1	3.97	4.06	0.87	9.80	質粗く表面が波打つ。背面端部にざらつく自然面を残す。
31	C6	999	VII	剥片	Ob1	2.89	2.72	0.98	5.30	質粗く表面が波打つ。平坦な自然面を打面とする。
32	A	607	VI	ナイフ形石器	Hol1	3.29	1.09	0.78	2.30	二側縁加工。左側縁に背面・主要剥離面両面から細かな調整剥離。
33	A	605	VI	ナイフ形石器	Hol1	3.33	1.38	0.67	2.70	二側縁加工と思われるが風化激しい。右側縁に主要剥離面側からの調整剥離。
34	A	741	VI	ナイフ形石器	Sh	2.74	1.62	0.54	1.60	基部・先端部を欠損。横長の不定形剥片端部を刃部とする。
35	A	798	VI	石刃	Hol1	3.70	1.80	0.30	2.80	背面にこれと同方向からの縦長剥片剥離面あり。
36	A	809	VI	スクレイパー	Ch2	3.05	2.58	1.99	17.10	右側欠損。厚みのある剥片で主要剥離面側からの急斜度加工により弧状の刃部を作る。
37	A	826	VI	スクレイパー	Sh	3.70	5.22	2.04	43.10	裏面には多方向からの剥片剥離面を残す。全周の約2/3に刃部加工を施す。
38	A	814	VI	スクレイパー	Sh	5.54	4.81	1.55	27.70	自然面を打面とし背面に不定形剥片剥離面あり。左側縁に主要剥離面側から刃部加工を施す。
39	A	954	VI	二次加工剥片	Sh	5.39	4.16	1.42	28.70	背面に多方向からの不定形剥片剥離面を残す。厚みの薄い右側縁に二次加工と微細剥離あり。
40	A	613	VI	微細剥離剥片	Sh	4.40	3.25	0.85	11.10	寸詰まりな剥片素材。両側縁に微細剥離あり。背面に同方向からの剥片剥離面あり。
41	A	359	VI	微細剥離剥片	Sh	4.50	3.50	0.90	12.10	右側縁に微細剥離あり。背面に同方向からの剥片剥離面あり。
42	A	861	VI	微細剥離剥片	Sh	3.80	3.65	0.85	9.10	不定形剥片素材。左側縁にわずかに微細剥離が見られる。
43	A	579	VI	微細剥離剥片	Ch4	4.10	3.45	0.75	11.00	寸詰まりな剥片素材。右側縁に微細剥離あり。背面に同方向からの剥片剥離面を残す。
44	A	910	VI	微細剥離剥片	Ch1	2.55	2.55	0.55	2.20	一部欠損するが左側縁に微細剥離あり。
45	A	735	VI	微細剥離剥片	Ob1	3.19	2.34	0.80	4.00	右側縁の上半分に微細剥離見られる。
46	A	756	VI	剥片	Hol1	5.25	2.85	1.85	20.50	背面に同方向からの2面の剥片剥離面を残す。断面三角形。
47	A	635	VI	剥片	Hol1	5.60	3.00	0.90	8.80	背面に同方向からの剥片剥離面を残す。質が粗く波打つように歪んだ剥片。
48	A	745	VI	剥片	Hol1	4.20	5.52	1.44	37.00	不定形剥片剥離面を背面に残す。厚みのある剥片。
49	A	844	VI	剥片	Ch2	4.30	4.20	0.95	17.50	不定形剥片。背面にこれと同方向からの剥片剥離面を残す。
50	A	592	VI	剥片	Cr	1.60	1.20	0.50	0.80	透明度の高い小型の剥片。
51	A	784+911	VI+VI	接合資料	Hol1	2.71	5.18	1.15	16.00	剥片2点の接合。節理面を打面とする。質が粗い。
52	A+H21A	611+ -	VI+(T2)VI	接合資料	Hol2	6.32	4.72	1.44	38.30	折れ接合。折損後、下側の剥片には素材剥片剥離時と逆方向より二次加工が施される。
53	A	801+ -	VI+ I	接合資料	Sh	4.82	2.77	1.59	9.20	剥片2点の接合。石核調整剥片と思われる。
54	A+H21A	862+ -	VI+ (-)	接合資料	Tu	6.20	7.60	2.90	132.70	石核と剥片2点(表土回収)の接合。多方向から不定形剥片剥離。ATが多量にこびりつく。
55	B1	450	VI	ナイフ形石器	Hol1	4.26	1.49	0.56	3.00	二側縁加工。素材剥片端部を基部に設定。正面基部側自然面を残す。風化激しい。ATが多量にこびりつく。
56	B1	441	VI	スクレイパー	Sh	3.75	3.45	1.25	13.90	自然面を打面とする幅広剥片素材。端部に急斜度加工、両側縁に定形化した浅い調整剥離を施す。
57	B1	VI上-1	VI上	二次加工剥片	Hol1	5.80	5.56	1.34	32.90	やや厚みのある縁辺2箇所に背面・主要剥離面両面から二次加工を施す。
58	B1	419	VI	剥片	Sh	5.70	4.20	1.61	33.30	多方向からの不定形剥片剥離面を背面に残す。
59	B1	440	VI	剥片	Hol1	4.80	4.90	1.10	37.10	幅広剥片。風化激しい。
60	B2	882	VI	剥片	Ryu	5.10	6.50	2.80	78.10	背面に褐色の自然面と剥片剥離面見られる。割れ口鋭く重量がある。ATが多量にこびりつく。

第5表 後期旧石器時代石器観察表（2）

掲載番号	区	遺物番号	出土層位	器種	石材(略称)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	観察所見
61	B2	887	VI	剥片	Hol1	6.72	4.37	1.46	29.80	剥片剥離面を背面に残すが、母岩の質が粗く節理多い。
62	B2	885	VI	石核	Hol1	4.92	4.18	2.48	32.90	残核。打面転移を繰り返し幅広剥片や不定形剥片を剥離。
63	B2	B3aGr.	VI上	石核	Gr-an	4.60	6.34	3.03	55.20	打面転移を行い幅広剥片や不定形剥片を剥離。新鮮面は濃灰色。
64	A	253	V	ナイフ形石器	Sh	2.63	1.00	0.40	0.60	左側中程～基部欠損。幅広剥片端部を刃部とし左側縁先端部のみ調整剥離見られる。
65	A	536	V	ナイフ形石器	Sh	3.22	1.35	0.71	2.40	幅広剥片素材の一側縁加工。背面・腹面両面より急斜度の調整剥離。刃部に微細剥離あり。基部端欠損。
66	A	480	V	ナイフ形石器	Sh	2.78	1.23	0.64	2.40	二側縁加工。先端部欠損。背面・主要剥離面両面から急斜度加工施す。やや身が厚い。
67	A	477	V	ナイフ形石器	Ob1	2.23	1.32	0.41	1.00	二側縁加工。薄く扁平な剥片素材。主要剥離面側より細かな調整剥離。
68	A	629	V	ナイフ形石器	Ryu	4.13	1.64	0.94	5.30	基部加工。刃部右側縁に衝撃剥離痕あり。
69	A	966	V	ナイフ形石器	Sh	2.79	2.38	0.69	5.00	基部加工ナイフか。基部・先端部欠損。主要剥離面側から括弧のような弧状の基部調整。
70	A	461	V	ナイフ形石器	Sh	6.32	2.56	1.04	16.70	背面に縦長剥片剥離面残る。先端部欠損。基部右側に腹面から調整剥離。刃部左側縁に微細剥離あり。
71	A	490	V	ナイフ形石器	Sh	4.55	1.74	1.13	7.20	二側縁加工。素材剥片剥離時の打面・打点残る。主要剥離面側からの調整剥離。
72	A	248	V	ナイフ形石器	Sh	4.92	2.19	1.08	6.80	二側縁加工。素材剥片剥離時の打面・打点残る。主要剥離面側からの調整剥離。左側欠損。
73	A	304	V	角錐状石器	Ch4	2.46	1.37	1.03	2.20	先端部のみ残存。主要剥離面側よりやや粗い調整剥離。
74	A	819	V	角錐状石器	Ch4	3.51	1.76	1.07	6.80	基部欠損。主要剥離面側より細かな調整剥離。
75	A	563	V	石刃	Hol2	6.30	2.95	1.15	17.90	節理により上部欠損。背面に同方向からの縦長剥片剥離面残る。背面左側端部に二次加工あり。
76	A	333	V	石刃	Hol2	7.30	3.50	1.00	23.20	剥片端部はやや屈曲するが、縦長剥片剥離面を背面に残す。左側縁上部に二次加工あり。
77	A	836	V	石刃	Hol1	9.70	3.40	1.10	24.40	背面に同方向からの縦長剥片剥離面2面あり。
78	A	567	V	石刃	Hol2	10.20	4.30	1.50	55.20	背面に同方向からの縦長剥片剥離面2面あり。
79	A	843	V	スクレイパー	Sh	4.57	3.97	2.34	47.80	全周に刃部加工施す。細かな加工も見られるが全体的に粗い調整剥離。
80	A	337	V	スクレイパー	Ryu	4.39	3.14	1.26	15.00	不定形幅広剥片素材。厚みのある端部に主要剥離面側から細かな刃部加工を施す。
81	A	298	V	スクレイパー	Ryu	4.09	2.39	1.28	15.80	厚さ約1cmの不定形剥片素材。剥片端部に刃部加工、右側縁に背面・腹面両面から二次加工施す。
82	A	822	V	スクレイパー	Ch1	5.24	4.83	1.66	43.30	厚みのある不定形剥片素材。剥片端部に刃部加工、右側縁上部に背面・腹面両面から二次加工施す。
83	A	808	V	尖頭器	Ryu	7.56	2.97	2.00	47.20	片面調整。腹面に両側縁から深い調整剥離を施す。
84	A	506	V	二次加工剥片	Sh	9.53	3.37	2.30	52.40	節理面を打面とする断面三角形の縦長剥片。右側縁に調整剥離見られる。
85	A	464	V	二次加工剥片	Ryu	7.36	2.76	0.98	15.50	縦長剥片剥離面2面を背面に残す。左側縁端部に調整剥離施す。
86	A	581	V	二次加工剥片	Sh	6.04	3.30	1.59	22.20	不定形剥片素材。自然面と主要剥離面のつくる斜縁に細かな二次加工施す。
87	A	507	V	二次加工剥片	Ryu	4.86	2.91	1.21	14.50	縦長剥片素材。上下端部欠くが両側縁に間隔をあけて深い急斜度加工施す。石の質が粗く脆い。
88	A	841	V	二次加工剥片	Hol1	5.99	8.73	2.71	124.90	弧状の縁辺部に部分的に二次加工施す。
89	A	728	V	微細剥離剥片	Hol2	6.30	7.37	1.98	76.70	幅広剥片・不定形剥片剥離面を背面に残す。弧状の縁辺部に微細剥離見られる。
90	A	588	V	微細剥離剥片	Ob1	2.48	1.99	0.88	3.50	やや厚みのある左側縁中央部と鋭い右側縁に部分的な微細剥離見られる。
91	A	501	V	微細剥離剥片	Ryu	4.49	2.52	1.36	13.40	打面付近と剥片端部の主要剥離面側に微細剥離あり。
92	A	340	V	微細剥離剥片	Sh	4.65	1.75	1.55	10.80	自然面の残る不定形剥片素材。鋭い右側縁の主要剥離面側に微細剥離見られる。
93	A	290	V	微細剥離剥片	Sh	6.65	5.85	2.10	53.00	背面に幅広剥片剥離面残る。約7cmの長さのある鋭い右側縁に微細剥離見られる。
94	A	630	V	微細剥離剥片	Ryu	5.75	4.78	1.78	42.70	背面に不定形剥片剥離面あり。厚みのない左側縁に微細剥離見られる。
95	A	235	V	微細剥離剥片	Tu	7.03	4.13	0.98	22.20	背面に同方向からの縦長剥片剥離面残る。両側縁に微細剥離見られる。
96	A	334	V	剥片	Ryu	6.40	4.20	0.95	15.00	背面や左側面に縦長剥片や寸詰まりな剥片剥離面あり。
97	A	580	V	剥片	Sh	5.35	2.05	1.35	15.00	剥離面を打面とする縦長剥片。多方向からの剥片剥離面を背面に残す。
98	A	583	V	剥片	Hol2	4.70	4.10	1.10	21.40	幅広剥片。剥離面を打面とする。左側約2/3が節理面。
99	A	488	V	剥片	Hol2	7.75	3.75	1.50	27.60	石核調整剥片。背面に複数の剥片剥離面残る。
100	A	254	V	剥片	Hlo2	5.68	5.34	1.49	23.80	石核調整剥片。背面に多数の不定形剥片剥離面あり。
101	A	514	V	剥片	Hol2	2.95	6.25	1.15	22.30	横長剥片。背面にもこれと同様の幅広剥片を剥離した痕跡が残る。風化激しい。
102	A	593+594	VI+V	接合資料	Hol2	7.25	3.60	1.25	21.10	折れ接合。石核調整剥片。背面に多方向から剥片剥離した痕跡残す。
103	A	586	V	石核	Sh	4.12	5.10	3.80	64.70	円礫素材。打面転移を繰り返し、小型の不定形剥片や寸詰まりな剥片を剥離する。
104	A	268	V	石核	Hol2	4.10	9.18	2.96	91.00	幅広剥片を多方向から剥離。約180°の打面転移を行い、幅約2～4cmの剥片を剥離。自然面なめらか。
105	A	306	V	石核	Ob6	1.95	1.70	0.95	2.80	質が粗い。剥離を繰り返した結果残された残核。
106	A	824	V	石核	Sh	7.26	5.55	2.21	76.30	節理多く質粗いが、これと同等の大きさの剥片を剥離した痕跡残す。裏面にも剥片剥離面見られる。
107	A	564	V	石核	Hol1	4.92	6.61	5.11	202.80	節理多いが、打面転移を繰り返し幅約2～3.5cmの幅広剥片を剥離。重量がある。
108	A	307+316	V+VI	接合資料	Ch2	3.95	3.30	1.15	11.90	剥片2点の接合。同方向より剥離され、2点の間にも厚さ約3mmの寸詰まりな剥片が入ると思われる。
109	A	353+484+553	VI+VI+V	接合資料	Hol1	5.15	4.55	2.95	41.50	剥片3点の接合。各剥片の背面に不定形剥片剥離面残る。
110	B1	436	V	ナイフ形石器	Sh	3.84	1.54	0.67	4.00	二側縁加工。素材剥片打面側を基部に設定。腹面側から左側縁と右側縁約3/4に調整剥離施す。
111	B2	672	V	ナイフ形石器	Sh	1.50	1.30	0.50	0.60	基部欠損。背面・主要剥離面両面からの細かな調整剥離が左側縁に見られる。刃部に微細剥離あり。
112	B1	425	V	ナイフ形石器	Hol2	5.18	2.00	0.83	6.30	二側縁加工。幅広剥片の端部を刃部に設定。主要剥離面側より調整剥離。風化激しい。
113	H21B	No.2	(T8-1V)	ナイフ形石器	Sh	4.86	1.91	1.26	8.20	二側縁加工。基部に打痕残る。右側縁と左側縁約1/2に腹面側より調整剥離。刃部腹面側に微細剥離あり。
114	H21B	No.1	(T11V)	剥片尖頭器	Ryu	6.32	3.24	1.13	18.60	基部は主要剥離面側よりやや粗い調整。両刃部に微細剥離見られる。
115	B2	675	V	スクレイパー	Sh	3.50	3.36	1.83	22.40	全周の約3/4に主要剥離面側からの粗い刃部加工。上部直線状の縁腹面側に微細剥離あり。
116	H21B	-	(T7-3V)	スクレイパー	Hol1	4.23	5.10	1.27	26.40	寸詰まりな幅広剥片端部に主要剥離面側より浅い調整剥離施す。
117	B1	438	V	二次加工剥片	Tu	7.21	9.24	1.71	62.90	打面脇の両縁部の主要剥離面側に二次加工施す。直線状の剥片端部背面側に微細剥離あり。
118	B2	676	V	二次加工剥片	Os	4.60	4.80	1.80	50.40	小型の円礫素材。多方向から二次加工施す。
119	B2	647	V	微細剥離剥片	Sh	3.90	4.10	1.90	17.50	被熱によると思われるハジケ多い。厚みのない左右側縁2箇所を微細剥離あり。
120	B2	168	V	剥片	Ryu	5.14	5.85	2.29	43.40	石核調整剥片。幅広剥片剥離面残る。

第5表 後期旧石器時代石器観察表（3）

掲載番号	区	遺物番号	出土層位	器種	石材(略称)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	観察所見
121	B2	166	V	剥片	Gr-an	2.00	2.90	0.60	2.30	下層(VI層)出土の石核より剥離されたものか。
122	B2	164	V	石核	Ryu	3.11	6.22	4.29	66.20	打面転移を繰り返し、寸詰まりな剥片や幅広剥片を剥離した痕跡残す。
123	B2	147	V	石核	Hol1	3.45	4.48	3.70	51.20	節理多く質粗いが、打面転移を繰り返し不定形剥片を剥離。
124	B2	128	V	石核	Hol2	3.35	5.72	4.15	77.30	円礫素材。多方向より剥片剥離を行う。
125	B2	152	V	石核	Ryu	3.14	5.89	5.90	110.40	母岩より剥離した際の打痕が残る主要剥離面を打面とし、不定形剥片を剥離。
126	B1	439	V	石核	Sa	4.52	10.87	3.82	144.60	大型の円礫素材。多方向より剥片剥離を行う。
127	B2	169	V	石核	Hol2	3.26	8.19	4.86	144.50	平坦な剥離面を打面とし剥片剥離行う。
128	B1	421	V	石核	Hol2	3.86	9.28	5.07	222.30	平坦な剥離面を打面とする。正面に幅約5cmの幅広剥片剥離面を残す。
129	B2+B1+B1	67+448+449	IV+V+V	接合資料	Ryu	5.70	7.60	2.30	66.00	3点の折れ接合。なめらかな自然面を残す。厚みのない縁辺部に微細剥離見られる。
130	B2	640+641	V+V	接合資料	Ryu	3.35	3.20	0.75	6.20	剥片2点の接合。前面の剥片は打面側を欠損するが、同方向より剥離された剥片。
131	C5	373	V	剥片	Ob1	2.10	1.60	0.40	0.80	背面に多方向からの剥片剥離面を残す。
132	C6	1003	V	剥片	Ob1	1.70	1.80	0.50	1.40	背面に多方向からの背面剥離面を残す。
133	A	271	V	細石刃	Sh	1.15	0.85	0.20	0.23	剥離面を打面とする。下部欠損。
134	A	562	V	細石刃	Sh	1.20	0.80	0.25	0.24	上・下部欠損。
135	A	303	V	細石刃	Sh	1.05	0.80	0.20	0.15	上・下部欠損。
136	A	294	V	細石刃	Ryu	1.40	0.85	0.15	0.24	剥離面を打面とする。下部欠損。
137	A	765	V	細石刃	Ryu	1.45	0.65	0.25	0.17	剥離面を打面とする。右側一部欠損。
138	A	532	V	細石刃	Ob1	1.35	0.80	0.25	0.25	剥離面を打面とする。下部欠損。
139	A	277	V	細石刃	Ob1	0.75	0.65	0.18	0.07	鮫肌状の節理面を打面として剥離。140と同一母岩か。
140	A	266	V	細石刃	Ob1	1.02	0.65	0.25	0.14	上部欠損。
141	A	527	VI	細石刃	Gr-an	0.75	0.65	0.15	0.12	剥離面を打面とする。下部欠損。
142	A	-	I	細石刃	Sh	1.00	0.85	0.12	0.19	剥離面を打面とする。下部欠損。
143	A	-	I	細石刃	Sh	0.95	0.80	0.15	0.18	剥離面を打面とする。下部欠損。
144	A	-	I	細石刃	Ryu	1.20	0.65	0.15	0.14	剥離面を打面とする。下部欠損。
145	A	599	V	細石刃核	Sh	2.80	2.19	3.32	20.70	側面は正方形。剥片端部を作業面に設定。作業面以外にも全面に調整剥離す。下縁調整と、打面に右側面からの打面調整あり。
146	A	-	-	細石刃核	Ch4	2.20	2.58	3.69	22.10	側面は半円形状。素材剥片の側面を作業面に設定。左側面、作業面の裏面にも調整剥離すが、右側面は一面に自然面のごす。
147	B2	130	V	細石刃	Sh	2.00	0.70	0.10	0.36	剥離面を打面とする。下部欠損。
148	B2	151	V	細石刃核	Hol1	2.68	2.72	2.71	22.00	側面は正方形。2面の作業面を持ち、他面にも調整剥離す。下縁調整。質粗い。
149	B2	148	V	細石刃核	Hol1	2.82	2.59	3.11	24.10	母岩の質が粗く、打面転移を繰り返しながら細石刃剥離を行った痕跡残る。
150	B2	134	V	細石刃核	Tu	3.11	2.84	4.65	35.20	側面は逆三角形。素材剥片の打面側を作業面に設定。作業面以外にも全面に調整剥離。下縁調整。
151	B1	432	V	細石刃核	Ryu	2.37	3.30	3.61	25.20	側面は逆三角形。素材剥片端部に作業面設定。素材剥片剥離時の打面側に自然面残すが、その他側面に調整剥離す。打面に左側面からの調整剥離見られる。ATが多量にこびりつく。
152	B1	442	V	細石刃核	Sh	1.78	3.14	3.18	18.30	側面は逆三角形であるが底部は節理により剥落。自然面を打面とし剥離した素材剥片の端部に作業面設定。素材剥片の打面側から右側面下部にかけて自然面残るが、左右側面に調整剥離す。
153	B2	160	V	細石刃核	Sh	2.38	2.87	3.04	18.00	不整形な打面を調整しながら細石刃を剥離しようとした痕跡残る。裏面には被熱によると思われるハジケ見られる。
154	B1	-	I	細石刃核	Hol1	2.16	3.08	3.38	16.60	側面は逆三角形。素材剥片側面に作業面設定。右側面のみ調整剥離し、下縁調整も見られる。
155	B1	-	I	細石刃核	Ryu	2.00	3.34	3.38	22.20	側面は台形。素材剥片端部に作業面設定。右側面に調整剥離す。底部になめらかな自然面残る。
156	B1	-	I	細石刃核	Sh	2.74	3.68	3.47	40.50	平坦な自然面を打面とする。直線状の一边から細石刃を剥離するが全面に調整剥離す。作業面・左側面からの打面調整あり。
157	B1	-	I	作業面再生剥片	Sh	4.30	3.41	1.25	21.00	背面右側約1/2に細石刃剥離面あり。細石刃剥離時と同方向より当剥片を剥離。左側縁に明瞭な微細剥離あり。

第6表 I層(表土)等出土石器観察表

掲載番号	区	遺物番号	出土層位	器種	石材(略称)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	観察所見
158	H21A	-	-	ナイフ形石器	Sh	3.74	2.32	0.98	7.40	基部加工。素材剥片端部を刃部に設定。主要剥離面に打痕残る。素材剥片と同方向からの剥片剥離面を背面に残す。右側縁に微細剥離あり。先端部欠損。
159	A	-	I	ナイフ形石器	Sh	4.58	2.59	0.96	8.10	素材剥片端部を刃部とする。右側縁先端部に調整剥離す。左側縁腹面側に微細剥離あり。基部欠損。
160	A	-	I	ナイフ形石器	Sh	2.48	2.61	0.71	4.40	上部欠損。素材剥片端部を基部に設定。基部と右側縁に調整剥離あり。背面に多方向からの剥片剥離面残る。
161	A	-	I	ナイフ形石器	Sh	2.68	0.72	0.58	1.00	基部は左右両方向より調整剥離し、右側縁にも二次加工見られる。
162	A	-	I	スクレイパー	Sh	5.74	3.31	1.28	22.80	打痕残る縦長剥片素材。剥片端部と右側縁約1/2に急斜度加工、左側縁は浅い調整剥離す。
163	A	-	I	剥片	Sh	5.19	4.22	1.40	23.70	背面に自然面と多方向からの剥片剥離面見られる。左側縁にわずかに微細剥離あり。
164	H21A	-	(IV)	微細剥離剥片	Ryu	3.01	3.96	1.05	6.90	背面に同方向からの剥片剥離面残る。右側縁に微細剥離あり。
165	A	-	-	石核	Ch1	1.65	4.38	2.72	18.00	上面が母岩より剥離した際の主要剥離面で打痕残る。上面を打面とし小型の剥片を剥離。
166	H21A	-	-	石核	Sh	5.10	5.47	2.22	51.20	裏面全面褐色の自然面残る。上方向からの剥片剥離を繰り返す。
167	H21A	-	T4	石核	Sh	6.60	9.90	5.35	278.80	大型の石核。裏面は母岩からの剥離面残る。背面には母岩から剥離前の幅広剥片剥離面や、自然面を打面とし幅約4cmの幅広剥片を剥離した痕跡残す。
168	A	-	I	石核	Ch4	2.42	4.85	2.58	25.40	質が粗く凹凸のある剥離面を打面として剥片を剥離。
169	A	-	-	石核	Sh	4.15	4.46	5.30	56.30	打面転移を繰り返しながら不定形剥片を剥離。
170	A	-	I+I	接合資料	Ryu	4.22	4.65	1.28	12.50	剥片2点の接合。正面左側の剥片の左側縁に部分的に急斜度加工あり。
171	B1	-	I	微細剥離剥片	Sh	5.42	5.41	3.17	47.60	剥離面を打面とする寸詰まりな不定形剥離。背面にこれと同方向からの縦長剥片剥離面残る。厚みのない右側縁に微細剥離あり。

## 第7節 縄文時代の遺構と遺物

B・C区において縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。以下、調査区ごとに詳述する。

### 1-1 B区 概要

B区の一段高い北東の調査区では縄文時代の遺物包含層（IV層）の堆積は確認されなかった。斜面部分で集石遺構2基を検出し、縄文土器や石鏃、石刃、二次加工剥片、石核などの遺物が出土した。なお、C5Gr.の集石遺構（SI10）の周囲には樹根が多く見られ、そこからナイフ形石器1点が出土したが、下層の遺物が樹根の影響で浮き上がったものと思われる。

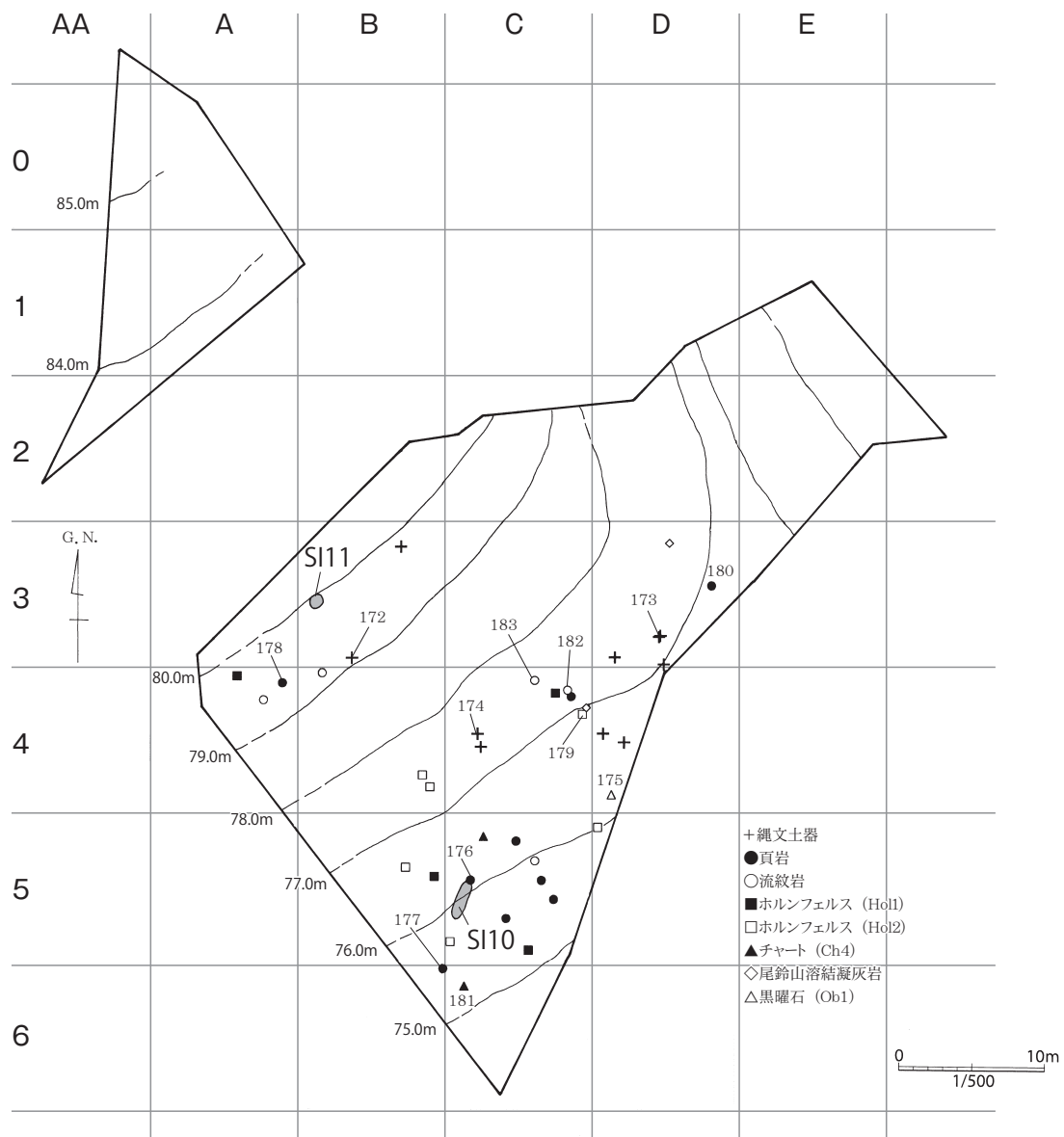
### 1-2 遺構（第54図）

SI10はC5Gr.に位置する。周辺には樹根が多く、表土上に集石遺構構成礫が顔を出した状態で検出されたため、原形を留めていない可能性がある。礫の設置面はIV層で、大小の赤化礫で構成される。SI11はB3Gr.で検出された。直径30cmの範囲に礫が密にまとまり、礫にはほとんど赤化が認められない。

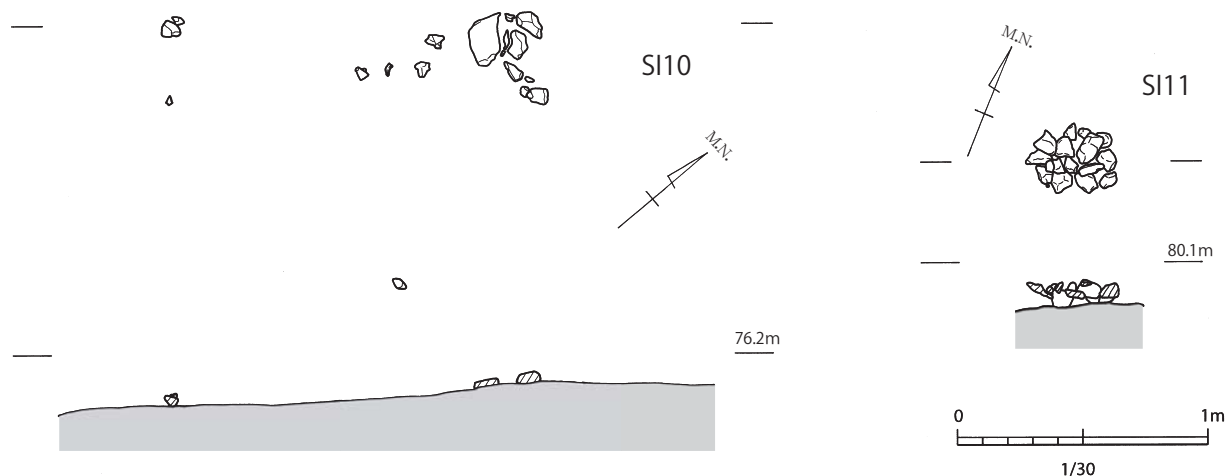
### 1-3 遺物（第55・56図）

#### 土器（第55図172～174）

縄文土器10点が出土した。いずれも小片で器形全体を復元するには至らなかったが、胎土や色調などから3個体の土器が見られた。1つは172で外面に



第53図 縄文時代早期（B区）遺構・遺物分布図



第54図 縄文時代早期（B区）集石遺構実測図

第7表 縄文時代早期（B区）集石遺構観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 (個)	重量 (kg)	備考
SI10	IV	C5	1.53	0.37	14	3.5	削平の可能性あり。
SI11	IV	B3	0.36	0.28	-	-	

羽状文をもつ深鉢の胴部である。もう1つは**173・174**で深鉢の同一個体と思われる。173は口縁部で内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。174は胴部である。内面は風化により器表面が剥落しているが、内外面ともに丁寧なナデである。173・174ともに器面に繊維と思われる痕跡が見られる。もう1つは小片のため未図化であるが、黄褐色を呈し厚みのある土器である。風化が激しいが内面は丁寧なナデ調整、外面には斜方向の文様らしき痕跡が微かに残る。

**石器（第56図175～183）**

ほとんどの遺物が斜面下側より出土する状況が見られた。旧地形の斜面の傾斜による遺物の二次移動も考慮する必要がある。

**石鏃（第56図175）**

黒曜石（Ob1）で基部の抉りは浅い。

**ナイフ形石器（第56図176）**

樹根の多く見られた箇所より出土したため、下層の旧石器時代の遺物が上がってきたものと思われる。

**石刃（第56図177）**

頁岩の端正な石刃で、端部にハジケが見られる。

**二次加工剥片（第56図178～181）**

**178**は主要剥離面側の端部に、両側縁からの細

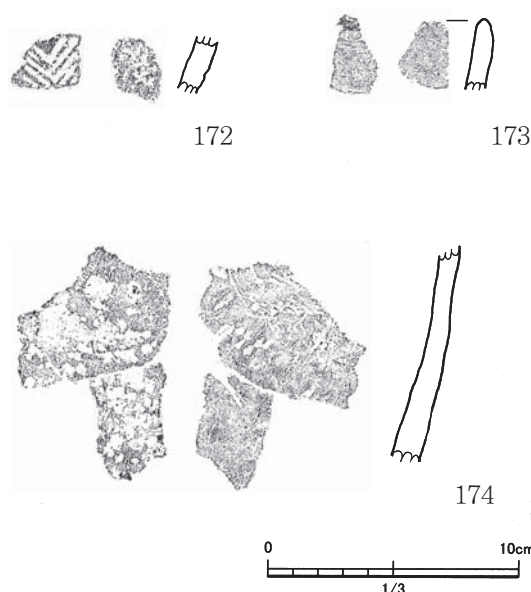
かな調整剥離が見られる。**179**はホルンフェルス（Hol2）、**180**は頁岩の円礫を素材とする。

**微細剥離ある剥片（第56図182）**

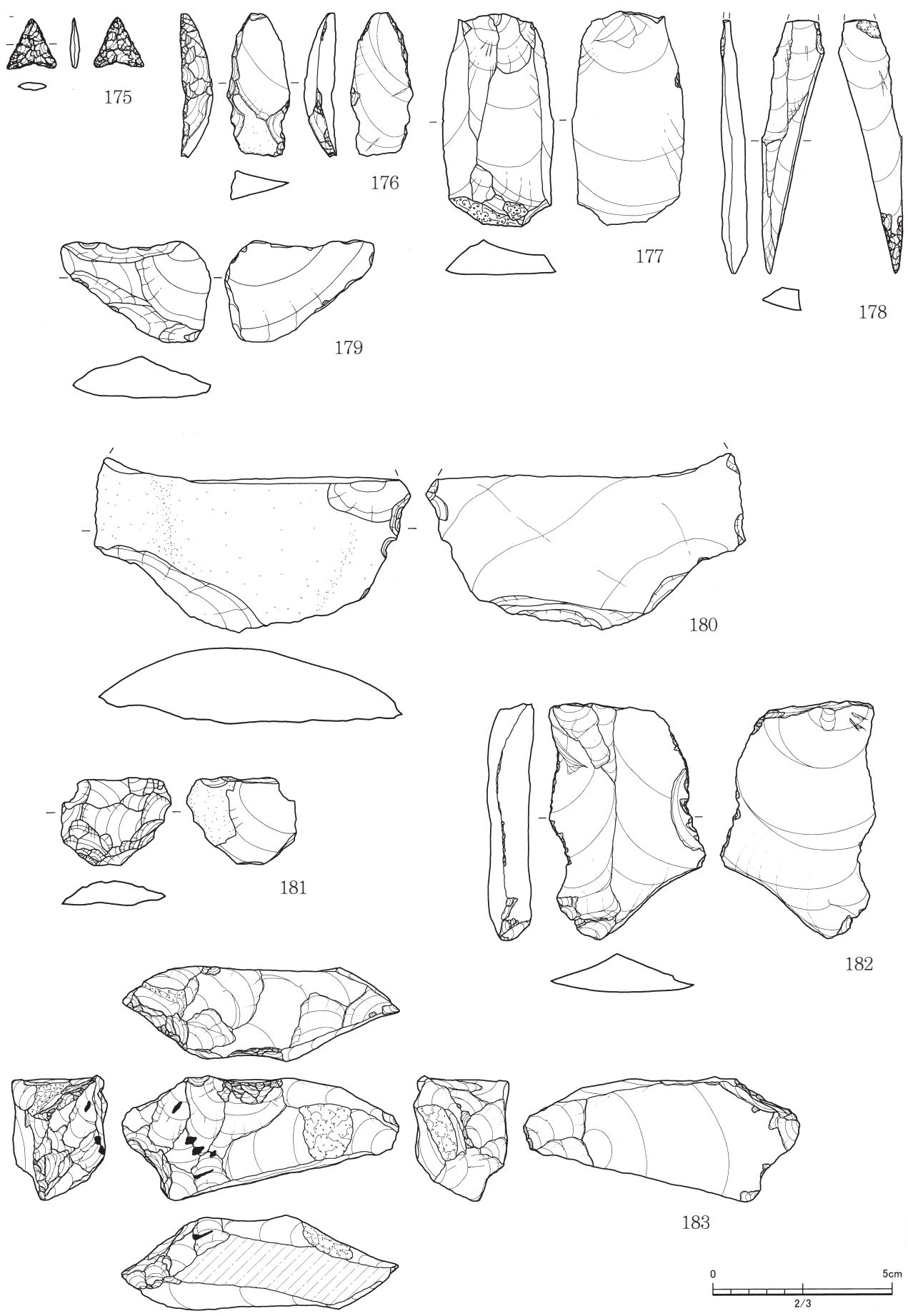
白色流紋岩で、湾曲した二側縁に微細剥離が見られる。背面にも大きな剥片剥離面が残る。

**石核（第56図183）**

流紋岩であるがやや質が粗い。被熱によるものと思われるハジケが見られ、大きさに割に重量は軽い。



第55図 縄文時代早期（B区）土器実測図



第56図 縄文時代早期（B区）包含層出土石器実測図



## 2-1 C区 概要

C区IV層では散礫や集石遺構が検出され、縄文土器や石器が出土した。

## 2-2 遺構

### 散礫 (第57・58図)

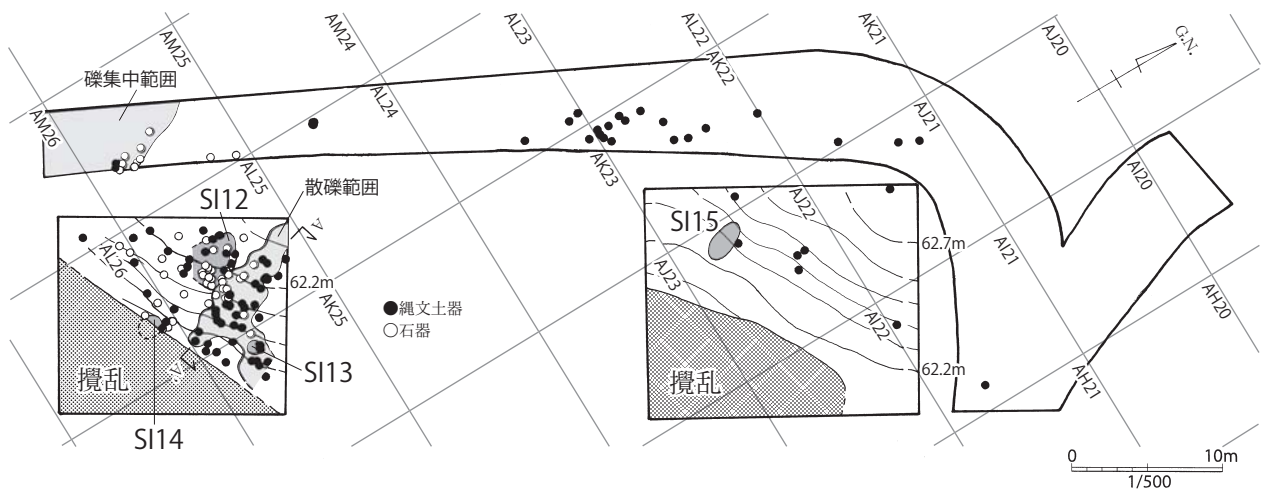
AK25・AL25Gr.にかけて散礫が検出された。北側と南側の一部を削平されていたが、約6.5m×10mの範囲に礫の広がりが見られた。散礫検出時より礫がやや密集する箇所が見られ、集石遺構の存在が考えられたため、散礫の厚さを把握したのち礫を1面ずつ外し、ある程度のまとまりが見られる範囲を集石遺構として認定しSIの名を付すこととした。

散礫の形成された場所は、南の上町川に向かって緩傾斜する地形である。先行トレンチより散礫を含むIV層の層厚を確認したところ、厚い部分で約20cmであった(第58図散礫土層断面図)。IV層の中でも礫を多く含むのは上部の方で、下部にはあまり礫が見られなかった。礫を外すと、散礫東端のAK25Gr.において、直径約25cmの扁平な礫を中心として大型の礫を敷き詰めた、いわゆる「配石」のような遺構を検出した(SI13)。上部にあったと思われる礫は散礫とともに外してしまったため、上部構造を記録

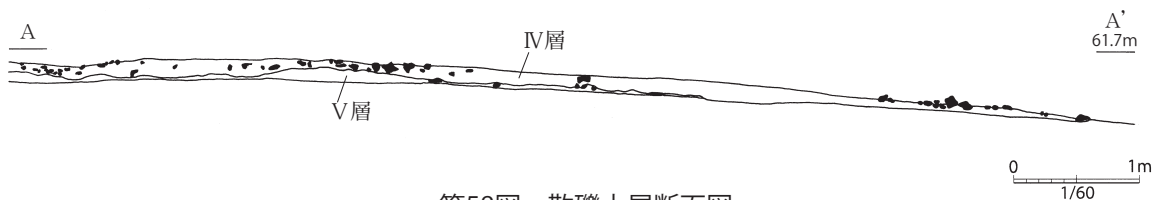
することができなかった。この集石遺構SI13が構築されていた場所に礫を廃棄し始めた結果、広範囲にわたる散礫が形成されたものと思われる。

### 集石遺構 (第59・60図)

SI12は散礫の西側に近接し、平面形は直径約3.4×3.2mで中心に礫の少ないドーナツ状を呈する。東端には炭化材集中箇所が見られた(炭化材に対する自然科学分析の結果については次項にゆずる)。SI13は散礫下より検出された。散礫の東端に位置し、その形状から集石遺構の配石部分にあたると思われる。9個の大型の扁平礫を配し、礫総重量は15.7kgとなる。礫の上面は赤化していたが、掘り込みを持たず炭化材等も見られなかった。SI14は散礫からやや南に離れたAL26Gr.に位置する。調査区南側がVII層下まで削平された際にSI14も削平を受け、半欠状態であった。構成礫35個は破碎礫だけでなく、自然の円礫も多く見られた。SI15はAJ22Gr.に位置する。散礫やSI12～14とは北側の小さな谷地形を挟んだ位置にあり、SI12～14と異なった様相を呈する。直径2.3mの範囲に小さな礫のまとまりが4箇所見られ、周辺にもまばらに赤化した礫が広がる。掌ほどの大きさの円礫を密に組み、礫と接地面との間に



第57図 縄文時代早期 (C区) 遺構・遺物分布図



第58図 散礫土層断面図

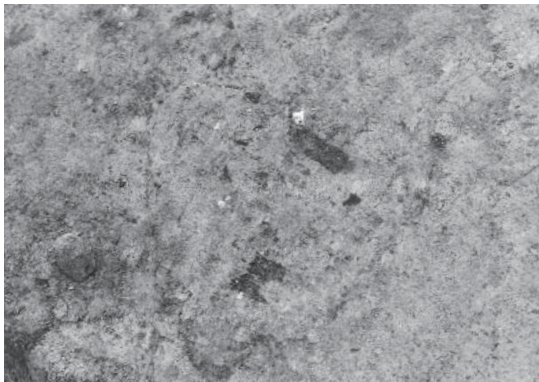
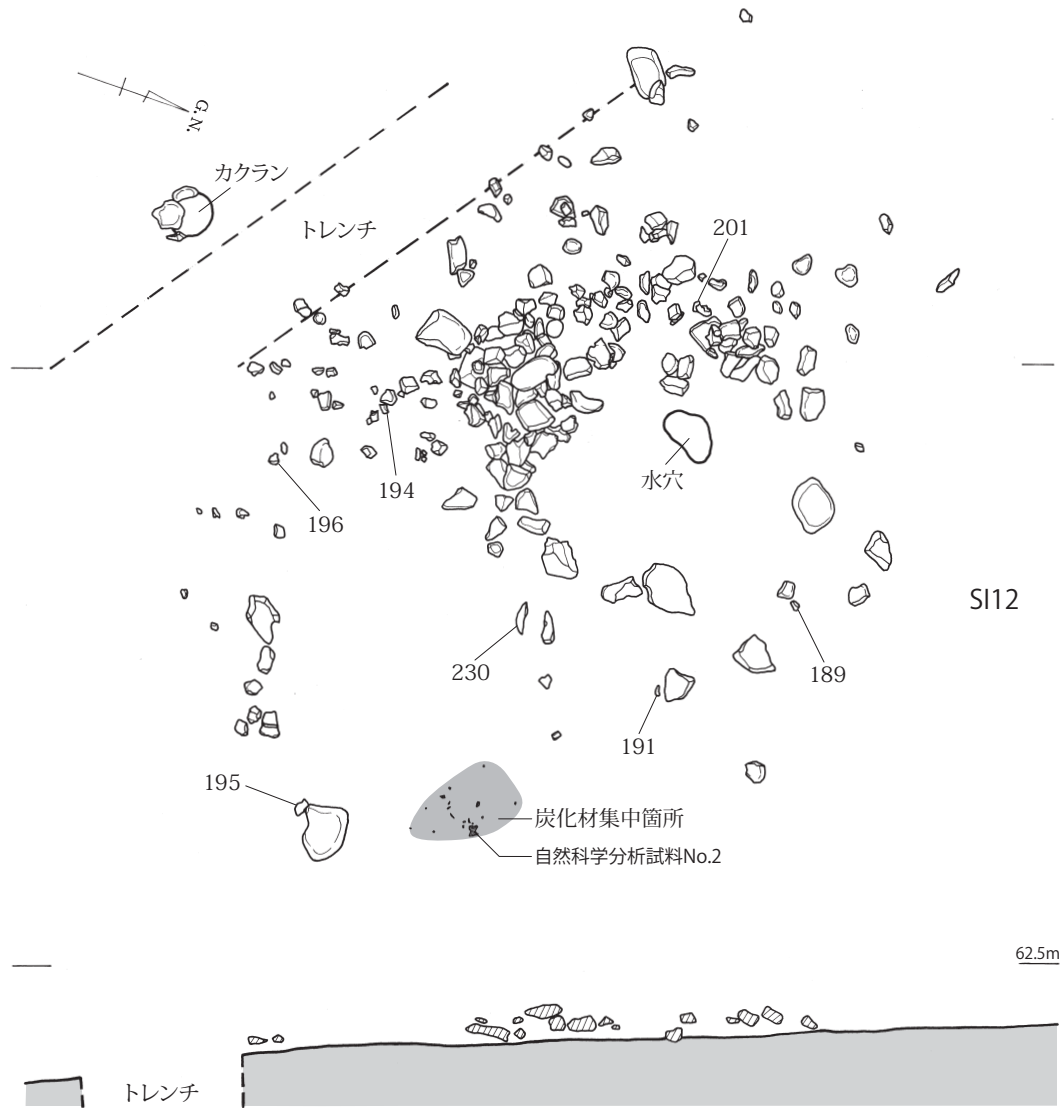
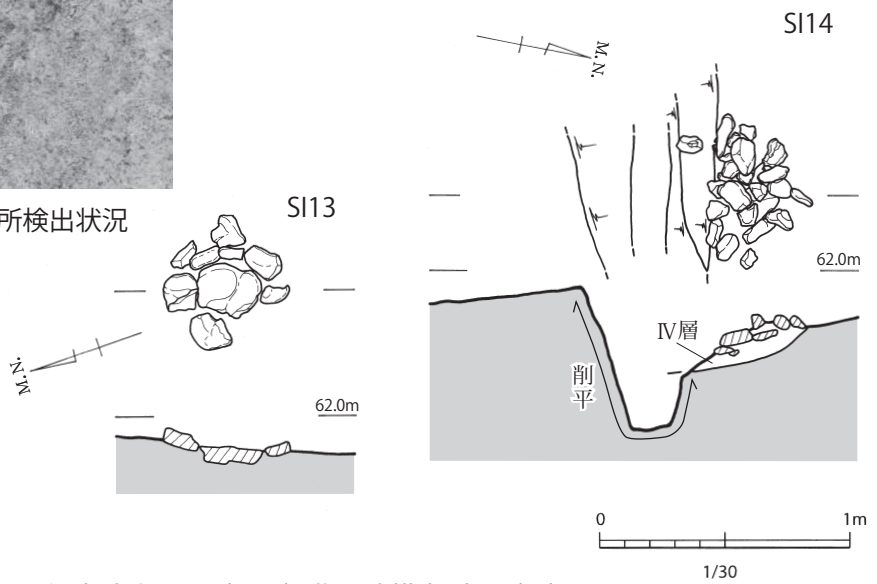


写真1 S112炭化材集中箇所検出状況



第59図 縄文時代早期（C区）集石遺構実測図（1）

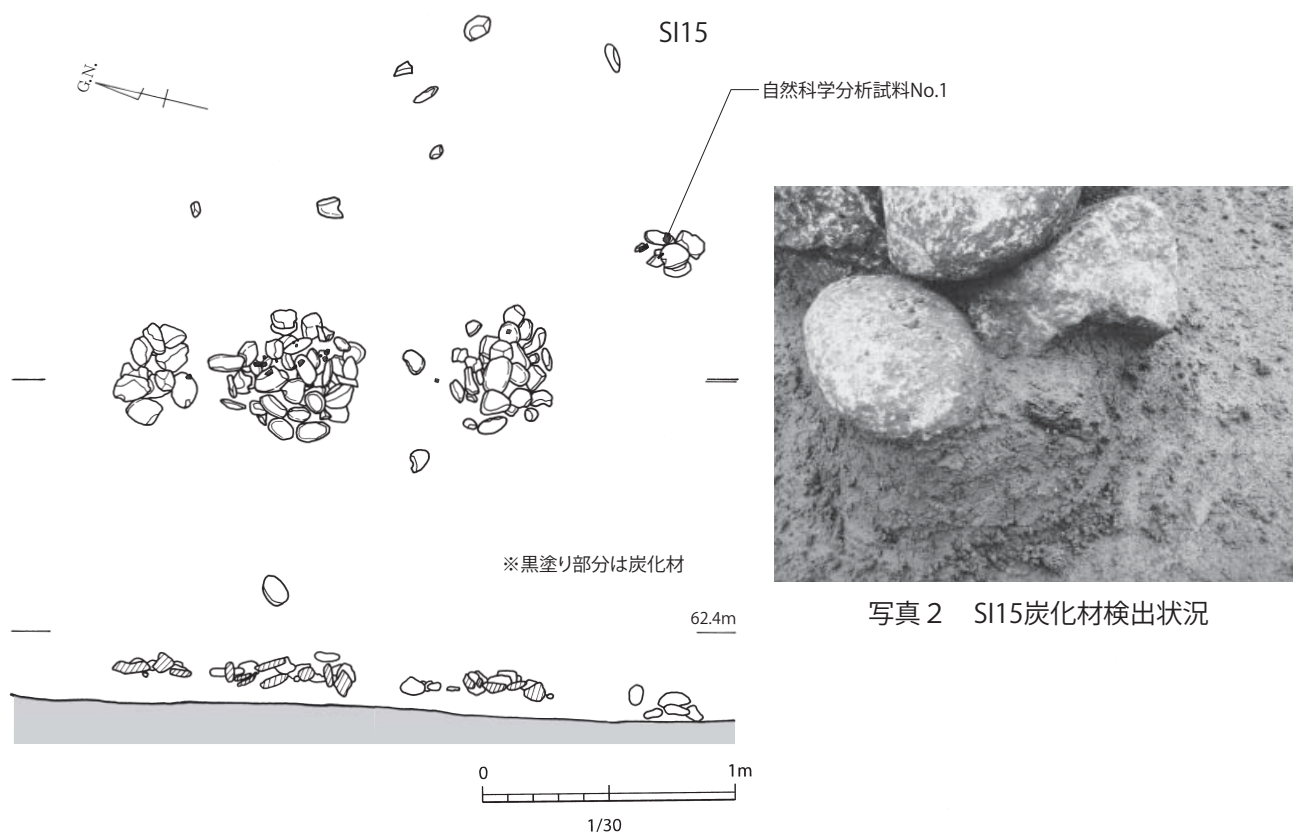


写真2 SI15炭化材検出状況

第60図 縄文時代早期（C区）集石遺構実測図（2）

第8表 縄文時代早期（C区）集石遺構観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸(m)	短軸(m)	礫数(個)	重量(kg)	備考
SI12	IV	AL25	3.37	3.20	189	77.0	検出面で炭化材出土。
SI13	IV	AK25	0.54	0.50	9	15.7	配石。
SI14	IV	AL26	0.61	0.54	35	16.9	削平を受けている可能性あり。
SI15	IV	AJ22	2.34	2.34	-	-	円礫で構成。礫直下より炭化材出土。

炭化材が見られる状況であった。特に、礫の数が最も多い北から2つ目のまとまりと、最も礫の少ない南端のまとまりでは、1cm以上の大きさの炭化材が集中して見られた（第60図）。南端のまとまりから出土した炭化材について実施した自然科学分析の結果については次項で述べる。

### 2-3 SI12・SI15出土炭化材に対する自然科学分析の結果について

SI12で検出された炭化材およびSI15の礫直下より出土した炭化材に対し、樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した。SI12で検出された炭化材の樹種はコナラ属コナラ節で、暦年代（校正年代）はBC7,720-7,570（95.4%）であった。またSI15で検出された樹種はブナ科で暦年代（校正年代）はBC7,320-7,180（68.2%）・BC7,360-7,080（95.4%）という結果となった（自然科学分析に関する詳細は第10節にゆずる）。

### 2-4 遺物（第62～65図）

#### 土器（第62図184～203）

IV層より縄文土器が出土した。ほとんどが小片で口縁部から底部まで復元できるものは見られなかったが、土器の胎土、焼成、施文、調整等の特徴により以下のように分類を行った。

#### 1類（第62図184）

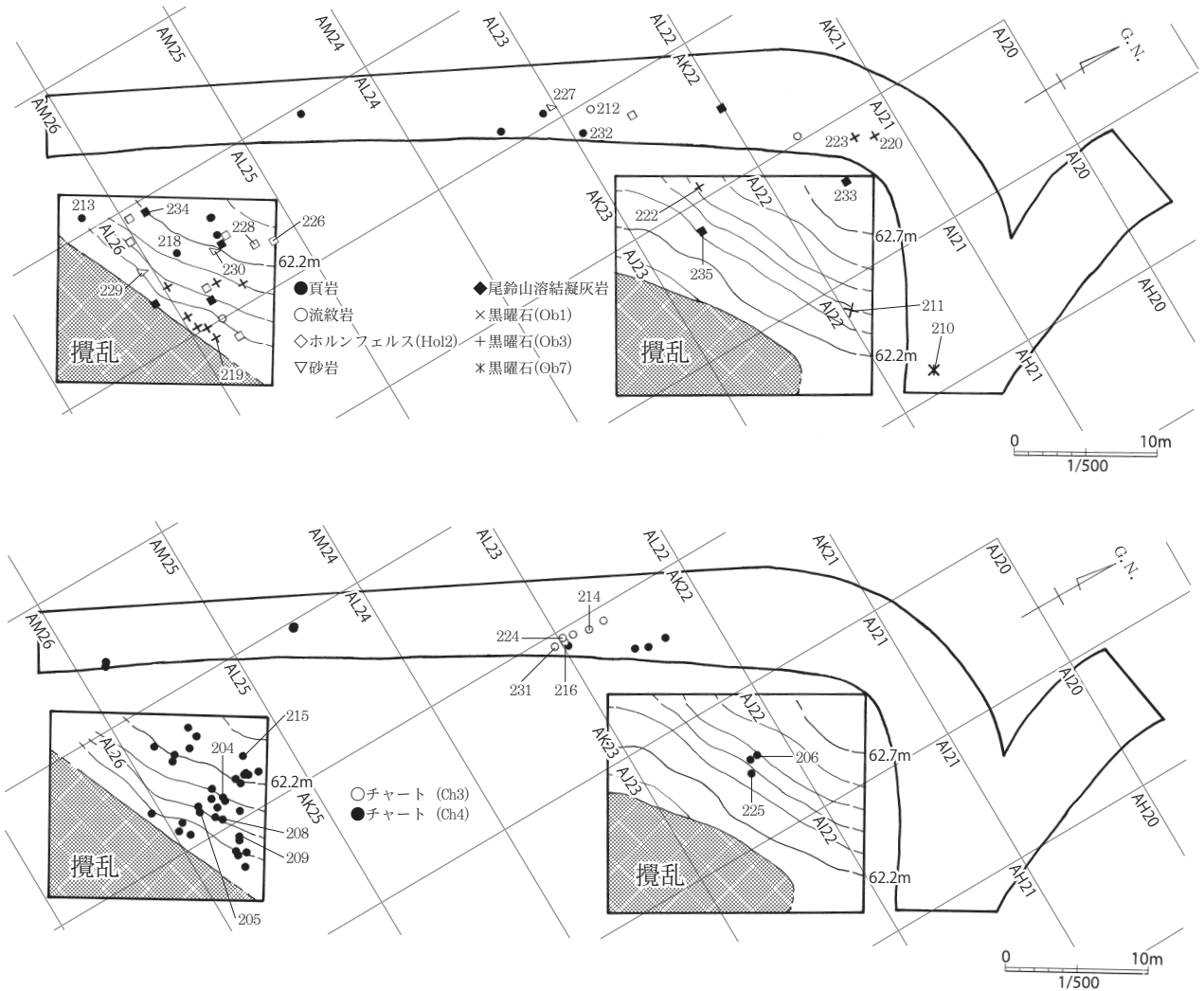
肥厚した内湾する口縁部をもつ、いわゆる桑ノ丸式土器である。明瞭な口縁部が1点のみ出土した。

#### 2類（第62図185～187）

条痕調整の残る一群である。ここに分類される3点は、胎土に直径2mm以下の金色の雲母片を多量に含み、繊維痕が多く見られるという特徴から、同一個体と考えられる。185・187は内面ナデ調整を施すが、186は内面に条痕が残る。

#### 3類（第62図188～190）

山形押型文を施す一群である。188・189は胎土



第61図 縄文時代早期 (C区) 石材別遺物分布図

や色調、内面の条痕調整などの共通性から同一個体の可能性がある。190は花崗岩質の粘土を用いた厚手の胴部片である。

**4類 (第62図191～197)**

楕円押型文を施す一群をここに分類する。

**5類 (第62図198～200)**

器面に変形撚糸文を施すもの (198・199) と、胎土や色調、焼成からこれと同一個体と考えられる底部片 (200) を5類とする。

**6類 (第62図201～203)**

無文の一群である。203はAM25Gr.より出土した深鉢の胴部である。

**石器 (第63～65図)**

**石鏃 (第63図204～211)**

211はいわゆるトロトロ石器である。他の石鏃は基部の挟りが浅いものやU字状に丁寧な挟りを作り

出すものなどが見られる。

**ナイフ形石器 (第63図212・213)**

212は流水痕の見られる小さな谷部分から、213は樹根の脇から出土したため、下層の旧石器時代の遺物が浮き上がったものと思われる。二側縁加工を施した端正なつくりのナイフ形石器である。

**スクレイパー (第63図214・215)**

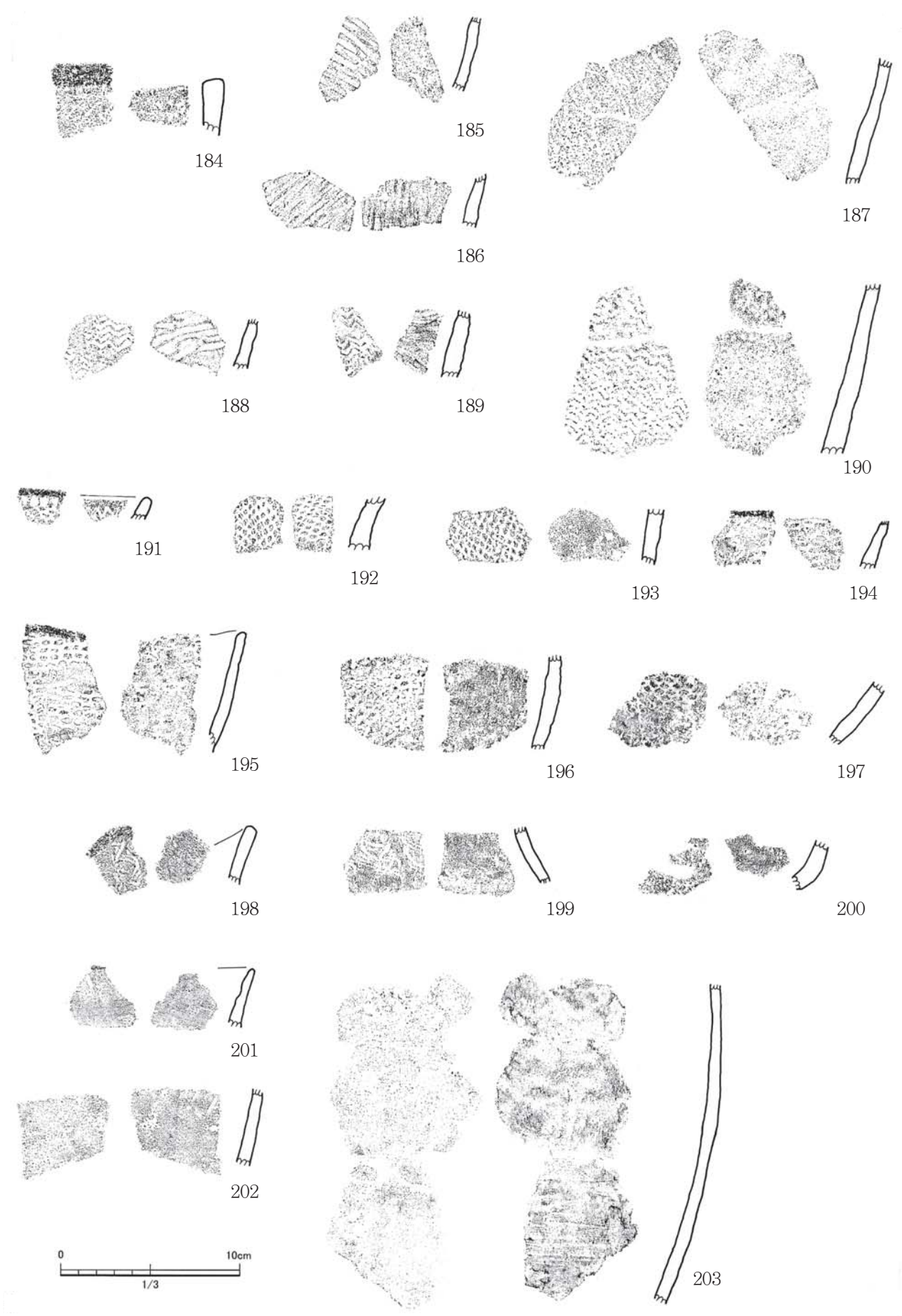
214・215ともにチャート製の小型のスクレイパーである。215は小型の円形搔器で、背面・主要剥離面両面に浅い剥離を丁寧に施している。

**微細剥離ある剥片 (第63図216～220)、剥片 (第63図221～225)**

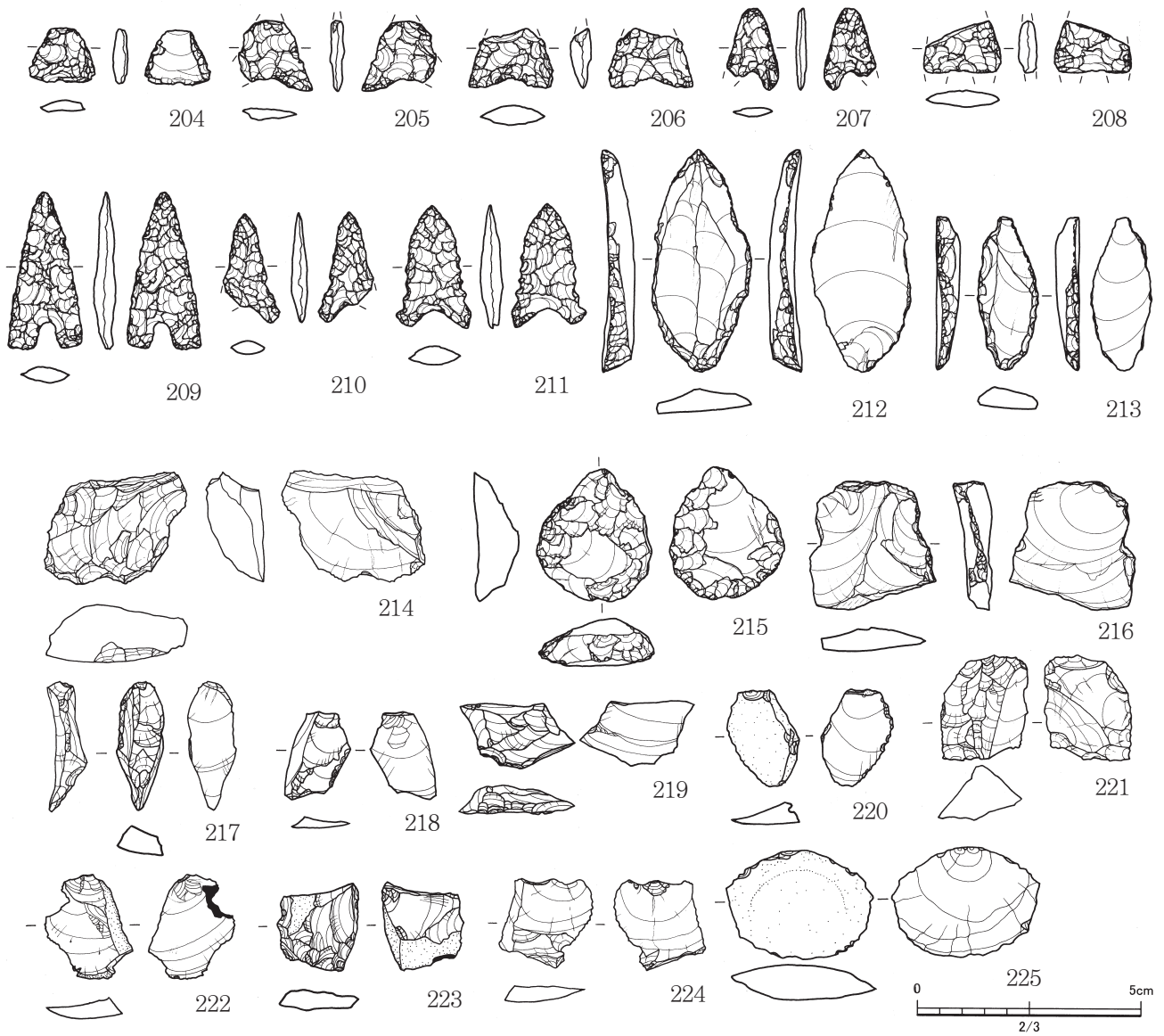
黒曜石 (Ob1) またはチャート製である。220は片面に鮫肌状の自然面を残す。

**二次加工剥片 (第64図226～230)**

227～229は片面に自然面を残す扁平な剥片の縁辺に二次加工が見られる。227は砂岩で、母岩より



第62図 縄文時代早期（C区）土器実測図



第63図 縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図（1）

薄く剥離した平面楕円形の剥片素材である。228も砂岩であるが227とは風化度が異なる。229は両端を欠くが、断面三角形の縁辺に明瞭な二次加工を施す。スクレイパーとしての使用も考えられる。

**石核（第64図231・第65図232）**

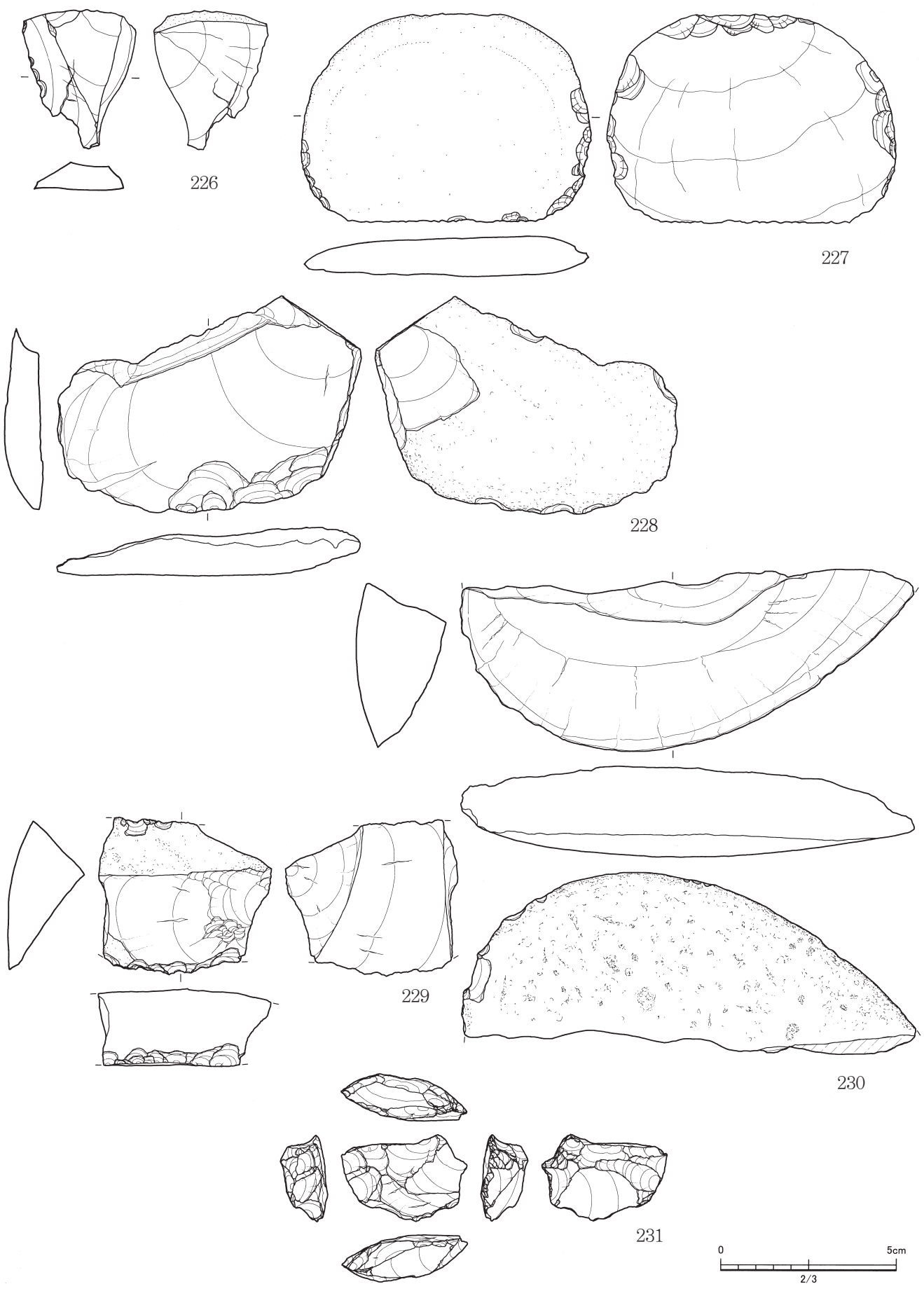
231はチャート（Ch3）、232は頁岩の石核である。

**敲石（第65図233）、磨・敲石（第65図234）、台石（第65図235）**

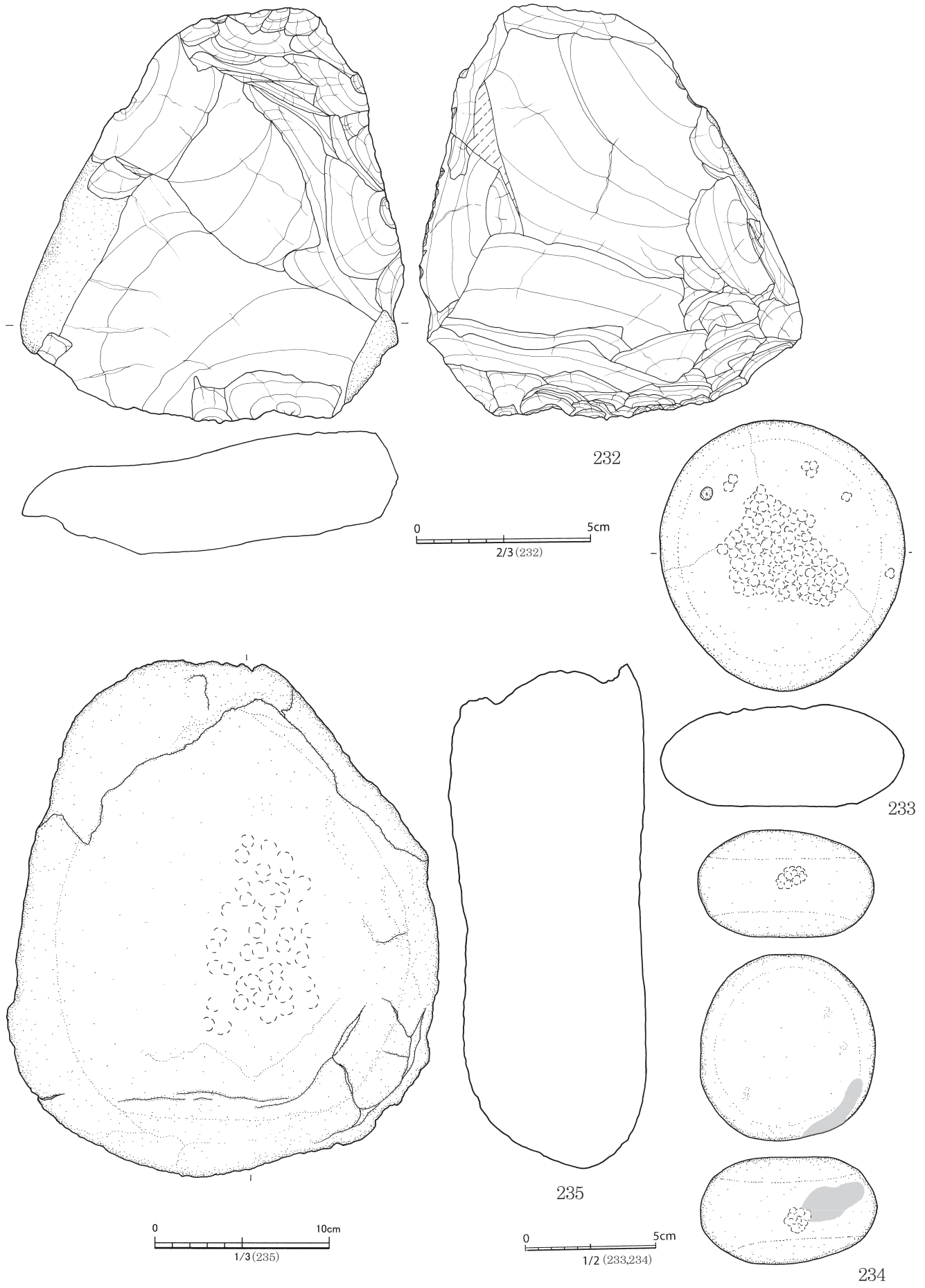
233～235すべて尾鈴山溶結凝灰岩である。233はやや大きめの扁平な自然礫を用いる。片面にのみ明瞭な敲打痕が残る。234は233と比べやや小ぶり、厚みのある円礫素材である。上下2箇所浅浅い敲打痕が見られる。また、敲打痕と重ならない位置にわずかに平坦な磨り面も見られる。

**2-5 遺構と遺物の関係**

散礫中から多数の土器・石器が出土した。これらは礫を廃棄する過程で礫とともに廃棄された可能性がある。また、散礫下から集石遺構の配石部分と思われる遺構も検出されたことから、集石遺構に伴う遺物である可能性も考えられる。散礫からやや離れた位置で検出されたSI14の周辺にまとまって見られた2類の土器（条痕調整の残る一群）は、この集石遺構に伴う可能性がある。金色の雲母片を多く含む胎土が特徴であるが、本遺跡内や周辺の遺跡からは同じような胎土の土器の出土は確認されていない。土器製作のための粘土獲得地に、このような雲母片を多量に含む場所があったことが考えられる。



第64図 縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図（2）



第65図 縄文時代早期（C区）包含層出土石器実測図（3）



第9表 縄文土器観察表

掲載番号	器種	部位	区	遺物番号	出土層位	焼成	色調		文様および調整		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
172	深鉢	胴	B	61	IV	良好	にぶい黄褐色 10YR6/4	褐色 7.5YR6/6	羽状文	ナデ	4mm以下の白色粒を多く含み、2mm以下の赤褐色・透明粒・金色の雲母片を含む、 花崗岩質粘土	桑ノ丸	
173	深鉢	口縁	B	149	IV	良好	明赤褐色 5YR5/6	赤褐色 5YR4/8	ナデ	ナデ	4mm以下の灰色・白色・透明粒を含み、角閃石をわずかに含む、花崗岩質粘土	織維痕	
174	深鉢	胴	B	60+H21 B T8	I	IV	良好	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/8	ナデ	ナデ	4mm以下の灰色・白色・透明粒を含み、角閃石をわずかに含む、花崗岩質粘土	織維痕
184	深鉢	口縁	C	717	IV	良好	明褐色 7.5YR5/6	明赤褐色 5YR5/8	羽状文	ナデ	2mm以下の白色・透明粒を多く含み、角閃石を含む、花崗岩質粘土	桑ノ丸 口唇部ナデ調整	
185	深鉢	胴	C	204-1	IV	良好	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	条痕文	ナデ	3mm以下の金色の雲母片非常に多く含み、2mm以下の透明粒をわずかに含む	織維痕	
186	深鉢	胴	C	204-2	IV	良好	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	条痕文	条痕文	3mm以下の金色の雲母片を非常に多く含み、2mm以下の透明粒をわずかに含む	織維痕	
187	深鉢	胴	C	204-3	IV	良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	条痕文	ナデ	3mm以下の金色の雲母片を非常に多く含み、2mm以下の透明粒を含む	織維痕	
188	深鉢	胴	C	193	IV	良好	褐色 10YR4/6	褐色 10YR4/4	山形押型文	条痕文	3mm以下の灰色粒・2mm以下の白色・赤褐色・透明粒を含み、角閃石をわずかに含む		
189	深鉢	胴	C	175	IV	良好	褐色 7.5YR4/6	褐色 7.5YR4/4	山形押型文	条痕文	3mm以下の灰色粒、2mm以下の白色・赤褐色・透明粒を含み、角閃石をわずかに含む		
190	深鉢	胴	C	979+980	V	良好	褐色 7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	山形押型文	ナデか	8mm以下の白色粒、6mm以下の灰色・褐色粒を多く含み、2mm以下の透明粒と角閃石を含む、花崗岩質粘土		
191	深鉢	口縁	C	176	IV	良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	褐色 7.5YR6/6	楕円押型文	楕円押型文	4mm以下の白色粒を多く含み、1mm以下の灰色・透明粒と角閃石を含む、花崗岩質粘土		
192	深鉢	頸	C	178	IV	良好	明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	楕円押型文	楕円押型文	3mm以下の白色粒、1mm以下の透明粒と角閃石を多く含む、花崗岩質粘土		
193	深鉢	胴	C	229	IV	良好	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	楕円押型文	ナデ	5mm以下の白色粒、3mm以下の灰色粒、1mm以下の透明粒と角閃石を多く含む、 花崗岩質粘土		
194	深鉢	口縁	C	181	IV	良好	赤褐色 5YR4/6	明赤褐色 5YR5/6	楕円押型文の ちナデ	楕円押型文の ちナデ	1mm以下の灰色・白色・透明粒と角閃石を含む		
195	深鉢	口縁～胴	C	189	IV	良好	褐色 7.5YR4/8	褐色 7.5YR4/8	楕円押型文の ちナデ	楕円押型文の ちナデ	1mm以下の灰色・白色・透明粒と角閃石を含む	波状口縁	
196	深鉢	胴	C	186	IV	良好	明褐色 7.5YR5/6	褐色 7.5YR4/4	楕円押型文	ナデ	1mm以下の灰色・白色・透明粒と角閃石を含む		
197	深鉢	胴～底	C	388	IV	良好	褐色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	楕円押型文	楕円押型文	1mm以下の赤褐色・透明粒を含む		
198	壺か	口縁	C	120-1	IV	良好	褐色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	変形燃糸文	ナデ	2mm以下の灰色粒、1mm以下の透明粒を含む	波状口縁	
199	壺	頸	C	120-2	IV	良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	変形燃糸文	ナデ	2mm以下の灰色・白色粒、1mm以下の透明粒を含む		
200	壺か	底	C	119	IV	良好	褐色 7.5YR6/6	明褐色 7.5YR5/6	ナデ	ナデ	3mm以下の灰色・白色粒、1mm以下の透明粒を含む		
201	深鉢	口縁	C	172	IV	良好	褐色 7.5YR4/6	褐色 7.5YR4/6	ナデ	ナデ	3mm以下の赤褐色粒、1mm以下の灰色・白色・透明粒と角閃石を含む		
202	深鉢	胴	C	224	IV	良好	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR7/4	ナデか	ナデ	2mm以下の灰色・白色・透明粒と角閃石を含む		
203	深鉢	胴	C	981+989	V	良好	明赤褐色 5YR5/6	にぶい褐色 7.5YR5/4	ナデ	ナデ	6mm以下の灰色・白色・赤褐色粒、2mm以下の透明粒と角閃石を含む		

俵石第2遺跡

第10表 縄文時代石器観察表

掲載番号	区	遺物番号	出土層位	器種	石材(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	観察所見
175	B2	129	IV	打製石鏃	Ob1	1.37	1.35	0.25	0.30	平面形は正三角形に近い。基部の抉り浅い。
176	B2	655	IV	ナイフ形石器	Sh	3.98	1.72	0.88	4.90	二側縁加工。素材剥片端部を基部に設定。左側縁急斜度加工。右側縁基部に粗い調整剥離。刃部先端の腹面側に微細剥離あり。
177	B2	678	IV	石刃	Sh	6.00	3.10	1.00	21.10	背面に同方向からの剥片剥離面残る。端部にハジケ見られる。
178	B2	65	IV	二次加工剥片	Ryu	7.05	1.76	0.72	5.00	背面に同方向からの剥片剥離面残る。主要剥離面端部に両側縁から細かな二次加工施す。上部欠損。
179	B2	138	IV	二次加工剥片	Hol2	2.80	4.10	1.20	13.70	不定形な幅広剥片の背面側に上・下部より急斜度加工施す。風化激しい。
180	B2	155	IV	二次加工剥片	Sh	4.90	8.80	2.10	97.60	円礫素材。背面側の右側縁・主要剥離面側の右側縁に二次加工あり。
181	B2	48	IV	二次加工剥片	Ch4	2.50	3.00	0.70	5.60	多方向からの浅い剥離面を背面に残す。
182	B2	136	IV	微細剥離剥片	Ryu	6.60	4.32	1.31	34.10	寸詰りな不定形剥片。背面に同方向からの剥片剥離面残る。両側縁に微細剥離見られる。
183	B2	133	IV	石核	Ryu	3.51	7.67	2.65	56.00	打面転移剥片剥離を行うが質が粗い。被熱によるものと思われるハジケあり。大ききの割に質量が軽い。
204	C5	219	IV	打製石鏃	Ch4	1.31	1.86	0.44	1.00	先端部尖らず裏面ほぼ調整剥離されない。基部の浅い抉り見られる。
205	C5	221	IV	打製石鏃	Ch4	1.56	1.63	0.31	0.50	先端部・片脚欠損。厚さ薄い。基部の抉りゆるやかな弧状を呈する。
206	C4	82	IV	打製石鏃	Ch4	1.20	1.44	0.32	0.60	先端部欠損。基部の抉りあまり深くなくゆるやかな弧を描く。
207	C6	-	I	打製石鏃	Ch4	1.79	1.13	0.22	0.40	二等辺三角形で厚み薄い。基部の抉り深い。先端部・脚端部丸みを帯び、脚部やや内湾する。片脚欠損。
208	C5	398	IV	打製石鏃	Ch4	1.14	1.71	0.40	0.80	先端部・脚部欠損。明瞭な基部調整見られる。
209	C5	400	IV	打製石鏃	Ch4	3.50	1.62	0.47	2.00	二等辺三角形状。逆U字状の深い基部の抉り施し、脚端部は直線状となる。
210	C6	684	IV	打製石鏃	Ob7	2.42	1.23	0.35	0.60	基部の抉り深く、身は細身で脚部外側に張り出す。
211	C4	77	IV	トロトロ石器	Ob3	2.73	1.65	0.49	1.30	柳葉状の丸みのある胴部。基部の抉りやや深く、脚部外側に張り出す。
212	C6	697	IV	ナイフ形石器	Ryu	4.92	2.19	0.71	6.90	二側縁加工。縦長剥片素材で打面側を基部に設定。先端部両側縁にも調整剥離施す。
213	C5	683	IV	ナイフ形石器	Sh	3.39	1.33	0.52	2.50	二側縁加工。縦長剥片素材で剥片端部を基部に設定。左側縁と右側縁に調整剥離。刃部に微細剥離見られる。
214	C6	695	IV	スクレイパー	Ch3	2.45	3.15	1.25	8.50	厚手の剥片素材。背面に細かな刃部加工施す。
215	C5	211	IV	スクレイパー	Ch4	2.93	2.53	1.02	6.60	円形に近い形状。ほぼ全周にわたる調整剥離が背面・主要剥離面両面に見られる。
216	C6	702	IV	微細剥離剥片	Ch3	2.85	2.79	0.85	6.10	背面に多方向からの剥片剥離面残る。右側縁に微細剥離あり。
217	C4	89	IV	微細剥離剥片	Ryu	2.85	1.05	0.80	1.70	調整剥片。左側縁の打面側に微細剥離見られる。
218	C5	414	IV	微細剥離剥片	Sh	2.00	1.50	0.25	0.90	調整剥片。右側縁下部に微細剥離見られる。
219	C5	410	IV	微細剥離剥片	Ob1	0.14	0.25	0.60	1.80	不定形剥片。剥片端部に微細剥離見られる。
220	C6	972	IV	微細剥離剥片	Ob1	2.10	1.60	0.50	1.40	背面に鮫肌状の自然面残る。左側縁に微細剥離見られる。
221	C6	975	IV	剥片	Ch3	2.35	1.95	1.20	5.00	質粗い。背面に剥片剥離面残る。
222	C4	83	IV	剥片	Ob1	2.30	1.95	0.60	1.20	背面に剥片剥離面と鮫肌状の自然面残る。
223	C6	973	IV	二次加工剥片	Ob1	1.90	1.80	0.45	2.00	剥片端部・左側縁に二次加工見られる。鮫肌状の自然面両面に残る。
224	C6	703	IV	剥片	Ch3	2.00	2.05	0.40	1.30	背面に剥離面あり。
225	C4	81	IV	剥片	Ch4	2.40	3.30	0.80	7.50	円礫素材で背面自然面残る。
226	C5	234	IV	二次加工剥片	Hol2	0.39	0.32	0.80	12.40	自然面を打面とする。背面に剥離面あり。左側縁に二次加工施す。
227	C6	705	IV	二次加工剥片	Sa	5.90	8.20	1.10	82.50	背面の左右側縁、裏面の上部・左右側縁に二次加工あり。
228	C5	212	IV	二次加工剥片	Hol2	6.15	8.58	1.38	65.70	不定形剥片素材。背面下部に二次加工見られる。
229	C5	200	IV	二次加工剥片	Sa	4.44	4.88	2.20	42.60	背面に剥離面と自然面見られ断面三角形となる。両側縁に二次加工あり。
230	C5	179	IV	剥片	Sa	5.19	12.95	2.59	165.80	自然面と主要剥離面からなる鋭い弧状の縁辺をもつ。
231	C6	704	IV	石核	Ch3	2.44	3.57	1.32	10.10	多方向からの剥片剥離面を残す小型の石核。
232	C6	700	IV	石核	Sh	11.85	11.00	3.90	602.80	大型の石核。多方向からの大小様々な剥片剥離面見られる。
233	C4	79	IV	敲石	Os	10.40	9.30	3.90	516.10	扁平な面の片面に敲打痕見られる。
234	C5	2	IV	磨・敲石	Os	7.10	6.75	4.10	277.60	稜線上の対の部分に浅い敲打痕見られる。うち1箇所の脇には磨面もわずかに見られる。
235	C4	20	IV	台石	Os	29.70	24.70	11.20	1280.00	平坦面の片面に明瞭な使用痕見られる。

## 第8節 弥生時代の遺構と遺物

B・C区において、弥生時代の遺構や遺物が検出された。以下、調査区ごとに報告する。

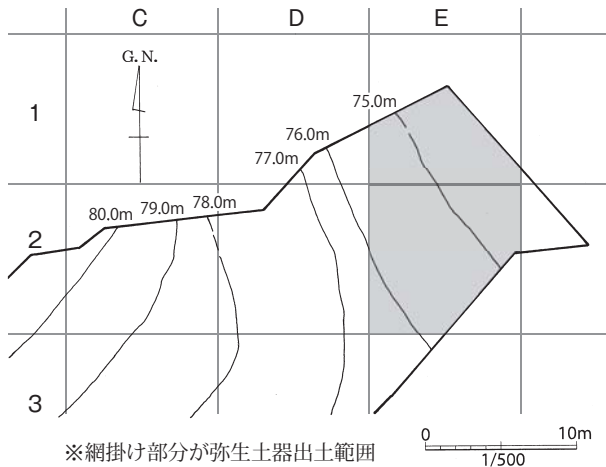
### 1-1 B区 概要

B区では、当該期の遺構は検出されなかったが、調査区北側の斜面部分に堆積したⅡ層の二次堆積層(Ⅱa層)中から弥生土器の小片が出土した。

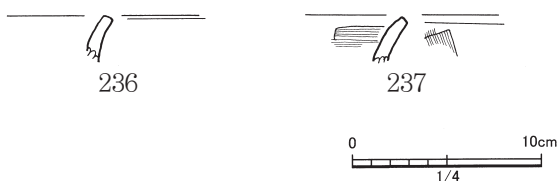
### 1-2 遺物(第67図)

E1・E2Gr.のⅡa層より弥生土器片23点が出土した(第66図)。Ⅱa層はK-Ahをブロック状に含むⅡ層(クロボク層)の二次堆積層であり、調査区北側の斜面部分にのみ見られる。そのためⅡa層より出土する遺物はグリッド単位で取り上げを行った。土器片はいずれも小片であり摩耗しているが、部位や調整方法の観察できる2点を図化掲載した。

236・237は甕の口縁部である。236は内外面とも黄橙色で、口唇部を含め丁寧な横方向のナデが施される。237は板状工具を用いてナデ調整を施す。色調は黄褐色を呈する。



第66図 B区弥生土器出土位置



第67図 弥生時代(B区)土器実測図

### 2-1 C区 概要

**検出された遺構と遺物** C区で検出された遺構は不明遺構2基(SZ1・SZ2)である。基本土層のⅡ層からは弥生土器の小破片が出土した。

**調査区の細分** C区は細長い調査区であった関係で、5mごとに区画し、南からa~l区と細分して掘り下げを行った(第68図)。

**土層堆積の状況** 基本土層のⅡ層は弥生時代の遺物を包含する堆積層であり、C区でも確認できた。

C区周辺におけるⅡ層とその前後層の堆積状況について報告する(第5・6・68図)。

Ⅲ層堆積以前は、f区付近に小さな谷地形が形成される(第68図)。しかし、あまり明瞭な谷筋ではなく深さもないため、水はけも悪い様子である。

このf区付近の谷地形と調査区北西側から続く傾斜の大きい斜面によって、Ⅲ層は谷に向かって鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)の二次堆積層として形成されたものと考えられる。Ⅲ層がf区付近に最も厚く堆積することや、Ⅲ層の堆積が北側ほど徐々に薄くなっていくのはこうした地形的要因によるものといえる。

Ⅲ層の堆積によって谷部分は埋没し平坦化し、その上にⅡ層が調査区全面にわたって堆積する。このⅡ層は弥生時代の遺物を包含する層である。特にi・j区で弥生土器の小破片が散漫に出土した。

なお、h区以南は現代の豚舎建設により攪乱を受けている。このように弥生時代の遺物の出土は、C区の中でも西側の細長い部分の調査で認められた。

### 2-2 不明遺構(SZ)(第67~76図)

C区では不整形な細長い土坑ないし溝状の遺構が2基検出された。完形の土器や夥しい量の土器片が出土する遺構も認められた。

この2つの遺構は、平面形や断面形状、底面に地下水が流れていることから人為的に掘りこまれた遺構というよりは自然遺構とも考えられるので、不明遺構(SZ)として報告する(SZ1・SZ2)。

次項にてSZ1(第69~75図)とSZ2(第76図)の調査結果を報告する。(橋口)

### 2-3 SZ1 (第69～70図)

**位置** SZ1はC区の東端(AI20・21Gr.付近)にある。SZ1の西側にはSZ2が交差するように隣接する(第68図)。

SZ1・2は、南東に向かって緩やかに下る場所に位置する。ちょうど荒崎山の山裾と上町川の河岸段丘面との境付近にあたる。

**遺構検出面** SZ1・2は、ともに表土直下のIV層面で検出された。このIV層面上には黒褐色や灰褐色のシルト質土がヤツデ状に広がっており、特に黒味の強いシミ状の部分を精査した結果、2箇所帯状に検出されたので、検出順にSZ1・2と呼称した。SZ1・2周辺のIV層は、C区内の他の場所と異なり、転石(巨礫塊)を含む層である。

**規模と構造** 掘り込み面は不整形な長楕円形を呈し、長さ約8m、幅1.5～2.5m、深さは約1.2mを測る。北西-南東方向が遺構の主軸となる。

壁面の立ち上がりは直立気味な箇所や階段状またはオーバーハングする箇所もあり一様ではない。

東側隅の壁面はトンネル状となり、遺構の底面から湧き出した地下水が伏流水となってさらに東側方向へ貫流する。このトンネル状部分は精査の際に落盤する危険性が高いため、地山面を切開する調査に切り替えた。しかし、湧水が著しい関係で遺構全体の構造の把握が困難であった。

遺構の底面は平坦で、部分的に巨礫が露出した状態である。東側に向けては緩やかに傾斜する。この底面からは地下水が湧き出していた。その湧水量は南東隅にあるトンネル状の部分をせき止めると、一晚で1m近く水が溜まるほどであった。

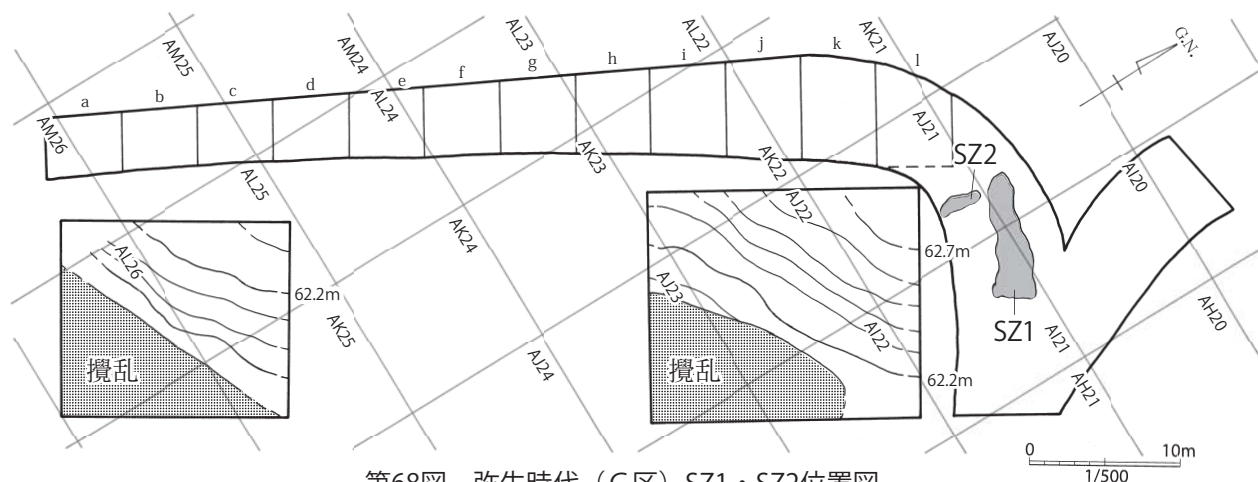
**土層堆積状況** SZ1の土層堆積を観察するために2箇所ベルトを設定した(第69図A-A'・B-B'間土層断面図)。遺構全体の埋土は、黒褐色シルト質土を主体とし、これに灰褐色・褐灰色・灰黄褐色シルト質土が間層状に堆積する。また、地山由来の橙色・明黄褐色土(K-Ah)や暗褐色土のブロックが混入する土層も認められた。

また、SZ1の中央部分(後述のB区)の埋土には礫が含まれており、埋土の中層～下層を中心として拳大～人頭大の礫を包含していた(第69図A-A'間土層断面図6・7・9層)。9層の堆積後に、土器と礫を多く包含する埋土(5～7層)が南側より連続して堆積したことが読み取れる。特に7層と遺構底面にかけては、後述するように完形の土器や土器片の集積が認められた(土器集中区a・b)。

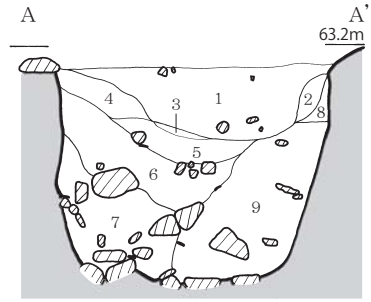
一方、遺構の東側部分(後述のC区)は、北側方向からの土層堆積が主となる。弥生土器や礫の包含は、ほとんど見られない。北側壁部分は、基本土層のIV層にあたる土と他の土が混ざったようなマール状の埋土層が認められた(第69図B-B'間土層断面図13層)。この層は地山層の自然作用(凍結や乾燥)による崩落土と考えられる。

**遺物の取り上げ** SZ1を平面的に3分割した。すなわち、A-A'間土層断面ラインより西側を「A区」、A-A'とB-B'ラインを結ぶ区間を「B区」、B-B'ラインより東側を「C区」とした(第69図)。

さらに、遺構埋土を上層(A-A'間土層の1～4・8層、B-B'間土層の1～3層)、中層(A-A'の5・6層、B-B'の4～9層)、下層(A-A'の7・9層、B-B'の10・11層)と区分して取り上げた(第69図)。



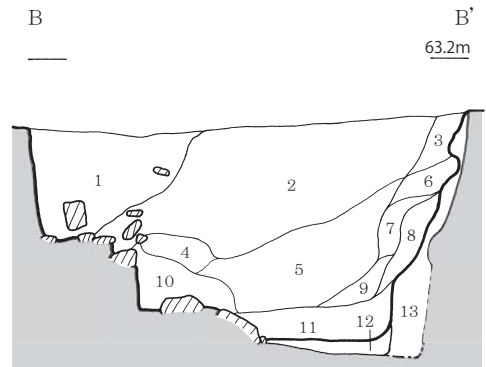
第68図 弥生時代(C区)SZ1・SZ2位置図



A-A'間土層注記

- 1 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue7.5YR3/1)  
しまりあり細粒。Φ10mm～拳大の礫を含む。  
Φ3mmの黒色ブロック部分的に含む。弥生土器包含。
- 2 埋土：灰褐色シルト質土 (Hue7.5YR4/2)  
しまりあり細粒。Φ1mmの小礫ごく少量含む。
- 3 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue10YR4/1)  
しまりあり細粒。
- 4 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまりあり細粒。Φ1mmの小礫ごく少量含む。  
明赤褐色の粒子全体的にごく少量含む。
- 5 埋土：灰黄褐色シルト質土 (Hue10YR4/3)  
しまりあり細粒。Φ5mm以下の明黄褐色ブロック含む。  
Φ1mmの白色粒子ごく少量含む。弥生土器多く包含。
- 6 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR4/1)  
しまりあり細粒。粘性5よりやや強い。  
拳大の礫多く含む。弥生土器多く包含。
- 7 埋土：黒色シルト質土 (Hue10YR2/1)  
しまり9よりやや強く粘性ややあり。  
拳～人頭大の礫多く含む。弥生土器多く包含。
- 8 灰褐色シルト質土 (Hue7.5YR4/2)  
しまり9よりやや強く粘性あり。マーブル状。  
B-B'間土層断面図の13にあたる。
- 9 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまり8より弱い。拳大の礫多く含む。  
部分的に褐色粒子集中面所あり。

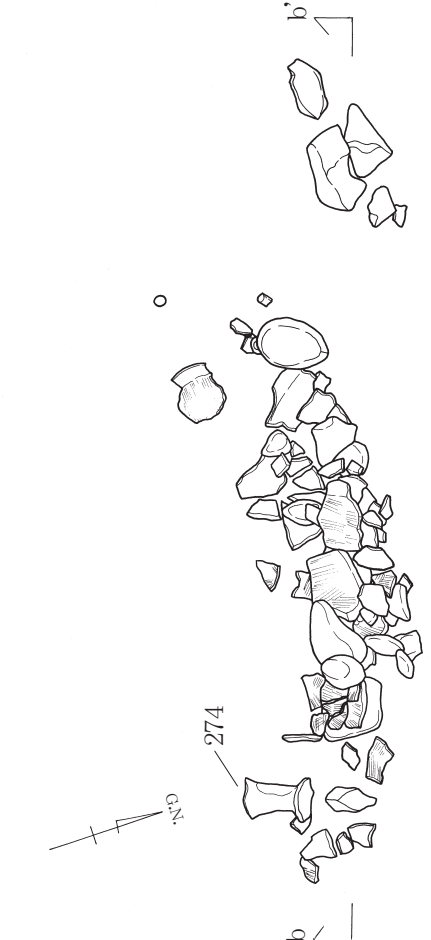
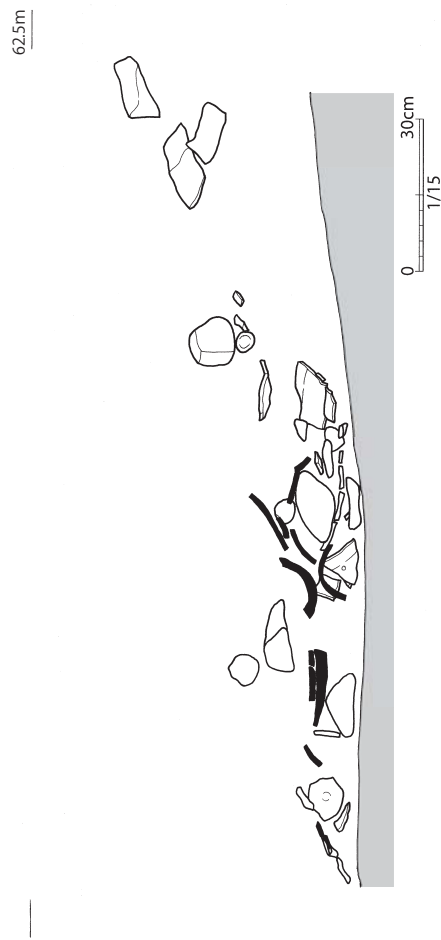
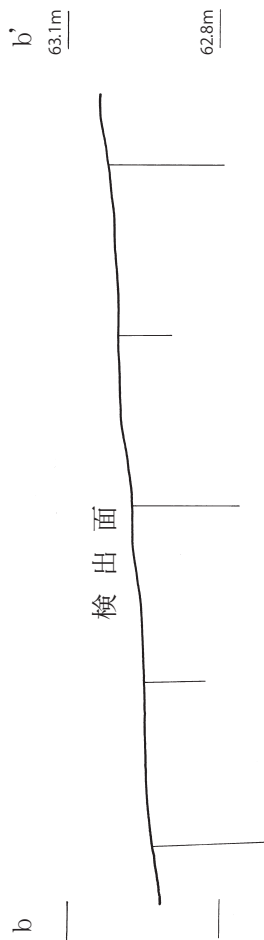
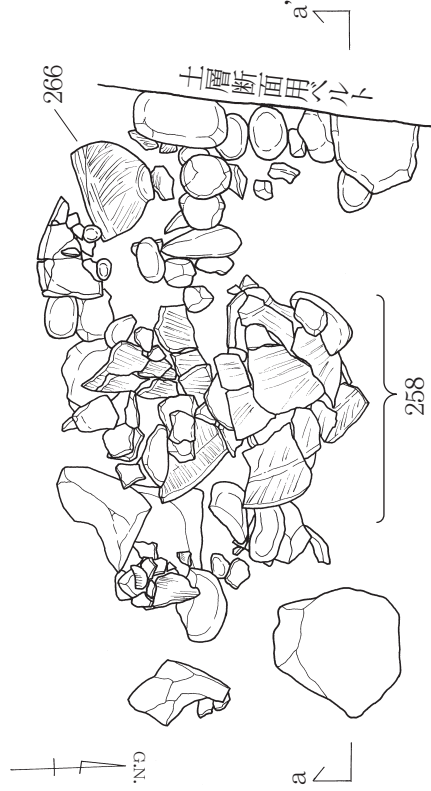
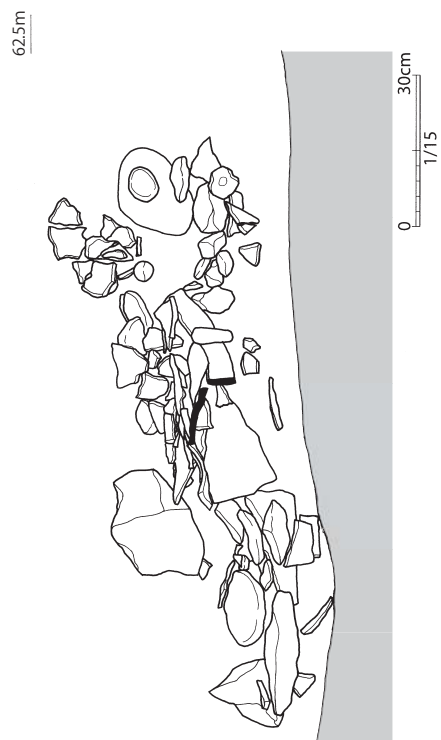
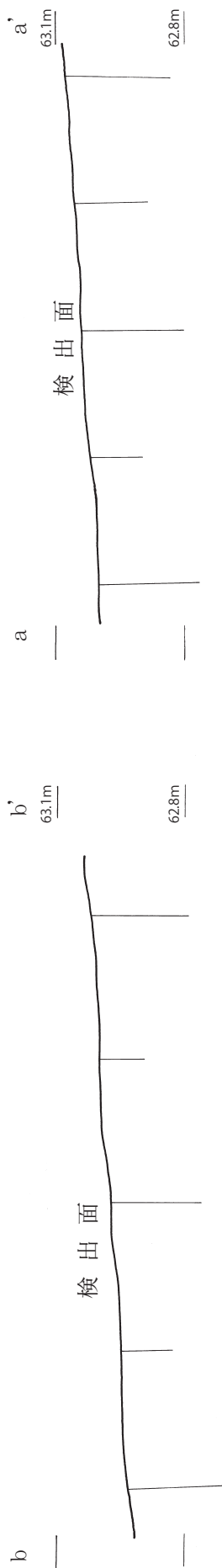
※土層断面図の黒塗り部分は土器の断面



B-B'間土層注記

- 1 カクラン：黒褐色シルト質土 (Hue5YR1/3)
- 2 埋土：黒色シルト質土 (Hue7.5YR2/1)  
しまり粘性ややあり細粒。Φ10mmの小礫ごく少量含む。
- 3 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR3/1)  
しまり粘性ややあり。  
Φ1～2mmの暗褐色ブロック全体的に含む。
- 4 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR3/1)  
しまり2より弱く粘性2より強い。粒子2よりやや粗い。
- 5 埋土：黒色シルト質土 (Hue10YR2/1)  
しまり粘性4に同じ。Φ10mmの小礫含むが2より少ない。
- 6 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue7.5YR3/1)  
しまりややあり粘性2よりやや強い。Φ10～30mmの  
褐色ブロック・Φ10mmの黒色ブロック北側に多く含む。
- 7 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)  
しまり・粘性・粒子6に同じ。褐色粒子全体的に含む。
- 8 埋土：灰黄褐色シルト質土 (Hue10YR4/2)  
しまり・粘性・粒子7に同じ。13が削られてきた層か。
- 9 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue7.5YR3/1)  
しまり粘性11に同じ。Φ50mmのK-Ahブロックを含む。
- 10 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR4/1)  
しまりなく粘性あり。粒子粗い。  
一部Φ10mmの褐色ブロック含む。一部褐色粒子あり。
- 11 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまり5より弱く粘性は強い。粒子粗い。
- 12 にぶい黄褐色砂利層 (Hue10YR4/3)  
しまりなく粒子粗い。砂利層。
- 13 灰褐色シルト質土 (Hue7.5YR4/2)  
マーブル状。地山層が自然作用で割れて堆積した層か。

第69図 SZ1実測図



土器集中区 b

土器集中区 a

第70図 SZ1土器集中区 a・土器集中区 b 実測図 (平面図・見通し断面図) (平面図・見通し断面図) ※見通し断面図の黒塗り部分は土器の断面

**遺物出土状況** 遺物（土器）は、SZ1のB区において集中的に出土した。B区では遺構の南壁側部分に堆積する埋土の中層（第69図A-A'間土層断面図5・6層）部分から出土し始め、特に下層（7層）から遺構底面にかけては、完形の土器や土器片が礫を伴って数多く集中して出土した。この土器の集中箇所は、大きく2つに区分される（第69図）。この土器の集中箇所を西側から土器集中区a、土器集中区bとして出土状況を図化記録した（第69・70図）。

埋土下層から土器集中区a・bにおいては、土器と大小様々な大きさの礫が混在した形で出土した。

個々の土器の出土状態に着目すると、破片化して散乱した状態や完形の状態、さらに完形に近い土器が土圧等で押し潰された状態など様々である。

特に、甕は破片化して平面的に散乱した状態（238・245・242）、完形品（241・243）や土圧により押し潰された状態（254～258）で出土したものがある。壺では完形に近い形（261・262）や土圧により押し潰された状態（264・265）で出土したものがある。また高坏は、遺構底面付近に破片化した状態（273・276）、さらに器台は完形に近い状態（279）で出土した。

このようにB区においては、土器と礫と一緒に連続的に投棄されたと判断される（第70図）。

なお、B区の北側壁付近では拳大～人頭大の礫がまとまって見られたが土器はほとんど伴っていない。

A区では下層（第69図A-A'間土層断面図7層）中から土器片が少量出土した。拳大の礫のまとまりも認められる（第69図）。C区では検出面に近い位置から土器片が少量出土したに過ぎない。

## 2-4 SZ1出土遺物（第71～75図）

**出土遺物の内容** 出土遺物は弥生土器のみであり、石器や鉄器、有機物等は検出されなかった。

出土した土器片を接合した結果、器形や全体形の判明したのは48点で、すべて図化掲載した。それ以外は接合の不可能な小破片である。

**器種** 甕類（238～260）、壺類（261～265）、鉢類（266～271）、高坏類（272～276）、器台（277～279）、甑（280）、杓子形土製品（281）、小型土器類（282～285）と分類される。

**出土位置と接合状況** SZ1の48点の弥生土器の出土位置（層位）について、接合作業の結果を踏まえ

ると下記のようにグループ化できた。

### A区

中層・甕（244）、小型土器（283）  
下層・壺（261）、杓子形土製品（281）  
下層+B区下層・甑（280）  
下層+埋土中・鉢（270）

### B区

中層・甕（249）  
中・下層・器台（279）、小型土器（285）  
下層・甕（241・248・253・259）、壺（265・262）、鉢（269）、高坏（272・273）、小型土器（282）  
土器集中区a・甕（239）、鉢（266）、小型土器（284）  
土器集中区a+A・B区中・下層・壺（263）  
土器集中区a+A区中・下層・甕（250）  
土器集中区a+A・B区下層・高坏（275）、器台（278）  
土器集中区a+A区中・下層+B区上～下層・甕（257）  
土器集中区a+B区中・下層・甕（245）  
土器集中区a+B区下層・甕（252）  
土器集中区B・甕（240・254）、鉢（268）  
土器集中区b+A区中・下層+B区下層・甕（242）  
土器集中区b+B区上～下層+C区・高坏（274）  
土器集中区b+B区中・下層・高坏（276）  
土器集中区b+B区下層・甕（238・243・255）、鉢（271）  
土器集中区a・b+A区上層・甕（247）  
土器集中区a・b+A・B区下層・甕（258・260）、壺（264）  
土器集中区a・b+B区中・下層・甕（246・256）  
土器集中区a・b+B区下層・器台（277）、鉢（267）

### C区

一括・甕（251）

**各器種の概要** 土器の詳細については観察表にゆずることとし、各器種の概略と特に言及すべき土器の特徴について以下に記載する。

### 甕（第71図238～第73図260）

図化掲載した甕は23点である。口径から小型（15cm以下：238～240）、中型（15～20cm前後：241～250）、大型（25～30cm前後：254～260）に細分される。なお251～253は中・大型甕の底部である。

**小型甕**（238～240）のうち、**238**は図面上で復元された。屈曲度のやや弱い「く」の字口縁部と底面の上げ底となる底部を有する。

**中型甕**（241～250）のうち完形に近い状態で出土したのは241・243・245である。

241・242・244・249・250は短く屈曲する口縁部を持つ一群である。胴部最大径が口径を上回る。小型甕の240も同タイプとなる。241は口縁部の根元に指一本分の凹みが一週する。底部は厚い平底を呈する。242は内湾気味の口縁部に僅かな上げ底状の底部を有する。244の底部は尖底ないし丸底気味である。

240・243・248は、口径と胴部最大径が近似する一群である。243は口縁部の端部が下方に垂下する。この口縁部外面は胴部から連続する刷毛目調整が施される。底部は接地面の広い平底である。

245～247は口径が胴部最大径よりも大きい一群である。245の口縁部付け根には指一本分の凹みが一週し、底部は接地面の少ない平底である。外面には焼成時の破裂痕跡が随所に認められる。247は口縁部の屈曲は弱く、底部は厚手で円盤状の平底となる。外面には平行方向のタタキ調整が残る。

大型甕(254～260)のうち、254～258は接合作業の結果、完形または略完形となった。大型甕の外面は、平行タタキを刷毛目調整にてかき消されるが、254の胴部下半、255・258の外面全体はタタキ調整痕がそのまま残る。

器形的には大きく2タイプにわかれる。254～257は、倒卵形の胴部に短く屈曲する「く」の字口縁部がつくタイプである。口径は胴部最大径とほぼ等しいか、それよりも小さい。胴部最大径は胴部の中位付近か、やや肩部よりにある。256の底部は接地面の少ないわずかな平底を呈するが、254・255・257は底部部分を欠失しており、その形状は不明である。ただし、254の底部は252、255の底部は253となる可能性がある。

258は、胴部最大径が口縁部の根もと付近にあり、体部が逆三角形を呈するタイプである。口径は胴部最大径よりも大きい。底部形態は平底となる。外面はタタキ調整が施されるが、粘土紐の接合痕が明瞭に認められる。なお、258の胴部中位に炭化物が薄い層状に付着していた。土器使用時の煤と考えられる。この煤について放射性炭素(AMS)年代測定を実施したところ、AD25-85(68.2%)・AD1-130(95.4%)という結果が得られた。259は口縁部のみである。258よりも口縁部の屈曲度が弱くなった形状を呈する。

260は、口縁部と底部を失い胴部のみである。口縁部の根元付近が残存しているので、本来は258に近い全体形であったと考えられる。

## 壺(第73図261～265)

壺は5点出土している。法量的には、小型(261～263)、中型(264)、大型(265)に区分される。

261は倒卵形の胴部と丸底気味の底部を有する。口縁部のみを欠失する以外は完全な形で遺存する。また、器表面は風化が進むが、丁寧な刷毛目調整の痕跡が認められる。

262・263は胴部が扁球形状となる壺である。口縁部根元のしまりが強いので長頸壺の部類といえる。262の口縁部は中途部分から直立気味となり、端部は水平となる。内外面の刷毛目調整の痕跡は、工具を強く器面に押し当てているため明瞭に観察される。

263は262よりも口縁部が長く発達している。口縁部端部付近は緩やかに外反し、その端部は丸くまとまる。土器の発色は赤褐色で精良な胎土である。外側の器面には丁寧なヘラミガキ調整が施される。

264の口縁部の端部は面取りされる。底部は平底である。胴部最大径は中位にあり、大きく膨らんだ胴部をなす。外面には刷毛目調整のあとヘラミガキ調整が施されている。

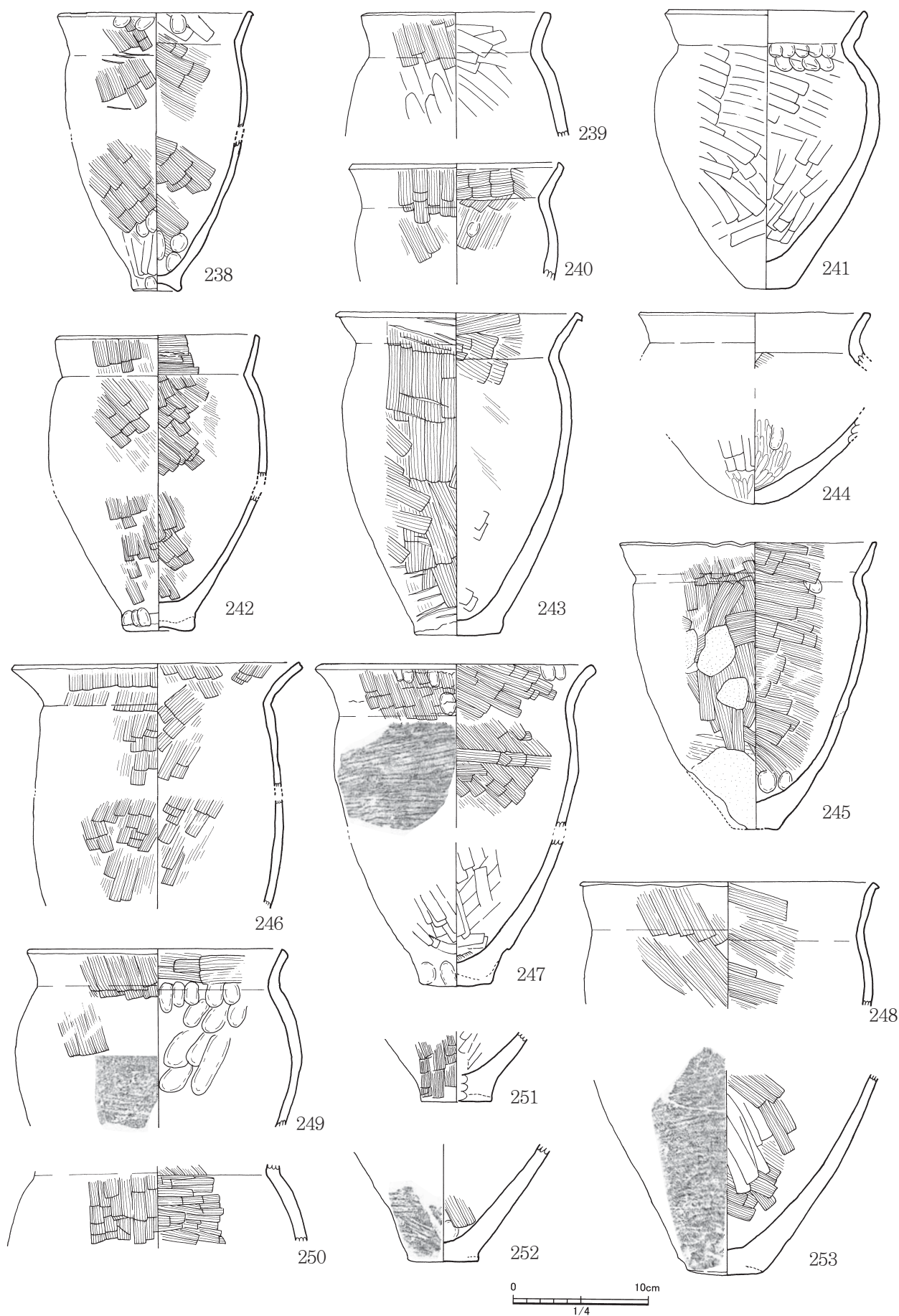
265は大型の複合口縁壺である。袋状の口縁部に球形の胴部がつく。口縁部と胴部の境には、断面三角形の貼付突帯が1条巡る。口縁部の端部は外側に張り出すように立ち上がる形状となる。口縁部の外面には2段構成の櫛描波状文が施文され、口縁部の屈曲部分には沈線が2条巡る。265の底部は図化掲載していないが、木葉痕を持つ平底である。

## 鉢(第74図266～271)

鉢は6点出土した。266は口径と器高が近似し、丸みを帯びた体部に直立する口縁部がつく。器形的特徴から浅鉢とみなされる。外面は刷毛目調整後に粗いヘラミガキ調整が施される。内面は縦方向のヘラミガキが密に施される。胎土は263と類似する。

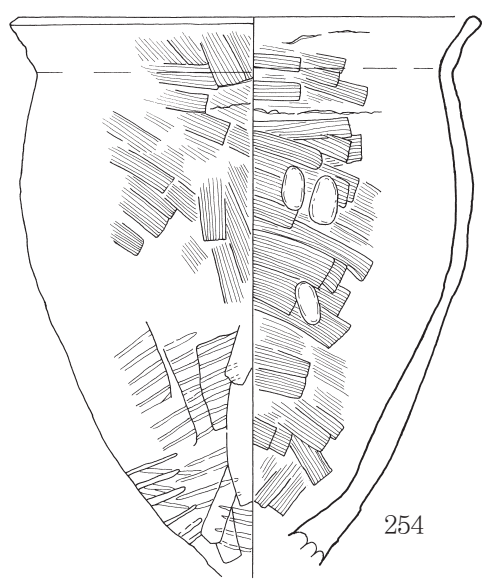
267は体部大半を失う。外面にヘラミガキ調整のある深鉢と考えられるが、小型の壺ともみなされる。

268は小型品で体部上半を失うがエッグカップ状の深鉢である。269は上げ底状の底部側面に貫通する穿孔が1箇所認められた。甕の底部とも考えられる。270は底径の小ささから、268と同様な器形の深鉢と考えられる。271は大きく外に張り出す平底を呈する。大型の鉢の底部と考えられる。

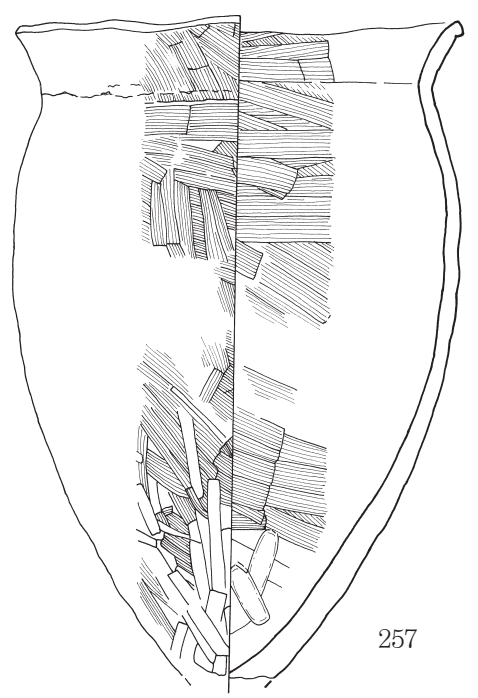


第71图 SZ1出土 弥生土器实测图(1)

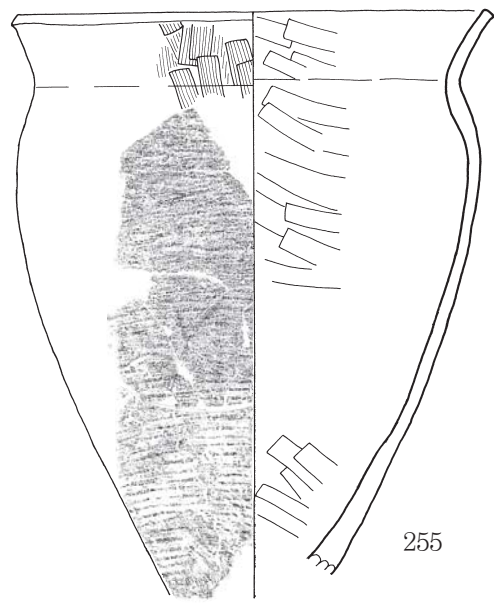




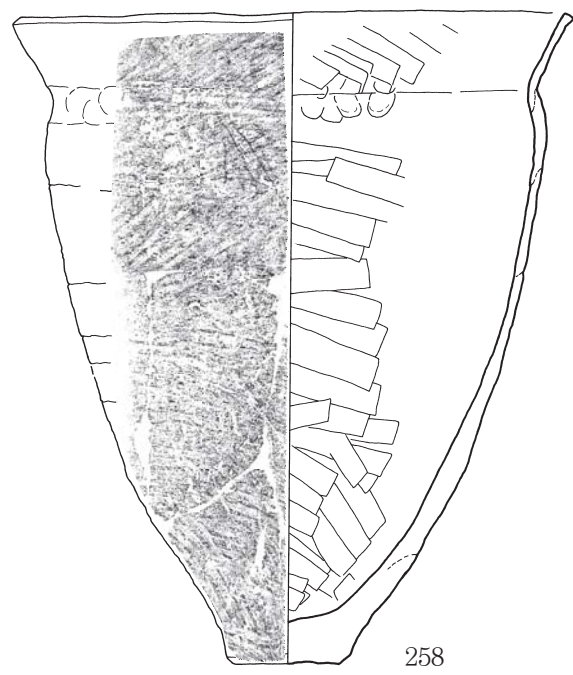
254



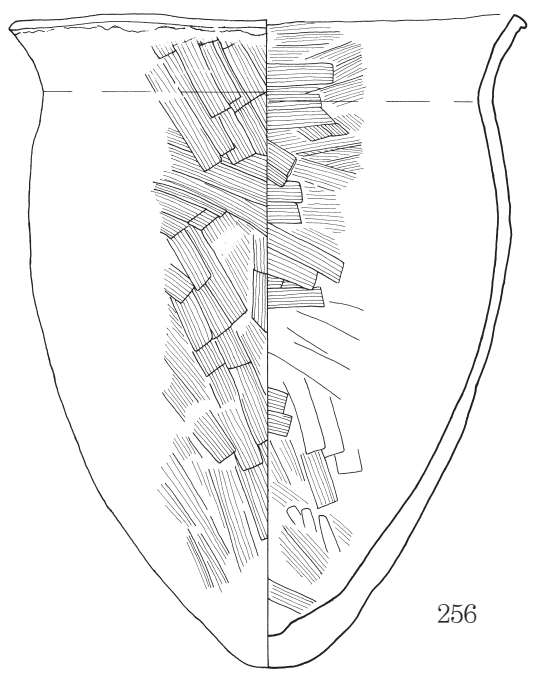
257



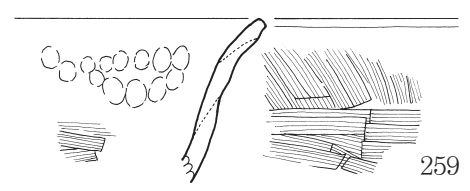
255



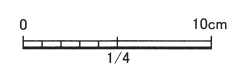
258  
※自然科学分析試料 No.3



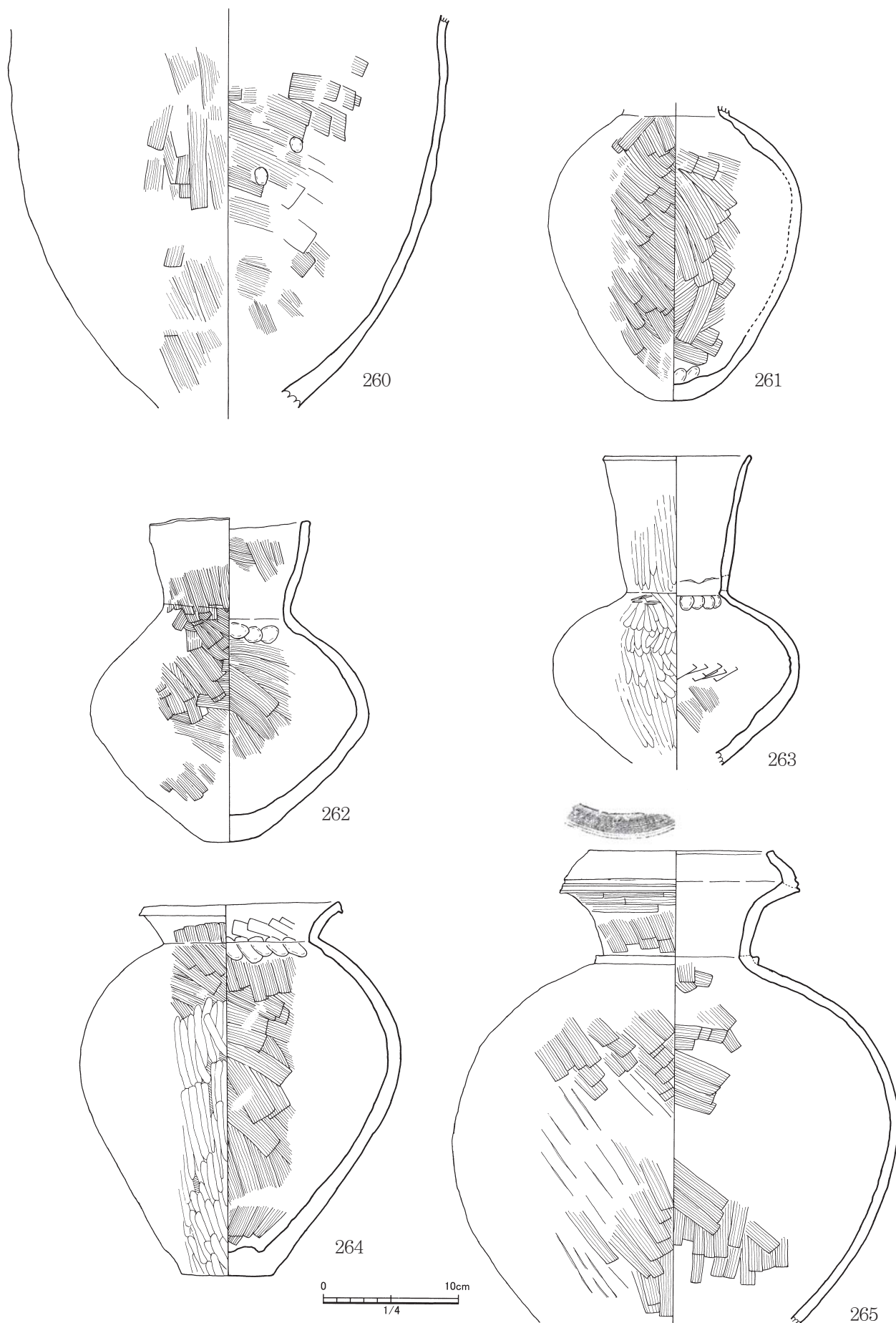
256



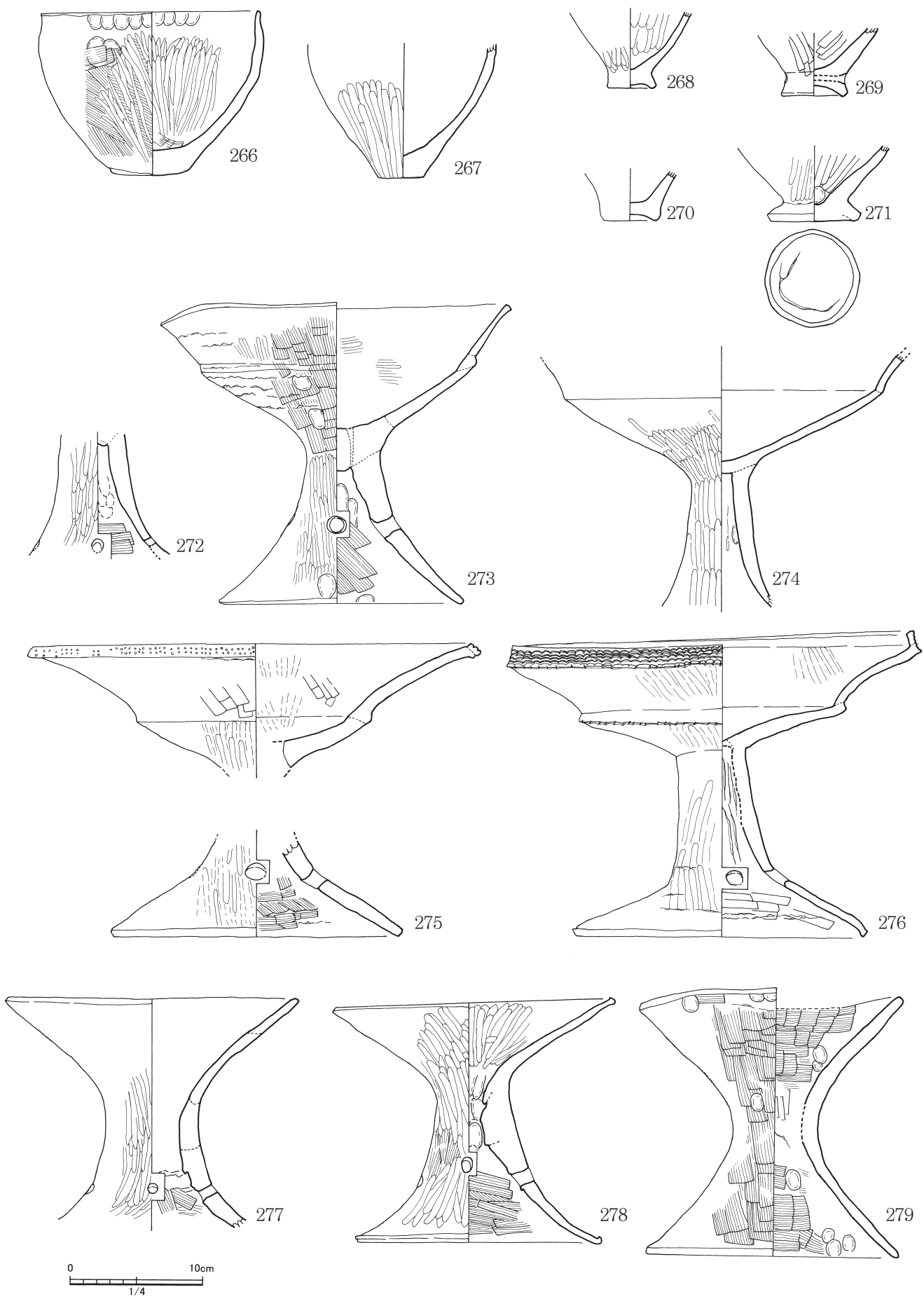
259



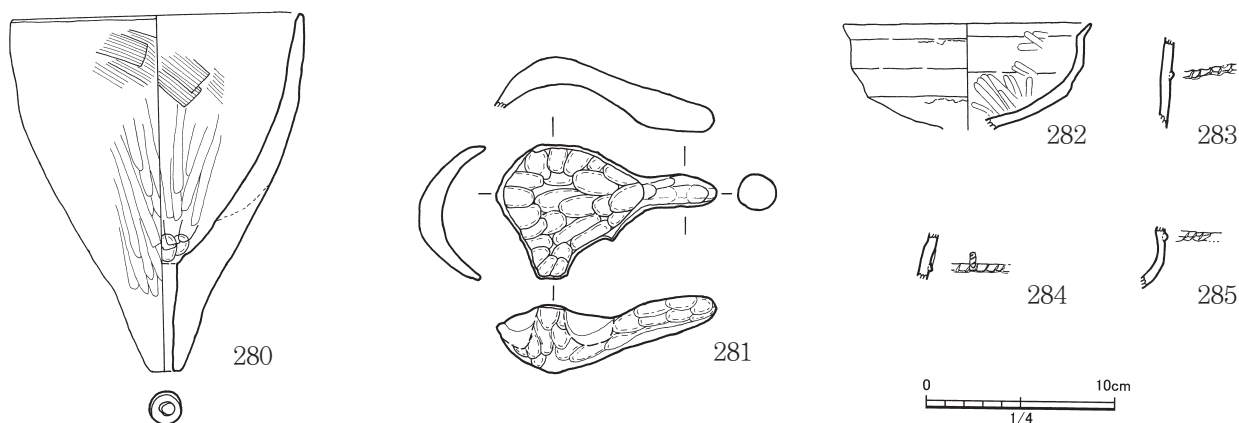
第72図 SZ1出土 弥生土器実測図(2)



第73図 SZ1出土 弥生土器実測図(3)



第74図 SZ1出土 弥生土器実測図(4)



第75図 SZ1出土 弥生土器実測図(5)

### 高坏 (第74図272 ~ 276)

高坏は5点出土した。在地系譜の高坏(272~274)と坏部が装飾的である高坏(275・276)の2つのタイプがある。

273は完形に近い形に復元された。坏部は直線的に逆「ハ」の字形に開く形態で、受部と口縁部との境にわずかな段がつく。脚部は末広がりには開くスカート状で、四方に円形透かしが入る。坏部と脚部は、棒状の粘土塊を差し込まれて接合される。器面は刷毛目やヘラミガキ調整が施されるが、総じて粗雑さが目立ち、坏部には接合痕も明瞭である。

274は口縁部が外反する器形である。坏部に直接脚部を接合して成形される。外面には丁寧なヘラミガキ調整が施されたことがわかる。

275・276は坏部が加飾された高坏である。

275の脚柱部は出土していないが、胎土や色調・調整から判断して坏部と脚部を同一個体とみなした。坏部は、短く厚みのある受部から大きく長く外反する口縁部が開く。口縁部の端部の平坦面には二段の列点文が施されたことがわかる。列点文は上段と下段の点が縦に揃っており、刺突が1点1点ではなく上・下段同時に施されたことがわかる。脚柱部と裾部との境には四方の円形透かしが入り、裾部はゆるく「ハ」の字形に開く。

276の口縁部は、外反する一次口縁に内傾する二次口縁が接続する形状である。二次口縁の外面には櫛描波状文が施される。口縁部と受部との境は断面三角形に外方へ突出し、稜線上には斜方向の刻み目が施される。脚柱部は円筒状で、脚裾部との境には四方の円形透かしが入る。脚裾部は275より屈曲度が強い。裾部の端部は内湾気味である。

### 器台 (第74図277 ~ 279)

器台は3点出土した。「X」字形の器形を呈し、口径と底径がほぼ等しいか、口径の方が小さい。柱部の形状は3個体ともバラエティーに富む。

277・278は裾部に円形の透かし穴が4箇所入る。外面は刷毛目のちタテ方向のヘラミガキ調整が施される。内面は受部付近がヘラミガキ調整、裾部には横方向の刷毛目調整が残る。278の外面には被熱痕が認められた。

279は内外面ともに刷毛目調整のみで、指頭痕が認められるなど、277・278に比べて成形や調整に粗雑さが感じられる。

### 甑 (第75図280)

280は、漏斗状の器形を呈し、底部に穿孔をする鉢状の土器である。有孔の鉢とも考えられるが、焼成前の穿孔であるので「甑」として報告する。

口縁部の内外面は刷毛目調整のみであるが、それ以外の部位はヘラミガキ調整が施される。穿孔の直径は約1cm、長さは5.5cmである。

### 杓子形土製品 (第75図281)

281は、いわゆる杓子形土製品である。全長12cmほどの小振りな器形である。

身の一部を欠くが柄まで良好に残存する。やや風化が進んでいるが、指頭痕が明瞭に認められ、手づくね成形の段階で焼成されたと考えられる。身はあまり深くなく、柄の部分からなだらかに成形される。柄の傾きはやや上方にのびる形をとり、柄の直径は約2cmである。

また、身の部分に粘土の接合部分が外れた箇所が2箇所認められた。どちらも半円形状に剥落して

いる。この剥落面は、内面側よりも外面側の方が広い面積で剥がれていることから、粘土塊を円形状に数個結合した上で身の部分を成形していたと想定される。

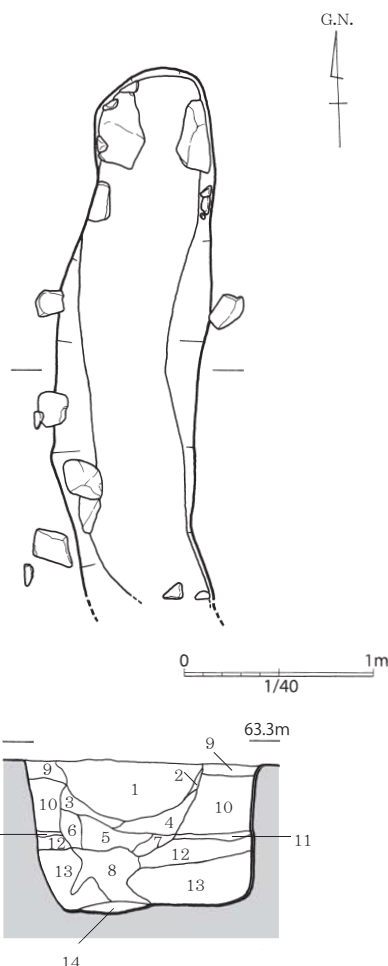
### 小型土器 (第75図282 ~ 285)

ここでは、破片化が著しいために全体の器形が不明な小型品を一括して報告する。

282は鉢または坏状の小型土器である。復元口径は13.2cmと小さい。口縁部の端部は外方に開く。体部外面は横方向の強いナデ調整のため、稜線が鋭くなる。内面はミガキ調整が施される。底部の状況は不明だが、体部から底部へ移行する形状から脚部を有していた可能性がある。

283 ~ 285は小破片であるが、外面に貼付突帯を施した上に刻み目を施す土器である。貼付突帯の幅は約2 ~ 4mmである。

なお、3点とも胎土や色調が近似しているのも同一個体の可能性があり、その場合は丸底の底部を持つ鉢状の土器となる。(今塩屋・橋口)



- 土層注記**
- 1 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまり強く粒子細かい。Φ1 ~ 5mmの白色・橙色の小礫含む。
  - 2 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue10YR4/1)  
しまり強く粒子細かい。橙色ブロックを全体的に含む。
  - 3 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR4/1)  
しまり1よりやや弱い。Φ0.5mmの白色・橙色粒全体的に含む。
  - 4 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue7.5YR4/1)  
しまり3に同じ。Φ0.5 ~ 1mmの白色・橙色粒全体的に含む。
  - 5 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまり4より弱い。Φ10mmの黄褐色ブロックを部分的に含む。
  - 6 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue10YR4/1)  
しまりやや弱い。黄褐色粒全体的に含み密度高い。
  - 7 埋土：褐灰色シルト質土 (Hue10YR4/1)  
しまりやや弱く細粒。Φ1mmの黄褐色・橙色粒部分的に含む。
  - 8 埋土：黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/1)  
しまりとても弱く粒子やや粗い。Φ10 ~ 50mmの黄褐色ブロック含む。
  - 9 明黄褐色シルト質土 (Hue10YR6/6)  
しまり強く粒子粗い。K-Ah下層部分か。
  - 10 灰黄褐色シルト質土 (Hue10YR4/2)  
しまり強く粒子粗い。上部は黄灰褐色。Φ10 ~ 30mmの小礫全体的に含む。
  - 11 明黄褐色シルト質土 (Hue10YR6/6)  
しまり10よりやや弱い。Φ1 ~ 10mmの白色粒を部分的に含む。
  - 12 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)  
しまり11に同じ。Φ10mmの小礫をわずかに含む。
  - 13 褐灰色シルト質土 (Hue10YR5/1)  
しまり12に同じ。上層にΦ1 ~ 50mmの礫集中。東側に流水痕あり。
  - 14 明黄褐色シルト質土 (Hue10YR7/6)  
しまり12に同じ。粒子やや粗く砂に近い。

第76図 SZ2実測図

### 2-5 SZ2 (第76図)

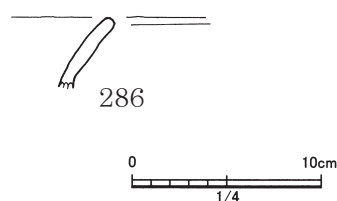
SZ2は南北方向に長軸をもつ長さ2.8m、幅0.6 ~ 0.8m、深さ0.8mの不整形な長楕円形で、SZ1と比較するとかなり小さい。遺構の埋土は上層部分がSZ1と同じく黒褐色シルト質土が主体となるが、中 ~ 下層は灰黄褐色・褐灰色・明黄褐色シルト質土と土色の明るい埋土が卓越する。

また、埋土中には礫が混じていたが、遺物は出土しなかった。SZ1との埋土の類似性からSZ2も弥生時代の陥没自然遺構と考えられる。

### 2-6 包含層出土遺物 (第77図286)

表土除去後、II層面で遺構検出を行ったところ、i・j区にかけて土器小片が多数出土したが、遺構は確認されなかった。i・j区周辺の表土中からは、包含層出土の土器と同一と思われる土器片が30点近く回収されている。SZ1より出土した弥生土器と関連する遺構が周辺に存在する可能性がある。

286は甕の口縁部である。内外面ともナデ調整で、口唇部も丁寧な横方向のナデを施す。(橋口)



第77図 包含層出土遺物実測図

第11表 弥生土器観察表(1)

掲載番号	器種	部位	法量(cm)				焼成	色調		調整		胎土	残存率	備考	出土位置および 接合状況
			口径	胴径	底径	器高		外面	内面	外面	内面				
236	甕	口縁～ 頸					良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	ヨコナデ	ヨコナデ	4mm以下の赤褐色粒、2mm以下の灰色・白色・透明粒を含む		口唇部ヨコナデ	-
237	甕	口縁					良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	タテハケ	ヨコハケ	2mm以下の灰色・白色・褐色・透明粒を含む			-
238	甕	口縁～ 胴 (12.50) 胴～底			3.6		良好	浅黄 2.5YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4	黒褐 2.5Y3/1 灰黄 2.5YR6/2	口縁～頸部タタキのちタテ・斜ハケのちナデ、胴部タテ・斜ハケのちナデ、底部指おさえ指ナデ	タテ・斜ハケのち底部指おさえ指ナデ	4mm以下の灰色・白色・褐色色粒を多く含み、2mm以下の透明粒を含む	口縁～胴部1/2、底部完形	口唇部ヨコナデ、口縁端部内外面ともに部分的に指おさえ、内面・外面胴～底部部分的に黒変、外面頸部付近マンガン附着	B下+B下2b B下
239	甕	口縁～ 胴 (13.0)					良好	橙 5YR6/6	橙 5YR7/6	斜ハケ	口縁部ヨコハケ、頸～胴部斜ハケ	2mm以下の白色・透明粒を含み、7mm以下の白色粒・1mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	1/5	口唇部ヨコナデ、外面口縁～胴部スス附着	B下2a
240	甕	口縁～ 胴 (15.0)					良好	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 10YR7/3	口縁～頸部タテハケ、胴部タテ・斜ハケのちナデ	口縁部ヨコハケ、胴部タテ・斜ハケのちナデ	5mm以下の白色粒、2mm以下の透明・赤褐色・褐色色粒を含む	1/4	口唇部ヨコナデ、内面胴部黒変	B下2b
241	甕	口縁～ 底	14.5	16.7	4.1	20.4	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	板状工具ヨコ・斜ナデ、底部タタキ	板状工具の胴部ヨコ・底部タテナデ、頸部下指おさえ	5mm以下の灰色・白色・赤褐色色粒を含み、2mm以下の透明粒を含む	ほぼ完形	激しく風化、外面胴～底部・内面胴部部分的に黒変	B下2
242	甕	口～胴 (15.0) 胴～底			(5.2)		良好	にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 2.5Y8/2 灰黄 2.5Y7/2	口縁部タテハケのちナデ、胴部タテ・斜ハケのちナデ、底部指おさえ指ナデ	口縁部ヨコハケのちナデ、胴部タテ・斜ハケ	3mm以下の灰色・白色・赤褐色・褐色・透明粒を含む	胴部1/2 底部1/2	外面スス附着、内面底部黒変、激しく風化	A+ベルト1-1+ ベルト1-6+B下2 B下+B下2+B下2b
243	甕	口～底	17.3	16.8	6.2	24.0	良好	にぶい橙 5YR2/4	明黄橙 10YR7/6	口縁部タタキのちヨコナデ、胴部タテ・斜ハケ、底部タタキ	口縁部ヨコハケ、胴部タテ・斜ハケのちナデ	3mm以下の灰色・白色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含む	ほぼ完形	口唇部ヨコナデ、外面胴～底部スス附着、外面口縁～胴上半部左肩あがり・底部右肩あがりのタタキ調整のちタテハケで消す、内面底部黒変	B下+B下2b
244	甕	口縁～ 頸 (17.2) 胴～底			2.25		良好	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4 にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部ヨコナデ、頸部板状工具ナデ、胴～底部工具ナデ、ミガキ	口縁部ヨコナデ、頸部板状工具ナデ、胴～底部タテミガキ	3mm以下の灰色・白色・赤褐色・褐色・透明粒を含み、6mm以下の白色粒をわずかに含む	口縁～頸部1/5、底部完形	口唇部ヨコナデ、内面底部・外面底部わずかに黒変	ベルト1-5 A
245	甕	口縁～ 底 (18.7)	(17.3)	(3.2)	21.1		良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	タテ・斜ハケ、部分的ヨコハケ、底部タタキ	ヨコ・斜ハケ、底部指おさえ	4mm以下の灰色・白色・褐色色粒を多く含み、2mm以下の透明粒を含む	口縁部1/2、胴部3/4	胴・底部被熱による器面のはじけ、胴部スス附着、底部タタキ痕部分的に残る、内面底部黒変	B中+B下+B下2a
246	甕	口縁～ 胴 (21.4) 胴			(19.2)		良好	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄 2.5Y7/4 浅黄 2.5Y7/4	口縁～頸部タテハケのちヨコナデ、胴部タテハケ	斜ハケのちナデ	2mm以下の灰色・白色・赤褐色・褐色・透明粒を含み、10mm以下の白色粒をわずかに含む	口縁部1/5、胴部1/3	口唇部ヨコナデ、外面胴部スス附着、激しく風化	B中+B下2b B下+B下2+B下2a
247	甕	口縁～ 胴 (20.6) 胴～底			(5.4)		良好	明赤褐 5YR5/6 にぶい黄橙 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部タテハケ、端部指おさえ、胴部タタキ・板状工具斜ナデ、底部指おさえ指ナデ	口縁端部指おさえ、口縁～胴部斜ハケのち板状工具タテ・斜ナデ	2mm以下の灰色・白色・赤褐色・褐色・透明粒を含み、3～5mmの灰色・白色粒をわずかに含む	胴部1/6、底部1/4	口唇部ヨコナデ、胴部平行タタキ調整、外面底部わずかにスス附着、内面底部黒変、激しく風化	A+ベルト1-1 A+ベルト1-3+B下2a+B下2b
248	甕	口縁～ 胴 (21.4)	(21.4)				良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	斜ハケ	斜ハケ	5mm以下の赤褐色・灰色・白色粒を多く含み、4mm以下の褐色粒も含む	1/5	口唇部ヨコナデ、マンガン附着	B+B下
249	甕	口縁～ 胴 (18.4)	(21.2)				良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁～頸部タテハケ、胴部上ナデ、胴部下タタキのち斜ハケ	口縁部ヨコハケ、胴部指おさえ指ナデ	3mm以下の白色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含み、5mm以下の白色粒をわずかに含む	1/5	口唇部ヨコナデ、外面胴部左肩あがりのタタキ痕、外面スス附着	B中
250	甕	頸～胴	頸径 (18.2)				良好	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/4	頸部タテハケのちヨコナデ、胴部タテハケ	頸部斜ハケ、胴部ヨコハケ	2mm以下の赤褐色・白色・透明粒を含み、5～7mmの白色・褐色粒をわずかに含む	1/4	激しく風化、外面胴部スス附着	ベルト1-6+ベルト1-7+B下2a
251	甕	胴～底			(5.2)		良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3	タテハケ	工具タテナデ	2mm以下の白色・透明粒を含み、1mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	1/5	風化激しい	C
252	甕	胴～底			5.3		良好	にぶい黄橙 10YR6/4	黒褐 2.5Y3/1	タタキ	斜ハケ、底部指おさえ	3mm以下の灰色・白色・褐色色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含み、6mm以下の白色粒をわずかに含む	底部完形	外面左肩あがりのタタキ調整、内面底部マンガン附着、激しく風化	一括+ベルト2-11+B下2a
253	甕	胴～底			5.5		良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	タタキのち一部タテハケ、底部指おさえ	斜ハケ	3mm以下の灰色・白色粒、2mm以下の赤褐色・褐色・透明粒を含み、6mm以下の白色粒をわずかに含む	底部完形	外面左肩あがりのタタキ調整、外面底部スス附着、内面底部黒変、激しく風化	B下

※「出土位置および接合状況」欄の略称の詳細は以下のとおりである。

A=SZ1 A区、B=SZ1 B区、C=SZ1 C区、上=上層、中=中層、下・下2=下層、  
a=土器集中区a、b=土器集中区b、ベルト1=第69図A-A'間土層断面、ベルト2=第69図B-B'間土層断面  
例) B下2a=SZ1土器集中区a、ベルト1-5=第69図A-A'間土層断面5層

第11表 弥生土器観察表(2)

掲載番号	器種	部位	法量(cm)				焼成	色調		調整		胎土	残存率	備考	出土位置および接合状況
			口径	胴径	底径	器高		外面	内面	外面	内面				
254	甕	口縁～底付近	23.85	23.7			良好	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁～胴部不定方向ハケ、底部タタキの板状工具ナデ	ヨコ・斜ハケ、底部指おさえ	4mm以下の灰色・白色・赤褐色粒を多く含み、2mm以下の透明粒を含む		タタキ原体の痕跡残る(幅5cm前後・溝7条)、外面底部右肩あがりのタタキ調整のち板状工具タナデで粗く消す、内面底部黒変、外面底部マンガン附着	B+B下2b
255	甕	口縁～胴	(24.6)	23.5			良好	にぶい黄褐 10YR4/3	灰黄褐 10YR4/2	口縁部タテハケ、胴部タタキ	口縁部斜ハケ、胴部板状工具ナデ	4mm以下の灰色・白色・褐色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含む		口唇部ヨコナデ、外面平行タタキ、外面口縁～胴部帯状にスス附着、内面底部黒変、風化激しい	B下+B下2b
256	甕	口縁～底	26.8	24.5	(3.0)	34.5	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部斜ハケ、胴～底部不定方向ハケのち底部工具タナデ	口縁～底部ヨコ・斜ハケ、底部指おさえ・指ナデ	4mm以下の灰色・白色・赤褐色粒、2mm以下の透明粒を含む	ほぼ完形	口唇部強いヨコナデ(外面に粘土の反り残る)、外面口縁～胴部帯状にスス附着、内面底部黒変、マンガン少量附着	B中+B下+B下2+B下2a+B下2b
257	甕	口縁～底	23.1	23.7			良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部斜ハケ、胴～底部不定方向ハケのち底部工具タナデ	口縁～底部ヨコ・斜ハケ、底部指おさえ・指ナデ	4mm以下の灰色・白色・褐色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含む	口縁部完形、胴～底部2/3	口唇部強いヨコナデ(外面に粘土の反り残る)、外面胴部スス附着、内面底部黒変	A下+B上～中+B中+B下+B下2+B下2a+ベルト1-5+ベルト1-6+ベルト1-7
258	甕	口縁～底	28.8	26.4	5.45	34.4	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁～底部タタキのち粗いナデ、頸部タタキのちヨコナデ	口縁部板状工具斜ナデ、頸～胴部板状工具ヨコ・斜ナデ	6mm以下の灰色・白色・赤褐色粒、3mm以下の褐色・透明粒を含む	口縁部2/3、胴～底部ほぼ完形	口縁～頸部右肩あがりタタキ・胴～底部平行もしくは左肩あがりタタキ調整、外面胴部帯状にスス附着、内面底部黒変、マンガン少量附着 ※スス自然科学分析	A下2+B下2+B下2a+B下2b+ベルト2-11
259	甕	口縁～胴					良好	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部ヨコナデ、口縁～頸部タテ・斜ハケ、胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、口縁～頸部指おさえ・指ナデ、胴部ヨコハケ	3mm以下の灰色・白色・褐色粒、2mm以下の赤褐色・透明粒を含む	口唇部ヨコナデ、内外面ともスス附着		B下
260	甕	頸～底付近	(34.2)				良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	タテハケ	胴部ヨコ・斜ハケ、底部付近ナデ	4mm以下の灰色・白色・褐色粒、2mm以下の透明粒を含む		外面胴部使用時の被熱による器面のぼけ、外面部分的にスス附着と黒変、内面黒変、マンガン少量附着	A+A下2+ベルト1-7+ベルト2-11+B下2+B下2a+B下2b
261	壺	頸～胴	18.6				良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	不定方向ハケ	頸部下指おさえ・指ナデ、胴部不定方向ハケ、底部指おさえ	3mm以下の灰色・白色・赤褐色・透明粒、6mm以下の褐色粒を含み、角閃石をわずかに含む	胴～底部完形	胴～底部黒変、外面激しく風化 ※中の土をフローテーションしたが種実等の検出なし	A下
262	壺	口縁～底	11.6	20.4	4.2	24.0	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁上半部ヨコナデ、口縁下半～頸部タテハケ、胴～底部斜ハケ	口縁部ヨコナデ、口縁部斜ハケ、頸部指おさえ・指ナデ、胴～底部不定方向ハケ	2mm以下の灰色・白色・透明粒を含み、2mm以下の赤褐色・褐色粒と角閃石をわずかに含む	ほぼ完形	口唇部ヨコナデ、外面胴～底部・内面底部黒変	B下
263	壺	口縁～底付近	(10.6)	18.2			良好	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	タテミガキ	頸部板状工具ナデ、胴部ハケ・板状工具ナデ、胴部上端指おさえ	2mm以下の灰色・白色・透明粒を含み、4mm以下の灰色・白色粒と角閃石をわずかに含む	1/2	口唇部ヨコナデ、外面胴部黒変、口縁～頸部わずかに黒変	A+A下+B下+B下2+B下2a+ベルト1-6+ベルト1-7+ベルト2-7+ベルト2-11
264	壺	口縁～底	14.4	(23.6)	7.1	27.6	良好	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部ヨコナデ、口縁部タテハケ、肩部斜ハケ、胴～底部斜ハケのちタテミガキ	口縁部ヨコ・斜ハケのちヨコナデ、頸部指おさえ・指ナデ、胴～底部不定方向ハケ	4mm以下の灰色・白色・赤褐色粒、2mm以下の透明粒を含み、6mm以下の白色粒をわずかに含む	口縁～胴部2/3、底部完形	外面肩部・底面黒変、内面胴～底部黒変	B下2+B下2a+B下2b+ベルト1-7+ベルト2-13
265	壺	口縁～胴	13.7				良好	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y6/3	二次口縁部ヨコナデのち櫛波状文・沈線文、一次口縁部ヨコ・斜ハケ、頸下部貼付突帯、胴部斜ハケ	口縁～頸部ナデ、胴部不定方向ハケ	3mm以下の灰色・白色・赤褐色・褐色粒、2mm以下の透明粒を含む	口縁～胴上半部ほぼ完形	二次口縁部ヨコナデのち2条の櫛波状文、その下に2条の沈線文施す、内外面胴部部分的に黒変、風化激しい	B下+B下2
266	鉢	口縁～底	15.7	16.9	5.85	12.3	良好	橙 5YR7/6	橙 2.5YR6/6	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ・斜ハケのちミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部タテミガキ	4mm以下の灰色・白色粒、3mm以下の透明粒を含み、2mm以下の赤褐色粒と角閃石をわずかに含む	完形	口縁部強いヨコナデ、内面のミガキ丁寧だが外面は粗い、内面底部に板状工具痕跡残る、外面胴部・底部部分的に黒変	B下2a
267	鉢	胴～底			3.3		良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	タテミガキ	ナデ	2mm以下の灰色・白色・透明粒を含み、2mm以下の褐色粒と角閃石をわずかに含む	底部完形	外面底部一部と内面底部黒変	B下+B下2a+B下2b
268	鉢	胴～底			3.7		良好	橙 2.5YR6/6	明黄褐 10YR7/4	胴部下ナデ、底部指おさえ・指ナデ	タテナデ	3mm以下の白色粒、2mm以下の灰色・透明粒を含む	底部完形	外面胴部スス附着、激しく風化	B下2b
269	鉢	胴～底			(4.9)		良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	板状工具タテ・斜ナデ、底部指おさえ・指ナデ	板状工具タテ・斜ナデ	3mm以下の灰色・白色粒、2mm以下の赤褐色・褐色・透明粒を含み、角閃石をわずかに含む	底部1/2	底部穿孔あり(焼成前の両側穿孔・貫通・径5mm)、外面黒変	B下

※「出土位置および接合状況」欄の略称の詳細は以下のとおりである。

A=SZ1 A区、B=SZ1 B区、C=SZ1 C区、上=上層、中=中層、下・下2=下層、  
a=土器集中区a、b=土器集中区b、ベルト1=第69図A-A'間土層断面、ベルト2=第69図B-B'間土層断面  
例) B下2a=SZ1土器集中区a、ベルト1-5=第69図A-A'間土層断面5層

第11表 弥生土器観察表(3)

掲載 番号	器種	部位	法量(cm)				焼成	色調		調整		胎土	残存率	備考	出土位置および 接合状況
			口径	胴径	底径	器高		外面	内面	外面	内面				
270	鉢	胴～底			4.2		良好	橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR4/1	胴～底部工具ナデ か、底部指おさえ・ 指ナデ	ナデ	5mm以下の灰色・白色粒 を多く含み、2mm以下の 透明粒を含み、角閃石 をわずかに含む	底部完形	風化激しい	A+ベルト1-7
271	鉢	胴～底			6.3		良好	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR7/6	ミガキ	板状工具タテ・斜ナ デ、底部指おさえ	3mm以下の灰色・白色・赤 褐色粒、2mm以下の透明 粒を含む	底部完形	底面に粘土のつなぎ目が輪 状に見られる、内面底部黒 変、激しく風化	B下+B下2b
272	高坏	脚					良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/6	ハケのちタテミガキ	脚部指ナデ、裾部ヨ コハケ	2mm以下の灰色・白色・透 明粒を含み、角閃石を わずかに含む		裾部円形透かし穴4箇所、 裾部一部黒変、マンガン少 量付着	一括+ベルト 1-11
273	高坏	口縁～ 裾	26.3	18.4	22.7		良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	坏部タテハケのちミ ガキか、脚～裾部タ テミガキ	坏部ミガキか、脚部 指おさえ・指ナデ、裾 部ヨコ・斜ハケのちナ デ	3mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、6 mm以下の白色・赤褐色粒 をわずかに含む	ほぼ完形	脚～裾部円形透かし穴4箇 所、口縁端部ヨコナデ・黒 変、脚部内面しぼり痕残る、 風化激しい	B下+B
274	高坏	環～脚 環					良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	坏部ミガキ、受部下 ミガキのちヨコナデ、 脚部タテミガキ	坏部ナデか、脚部指 おさえ・指ナデ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・褐色・透明粒を含 み、5mm以下の灰色・白 色粒をわずかに含む	脚部完形	裾部円形透かし穴4箇所、 脚部内面しぼり痕残る、脚 部外面黒変、全体にマンガ ン付着、激しく風化	C+ベルト 2-11+B下2b B上～中+B下
275	高坏	環 裾	环径 (34.2)				良好	橙 5YR6/8	明黄褐 10YR7/6	口唇部貼付後ヨコナ デのち二段の列点 文、口縁部ハケのち ミガキ、受部ナデの ちミガキ、裾部ミガ キ、裾端部ヨコナデ	坏部工具ナデのちミ ガキ、裾部不定方向 ハケのちナデ	2mm以下の灰色・白色・透 明粒を含み、5mm以下の 白色粒をわずかに含む	1/4	裾部円形透かし穴1箇所残 る、激しく風化	A+ベルト1-7+ ベルト2-11+B 下2a ベルト1-7+B下 2a
276	高坏	口縁～ 裾	30.4	裾径 20.8	22.3		良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁端部ヨコハケの ち櫛描波状文、下位 に刻み目、坏部タテ ミガキ、口縁部下刻 み目貼付突帯、脚～ 裾部タテミガキ	口縁端部ヨコナデ、 坏部ミガキ、脚部指 おさえ・指ナデ、裾 部ヨコ・斜ハケのちナ デ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・褐色・透明粒を含 み、5mm以下の白色粒を わずかに含む	口縁～受 部3/4、脚 ～裾部完 形	裾部円形透かし穴4箇所、 脚部内面しぼり痕残る	B中+B下+B下 2b
277	器台	受～裾	(21.6)				良好	浅黄橙 10YR8/4	橙 5YR7/8	受部ナデか、柱～裾 部ミガキ	受部ナデか、柱部タ テナデ、裾部ハケ	2mm以下の灰色・白色・橙 色・透明粒を含み、9mm 以下の白色粒をわずかに 含む	受部1/2、 柱部完形	柱～裾部円形透かし穴4箇 所、受端部一部スス付着、 風化激しい	B下+B下2a+B 下2b
278	器台	受～裾	20.8	18.4	18.4		良好	淡黄 2.5Y7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	ハケのちミガキ	受部ハケのちミガ キ、柱部指おさえ、 裾部ハケ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、5 mm以下の灰色・白色粒を わずかに含む	受部1/4、 柱部完形	柱～裾部円形透かし穴4箇 所、受～柱部外面被熱痕あ り	A下+B下+B下 2a
279	器台	受～裾	(19.8)	(18.9)	20.2		良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	受端部指おさえ・指 ナデ、受～裾部タテ ・斜ハケ、柱部タテ ハケのち指おさえ・ 指ナデ	受・裾部ヨコハケ、 柱部工具ナデ・指ナ デ	3mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、6 mm以下の赤褐色粒をわ ずかに含む	ほぼ完形	外面受部・柱部・裾部黒変	B中+B下
280	甌	口縁～ 先端	15.4	1.6	18.8		良好	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	口縁部不定方向ハ ケ、胴部タテハケの ちタテミガキ	不定方向ハケのちタ テミガキ、穿孔上部 指おさえ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、6 mm以下の灰色・白色・橙 色粒をわずかに含む	胴部2/3、 先端部完 形	穿孔(円形)直径1.0cm、内面 穿孔上部に粘土のヨリ見ら れる(鉢のようなものを胴 部とし、粘土を貼り付けて 先端部を整形する)、外面 胴部一部黒変	A+B下+B下2+ ベルト1-3+ベ ルト2-11
281	杓子 形土 製品	身～柄	長 11.6	幅 7.1	柄径 2.0		良好	明黄褐 2.5Y7/6	にぶい橙 7.5YR7/3	指おさえ・指ナデ	指おさえ・指ナデ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、5 mm以下の白色粒をわず かに含む	ほぼ完形	裏面一部黒変、粘土接合面 2箇所あり(うち1箇所は黒 変部分にあるが接合面は黒 変していないため、黒変(被 熱)後に粘土が剥がれたと 思われる)	A下
282	小型 土器	口縁～ 胴	(13.2)				良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ	ミガキ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・褐色・透明粒を含 み、4mm以下の白色粒を わずかに含む	口縁1/5	内面胴部黒変、底部に近い のか胴部下に反りが見られ る	B下+B下2 B下
283	小型 土器	胴					良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ、刻み目貼付突 帯	ナデ	1mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、角 閃石をわずかに含む		※傾き不順、横位貼付突帯 (幅4mm)の上に斜め刻み目 (刻み目の間隔4mm)	一括+ベルト 1-5
284	小型 土器	胴					良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ、刻み目貼付突 帯	ナデ	1mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、角 閃石をわずかに含む		横位貼付突帯(幅3mm)のち わずかに重ねて縦位貼付 突帯(幅2mm・長さ8mm)、その 後貼付突帯の上に斜め刻み 目(刻み目の間隔:横位突 帯は3mm、縦位突帯は2mm)	B下2a
285	小型 土器	胴					良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	ナデ、刻み目貼付突 帯	工具ナデのち指おさ え・指ナデ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含み、角 閃石をわずかに含む		横位貼付突帯(幅4mm)の上 に斜め刻み目(刻み目の間 隔3mm)	B中+B下
286	甌	口縁～ 頸					良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ	ナデ	2mm以下の灰色・白色・赤 褐色・透明粒を含む		口唇部ヨコナデ	-

※「出土位置および接合状況」欄の略称の詳細は以下のとおりである。  
A = S21 A区、B = S21 B区、C = S21 C区、上 = 上層、中 = 中層、下・下2 = 下層、  
a = 土器集中区a、b = 土器集中区b、ベルト1 = 第69図A-A'間土層断面、ベルト2 = 第69図B-B'間土層断面  
例) B下2a = S21土器集中区a、ベルト1-5 = 第69図A-A'間土層断面5層



## 第9節 K-Ah降灰以降の遺構と遺物

### 1-1 C区 概要

AI20～21・AJ20～21Gr.において、II層中より礫の密集した遺構（礫集積遺構）2基と土坑1基を検出した。II層はK-Ah降灰後に堆積した黒色土層である。これらの遺構に伴う遺物は出土しなかったため、遺構の帰属時期を明らかにすることはできなかった。しかし、K-Ah降灰後に構築された遺構であることは明確であり、以下で報告を行うこととする。

### 1-2 遺構（第78～80図）

#### 礫集積遺構（第79図）

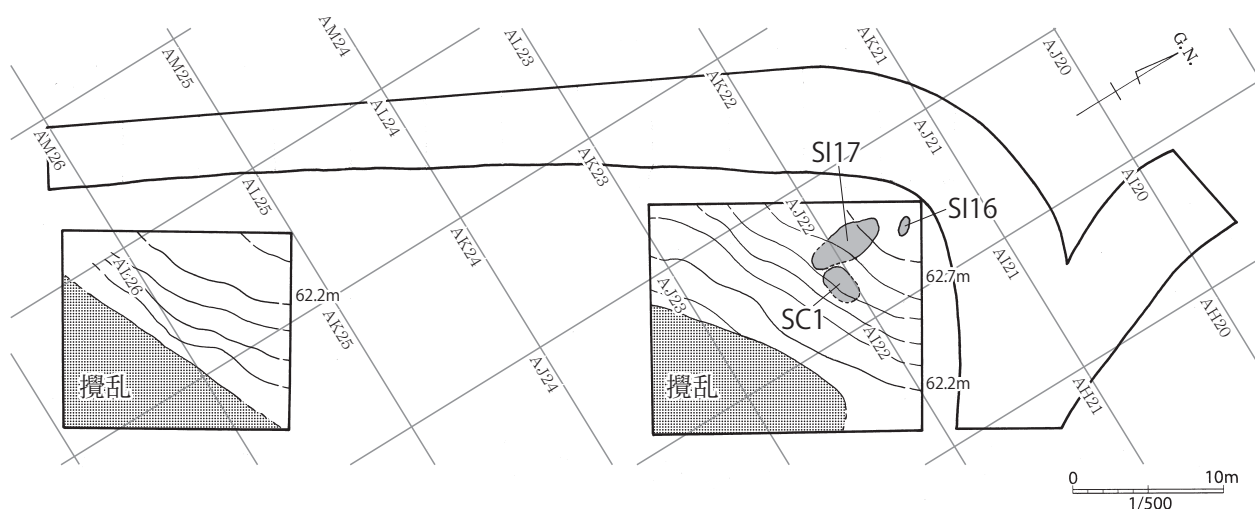
II層の中～下部にかけて礫の密集した遺構を2基検出した。ここでは「礫集積遺構」としてSIの名を付し報告する。SI16はII層中部で検出された。AJ21Gr.に位置し、長軸を南北方向にもつ。尾鈴山溶結凝灰岩の円礫や角礫19個で構成されるが、礫に赤化は認められない。SI16の南に位置するSI17はII層中～下部にかけて検出され、約5.0m×2.5mの範囲に礫が集中する。ほぼすべての礫が尾鈴山溶結凝灰岩で、直径10cm以下のチャートの円礫が数個程度混じる状況である。SI16同様礫の赤化はほとんど見られない。総礫数1,194個、総礫重量126.6kgにもな

る遺構である。SI16・SI17ともに掘り込みや炭化材等は認められず、具体的な遺構の機能を示す痕跡を見いだすことはできなかった。

#### 底面に焼土をもつ土坑（第80図）

SC1は、SI16・SI17の南東側AJ22Gr.に位置する。II層下部で検出されたが、東側約2/3は上部に削平を受けており、削平範囲の南半分はIII層、北半分はIV層上面で遺構の上端を捉えることとなった。長軸約2.5m、短軸約1.6mの平面楕円形の土坑である。削平を免れた西側約1/3の残存状況から、III層(K-Ah)を掘り込んで構築された遺構であることが確認できた。SC1の特徴として、①土坑内に礫のまとまりを有すること、②土坑の底面に焼土が広がっていることが挙げられる。まず①について検出時からの状況を詳述する。SC1を掘削中、検出面から15～20cmほど掘り下げたところに河原石のような拳大の円礫が見られ、掘削を進めるうちに礫が一定のレベルで揃うことがわかった。また、それらの礫は不揃いではなく扁平な面を下にしている状況であった。次に②について、土層断面図と合わせて示す。

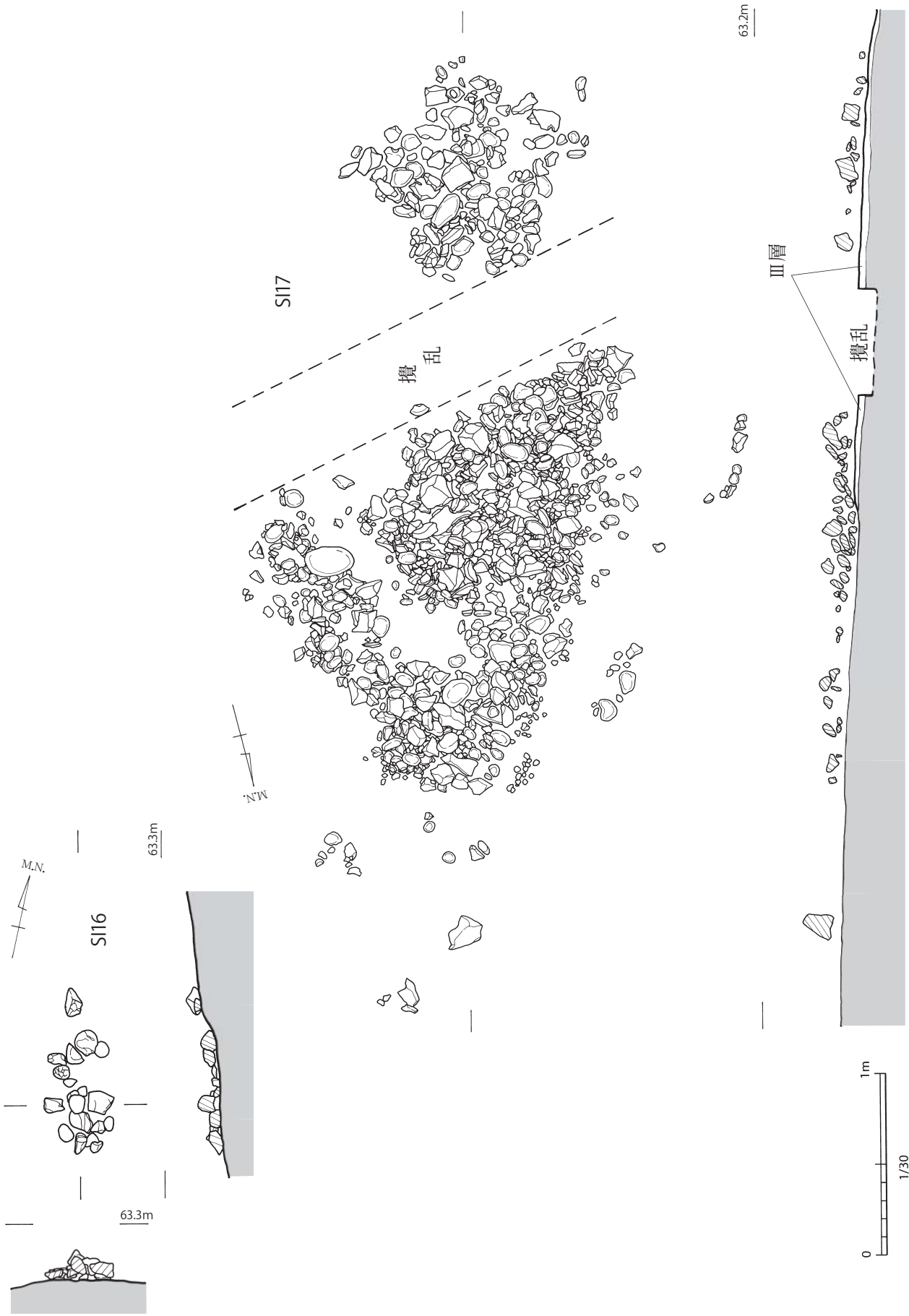
SC1の埋土にあたるのは、第80図の土層断面図第1～3層の黒色土であり、第4・5層は底面に広がる焼土層である。上部焼土層第4層は、φ1～5mm



第78図 II層検出遺構分布図

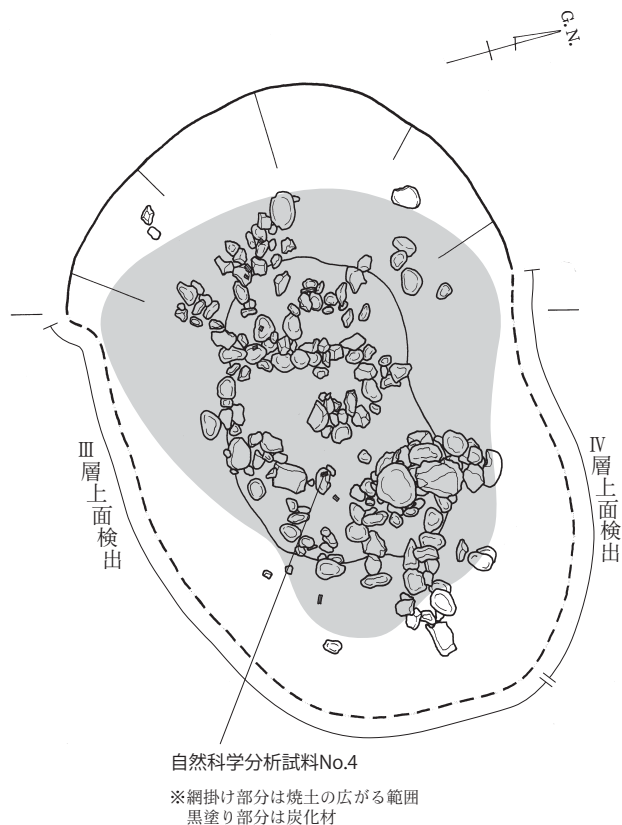
第12表 礫集積遺構観察表

掲載番号	検出層	Gr.	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 (個)	重量 (kg)	備考
SI16	II	AJ21	0.91	0.39	19	11.9	礫の赤化見られない。
SI17	II	AJ21	5.25	2.79	2778	314.1	礫の赤化見られない。チャート円礫混じる。削平。



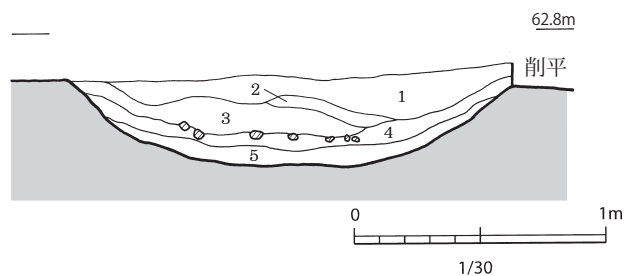
第79図 礫集積遺構実測図

程の橙色の粒や炭を含んでおり、ややざらついた感触である。それに比べ下部焼土層第5層は、φ20mm以下の炭を多量に含む層で、掘削するとじゅりじゅりと音を立てる。①・②の関係性についてであるが、土坑内の礫は黒色埋土と上部焼土層第4層の間に広がる（第80図土層断面図）。しかし、焼土層に接する礫面に赤化や黒変などは認められなかった。このことから推測される遺構の機能的変遷は、土坑を掘削し火を用いる施設として利用したのち、なんらかの意図で焼土層の上に円礫を平たく配置したのと思われる。その後あまり時間をかけずに埋没した様子が窺える。遺構の具体的機能については判断し難いが、一時の間土坑内で火を焚いていたことは焼土層の存在から明らかである。下部焼土層には親指大ほどの炭化材も数点見られたことから、土坑の機能を推察する目的で炭化材1点について自然科学分析を行った。これについては1-4で後述する。



### 1-3 SC1埋土中出土遺物（第81図287）

SC1の具体的時期を特定する遺物は出土しなかったが、SC1埋土第3層より出土した磁器1点を図化した。いわゆる「くらわんか碗」で外面にくずれた雪輪梅花文を描く。18世紀末以降のものと思われる。



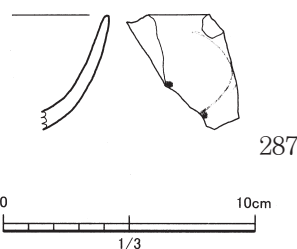
#### 土層注記

- 1 黒色土 (Hue10YR2/1)  
 しまり2より強く粘性なし。2と同じφ1mm以下の白色粒子を全体的に含む。φ2～3mmの黄褐色粒 (Hue10YR5/8) とφ10mm大の小礫をまばらに含む。黒色 (Hue10YR1.7/1) のシミが全体的にマーブル状に入る。
- 2 黒色土 (Hue10YR2/1)  
 しまり3に同じ粘性なし。3と同じφ1mm以下の白色粒子を層全体にまばらに含む。φ1mm大の黄褐色粒 (Hue10YR5/8) をごく少量含む。
- 3 黒色土 (Hue10YR1.7/1)  
 しまり4より強く粘性なし。φ1mm以下の橙色粒 (Hue5YR5/8) を全体的に多く含み、φ1mm以下の白色粒子もまばらに含む。8～10mmの炭をごく少量含む。4・5とは異なりジャリジャリしない。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR2/2)  
 しまりあり粘性なし。φ1～5mmの橙色粒 (Hue5YR5/8) をまばらにわずかに含む。1～5mmの炭も少量含む。5ほどではないが少しジャリジャリしている。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR2/3)  
 しまり粘性ともになし。φ1～10mmの橙色粒 (Hue5YR5/8) をまばらに含む。数mm～20mm大の炭を多く含みジャリジャリしている。焼土。

第80図 SC1実測図

### 1-4 SC1焼土から出土した炭化材について

遺構の帰属時期を推定し、燃料材としての木材の利用状況を把握する目的で、下層焼土層より採取した炭化材1点について樹種同定および放射性炭素年代測定を実施した（試料No.4）。その結果、樹種はアカマツで、時期についてはAD1,660-1,690(19.4%)、AD1,730-1,810(55.7%)、AD1,920-1,960(20.3%)（合わせて95.4%確率）との結果が示された。



第81図 SC1埋土中出土遺物実測図

## 第10節 自然科学分析の結果

俵石第2遺跡では、放射性炭素年代測定・炭化材の樹種同定および炭化種実同定を実施した。

### 1 放射性炭素年代測定

#### 1-1 目的

今回4試料の炭化材・炭化物に対して放射性炭素年代測定を実施した。帰属時期の明らかでないSC1より採取した炭化材(試料No. 4)は、遺構の時期決定を目的とする。縄文時代の集石遺構SI15、SI12に伴って検出された炭化材(試料No. 1、2)は、より詳細な遺構の帰属時期を明らかにする目的で行った。また、SZ1より出土した甕(掲載番号258)に付着した煤(試料No. 3)は、土器の使用時期の把握を目的として実施した。

#### 1-2 試料と方法

測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法を第13表に示す。

#### 1-3 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた<sup>14</sup>C

濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。第14表にこれらの結果を示し、第82図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

#### 1-4 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、試料No. 1では8,230±35年BP(BC7,360～7,080年)、No. 2では8,610±35年BP(BC7,720～7,570年)、No. 3では1,940±20年BP(AD1～130年)、No. 4では185±20年BP(AD1,660～1,690, 1,730～1,810, 1,920～1,960年)の年代値が得られた。

#### 【文献】

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p.3-20

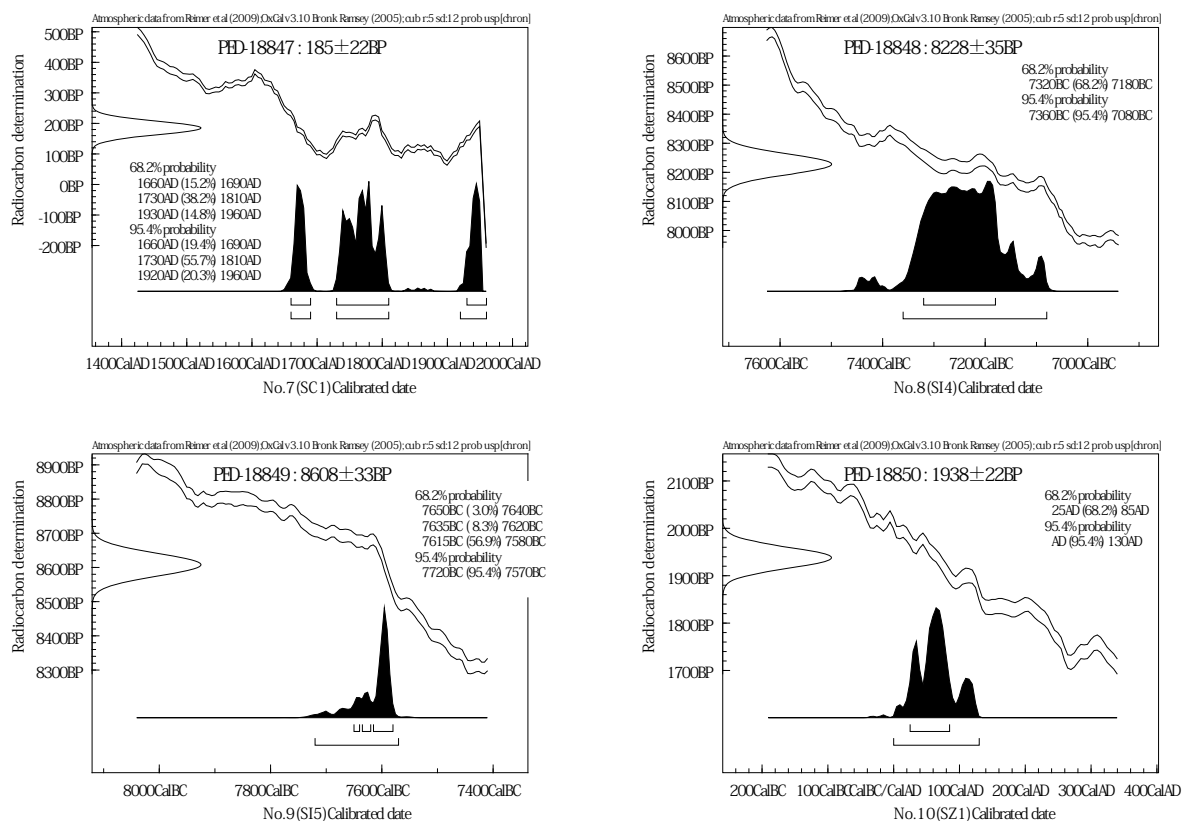
第13表 測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法

試料No.	委託No.	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
1	No. 8	俵石第2遺跡No67, SI15	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
2	No. 9	俵石第2遺跡No68, SI12	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
3	No.10	俵石第2遺跡No69, SZ1, B下2, 甕	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
4	No. 7	俵石第2遺跡No66, SC1, 焼土①e	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

第14表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	委託No.	測定番号 PED-	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正用 年代(年BP)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代(較正年代)	
						1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
1	No. 8	18848	-25.80±0.19	8,228±35	8,230±35	BC7,320-7,180(68.2%)	BC7,360-7,080(95.4%)
2	No. 9	18849	-25.49±0.21	8,608±33	8,610±35	BC7,650-7,640(3.0%) BC7,635-7,620(8.3%) BC7,615-7,580(56.9%)	BC7,720-7,570(95.4%)
3	No.10	18850	-26.48±0.17	1,938±22	1,940±20	AD25-85(68.2%)	AD1-130(95.4%)
4	No. 7	18847	-25.30±0.22	185±22	185±20	AD1,660-1,690(15.2%) AD1,730-1,810(38.2%) AD1,930-1,960(14.8%)	AD1,660-1,690(19.4%) AD1,730-1,810(55.7%) AD1,920-1,960(20.3%)



第82図 暦年較正結果

## 2 炭化材の樹種同定

### 2-1 目的

樹種同定を3試料について実施した。SC1、SI4、SI5ともに、燃料材としての木材利用状況の把握を目的として行った。

### 2-2 試料

試料は、SI15、SI12、SC1から採取された炭化材3点（試料No.1・2・4）である。

### 2-3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 2-4 結果

同定結果を以下に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す（第83図）。

### 2-5 所見

樹種同定の結果、アカマツ1点（SC1）、コナラ属コナラ節1点（SI12）、ブナ科1点（SI15）が同定された。アカマツは土壌条件の悪い岩山に生育し、二次林を形成する常緑高木で、温帯を中心に広く分布

する。コナラ属コナラ節は日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、温帯を中心に広く分布する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

### 【文献】

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版，290p.
- 島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣，296p.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会，242p.

## 3 炭化種実同定

### 3-1 目的

SC1の焼土をフローテーションした結果得られた炭化種実、およびSZ1より出土した壺（掲載番号261）内の土を同じくフローテーションして得られた炭化種実に対して同定を行った。周辺の植生の推定と、植物質食糧の推定を目的とする。

### 3-2 試料

試料は、SC1とSZ1から採取された試料で、いずれ

も水洗選別済みの炭化物である。

### 3-3 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 3-4 結果

#### (1) 分類群

種実同定の結果、草本4分類群が同定された。同定結果および写真を以下に示す(第84図)。

#### (2) 種実群集の特徴

SC1の焼土①では、草本種実のナデシコ科10、カヤツリグサ科4、コキンバイザサ1が同定された。SC1の焼土②では、草本種実のナデシコ科2、カヤツリグサ科3、キンバイザサ3、コキンバイザサ1が同定された。SZ1の土器(壺)内では、種実類は認められなかった。なお、各試料とも不明炭化物(種実以外)が多く認められた。

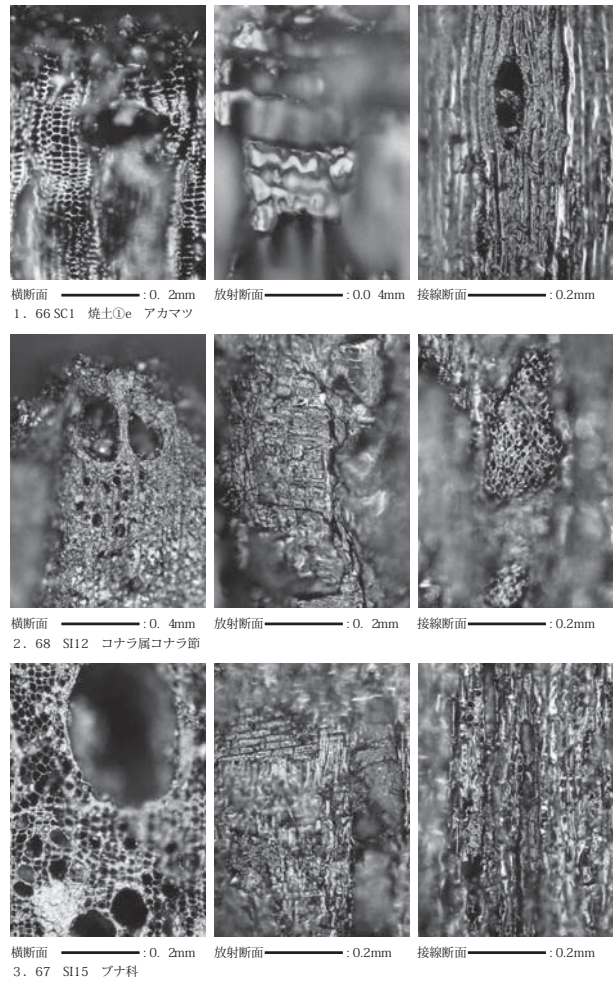
### 3-5 所見

種実同定の結果、栽培植物や食用となる種実類は認められず、草本種実のカヤツリグサ科、キンバイザサ、コキンバイザサ、ナデシコ科が認められた。これらの植物は、いずれも集落などの人為地やその周辺に生育する草本であり、周辺から何らかの形で混入したことや、燃料などに用いられた可能性が考えられる。なお、各遺構で多く認められた不明炭化物(種実以外)は、人の活動の遺存物と考えられる。

#### 【文献】

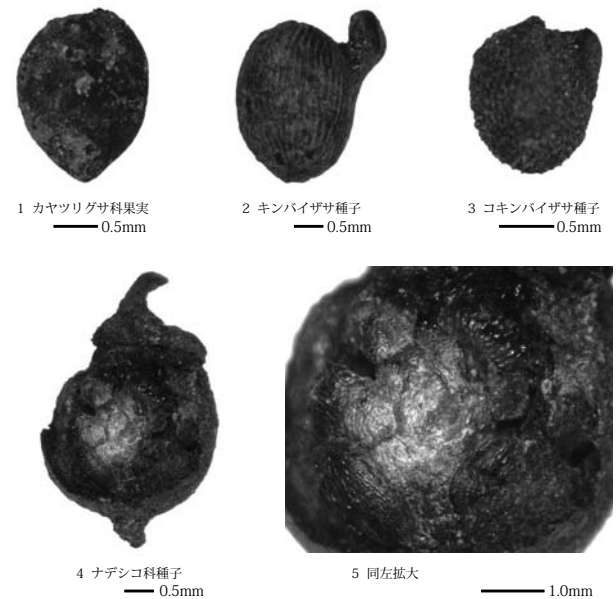
- 笠原安夫(1985)日本雑草図説, 養賢堂, 494p.  
 笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.  
 佐藤敏也(1988)弥生のイネ. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版株式会社, p.97-111.  
 南木睦彦(1991)栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.  
 南木睦彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

俵石第2遺跡の炭化材



第83図 炭化材断面顕微鏡写真

俵石第2遺跡の炭化種実



第84図 炭化種実写真

## 第11節 まとめ

### 1-1 後期旧石器時代

本遺跡ではAT下位黒色帯（MB2～3相当層）から礫群および遺物の出土が見られた。上町川北側の平地部分ではAT下位黒色帯が発達し、その黒色帯中部より2基の礫群が検出された。検出層位や位置関係から同時期に存在した可能性が考えられる。また、これら2基の礫群と重なりはしないものの、2基の礫群から10mほど離れた場所に桑ノ木津留産と推定される黒曜石を含む遺物集中区が見られた。黒曜石、頁岩、尾鈴山溶結凝灰岩、チャート素材とする二次加工剥片や微細剥離ある剥片がまとまって出土した。個々の遺物に接合関係は見られず、今回の調査範囲からは石核や母岩の出土も見られなかったため、これらの遺物は現状で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。また、遺物集中区と少し離れた箇所でも稜付石刃やホルンフェルスの石核が出土しており、この時期にこれらの遺物を所持した人々が遺跡内に足を留めていたと考えられる。

上町川を離れやや北に目を移すと、南東・北東に下る急斜面地でも同層より遺物の出土が見られた。遺構は確認されず遺物数も少ないが、流紋岩製二側縁加工ナイフ形石器や頁岩製二次加工剥片、ホルンフェルスの石核調整剥片などが出土した。

さらに目を北に向けると、南に下る緩斜面地では同層より局部磨製石斧と打製石斧が出土した。刃部に研磨痕が見られる完成品1点と、研磨痕は見られないもの前述した完成品と同石材・同製作技術で製作された打製石斧1点が同位置よりまとまって出土した。また、これら2点と少し離れた箇所からも打製石斧の欠損品が出土し、これについては6mほど離れた箇所から出土した剥片との接合関係も確認された。接合が見られた石斧は、前述した2点と異なりかなり風化していて、製作技法も異なった点が見られる。接合は見られたものの敲石等の調整に必要な石器の出土は確認されなかった。これらの石斧は、遺跡外で調整された状態で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。その他、桑ノ木津留産と推定される黒曜石製のナイフ形石器やスクレイパー、尾鈴山溶結凝灰岩製の縦長剥片も出土し、流紋岩やホルンフェルス、頁岩等の接合資料も確認されている。

### 1-2 局部磨製石斧の出土について

本遺跡における基本層序のⅦ層（AT下位黒色帯：MB2～3相当層）より局部磨製石斧1点と打製石斧2点が出土し、うち1点については剥片との接合関係も確認された。

宮崎県内における局部磨製石斧の出土数は数えるほどである。延岡市の山田遺跡で2点、都農町の尾立第2遺跡で1点、川南町の中ノ迫第3遺跡で1点の出土が確認されている。

これらの石斧が出土した層位は、都農町域の基本層序のMB2～3にあたるAT下位の黒色帯である。宮崎平野の北端の中ノ迫第3遺跡、尾立第2遺跡、加えて本遺跡から計3点の局部磨製石斧が出土している。本遺跡から他2遺跡までの距離はさほど離れておらず、いずれも他の遺物と離れた場所から点的に出土するという似た出土状況を見せる。管理性の高い遺物と言われる局部磨製石斧が近接した3遺跡から出土した点に注視しておく必要がある。（橋口）

### 2-1 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物の出土は上町川沿いの平地部分と、その北の南東・北東に下る急斜面地で見られた。急斜面地では表土直下に当時期の遺物包含層が見られ、近年までの耕作等の影響を受けるものの、集石遺構2基が確認された。また、出土数は多くないものの、縄文土器や石鏃などの石器の出土も見られた。上町川沿いの平地部分では、一部削平を受けていたものの、調査範囲内において約6.5m×10mの範囲に広がる散礫が検出された。散礫の下からは集石遺構の一部と見られる配石1基が検出され、礫を廃棄し始める前には集石遺構が構築されていたと思われる。散礫の西側には礫が円形に巡る集石遺構も見られ、その礫の間からは炭化材も検出された。自然科学分析の結果から、この炭化材はブナ科の植物であることも判明した。散礫の南側にも削平を受けていたが集石遺構が1基確認された。散礫よりやや北側では、散礫周辺で見られた集石遺構とは趣の異なる集石遺構が1基確認された。円形の礫を小さく集めて構築されたこの集石遺構にも炭化材が伴っており、コナラ属コナラ節であることがわかった。集石遺構構築当時、これらの植物が遺跡周辺に広がっていたと考えられる。（橋口）

### 3-1 弥生時代

今回の調査では、弥生時代の土器片を含む包含層（Ⅱ層）の存在が確認され、弥生土器が大量に出土したSZ1（不明遺構）と、SZ1と埋土の類似するSZ2が検出された。

この項では、SZ1・2の性格と、SZ1出土の弥生土器群について、検討を加えることでまとめとしたい。

### 3-2 SZ1・2の形成要因

SZ1・2の遺構内には、地下水の湧水と流水が見られること、壁面がオーバーハングしていることから、SZ1・2はいわゆる「水穴」（パイピング・ホール）と考えられる（横山2009）。すなわち、地下水脈の流水作用によって堆積物が流出して地山層内部に空洞が発生・成長して、結果的に空洞部分の天井が帯状に陥没した自然遺構と位置付けられる。

### 3-3 SZ1出土土器と遺構の時期

**甕類の時期** 甕は、大きく①～③類に区分することが可能であり、分類ごとの時期を推定する。

①類…口縁部は「く」の字形に屈曲し、胴部最大径が口径より大きく、底部は平底やわずかな上げ底状。タタキ調整あり（239・241・242・249）。

②類…口縁部付け根の縮まりが①よりも弱く、口径と胴部最大径が近似する。平底や丸みを帯びた平底の底部。タタキ調整あり（238・240・243・254～257）。

②類…②類より口縁部の屈曲が弱い（248）。

③類…口径が胴部最大径よりも大きい。胴部は逆三角形状で、底部は平底（245・247・258）。

①類とした甕は、本遺跡の北側に位置する都農町木戸平第2遺跡SA1出土資料に類似する。このSA1の出土土器群は弥生時代終末期（庄内式併行期）でも初め頃となるが、241のように平底化がより顕著になるので、①類は終末期の前半に充当される。

②類は、都農町木戸平第2遺跡SA2～4出土資料に類似する。①類との形式的対比から終末期の後半に位置付けられる。

③類は、日向市百町原遺跡周溝状遺構や川南町上ノ原遺跡2号住居出土資料に類似品がある。両者の出土土器は、吉本正典氏の「百町原期」（庄内式後半）にあたる（吉本1995）ので、終末期後半とする。

このように、甕類は弥生時代終末期でも後半段階

の資料が多く、主体である。SZ1内の土器集中区a・bでは、古相（①類）と新相（②・③類）が共伴（混在）する出土状況となる。

なお、甕（258）に付着した炭化物の放射性炭素（AMS）年代は、AD25-85（68.2%）・AD1-130（95.4%）という結果が得られた。258は型式学的検討からは弥生時代終末期と位置づけられるので、AMS年代と土器の年代観にヒアタスが生じることになった。さらに測定結果の蓄積や整合性の検討が必要である。

**壺類の時期** 263・264は吉本氏のいう「大戸ノ口期」（庄内式前半）や「百町原期」に盛行する。複合口縁壺の265は、一見東南部九州に広く認められる安国寺式土器の壺にみえる。しかし、口縁部端部が外反し胴部は球形胴を呈するので、武末純一氏の「筑肥型」（武末1992）に相当する。

このように壺類は弥生時代終末期に位置づけられ、その細分時期は甕類の主体となる時期（終末期後半）と考えておきたい。

**小型器種の時期** 高坏のうち、273は吉本氏のいう「大戸ノ口期」（庄内式前半）にあたる新別府下原遺跡B-1区2号土壙出土資料よりも退化した形態で、「百町原期」の百町原遺跡周溝状遺構の出土資料に近い。このため273は終末期後半に位置付けられる。274はそれより古相に位置付けられる。

装飾的な高坏である275・276を川南町東平下円形周溝墓から出土した吉備系装飾高杯の影響下で成立した在地模倣型とみるならば、弥生時代終末期の時期に位置づけられる。高坏類はすべてSZ1の土器集中区a・bや下層で出土したことから、甕類の主体となる時期（終末期後半）の土器群と捉えられる。

**器台**には、形式的な大きな差異は認められず、出土位置からも共伴関係にあると考えられるので、終末期でも後半に位置づけられるといえる。

**小型土器**（283～285）は小林市大萩遺跡の第10土器分布群中に類例がある。この分布群中には装飾的な高坏も出土するので、終末期に位置づけられる。

**出土土器の時期** SZ1の出土土器は、古相の土器を若干含むが、その主体は弥生時代終末期でも後半の時期と考えられる。

**SZ1の時期** SZ1が埋め戻された時期は、出土した甕のうち形式的に後出するもの（254・255・257）から弥生時代終末期でも後半頃とする時期と考えら



れる。遺構の形成、すなわち陥没した時期は、明確にはし難い。ただし、弥生土器の出土状況や出土位置からみて、土器の時期に近いものと考えられる。

### 3-4 SZ1と弥生土器

「水穴」による陥没孔の類例 本遺跡の南側に位置する俵石第1遺跡では、円形の陥没孔4基(「水穴」状遺構)や、ヤツデ状に延びる地下流路の跡が検出されている。さらに南東側に位置する尾立第2遺跡では、大量の弥生土器が出土した円形の土坑を「水穴」である可能性が高いとして報告されている。

また、宮崎市上の原第1遺跡の「土器埋納遺構」は、シラス台地上の水穴による陥没孔である。

尾立第2遺跡のSZ1では、弥生土器甕や壺16個体分が陥没孔を整地後、その周縁に配置や廃棄された状態で出土したという。土器より上位の位置に拳大や人頭大の礫が堆積するが、礫は意図的とも言える程に平面を水平に向けているので、丁寧に埋め戻されたと解釈できる。土器の時期は弥生時代終末期の前半頃と捉えられる。

上の原第1遺跡の「土器埋納遺構」は、搬入土器の布留式甕と在地系の壺や高坏といった完形の土器が伴う。調査者の吉本正典氏は、「土器埋納遺構」を水に関わる祭祀に伴う遺構と推察されている(宮崎県埋蔵文化財センター2000)。土器の時期は古墳時代前期でも前半頃と考えられる。

SZ1出土土器の性格 俵石第2遺跡のSZ1から出土した弥生土器群は、その出土状態からは埋納や配置されたのではなく、陥没孔の埋め戻しの際に一括廃棄されたものと推察される(第69・70図)。

つまり、陥没孔の北側から礫混じりの土を投入し(第69図A-A'間土層断面図9層)、ついで南側から埋め戻す際に弥生土器群を礫と共に投棄したもの(5~7層)と考えられる。

しかし、SZ1出土の弥生土器群は完形品に近い土器が多く、装飾的な高坏の存在や多量の礫が土器群と混在して出土するあり方も特徴的である。さらに石器や鉄器類等は認められなかった。

上述した尾立第2遺跡や上の原第1遺跡例を鑑みると、SZ1出土土器群は単なる遺棄物ではなく「水(穴)」に対する祭祀関連品であり、祭祀執行後に土砂と一緒に投入されたものと考えておきたい。

### 【第11節1 参考文献】

- 宮崎県旧石器文化談話会2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66  
 秋成雅博2005「宮崎10段階編年の概要」『九州旧石器』第9号 九州旧石器文化研究会  
 宮崎県埋蔵文化財センター2005『東九州自動車道(都農~西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書V』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2006『東九州自動車道(都農~西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第131集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2007『中ノ迫第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第144集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2007『山田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2008『尾立第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集  
 日高優子2009「宮崎県の様相」『九州旧石器』第13号 九州旧石器文化研究会

### 【第8節・第11節3 参考文献】

- 宮崎県教育委員会1974『大萩遺跡(1)』瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
 宮崎県教育委員会1976『都農町岩山(境ヶ谷第1)遺跡調査報告』宮崎県文化財調査報告書第18集  
 武末純一1982「北部九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎先生古稀記念論文集』  
 石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案-素描(Mk. II)」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会  
 宮崎県教育委員会1986『川南町東平下円形周溝墓』宮崎県文化財調査報告書第29集  
 都農町教育委員会1988『都農町遺跡詳細分布調査報告書』  
 都農町教育委員会1990『新別府下原遺跡』都農町文化財調査報告書第3集  
 高鍋町教育委員会1991『大戸ノ口第2遺跡』高鍋町文化財調査報告書第5集  
 日向市教育委員会1994『百町原遺跡』県営圃場整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
 吉本正典1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察」『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会  
 石川悦雄1998「宮崎平野部弥生土器編年」『宮崎考古学会第36回例会発表資料』  
 宮崎県埋蔵文化財センター2000『上の原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第151集  
 松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉~古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会  
 松永幸寿2004「日向における古式土師器の成立と展開-宮崎平野部を中心として-」『西南四国-九州間の交流に関する考古学的研究』  
 宮崎県埋蔵文化財センター2008『尾立第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集  
 横山勝三2009『シラス学-九州南部の巨大火砕流堆積物』  
 中村直子2009「南九州における木製品模倣土器について」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』  
 坪根伸也2009「南九州出土の安国寺式系壺の故地を求めて」『南の縄文・地域文化論考』南九州縄文研究会  
 宮崎県埋蔵文化財センター2011『尾花A遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2011『俵石第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第200集  
 宮崎県埋蔵文化財センター2012a『木戸平第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第215集  
 徳留洋志・今塩屋毅行2012b「第IV章 総括」『木戸平第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第215集

## 第Ⅳ章 総括

俵石第1遺跡は上町川南側の三日月原台地の西端部に位置し、俵石第2遺跡は上町川北側の荒崎山東裾部に位置する。両遺跡では、後期旧石器時代から弥生時代及び近世の遺構が検出され、多数の遺物が出土した。本章では、俵石遺跡群に加え、良好な資料が出土している近隣遺跡を含め、後期旧石器時代から弥生時代にかけての当地域の様相について述べ、総括とする。各遺跡の位置については、第Ⅰ章第3・4図を参照されたい。

### 都農町域の基本層序と遺物の検出状況

近年急増した旧石器時代の調査成果をもとに、2001年、宮崎県旧石器談話会からいわゆる「宮崎10段階編年」が提示された。以降、旧石器時代遺跡の調査において、当編年との比較・検討が継続して試みられている。しかし、都農町は宮崎平野部北端部に位置し、これまで蓄積されてきた新富・高鍋・川南町域の基本層序と一概に対比できない状況も散見される。都農町域は各土層の層厚が薄く、肉眼で明瞭に確認できる火山灰層がK-AhとATに限られる状況であり、Kr-KbやSz-Sと言った火山灰層を単一層として確認するのが困難である。そのため、同一層より異なる時期の遺物が出土する状況が見られる。また、後期旧石器時代の重層遺跡の遺物出土状況から、宮崎10段階編年に当てはまらない事例が散見されつつあることも指摘されている(松本2011)。以下では、今後更なる検討が必要であることを念頭に、現段階での俵石遺跡群周辺の時代別の様相をまとめる。

#### 1 後期旧石器時代

名貫川以北の三日月原台地西端部と荒崎山南東裾部には、竜ヶ平第1・第2遺跡や立野遺跡、尾立遺跡、朝草原遺跡など8遺跡が存在し、近年、東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う発掘調査で7遺跡が調査され、後期旧石器時代の良好な資料が出土している。ここでは、尾立第2遺跡以北の3遺跡4調査に焦点をあて、三日月原台地西端部から荒崎山東裾部にかけての後期旧石器時代の様相について見ていく。検討方法として、今日までの東九州自動車道関連の発掘調査成果をもとに作成された都農町

域の基本層序と、宮崎10段階編年及び各遺跡の基本層序を並列させ、そこに遺跡ごとの時期区分と遺物の出土状況を反映させた(第1表)。比較・検討した結果について以下で述べる。また、多様な石器石材の利用状況についても検討を行う。

**MB2～ML3** ML3相当層(以下、「相当層」は略す)より遺構は確認されていない。遺物は、俵石第1遺跡(第1次調査)ではチャートや頁岩、ホルンフェルス(以下、ホルン)製の剥片が出土し、尾立第2遺跡では砂岩製の敲石が出土している。MB2～MB3にかけては3遺跡ともに礫群が検出されている。遺物は、俵石1遺跡では阿蘇溶結凝灰岩製の剥片ブロックや水晶製の小型の二側縁加工ナイフ形石器等が出土している。尾立第2遺跡では、縦長剥片素材の小型のナイフ形石器や黒曜石集中範囲等が見られ、遺物が調査区全体に散在する状況が確認された。ホルン製の局部磨製石斧も出土している(調査時は土層を細分しており、MB3からの出土と明記している)。俵石第2遺跡では、礫群と重ならない箇所に遺物集中区が見られた。遺物集中区では頁岩製の微細剥離ある縦長剥片や尾鈴山溶結凝灰岩製の二次加工剥片、黒曜石製剥片がまとまって出土した。また凝灰岩製の局部磨製石斧と打製石斧、黒曜石製の小型のナイフ形石器、流紋岩製の厚手の剥片素材のスクレイパー等も出土した。

概観すると、ML3において遺構は見られず、チャートや頁岩、ホルン製の遺物(剥片)が出土している。MB2～MB3にかけては礫群が検出され、礫群の形態は礫の密度が低い傾向にある。遺物は局部磨製石斧や敲石、ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工剥片や微細剥離ある剥片等が出土している。石器石材は、局部磨製石斧は凝灰岩やホルン、ナイフ形石器は頁岩、黒曜石、水晶、ホルン、スクレイパーには流紋岩や頁岩、ホルン、敲石には砂岩や尾鈴山溶結凝灰岩が用いられている。

第1表 後期旧石器時代～縄文時代早期相当層の基本層序と各遺跡の状況

宮崎 都農町域 尾立第2遺跡 俵石第1遺跡(第1次調査) 俵石第1遺跡(第2次調査) 俵石第2遺跡  
 10段階編年 基本層序

段階	基本層序	尾立第2遺跡	俵石第1遺跡(第1次調査)	俵石第1遺跡(第2次調査)	俵石第2遺跡
第6・9・10段階	K-Ah	IIIa、b層	II層	IIIa、b層	III層
	MBO	IV層 P,Ar,MB,MC,Kn, Ka,Tr,Fl,Co	III層 P,Ar,Kn,Tr,Po,Fl 陥穴 (IV層上面検出)	IV層 Co,Fl,Kn	IV層 P,Ar,Sc,Ha,An, Fl,Co,ト口
	ML1上部	V層 P,Ar,MB,MC,Kn, Ka,Tr,Ha,Ax,Fl	IV層 P,Ar,Kn,Ka,Sc, Fl,Co	V層 P,Ar,Sk,MB, MC,Fl,Co,Tr, Ha,Ka,Sc	IV層 P,Ar,Sc,Ha,An, Fl,Co,ト口
第8・9・10段階	ML1下部	VIa層 Ar,Ax,MB,MC, Kn,Ka,Sc,Ha, FP,Tr,Dr,Fl,Co	Va層 P,Ar,Kn,Sc,Fl (Kr-Kb含)	—	—
	Kr-Kb	Vib層 (Kr-Kb含)	Vb層 MB,MC,Kn,Ka, FP,Sc,Dr,Ha,Gr, Tr,Fl,Co	—	—
	MB1	VIa層 (Kr-Kb含)	—	VI層 Ar,MC,MB,Kn, Ka,Sc,Fl,Co,Ha	—
第5段階	—	VIIb層	—	—	—
	ML2	VIIc層	VI層 MB,Kn,Ka,FP, Sc,Ha,Gr,Tr,Fl,Co	VII層 Fl	V層 P,MB,MC,Po,FP, Fl,Co
第4段階	AT	VIIa、b層	VII層	VII層	VI層 Kn,Sc,Fl,Co ATまじり
	MB2	IXa層 (A-Fm, A-Or含)	VIIa層 Kn,Sc,Co,Fl,Ha (VII層をまとめて報告) VIII層※1 (A-Fm, A-Or含)	IX層 Fl	VII層 Ax,Kn,Sc,Fl,Co
第3段階	—	—	—	—	—
	MB3	IXb層 (A-Fm, A-Or含)	—	—	—
第2段階	—	—	—	—	—
	ML3	X層 Ha	IX層 Fl	IX層 Fl	—
第1段階	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—

凡例

・P=土器、Ar=石鏃、MB=細石刃、MC=細石刃核、Kn=ナイフ形石器、FP=剥片尖頭器、Ka=角錐状石器、Sc=スクレイパー、Tr=台形石器、Ax=石斧、Co=石核、Fl=剥片、Dr=石錐、Ha=敲石、Gr=磨石、Pt=礫塊石器、An=台石、ト口=ト口ト口石器、陥穴=陥穴状遺構、集石=集石遺構、縄文早期=縄文時代早期  
 ※1 宮崎県埋蔵文化財センター(2011)で、VIIb層(明褐色粘質土)は都農町域の基本層序にあてはまらない層と報告されている。

**MB0～ML2** AT上位のMB0～ML2において、各遺跡とも多くの遺物が出土し、特にML1～MB1から多くの遺物が出土している。以下、MB1～ML2、MB0～ML1に分けて詳述する。

MB1～ML2より検出された礫群はAT下位の礫群と比べ礫の密度が高い形態のものが多く見られる。遺物は角錐状石器、北牛牧型・今峠型等のナイフ形石器、剥片尖頭器等が出土している。石器石材として、角錐状石器には頁岩や流紋岩、チャート、ホルン、ナイフ形石器には頁岩や流紋岩、ホルンが多用される傾向がある。剥片尖頭器は流紋岩やホルン製である。

MB0～ML1にかけては、後期旧石器時代の礫群と縄文時代の集石遺構、陥し穴状遺構が検出されている。ML1より検出される礫群は前述したMB1～ML2検出の礫群と比べ礫の密度が低いものが多い。遺物は、小型の縦長剥片素材のいわゆる片島型ナイフ形石器、黒曜石の小礫を素材とする細石刃核、船野型・畦原型細石刃核等が出土している。3遺跡ともナイフ形石器の出土量が圧倒的に多く、石材は頁岩や流紋岩、ホルンが主として用いられている。細石刃核は、黒曜石製のものが多くが桑ノ木津留産や日東産など南九州系の黒曜石が利用されている。船野型・畦原型細石刃核には流紋岩やチャート、頁岩等が利用されている。

## 2 縄文時代

俵石第1遺跡では、杭痕のある陥し穴状遺構が検出され、また植物採取痕の可能性が考えられる「ハイヒール」状土坑も検出された。尾立第2遺跡では、陥し穴状遺構に加え、集石遺構や土坑、また石鏃製作跡と思われる石器集中範囲が複数確認された。朝草原遺跡(3)、立野第5遺跡(4)では土坑が検出され、朝草原遺跡の土坑は遺構内より炭化材が出土し、炉穴の可能性が指摘されている。俵石第2遺跡では、散礫や炭化材を伴った集石遺構が検出され、樹種同定によりコナラ属コナラ節やブナ科が検出されている。(谷口・橋口)

## 3 弥生時代

俵石第2遺跡では弥生土器を含む「水穴」の陥没孔(SZ1)が検出されたが、弥生時代の集落跡は確認されなかった。尾立第2遺跡でも「水穴」(SZ1)が検出されたが、集落跡は見られなかった。「水穴」から出土した土器群の時期に比定される集落跡はよ

り高位の丘陵上か、上町川沿いの自然堤防上に位置していたと考えられる。実際に弥生時代終末期の集落跡や墓は、両遺跡より北側の木戸平第2遺跡(7)で確認されている(第3図No. 5・28)。

このように、一連の発掘調査によって、名貫川中流域から荒崎山東裾部における弥生時代後期～終末期の様相が明らかになりつつある。俵石第2遺跡の場合は弥生土器を含む「水穴」と集落跡等の立地が対比的であったことを読み取ることができた。さらに、「水穴」の陥没孔に土器を配置や廃棄した後に埋め戻す痕跡が隣接する遺跡間で検出されたことは、数少ない調査事例をもたらしただけではなく、弥生人の大地や水に対する信仰や精神世界を知る手がかりを得たとも言える。

(橋口・今塩屋)

## 4 後期旧石器時代～弥生時代の土地利用

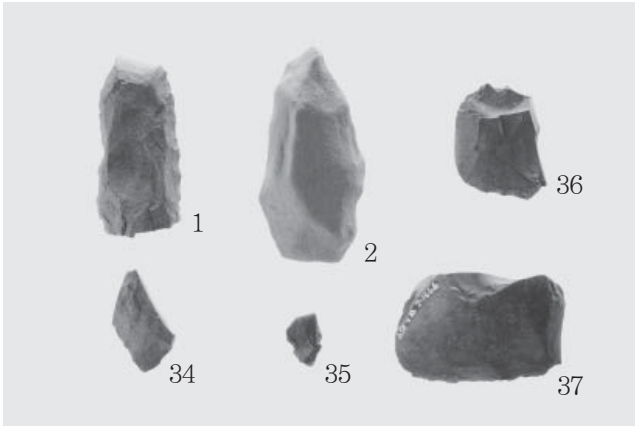
名貫川以北の台地周辺では、後期旧石器時代の礫群がAT下位・上位より検出され、周辺には遺物集中区も確認された。

石器製作を行っていたと考えられる。縄文時代早期には、尾立第2遺跡、俵石第1遺跡一帯が狩場・植物質食糧の採集地として利用され、その周辺に集石遺構や炉穴と考えられる土坑を伴う集落が形成されていた可能性が高い。弥生時代には自然陥没孔である水穴に土器を配置・投棄する遺構が尾立第2遺跡、俵石第2遺跡で確認されているが、集落跡等は確認されていない。水穴が形成される地形的要因から、住空間としての土地利用はなされなかったと考えられる。(谷口・橋口)

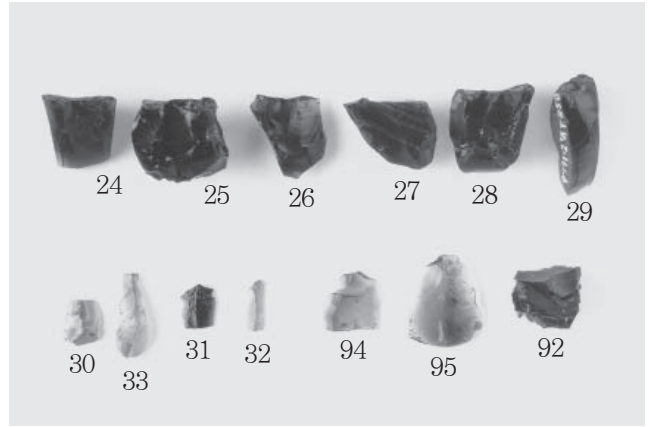
## 【参考文献】

- 宮崎県旧石器談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学66』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第131集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007「朝草原遺跡・尾立第3遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第146集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007「立野第5・第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第156集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「尾立第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第169集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011「俵石第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集
- 松本茂2011「宮崎県下の重層遺跡」『九州旧石器』第14号
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012「木戸平第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第215集

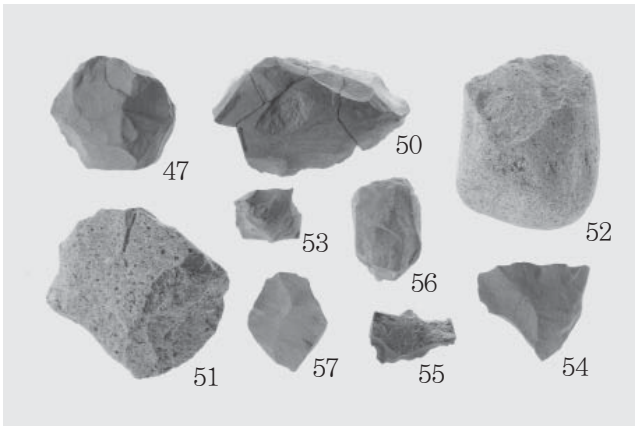
図版1 俵石第1遺跡（第2次調査）



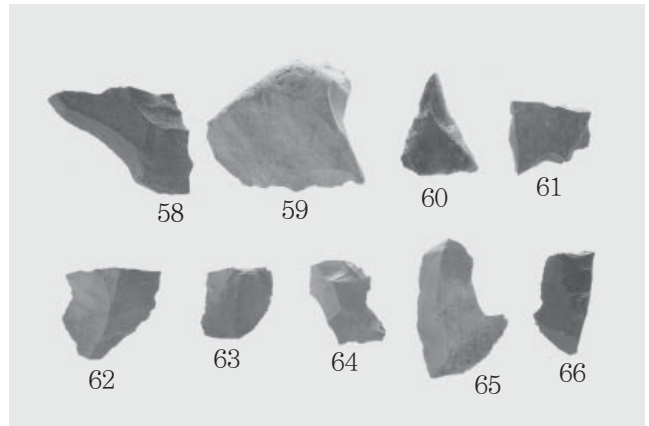
後期旧石器時代の遺物（角錐状石器、尖頭器、台形石器、搔器）



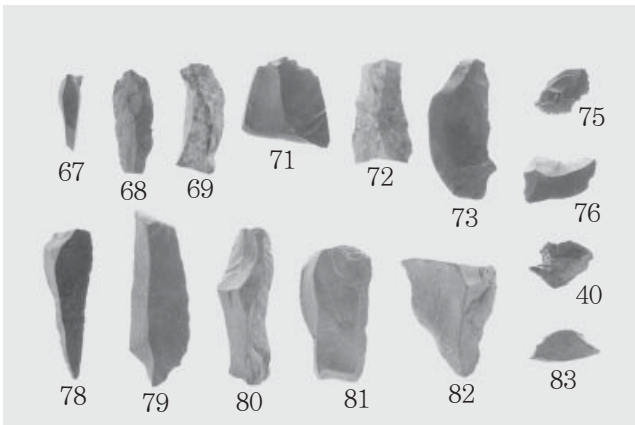
後期旧石器時代の遺物（黒曜石製遺物）



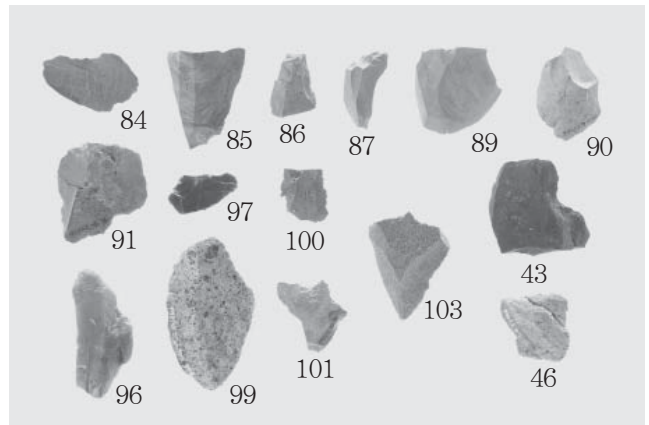
後期旧石器時代の遺物（石核）



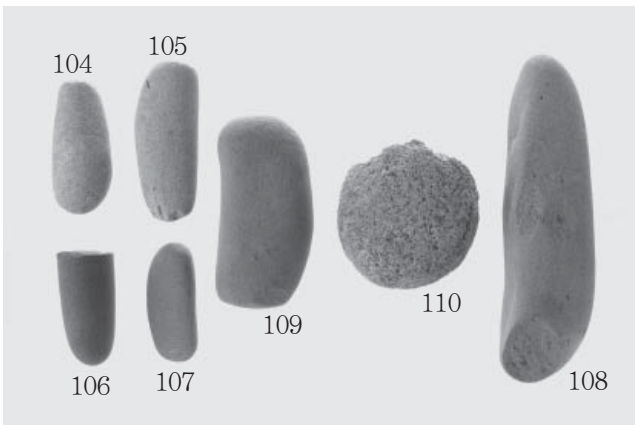
後期旧石器時代の遺物（二次加工剥片、微細剥離剥片）



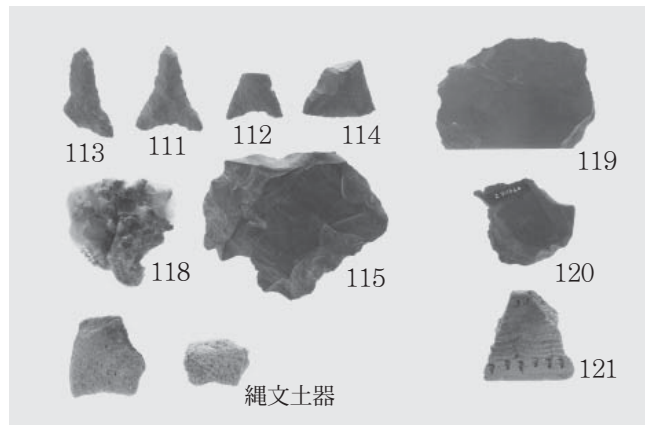
後期旧石器時代の遺物（剥片1）



後期旧石器時代の遺物（剥片2）

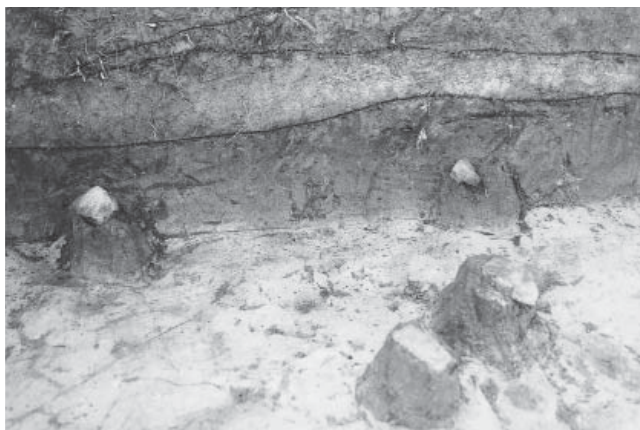


後期旧石器時代の遺物（敲石）



縄文時代及びその他の時代の遺物

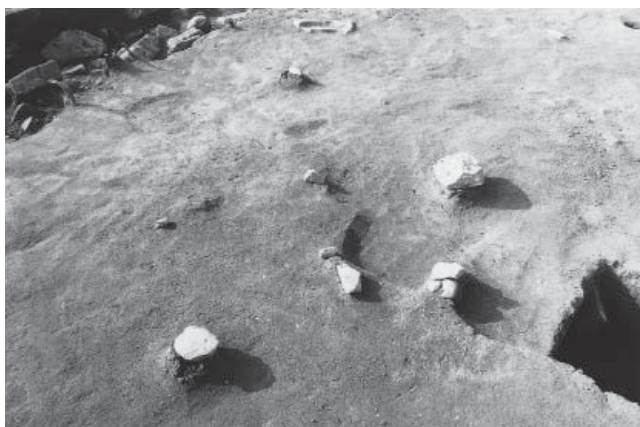
図版2 倭石第2遺跡



S11



S12



S13



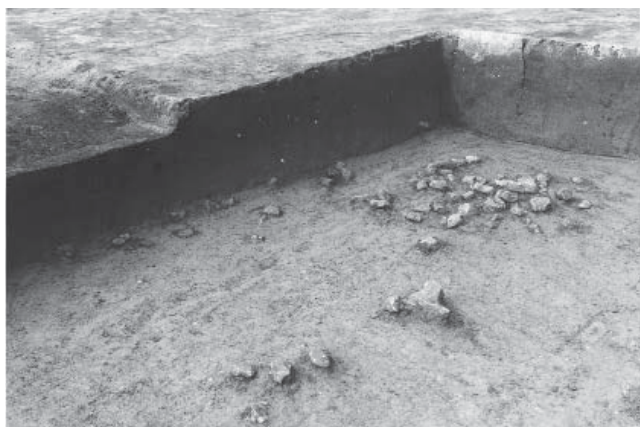
S14



S15



S16



S17



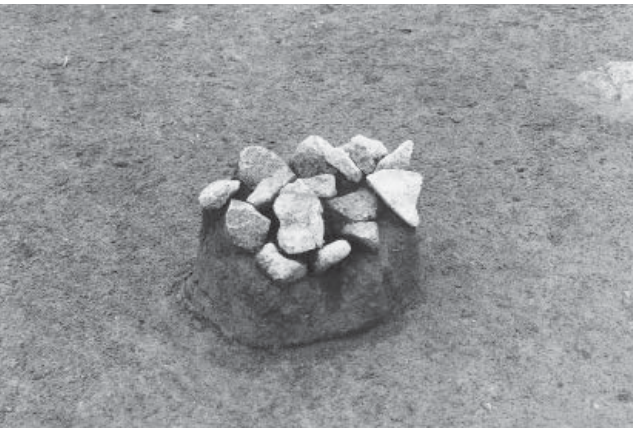
S18



SI 9



SI 10



SI 11



散礫 (東より)



散礫 (西より)



SI 12



SI 13

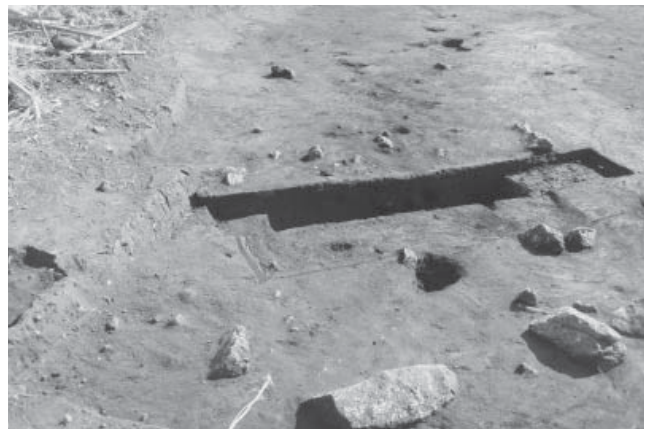


SI 14

図版4 倭石第2遺跡



SI 15



SZ 1 検出状況 (西より)



SZ 1 (A区) 弥生土器出土状況 (中央は261)



SZ 1 (B区) 弥生土器出土状況 (左下は265)



SZ 1 A-A'間土層断面 (東より)



SZ 1 B-B'間土層断面 (東より)



SZ 1 完掘状況 (東より)



SC 1 土層断面 (東より)





SC1内 礫検出状況 (西より)



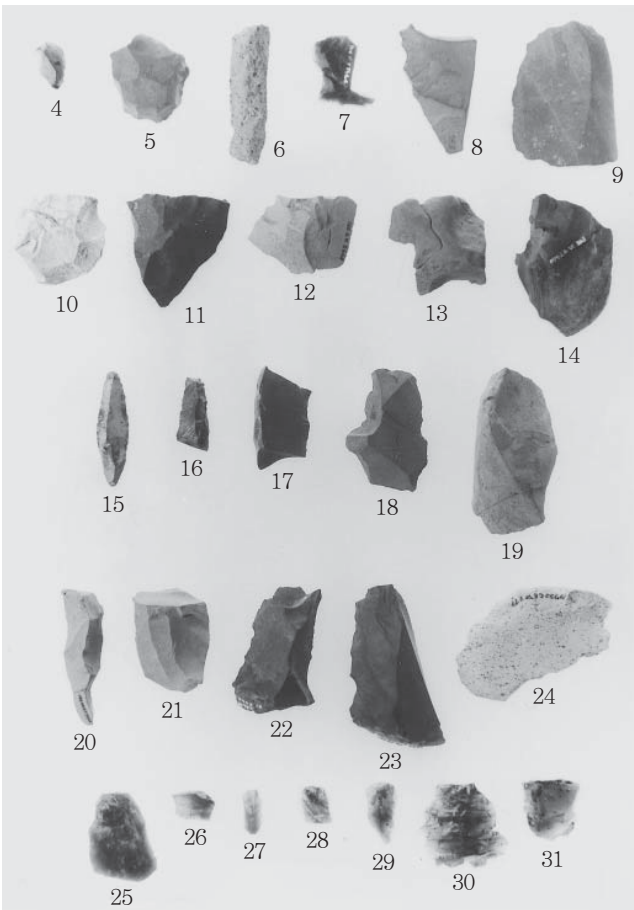
SC1 完掘状況 (南より)



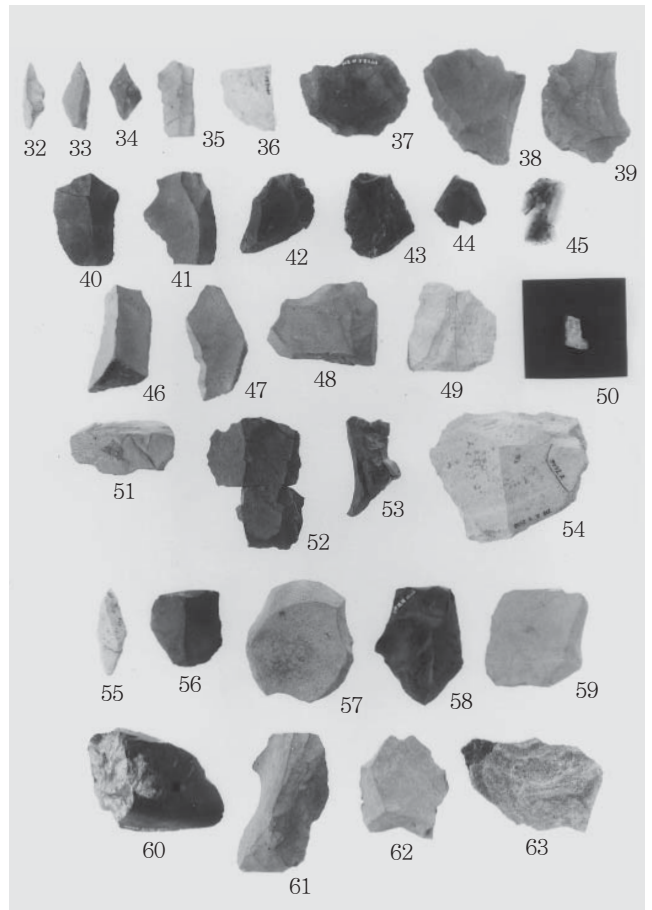
S116



S117

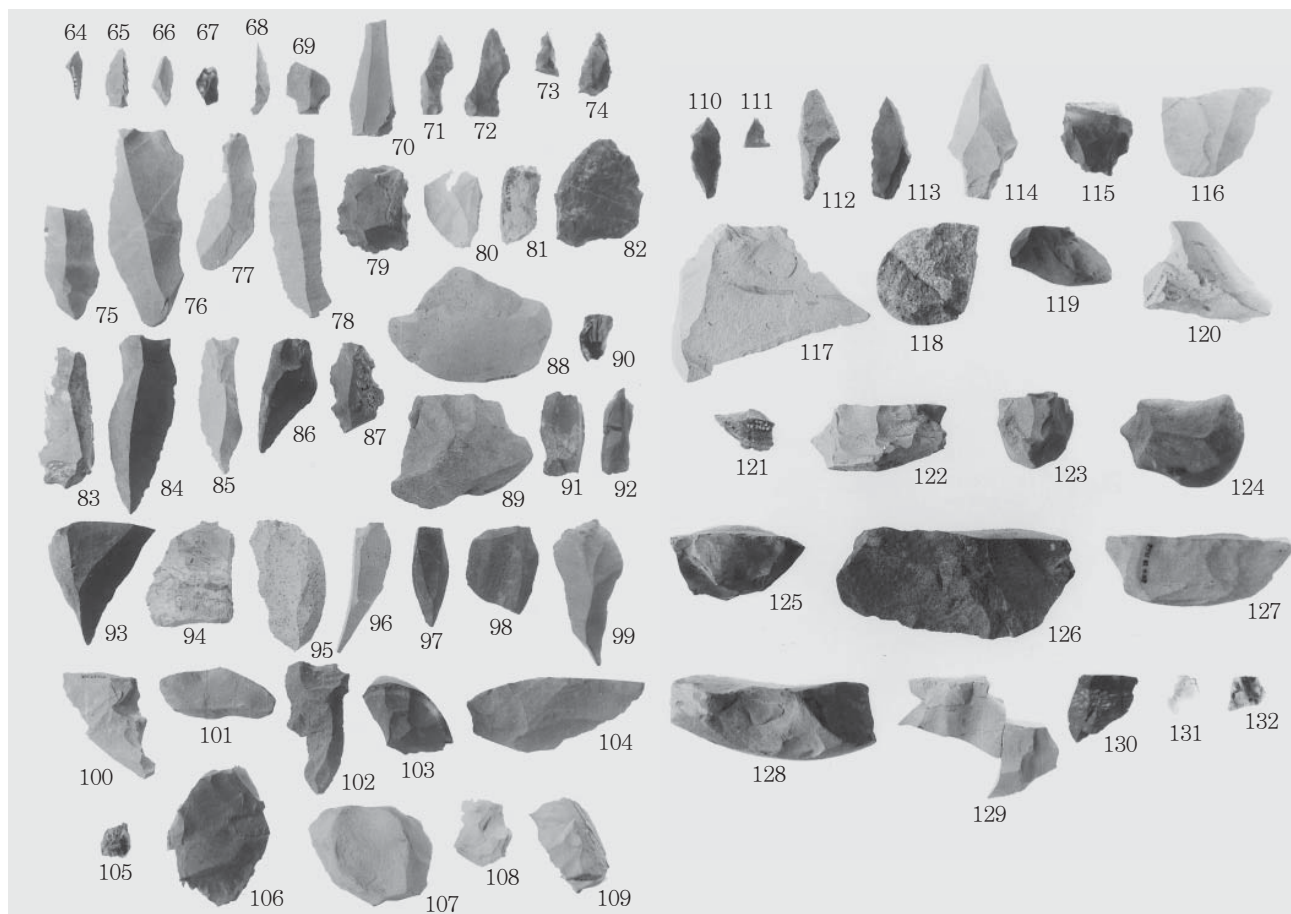


後期旧石器時代Ⅰ期の石器

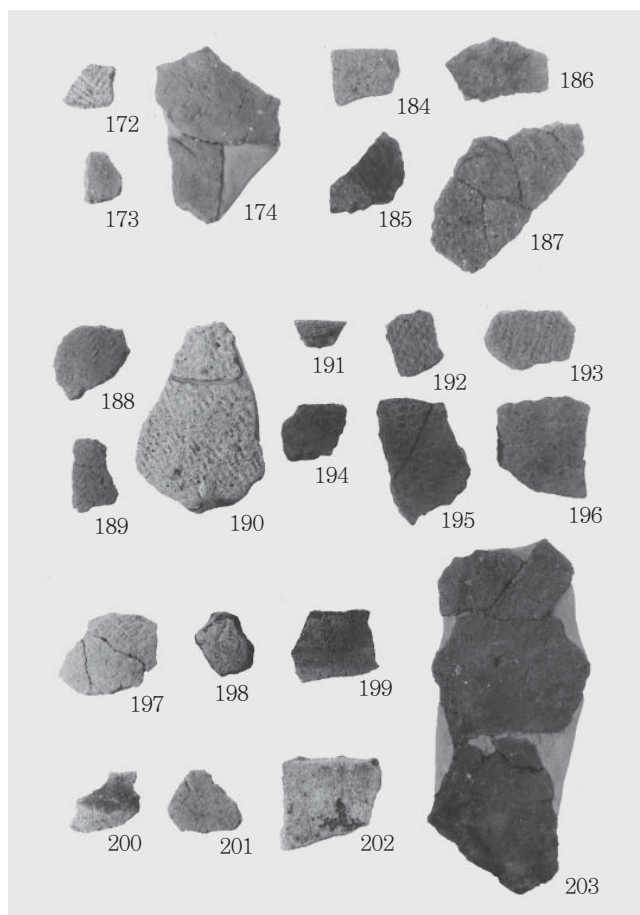


後期旧石器時代Ⅱ期の石器

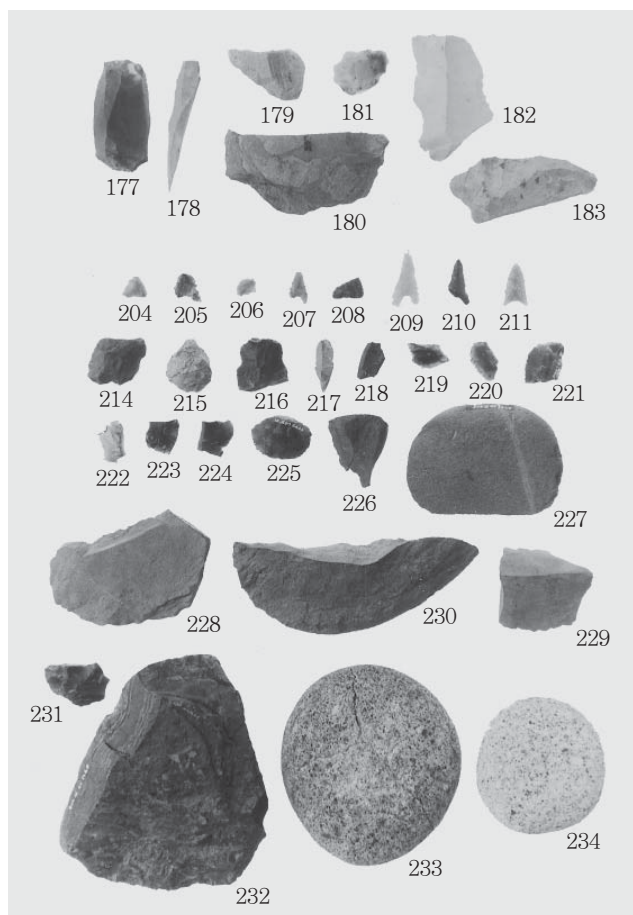
図版6 倭石第2遺跡



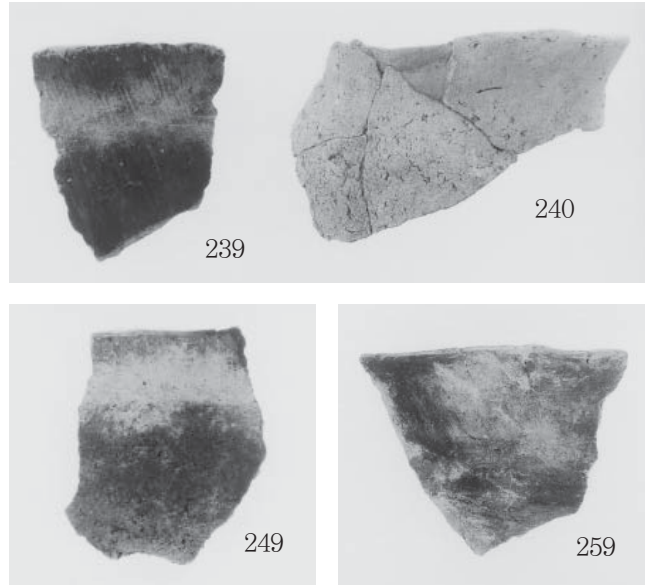
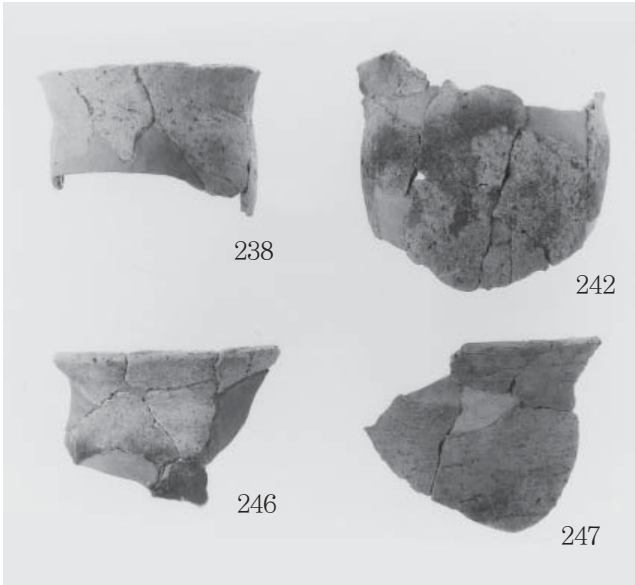
後期旧石器時代Ⅲ期の石器



縄文時代早期の土器

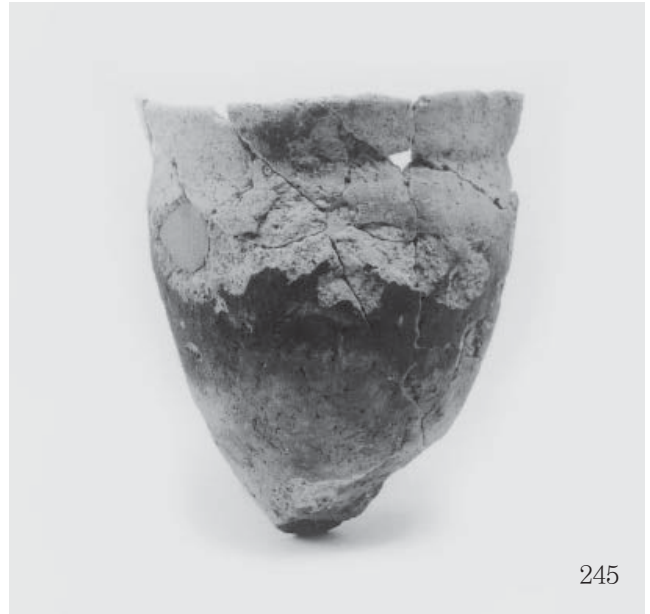


縄文時代早期包含層出土の石器



S Z 1 出土の弥生土器 (1)

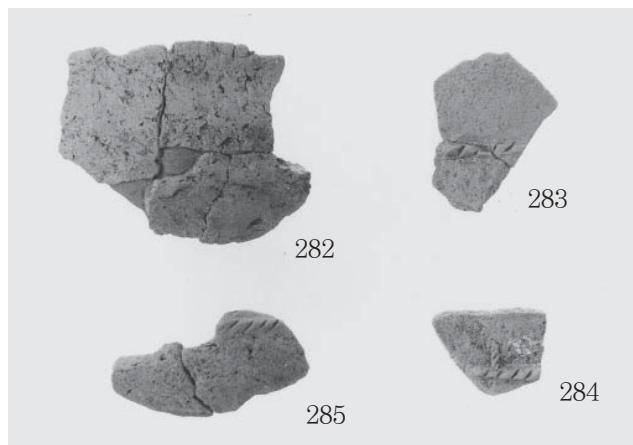
図版8 俵石第2遺跡



S Z 1 出土の弥生土器 (2)



S Z 1 出土の弥生土器 (3)



S Z 1 出土の弥生土器 (4)

# 報告書抄録

ふりがな	たわらいし だいいちいせき (だいにじちょうさ)、たわらいしだいにいせき							
書名	俵石第1遺跡(第2次調査)、俵石第2遺跡							
副書名	東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番名	第216集							
編著者名	谷口 めぐみ・橋口 由佳・今塩屋 毅行							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2012年2月29日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
たわらいし 俵石第1遺跡 (第2次調査)	みやざきけん こ ゆぐん 宮崎県児湯郡 つ の ちょうおおあぎ 都農町大字 かわきたあぎ ゆ む た 川北字湯牟田	45406	1011	32度 15分 23秒	131度 31分 47秒	2010年11月1日 ～ 2010年12月24日	255㎡	記録保存調査
たわらいし 俵石第2遺跡	みやざきけん こ ゆぐん 宮崎県児湯郡 つ の ちょうおおあぎ 都農町大字 かわきたあぎ たわらいし 川北字俵石		1012	32度 15分 31秒	131度 31分 51秒	2010年4月12～23日、 2010年10月4日～ 2011年2月17日	3,320㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
俵石第1遺跡 (第2次調査)	集落	後期旧石器時代	礫群	2基	ナイフ形石器、台形石器、 角錐状石器、細石刃核等			
		縄文時代早期			石鏃、石匙、縄文土器等			
俵石第2遺跡	集落	後期旧石器時代	礫群	9基	局部磨製石斧、打製石斧、 角錐状石器、ナイフ形石 器、細石刃核、細石刃等		AT下位から局部磨 製石斧・打製石斧 が出土	
		縄文時代早期	散礫 集石遺構	6基	石鏃、縄文土器等			
		弥生時代	不明遺構	2基	弥生土器(甕、壺、高坏等)			
		K-Ah降灰以降	礫集積遺構	2基				
		近世	土坑	1基				
要約	<p>俵石第1遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代早期までの遺構・遺物が確認された。後期旧石器時代の遺構は、礫群が2基検出された。遺物は、ナイフ形石器や角錐状石器等刺突具が多く出土し、ほかに細石刃や細石刃核も出土している。縄文時代早期の遺物は、石鏃と土器で、出土はわずかであった。</p> <p>俵石第2遺跡では、後期旧石器時代から弥生時代までの遺構・遺物が確認された。後期旧石器時代の遺構は、礫群が9基検出された。遺物はAT下位から局部磨製石斧やナイフ形石器、AT上位からはナイフ形石器や角錐状石器、剥片尖頭器、細石刃、細石刃核等が出土した。縄文時代早期の遺構は集石遺構が6基検出された。遺物は縄文土器(押型文土器)や石鏃等が出土した。</p> <p>弥生時代の遺物は不明遺構(遺構自体は自然に形成されたもの)から、まとまった形で弥生土器が出土した。甕、壺、高坏等の遺物は完形品が多く、都農町域の弥生時代の土器編年を探る上でも良好な資料が出土している。</p>							

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第216集

**倭石第1遺跡(第2次調査)**

**倭石第2遺跡**

東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書8

2012年2月

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社 文昌堂  
〒880-0052 宮崎県都城市東町18街区1号  
TEL 0986(22)1121 FAX 0986(25)6408

---

---